LA REKONSTRUO

改造

八月号

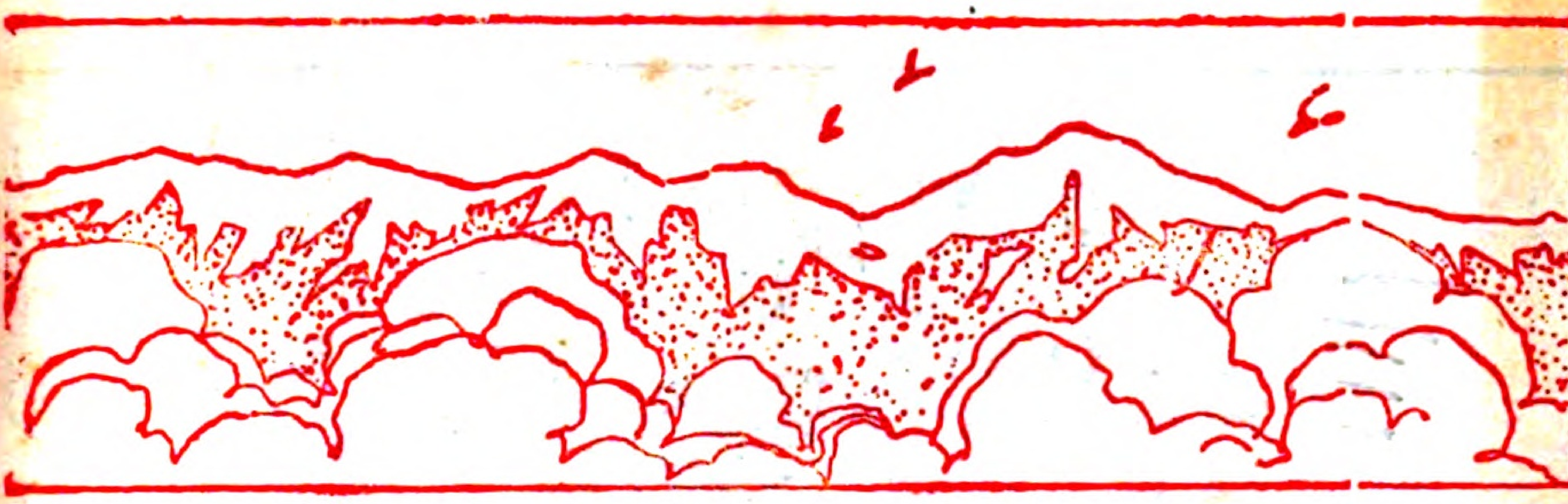
1922



サンエス万年筆

サンエスインキ

東京一大阪一京城　細沼株式會社　名古屋一金澤一札幌



改造八月號目次





改造社出版目錄

◇阿部次郎著

北郊雜記

定價壹圓九拾錢
送料十五錢
菊半截版上製
（九版）

著者が折にふれ、感興に應じて執筆した水晶の如き透徹した評論と隨筆だ、氏が論壇に於て第一人者なるが如くその文章のスッキリして滋味津々たることも斯界唯一の寶石だ。

◇理學博士 石原純著

アインスタインと相對性理論

（增補版）

定價貳圓廿錢
送料十七錢
四六版上製
（廿九版）

ニュートン引力を否定して、全科學界を革命せる**アインスタイン**の相對性理論は既に絶對となつた。今までの物理學の公理、定義は根本から轉覆された、本書を一讀せずして教育したら其生徒は殘らず時代後れとなります。

◇中澤臨川著

電子說から見た世界

定價壹圓八拾錢
送料十五錢
四六版上製
（六版）

一代の文豪として雷名を轟かした臨川氏は實に東大出の工學士だ、本書は我國に於て類例のない理學的文藝品であり、藝術的滋味に富める科學的世界觀の大傑作、本著は「新社會の基礎」の改訂版である。

◇文學博士鹿子木員信・饒平名智太郎共著

ガンヂと眞理の把持

定價貳圓參拾錢
送料十九錢
四六版上製
（七版）

東洋が現代に有する最大の哲人として印度革命の大立物として共產露西亞のレーニンと並び稱せらるるガンヂ氏の哲學の體系たる「眞理の把持」と最近印度に横流する理想主義的革命の本體を明にす、著者は印度研究の權威たる鹿子木博士及饒平名氏である。

改造社出版目錄

◇山川 均著

レーニンとトロツキー

定價壹圓九拾錢
送料十五錢
四六版上製
（七版）

現代世界の革命家として世界的環視の檜舞臺に突つ立てるレーニンとトロツキーの思想評傳である。革命は一日にして成らず、彼等の波瀾多き半生涯の生立記は蓋し骨鳴り血躍る。著者は我社會主義者の頭目山川氏だ。

◇文學博士醫學博士 榊保三郎 醫學士 請岡存 共著

スタイナハ若返り法研究

定價壹圓參拾錢
送料十三錢
四六版上製
（五版）

スタイナハの深遠なる生理學の智識と十數年に亘る嚴密なる實驗によりて組立てられたる『若返り法』は七十にて尚ほ二十歳前後に見る性慾生活に生き得べき事を說く。我『若返り法』研究の大家榊博士の解說せし權威ある書。

◇文學博士醫學博士 榊保三郎著

學齡より丁年迄の精神發育研究

定價四圓
送料廿七錢
四六版上製
（四版）

著者が十一ヶ年を費して研究した世界的權威の大冊子で、六歳より二十一歳までの兒童の精神敎育を研究した空前の大名著、小學校、中學校には一書を備付くる要がある。本書によりてのみ兒童精神の推移は判明すれば也。

◇片山 潛著

自傳

定價壹圓八拾錢
送料十五錢
四六版上製
（四版）

赤色露西亞に於てレニン、トロツキーと同等待遇を受けつゝあつた氏は最近第三インタナショナルの南北亞米利加の總指揮官となつた、我有史以來主義の爲めしかも無産者の味方とし世界的活躍者は他にない本書は氏の自筆になる自傳だ。

改造社出版目錄

◇文學博士 朝永三十郎著

カントの平和論

定價壹圓五拾錢
送料十五錢
四六版上製
(五版)

著者は我國に於て哲學史專攻の第一人者だ、カントの平和論は近代平和論の根源であり、母體であることも一般周知の事だ、政治哲學を根本的に組織的に研究せんとするものは基礎哲學として本書を薦む。

◇文學博士 米田庄太郎著

現代文化人の心理

定價貳圓七拾錢
送料十九錢
四六版上製
(十二版)

文化主義、文化生活等凡そ文化なる語は今や思想界の流行語となつた。其百般の文化的事象、文化的概念を尤も平易に解説した快著。つまり現代文化を研究する人の第一に手にすべき文化哲學の手引の様な有益な著書。

◇バートランド・ラッセル著

愛國心の功過

定價壹圓八拾錢
送料十五錢
四六版上製
(五版)

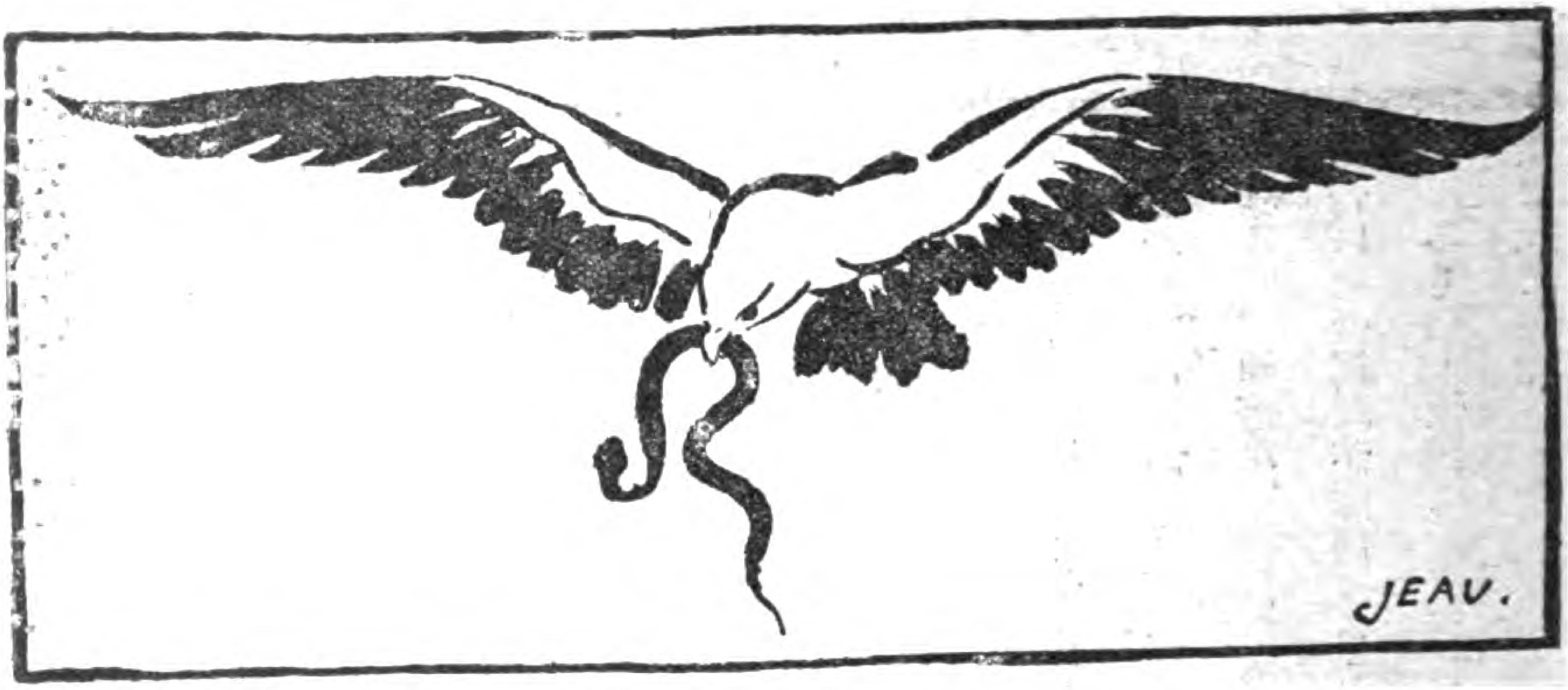
日本人にかくも鋭い警告を與へた思想家はない、我々は此一書を讀むごとに「誤れる愛國心」「眞理に徹せざる我國民」「哲學なき貧しき自分」『ラ氏の論議は論議の基礎を成す原料品」「光る眞珠」だとしみ〲感ぜしめ學ばせる。

◇島田清次郎著

勝利を前にして

定價貳圓四拾錢
送料十九錢
四六版上製
(十一版)

若くして、新しい思想に燃ゆる『地上』の著者が、渡歐に際し『更に大なる人生を生きる門出』として全國の青年男女のために書いた火の如き熱烈な小說、セムシを夫に持つ或女が、貧苦に苦しめらるゝ一書生と戀仲になつて大望を抱いて出京し、貧と戀とに苦み戰ふ記錄。『平民王』として矜持高き作者の筆端は火を吐き、目まぐるしい光りを放ち、そして讀者の肺肝を剔ぐる、この魅力の底に潛む作者の力强き信と力の表現を見よ



══((改造八月號))══

物質の飢饉と愛の飢饉

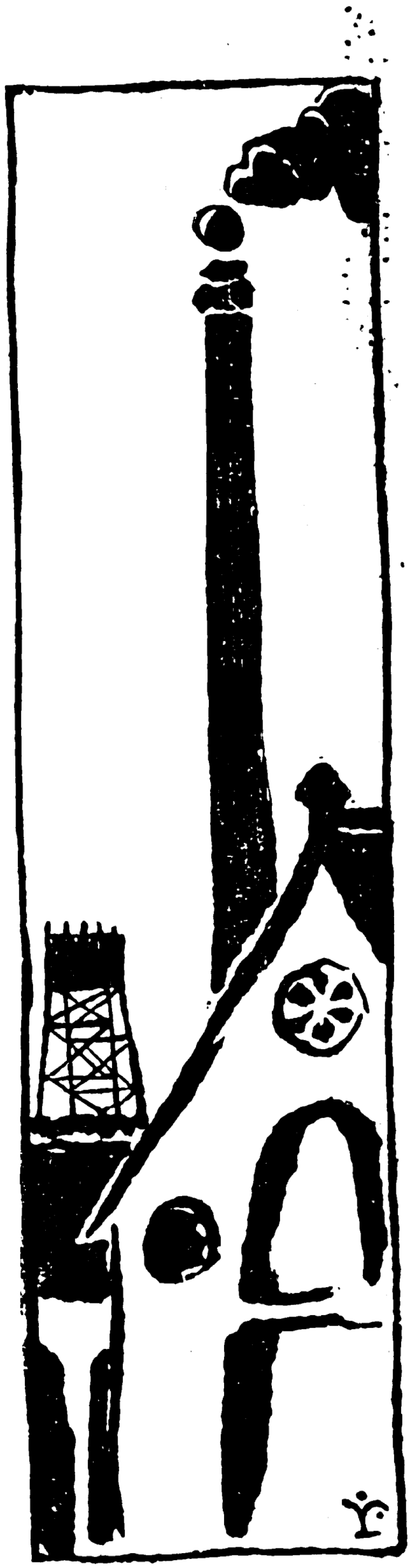
収穫時にはなろうとするが、収穫すべき何物もなく、麥藁もつき、榭の皮も剝がれはてて、斃れたる牛や犬の骨屑まで悉くさらはれてしまつた。眼には涙の霑ひもなく、子と親とは愛の鐵鎖も切れてしまつて淺ましき食糧の爭闘に此世ながらの修羅場を現出しておる。サラトフ附近の農民は一にも水、二にも水、水のみ賴りとして醜惡なる人生への執着をつづけつつある、屍骸を雨にさらし、愛子の臟腑を野犬に喰はるるのを目前して、死の手を待ちつつもがいておる露西亞の現狀を思ふとき、我々は思はず人類の逢着すべき運命の哀しさを哀しみ、その持合せの智慧の分量の淺薄なるを憾むのみだ。

いかに異なる社會組織に生き、色を異にし、文字を異にし、國を異にし、疎隔せる感情に成長すればとて默して數百萬人類の死を看過することが我々に出來やうか、人類の死を直前するとき、我々は區々たる社會組織を云々すべきでない、國境と人種を論ずべきでない。實にそこには人種を超越し、國情を超越せる偉大なる精神の發露を見ねばならぬ、人性の母としての偉大なる愛の命令に服從せねばならぬ。謙信が玄に鹽を送つたのは決して場あたりのごまかしではない、それは實に刹那にこみ上げてくる人類至仁の愛の發動だ。

露國は物質の飢饉だ、我國は愛の飢饉だ、我々が東洋の猶太人と貶す國の人々さへも尙ほ數萬圓を隣國へ捐送したとき、其の人々の先輩をもつて任じ、文化の兄哥を以つて居る我々が、風馬牛で財布の口を開かぬのは血あり、涙ある擧措といひ得るだらうか。

西伯利から撤兵し、サガレンも撤兵さるれば其次は一陽來復の通商復活だ、ソンナ功利的な念は別として、政府者に氣兼ねして、燃え出づる我の心と、我の行動を遮止するは、それは自分が、自分に强く生きる道であろうか、人道の撰手として自ら任ずる我々が取るべき行爲であろうか。

勞農政府の潰倒を祈念する人々にも、彼の不幸に同情する純眞の友情は延びなければならぬ、我が資本階級の人々も彼等が人類として嘗めつゝある不幸、不運は諒解し得る雅量と、俠氣がある筈だ、我々は隣人の最大限の不幸に對して默するには忍びぬのである。



宗教的眞理の本質

柳宗悦

此篇で私が取り扱はうとする事は、宗教的眞理の本質に就てゞある。云ひ換えれば如何なる眞理を指して宗教的と呼ぶのであるか、又何が故に或眞理が宗教的と呼ばれ、他の眞理から識別されるのであるか。眞理が宗教的と云はれる時、如何なる特質があらねばならぬか。かゝる事を深く反省したいのが私の願望である。此問題を究める事は啻にその眞理が如何なるものであるかを私に教へるのみならず、かゝる眞理の理解、即ち人々が呼んで信仰と名付けるものゝ性質に就て正しい見解を私に與へると思ふ。引いては今も尚多くの者を苦めてゐる知識と信仰との關係に就て、光ある答へにまで私を導くと思ふ。眞理の問題は認識論によつて取り扱はれる。故に私もこゝに認識の

問題から出發せねばならぬ。

一

思惟の世界に入る時。人は審判の座に着くのである。デカルトが嘗て信じた様に、凡ては彼の審きの前に置かれてある。否、判かねばならぬ位置に自らを見出すのである。然もカントが云つた樣に彼の思惟には「かくあらねばならぬ」と判き得る權利さへあるのである。權利とは資格である。これは彼がみだりに撰んだ資格ではあらぬ。彼の存在に先んじて彼に用意せられた權利である。彼は思惟に內在するその權利によつて彼の凡ての知識を吟味し整理し、かくして統一あるものに構成する。此先天性は彼の思惟が依らねばならぬ法則であり規範である。彼が忠實に此規範に則る時、彼は正しい審判を果すのである。判かれた內容はその先天的法則に基礎づけられて、妥當する世界に入るのである。此妥當する知識を人は眞理と呼び慣はしてゐる。かくして眞理は人と時と處とを越える。正しく判かれた眞理は客觀性と一般性との確實さをおびる。それは萬民が共有する眞理である。思惟の世界に於て人は普遍の世界を樂むのである。眞理に自他はなく國境はあらぬ。眞理に活きる時、人は狹き自我を越えるのである。

眞理に潛む此深く細かな內容を人々に氣附かしめたのは、人類的な思索者カントの功績であつた。眞理を學ぶ程のものは彼に師事せねばならぬ。人は彼によつて思惟の意味を知り、認識の何ものであるかを學ぶのである。今日の趨勢を見ると惜に彼の思想の或局部は異常に發展せられた。然し之が爲に重要な彼の主旨の或ものは見失はれたかの感がある。人は彼が暗示した方向に進んで眞理の性質を極めようと求めた。種々なる眞理は彼のとつた見方から批判せられた。かくして最後の眞理——宗教的眞理に來た時、之も同じ立場から說かれねばならぬと考へられた。人は躊躇する所なく

宗教的と呼ばれる眞理をも亦認識の圏内に於て理解すべきものである事を豫想した。從つてそれも亦論理的要求に於て判かるべき眞理の一つであると考へられた。宗教的眞理が妥當なものとして成立するのは、やはり宗教的アプリオリに依據するが故であると思惟される。それが眞理として是認されるのは、規範的根據を持ち、客觀性を得、普遍性を得るからである。それは權利に活きる眞理である。從つて宗教的眞理は他の眞理と並んで、共に一つの眞理體系を形成する、宗教はかくして文化の中に正當な一部の場所を占めると考へられる。宗教的眞理も畢竟他の眞理と共に知解される眞理である。

然し認識の道に急ぐ者のかゝる理解は、止るべき境を越えた所がありはしまいか。それは認識の能力に對する過度の信頼ではないだらうか。カントがその能力を定限した貴重な主旨を忘れた所がありはしまいか。彼は宗教の世界を認識の對象界に入れたであらうか。眞理が宗教性をおびる場合、それは既に認識論的性質を越えた或るものを示してはゐないだらうか。純論理的要求に於て理解し得る宗教的眞理があるであらうか。

認識作用に關するカントの學說は偉大である。だが宗教の問題に入る時更に重要なものは、却て認識能力の限界に對する彼の主旨ではないだらうか。眞理は論理的要求から知解され思惟さるゝ眞理である。然し宗教的眞理も同じ理解に依るべきものであらうか。この前に立つて認識がその能力の不足を感じる事はないだらうか。同じく眞理と呼んではゐるが、これは別個の理解を要求すると思ひ得ないだらうか。それは妥當する認識の圏內にあるが故に確實であるのではなく、却て思惟の理解を許さぬが故に不變なのではないだらうか。私はいつも想ふ、宗教の世界を思惟によつて知らうとする試みは、吾々の正しい努力ではあらぬ。どうして宗教の世界は思惟を超越するかと云ふ事を知らうとする方が、より正當な希願である。宗教は What として解されるよりも、What-not として解される事を求めてゐる。知らるゝ

が故の宗教ではなく、寧ろ知るを許さぬが故の宗教ではないか。論理的認識の界内に宗教的眞理があるのではなく、かゝる認識の彼岸にそれがあるのであらう。カントが美しく云つた樣に、「信仰に位置を與へる爲に、知識の不當な要求を制限せざるを得ないのである。」

審判の座に着く者は、與へられた則を越えてはならぬ。「不當な要求」に陷る時、彼によつて理解さるゝ何ものもあらぬ。彼は一切を判き得ると思つてはならぬ。思惟の働きは無限ではあらぬ。判くを許されないものがある事を謙遜に承認せねばならぬ。彼は彼の思惟に於ける權利を無上に信じてはならぬ。それは只思惟の世界に於てのみ許された資格に過ぎぬ。然し思惟が一切の世界ではあらぬ。思惟の權利は如何なる世界をも支配し得る權威とはならぬ。權威は自由であるが資格は約束に過ぎぬ。思惟の限界を越えてまでその資格に力があると思つてはならぬ。かゝる有限な力を以て究竟の深さを測つてはならぬ。測り得ると思ふ時、彼は「不當な要求」に自らを誤つてゐるのである。誰も彼の思惟に於ては凡てを判く王である。然し凡ての王も神の前には從である。人は此位置を顚倒してはならぬ。宗教のことを思惟によつて全く解き得ると思ふ時、彼が不敬でないとどうして云ひ得よう。認識の限界に對する承認のみが、彼に正しき認識を與へるのである。

果して宗教的眞理も他の眞理と同じ樣に、思惟の審判に委ねられてゐるであらうか。之を認めると否とは彼の哲學に異る方向を與へるであらう。私は此重要な問題を深く考へてゆかねばならぬ。

二

何を指して宗教的であると見做すのであらうか。如何なる根據があつてものが宗教的となり得るのであるか。眞理が

宗教的である爲には、如何なる意味が内に含まれねばならぬか。

宗教的とは神的との義であらう、若しも神と云ふ字が不明に聞えるなら、私は究竟と云ふ言葉を之に代へよう。究竟とは無上な意味である。「一」である。人々が呼んで「聖きもの」又は「權威あるもの」と見做す世界である。かゝる義なくては宗教的意味をなさぬ。眞理が宗教的であると云ふ事は、その眞理が究竟性に基礎づけられてゐると云ふ意味がある。かゝる基礎なくしてはその眞理は他と識別される理由を持たぬ。宗教的と云ふ時、人は之に神的な根柢を認めねばならぬ。究竟性が宗教性である。

究竟なものは必然にあらゆる相對の義を超越する。それは對立する何ものをも前に許さず、又何ものによつても對立される事を許さぬ。權威あるものと呼ばれるのはかゝる意味があるからである。それは犯し得ない無上な全體である。神聖であつて、何ものも之に對し得るものはあらぬ。聖きものは獨在する。彼のみがあつて、彼に並び得るものはあらぬ。かゝる意味で神的なものは唯一なるものと解されねばならぬ。究竟は一である。唯一にして一切である。一である故に二となるを許さぬ。それは分ち得る何ものでもなく比べ得る何ものでもあらぬ。分別の二と比較の對とは一の世界にはあらぬ。かゝる一に基礎づけられた凡てのものを、吾々は宗教的と呼ぶのである。

然し私が認識論に歸る時、宗教的眞理はかゝる究竟の基礎を持つものとして考へられてゐるであらうか。果して何等の獨斷なく一を一として取り扱つてゐるであらうか。然し認識の本質そのものからして、かゝる事は不可能に見える。思惟は分別に於てものを二に裂くからである。眞理が宗教的である時、果してそれは思惟による認識の圏内に入り得るだらうか、一度究竟の世界を考へる時如何に今日の認識論が種々な獨斷に滿ちてゐるかを氣づくであらう。人々から殆ど不可抗であると思はれてゐる批判的認識論に對して、私は私の疑ひを率直に述べねばならぬ。

私の考へでは思惟の世界はどこ迄も限界ある相對の世界である。その限界内に於て今の認識論の優秀な價値を否む事は出來ぬ。然し一度それが究竟の問題に觸れる時、私はそれによつて何ものをも解明され得ないのを感じてゐる。思惟はその本質上相對の性を持つが故に、それによつて吾々は、もの丶基礎の基礎を求める事は出來ぬ。私は先づ思惟から何が預想せられるかを吟味せねばならぬ。

有限の世界に身を受けた吾々が思惟の世界に入る時、心に於て心も亦二元に降るのである。否、正しく云ふならば二元を許さずしては成立し得る思惟はないのである。思惟がその作用を遂げ得るのは全く相對する二個の世界を預想するからである。此事を許さずして思惟はなく判斷はなく立論はあらぬと私は思ふ。私は思惟が成立し作用し表現せられるに至る五個の場合に於て、それが受ける命數を考へてみようと思ふ。

第一認識が成立する爲には、認識する主體と認識さる丶客體とを許さねばならぬ。吾々は考へるものなくして考へると云ふ事は出來ぬ。思惟自體と云ふが如きものはあり得ないであらう。凡ての思惟は對象を必要とする。主客の二を預件とせずして成立し得る認識はあらぬ。對象は對立を預想する。吾々が思惟に入る時、吾々は二元の相對する世界に入るのである。二を許さずしてはあり得ぬ思惟である。故に眞に一として自律するものは思惟の域に入る事は出來ぬ。人は無上な神をも思惟の對象となし得ると思ふかも知れぬ。然し對象化せらる丶ものは相對なものに過ぎぬ。人が神を疑はうとする時、彼は神ならざるものを疑ひつ丶ある矛盾に陷ゐるのである、客體となり得る神は何處にもあらぬ。宗教の世界は永へに知から匿されてゐる。神秘であるとそれが呼ばれる事に必然さがあると知らねばならぬ。

第二に思惟は反省であつてもの丶出發ではあらぬ。第一事なものは今日呼んで純粹經驗と云ふが如きものであらう。思惟は後に之に加へた反省に過ぎぬ。思惟は一切のもの丶基礎ではあらぬ。かくして思惟はそれ自身二個の相對する世

界を假定する。思惟は佛者が巧に名づけた樣に分別である。字が示す如くものを二つに分つ事に於て思惟は働くのである。思惟とは判きである。判くとはものを二つに分つ意である。分つ事なくしては思惟は自滅する。從つて分ち得ないものを思惟する事は出來ぬ。思惟は分析である。例へば普遍自體と云ふが如きものは思惟の考へ得る所ではあらぬ。普遍は特殊に對してのみ一つの意味を齎らすのである。A priori と云ふ事は A posteriori に對してのみ意義がある。思惟は對律を要求する。自律するものは分別に入る事は出來ぬ。分別されるものは自律ではあらぬ。分ち得る究竟はないが故に、思ひ得る究竟は何處にもあらぬ。

從つて第三に思惟の對象である客體も差別せられた客體に過ぎぬ。甲は非甲に對してのみ意識せられる。吾々は左右を分ち黑白を區別し本末を對立させる。あらゆる對象界は差別界である。かゝる世界に於てのみ思惟は成立し作用する。差別を許さぬ世界に思惟を働かす事は出來ぬ。差別の世界は矛盾の世界である。矛盾律とか排中律とか云ふ論理的法則が可能であるのは、矛盾する二、左右の双があるからである。矛盾を越えた世界に加ふべき論理の判きはあらぬ。

第四に思惟するとは判斷する事である。是非を分つのである。一つの斷案を得るとは、正しきものを撰び、誤れるものを棄てる意がある。誤りを反面に持たざる正しさと云ふが如きものを想ふ事は出來ぬ。答へは常に然と否とに區分される。肯定と否定とは常に對峙する。判斷は眞僞の二を預想してのみ可能である。自律する眞と云ふが如きものは、吾々の斷案に入る事は出來ぬ。吾々が誇りを以て眞理と見做すものも、實に相對的意義に於て眞理であると云ふに過ぎぬ思惟による認識の成立は約束せられた成立である。眞に無假定にして自由な認識であるならば、分別する事もなく判斷する事もないであらう。論理の法則に依存するのは、對立する二があり矛盾する多があるからである。一律の世界に論

理の法則はあらぬ。

第五に是等の相對的理解によつて導き出される凡ての言葉は、又二の言葉である。言葉は對辭である。字義は相對性を越える事が出來ぬ。言葉はその字義に於てものを斷定し定義する」言葉は約束である。約束なき言葉に於て吾々は何ものをも言ひ現はす事が出來ぬ。然し約束であり斷定であるが故に、それは一つの限定である。凡ての言葉は有限であつて自由を持たぬ。一度吾々が究竟の世界に入るならば、言葉が如何に不自由であらう。故に凡ての宗教家は字義に於て語らずに、象徴に於て語らうと欲した。

是等相對の世界に思惟が約束せられてあるなら、究竟なものをその理解の中に入れる事は許されておらぬ。「聖きもの」への理解は永へに思惟に向つて匿されてゐる。若しも認識が思惟に局限されてあるなら、理解される宗教的世界はないであらう。吾々の判斷に宗教的眞理を委ねる事は正當な所置であらうか。思惟の世界に入るならば既に「一」の基礎を失はねばならぬ。「一」の基礎を失うならば、それをどうして宗教的と呼び得るであらう。若しも判斷作用が認識を可能ならしめる唯一の道であるなら、かゝる認識に現はれ得る宗教的眞理はないであらう。然し思惟のみが認識の唯一の作用であるとは誰が定めたのであるか。こゝに拭ひ得ぬ獨斷があると思ふ。

然も思惟によつて豫想される對立の世界には何等の作爲もないであらうか。凡ての分析は、反省である思惟それ自身の性質から導き出される作爲であらう。批判論者は「かくあるもの」と「かくあらねばならぬもの」とを峻別する。特殊なものを一般なものに對立せしめ、個々を普通に、經驗を規範に對峙させる。又後驗に對して先驗を、存在に對して當爲を、事實に對して權利を差別する。かゝる見方は明晰な世界に吾々を導く上に優れた理解ではあらう。然し是等の區分は思惟によつて必然に要求せられた迄であつて、こゝに尚幾多の人爲と獨斷とがないであらうか。分析せずしては思

惟し得ないからではあるまいか。

人は事實の世界と規範の世界とを峻別する。だが本來かゝる區別はあり得るだらうか。それは思惟を唯一の世界と見做す處から來た作爲ではないだらうか。若しも經驗を純粹に解したならばそこに果して前後の別があるであらうか。思惟するが故に分別せられるのではないだらうか。一度思惟を越え、分別の境を離れるならば、かゝる二が必然なものとして受け容れられるであらうか。思惟の世界に於て、又は思惟以下の世界に對して、かゝる區別は一つの權利を伴うであらう。然し無上な「權威ある」世界に來て迄、それに絶對の信賴を置き得るだらうか。思惟が唯一な最高な世界であるなら、凡ては分別に於て判かれねばならぬ。然しかく思ふのは「知識の不當な要求」であらう。

此事は特に宗教の問題に於て注意せらるべきであると私は想ふ。何となれば今の殆ど凡ての宗教哲學者は、今日の認識論に於て誤りなく宗教的眞理を取り扱ひ得ると考へてゐるからである。私は私が主張する宗教的眞理の特質に就て筆を進めねばならぬ。

三

今日の認識論に從ふ時、宗教的眞理も妥當する客觀性を得、萬人から承認さるべき資格を得た樣に見える。もとよりかゝる理解は宗教的眞理に、正しい存在の理由を見出そうとするよき意志に基くよき努力であつたにちがいない。然しかゝる見方にもう疑ひ得る餘地はないであらうか、果してかゝる説明は宗教的眞理へのよき保證であらうか。

眞理には種々なる眞理があらう。或ものは數理的と呼ばれ、或ものは歴史的と又或ものは科學的と呼ばれるであらう然しそれは内容の差であつて、眞理と云ふ形式に於ては共通である。即ち種類は多く名稱は異つても、凡ては眞理體系

中に並在する。丁度人種は異つても、人間と云ふ事に於て一樣であるのと同じである。多くの哲學者は宗教的眞理を種々なる眞理の一つであると考へてゐる。

然し宗教性と云ふ事が究竟性であるならば、そこには唯一性があらねばならぬ。唯一なるものと只一個のものとは混同されてはならぬ。種々なる眞理の只一つに過ぎないならば、それは「一」としての基礎を持たぬ。かゝる基礎を缺く時それはもはや宗教性を持たないではないか。他の眞理と並在し得るならば、それは相對の存在であらねばならぬ。かゝるものにどうして無上な權威を認める事が出來よう。かゝる理解は宗教的眞理に一つの場所を與へる事に於て成功するであらう。然し之れによつて究竟な基礎をそこから奪ひ去るではないか。宗教的眞理を他のものと並立して理解する事は淺い見方に過ぎぬ。それは一個の眞理ではなくして唯一の眞理である。唯一とは之に並在し對立するものを許さぬ謂である。他の眞理と宗教的眞理とを同一の標準に於て解する事は出來ぬ。

一般に正しき認識卽ち眞理たる爲には客觀性を持たねばならぬと考へられる。かゝる妥當する性質が可能となるのは先天的規範に依存するが故であると解されてゐる。此考へは思惟に關する鋭き見方であると私も想ふ。然し前にも疑つた樣に、經驗に前後を分け、事實と規範とを峻別するのは、作爲なく獨斷なき考へであらうか。又客觀的なる事がものを確實ならしめる最後の根據であらうか。主觀客觀の對立それ自身に絕對な意味があるであらうか。客觀と云ふ事は相對の世界に於てのみ、確實な事の根據となるのではないだらうか。一步相對の世界を出る時、どこに主客の別があるであらう。客觀とか普遍とか云ふが如きは未だ二に墮した見方に過ぎぬ。ある內容が絕對に確實であるとは、客觀的な故ではなく、主客の二を越えるが故であらねばならぬ。主客の二もなき世界を究竟の世界と呼ぶのである。客觀的な眞理と云ふが如きは、眞理の凡てゞもなく又最後のものでもあらぬ。それは寧ろ究竟な眞理を思惟によつて定限した姿に過ぎ

ぬ。思惟の分別には作爲がある。認識論者は如何に A priori と云ふことを愛してゐるであらう。然しかゝるものが不自由な束縛として意識される場合がいつかは來るであらう。宗教の理解に於てかゝる見方は新しい一つの拘束である。

宗教の眞理が眞理として承認せられるのは客觀性を持つが故ではあらぬ。それは究竟性を持つ事によつて自存する。故にそれは他の眞理と同一視せられる何ものでもなく、同時に差別せられ對立せらるゝ何ものでもあらぬ。客觀とか普遍とか云ふ事は宗教的眞理の確實さを保證する力とはならぬ。それ等のものは相對的保證に過ぎぬ。

判斷に於て吾々は眞僞の世界に入る。判斷とは僞に對し眞を撰ぶ働きである。此時論理の法則は吾々の歩みを過ちに陷らしめない樣に吾々を指導する。論理への依存が厚ければ厚いほど吾々の判斷は洗煉される。かくして得られた眞理は誤謬でないが故に、何人からも承認される客觀的知識として是認される。

然し宗教的眞理も同じ樣に誤にあらざる眞理であらうか。之は重要な問ひであると私は思ふ。もとより眞理であるからには誤謬であつてはならぬ。然し同時にそれは誤りに對する正として解すべきものであらうか。誤に非る眞、誤謬の否定としての眞理、僞に對する眞、かゝるものは凡て相對義に終る眞理ではないか。宗教的眞理が單に誤に非る眞理であるなら、私はそこに究竟性を見出す事は出來ぬ。それは反面を豫想する正面に過ぎぬ。それは僞に對する眞ではあらう。だがかゝる眞は僞の反律に過ぎないではないか。正邪眞僞は對辭に過ぎぬ。判斷は肯定否定の間を往復する。人々が誇りを以て眞理と呼びなすものも相對の意を越える事が出來ぬ。故にかくして得られた眞理は究竟的眞理ではあらぬ。宗教的眞理はかゝる眞理の何れでもあらぬ。

宗教的眞理は單に誤に非る眞理と云ふが如きものではあらぬ。それは誤を許さゞる眞理である。僞と云ふ對辭を持たざる眞である。左なき右である。古人が呼んで周圍なき中心と云つた趣きがある。僞を思ふことなくしてあり得る眞で

ある。否定の反律を豫想する事なき肯定である。科學的眞理は誤りを避ける。然し宗教的眞理は避けるべき誤りを最初から持たぬ。宗教に於て眞僞の二字はあらぬ。古人が「唯揀擇を嫌ふ」と云つたのはかゝる意味であらう。判斷は揀擇である。然し究竟の世界には判斷すべき眞僞があらぬ。宗教的眞理は眞に對する僞ではあらぬ。然し共に僞に對する眞であつてもならぬ。眞僞の別なき眞である。僞を許す事なくして自らあり得る眞理である。宗教的眞理は自律する眞理である。眞自體である。

かくして吾々は次の特質を擧ぶ事が出來るであらう。自律するが故にそれは自明な眞理との意である。分明にされる眞理ではなくして、自らが自らの明るさを保證する眞理である。誤りを許さぬ眞理なるが故に、人はそこに疑ひ惑ふ暇を持たぬ。眞理自體より他に何ものもあらぬ。宗教的眞理はその自明性に於て獨在する。かゝる自律性や唯一性なくして吾々は眞理を宗教的と呼ぶ事は出來ぬ。かゝる意味に於て他の多くの眞理と並在するものではあらぬ。一つの場所を占めるが故にその存在が認められるのではあらぬ。全き存在であるが故に一つの場所と云ふが如きものを持たぬ。

諸々の眞理は證明せられた眞理である。然し宗教的眞理は眞理の證明に依存してはならぬ。人は證明せられるものを確實なる唯一のものと考へてゐる。然しかゝる確實さは相對界に於て效果を持つに過ぎぬ。一度究竟の世界に入るならば何處に證明されるものがあり、又證明し得るものがあらう。證明それ自身が相對の義を越え得ないからである。論理的理知によつて理解し得ないものを不明であると云つて棄てゝはならぬ。不明なのは理知に限界があるからである。證明さるゝ凡てのものは有限なものに過ぎぬ。人は究竟なものを迄證明し得ると思つてはならぬ。それは當に證明の力に餘るのみならず、實に證明する事をすら許さぬ。何となれば究竟は自明なるが故に分明にさるゝ必要を持たぬ。自明なものを理知で觀ずる時不明であると云はれるに過ぎぬ。丁度太陽の光の眩さを見る時、何ものをも見得ない暗さを感じるのと

同じである。宗教的眞理は證明される事によつて確實となる眞理ではあらぬ。證明を許さぬ自明さによつて自らの確實さを保證する眞理である。それは古人が名づけたように自證の眞理である。自證の眞理を宗教的眞理と云ふのである。

四

私はこゝに本質的に異る二樣の眞理がある事を主張した。二樣とはもとより對立するとか差別せられるとか云ふ意ではあらぬ。一つは相對依存の眞理であり、一つは絕對自存の眞理である。吾々は是等のものを並在せしめて考へる事は出來ぬ。何となれば後者は比較し得る何ものでもないからである。一個の眞理と唯一の眞理とは同一の世界にはあらぬ。前者は正しき眞理、客觀的眞理と呼びなすものを指すのである。それは論理的であり立證せられる眞理である。誤に非ざる眞理、僞に對する眞を示すのである。

後者は眞僞なき眞理、究竟の眞理である。それは證明せらるゝ必要なき自證の眞理である。誤を許さゞる眞理、僞に對せざる眞、誤謬を反面に持たざる眞理、自明なる眞との義である。

今日認識論が明かに主張するものは前者である。然し私は後者をこそ宗教的眞理の本質と解してゐる。そうしてかゝる理解を通してのみ、滿足に信仰の意味を解し得るのであると考へてゐる。かくして吾々にとつての重要な問題――知識と信仰との關係に就て、光ある理解へと吾々を進め得るであらう。

私は宗教的眞理が自證の眞理であり自明の眞理である事を說いた。かくして讀者はそれが論ぜらるべき眞理でない事を理解されるであらう。それは思惟によつて解し得る眞理ではあらぬ。判かれ疑はるゝ何ものでもあらぬ。吾々はそれを理知によつて知る事は出來ぬ。知つて後理解せらるゝ眞理ではあらぬ。判斷を認識の唯一の作用とするなら、かゝる

認識論によつて理解さるゝ宗教的眞理はあらぬ。判かれ論ぜられ分別せられ明かにされるものは、ひとり眞僞の世界である。然し眞僞の二を許さぬ宗教の世界に於て、かゝる審判は何等の力をも持たぬ。

かく云ふ時批評家は私が不可知論（Agnosticism）に陥つてゐると見做すかも知れぬ。然しそうではない。却て理知が明かにする世界よりも、尚明るい世界に吾々は入りつゝあるのである。人は思惟し得るものを又は判別し得るものを最後の明るさだと思つてはならぬ。況んや思惟し得ず知解し得ないものを直ちに不明であり不確實であると思つてはならぬ。自明なものよりも、より明るいものが何處にあらう。自證の眞理よりも、より確實な眞理が何處にあらう。それを知り得ないのは、自明であつて知の働きを許す餘地を止めないからである。知り得ぬのは暗いからではなく眩いからである。判斷を越えた世界は不可知の世界ではあらぬ。知るをすら許さぬ自明の世界である。

何の思惑が何の懐疑がかゝる世界に於て力を持とう。自明である眞理の前に、持ち出すべき論理や分別はあらぬ。それは知るをだに要せざる眞理ではないか。人はそこに於て判く一瞬の時間をすら持たぬ。それを知る爲の過程は何處にもあらぬ。時もなく處もなくそのまゝに受け入れられねばならぬ。自證の世界に對するかゝる承認をこそ、信仰と呼ぶのではないか。

自明な眞理は權威ある眞理である。人はその前に於て己れの知を主張する事が出來ぬ。權威は無條件な承認を要求する。權威に打たれる無條件な承認をこそ信仰と名づけるのではないか。シュライエルマッヘルが「絶對從屬」を宗教的生活の本質と解したのは誤のない理解である。宗教的眞理は單に妥當する權利を持つ眞理と云ふが如きものであらぬ。權利は一つの資格に過ぎぬ。全き資格ではあらぬ。近世の認識論は問題を事實から權利に高めたと云ふ事を誇る。然し權利はまだ最後の基礎ではあらぬ。權利から權威に深まるに及んで吾々はものゝ根柢の根柢に入るのである。權威ある

眞理をこそ宗教的眞理と呼ぶのである。私が嘗て書いた樣に、それは細心に構成せられる眞理ではなく、無心に是認せらるゝ眞理である。或資格を持つ權利の上に主張される眞理ではなく、あらゆる資格を越えた權威を持つが故の眞理である。それは價値（Value）の世界であるよりも、評價を許さぬ（Invaluableness）境である。

人は宗教の世界に於て自らの知に傲つてはならぬ。神の前に誇り得る吾々の知識はあらぬ。パウロが云つた樣に神の智慧の前に如何に人の知は愚かであらう。宗教の眞理とは神の持つ眞理との義である。究竟な眞理である。より明かな眞理はあらぬ故に信じ入るべき眞理である。論ぜらるゝ眞理は知らるゝ眞理であるが、判く許さぬ眞理は信ぜらるべき眞理である。自證なものより、より深き證明を持つものが何處にあらう。私はより確かな眞理を他に思ふ事が出來ぬ。そこにはもはや思惟を挿入すべき少しの場所もあらぬ。信ずるほかなき眞理である。確かな世界は知り得る世界ではなくして、信じ得る世界である。人はいつも保證を求める。それならばなぜ自證せるものを求めないのであるか。人知の保證と云ふが如きものに絶對の力はあらぬ。宗教的眞理は神に保證せられた眞理である。

かく考へるならば、明るいと思はれる知識の世界よりも、より明るいものが信仰の世界である。知識が確であるならば信仰は更に確かである。否、比較し得ぬ程確である。確實ならざる信仰と云ふが如きものは存在せぬ。說き得ない故を以て、人は屢々信仰の不明を想ふ。然し理知からしてそれが不明だと思はれるに過ぎぬ。說くを許さぬ何事かは、說き得るものよりも一層確實である。それは自證の世界だからである。自證とは究竟的保證ではないか。信仰こそ全き知識である。

知によつて神の國をうかゞう事は出來ぬ。宗教的眞理の理解は直ちに信仰を要求する。信ぜずして解し得る宗教的眞理はあらぬ。信仰は全きものへの作爲なき理解である。信仰は無心である。淸き心を持つものゝみ神國に入るのである幾度か聖者は幼き者を讃えたであらう。無垢なるものゝみ信仰に活き得るのである。知識に據るものは如何に神の國か

ら遠ざかるであらう。知によつて宗教をまで剖こうとする時、聖さを瀆す罪から免れ事るは出來ぬ。嘗て耶蘇が告げたように聽き者にこそ凡ての神秘は匿されてゐるのである。

宗教の世界は自明な世界であるが故に信ぜらるべき世界である。信じ入るよりほかなき世界である。信仰とはかゝる權威への絕對歸依である。然しかゝる歸依を束縛だと思つてはならぬ。究竟に歸依するとは究竟と一つに活きるといふ意である。究竟の自由に甦る意である。歸依よりより深き自由はあらぬ。人は無條件なかゝる服從を盲從であると思つてはならぬ。無條件と云ふ事は盲目的と云ふ事ではあらぬ。否、目的自體である究竟そのものに交る謂である。神への服從は、目的への服從である。信仰は盲從ではあらぬ。

科學的眞理は知らんとする意志を要求する。然し宗教的眞理は信ぜんとする意志を要求する。知識は相對界に於ける理解である。然し信仰は究竟界に於ける理解である。信ぜずして味はれ得る宗教的眞理はあらぬ。知識は信仰の場所をまで犯してはならぬ。知識を越える信仰は知識に又知識以下に沈んではならぬ。知識は分明な即ち誤りに非ざる眞理への理解である。信仰は自明な即ち誤りを許さゞる眞理への理解である。吾々は各々の特質を明確に承認せねばならぬ。それは並存すべき一系統の眞理ではあらぬ。故に對立し矛盾する何ものでもあらぬ。知識對信仰の問題はあらぬ。信仰の究竟な世界に對とか反とか云ふ字はあらぬ。そこには二がない故に矛盾する何ものもあらぬ。

知識は知らるゝ眞理を吾々に與へる。信仰は味はるゝ眞理を吾々に贈る。神の眞理は說く事は出來ぬ。說かるゝが如き相對のものではあらぬ。然し說かれずとも味はれてゐる眞理である。味識は知識よりも深き理解である。かゝるものを不合理であるとか、背理であるとか、又は不可知であるとか云つて棄てゝはならぬ。論理性は合理性の全てゞはあらぬ。信仰こそ合理的要求の歸趣である。生命に深く固く味はるゝ體驗である。

信仰に入るとは、人の知慧を越える意である。人の知慧を越える時、彼は神の知慧に交るのである。己の心を空しくするとは、神の心に己を充たす事である。無心は無知ではあらぬ。信仰をこそ全き知識と呼ばねばならぬ。

(一九二二、七、一〇)

農村法律問題（其の三）

末弘巖太郎

其の二　永小作の法律關係

一

現在農村問題の中心は小作問題にある。從つて先きに農村法律問題の根柢として充分に考慮されねばならぬ公有林野の問題について一應の説明を試みた私は、今や筆を轉じて小作の法律問題に向はうと思ふ。

所が同じく小作と云ふても、其中には普通小作と永小作との區別がある。此二つは現行の法制上は素より、沿革から云ふても、經濟上の見地から見ても、全然區別して考へられねばならぬ異別の制度である。從つて同じく小作問題と概稱されて居るものゝ中でも、普通小作に關聯して起るものと永小作に付いて起るものとは自ら問題の內容が違ひ、從つて又之を解決するに付いて考ふべき根本の論點が違はねばならない。無論現在小作爭議と稱されて居るものゝ大多數は普通小作について起つて居るけれども小作問題を考へる第一段としては普通小作の外に永小作の存在すること、それ等相互の間には十分區別して考へねばならぬ重要なる差異あることを知らねばならぬ。何故なれば區別を明瞭にせずして小作問題を論ずることは、抑も議論の出發點を過つて居るやうに思はれるからである。

其所で、私は小作の法律問題を論ずるに當つて先づ稿を「永小作の法律問題」から起さうと思ふ。

二

永小作の話をする爲めには、先づ其沿革について一應の説明を與へる必要がある。それが現行以上如何なる性質を有するものであり、又今後如何に取扱はるべきものであるかと云ふやうな問題は、すべて之を後に讓る。

永小作制度を研究せむとする者の先づ第一に注意すべき事實

は、現在永小作の慣行があると云はれて居る田畑の多くが海岸又は河口等に存在する事實である。例へば、愛知縣の鳴海町其他あの邊の入江に沿ふた一帶の土地、大阪神戸附近の其昔難波江と云はれた一帶の海岸、其他徳島縣板野郡の海濱に沿ふた田地等には廣く永小作の慣行がある。然らばそれは果して如何なる理由に基くのであらうか？ それは果して何事を語るのであらうか？ 讀者は先づ此點を十分に考へて見なければならぬ。

現在永小作地になつて居る土地は其昔多くは濕地其他荒無地であつた。それを開墾するに當つて、其所有者又は拂下人は自ら海岸に堤防を築くとか井路を作るとか云ふやうな根本の大工事を引受ける代りに、内部の田地を開くことはすべて之を他所から招致した百姓にやらせた。地主乃至拂下人には資本はあるが勞力がない。百姓には勞力はあるが資本がない 其双方の足らざる所を互に補ひ合ふ爲めに、例へば地主は百姓を招致した上之に向つて「若し お前等が此土地を開墾すれば子々孫々に至るまで永代小作させてやる」と約する。かくして地主の資本と百姓の勞力との結合に依つて愈々田地が出來上ると、一方百姓は永代其土地を耕作する權利を取得し、他方又地主は之から掟米を受ける權利を取得するのである。小作地とは云ふもの丶、元來荒蕪地であつたものが今日の如き美田となつたのは元々百姓の勞力のお蔭であるから、其美田の上の權利は必ずしも地主のみをして之を獨占せしむべきではない。百姓は其勞力に對する報酬として美田そのもの丶上に權利を取消して然るべきである多少一般よりは安い小作料で耕すことが出來てもい丶。又其權利は普通一般の小作權よりは強固な、從つて濫りに地主に依つて奪はれることのないやうなものでなければならない。無論其開墾に從事した百姓が單なる勞働者として地主に雇はれて働いたのであれば、依つて彼等の受くべき報酬は勞力の代價即ち賃銀でありさへすればい丶。けれども單なる勞働者としてゞはなく多少なりとも地主の共力者たる地位に立つて勞力を提供し、從つて其勞力そのものに對しては全然何等の報酬をも受けないか又は僅少な報酬を受けたに過ぎないときは、彼等の勞力はどうしても其結果として出來上つた土地其ものに依つて報ひられねばならぬ。

此際地主が百姓の勞に報ゆるが爲め出來上つた田地の一部を分割して彼等に讓與したとすれば、事は極めて簡單である。何故それは、其場合には地主も百姓も別々な土地の單獨所有者になるだけのことで、以後二人の間には何等特別の關係も存在しないことになるから。所が維新前の法律思想によると、地主の小作地に對する權利は今日の土地所有權とは餘程違つたものであ

つた。小作人は封建君主に向つて年貢を納めねばならぬ。其年貢の附加税のやうな考へで小作料をとる權利を地主が持つて居た。從つて一の土地の上に小作人は耕作の權利を有し、地主は小作米をとる權利を有し、封建君主は年貢をとる權利を有し、更に又其上の何者かゞ年貢をとる權利をもつて居り、從つて今日ならば一個の所有權の內容とも見るべきものが、かくの如き上下の關係を持つた數人の間に分割されて屬することは少しも不思議ではなかつた。即ち今日の法律に於ては、土地所有權は地主一人に存し、他の者はすべて地主の許與を基礎として其土地を借り用ひることが出來るに過ぎないのに反し、昔は一個の土地の上に上下數人の者が所有權を有すると云ふやうな——法律學上に所謂分割所有權 Geteiltes Eigentum に相當すべき——法律關係の成立することが認められて居た。其所で百姓を招致して荒蕪地を開墾させたやうな場合にも、其勞に報ゆるが爲め土地の一部を分割して之に與へる代りに、開墾地の上に成立する權利の一部を分割して之に與へることが一般に行はれて居た即ち百姓をして單なる借地人たらしむる代りに之に永代其開墾地を耕作する權利を與へ、地主自らは百姓から掟米を受ける權利を自己に留保して滿足したのである。今日の法律思想を以て考へると、此場合でも土地所有權は地主にあり、百姓は單に其土地の借主に過ぎないやうに見へるけれども、當時の考では百姓はかくして土地の上に耕作權を得、地主は又其同じ土地の上に掟米收得權を有するに至り、二人とも其土地の上に所有權に相當すべき權利を取得したものを見るべきである。是れは獨り吾國のみならず封建的土地制度の特色として歐洲諸國にも存在した制度である。此事を考へると——餘談ではあるが——私にはどうも昔の人の土地殊に農業地の所有權と云ふ觀念は、今日の如く土地の借用收益權と云はむよりは寧ろ土地より產出する收穫物を收得する權利なりとして考へて居たのではあるまいかと思はれる。

百姓を招致して荒蕪地を開墾させることは明治になつてから盛に行はれた。殊に明治初年以來北海道に於て最も盛に行はれた。而して今日華族富豪役人などが北海道に持つて居る大農地の大多數はかゝる開墾に由來したものである。彼等は、明治五年太政官布告第三〇四號北海道土地賣貸規則、明治十九年閣令第十六號北海道土地拂下規則、明治三十年法律第二六號北海道國有未開地處分法、明治四十一年法律第五七號北海道國有未開地處分法改正法律等に依り、開墾を條件として官有地の、貸下を受けた上、之に內地から百姓を招致して開墾を爲さしめ、之に依つて法定の條件を充たして其土地の所有權を取得したので

ある。從つて所有權の名義は其等の華族や富豪に屬しては居るものゝ、彼等は唯權勢・緣故乃至は資力のお蔭で土地の拂下を受けたゞけのことであつて、其土地を今日の如き農地たらしめた者は實に其開墾に從事した百姓である。それで百姓の中には開墾の勞に報ゆるが爲め土地の分讓を受けた者もあろうけれども多くは引續き其土地の小作人として今日に及んで居る。明治以前ならばそれ等の直接開墾に從事した者は、土地そのものか又は權利の分讓を受けて居る譯である。所が北海道の場合に於ては土地所有權は拂下を受けた華族や富豪が完全に之を取消して仕舞ひ——無論多少土地そのものを分讓したと云ふことはあるけれども——開墾に從事した百姓は單なる小作人となつたに過ぎなかつた。無論華族や富豪達が土地を得た當初に於ては彼等も別に其土地に重きを置かず、從つて小作人も自己の利益を防衞する爲め特に法律の保護——權利——を必要としなかつた。けれども、年と共に農産物の價格が騰貴し又内地の農地不足が甚しくなるにつれて、地主も段々と土地所有者たるの意識が明瞭となり、其結果從來は餘り重きを置かなかつた其土地を新に重要なる收益の淵源として考へるやうになつた。其所で彼等は從來小作人の收益が所有者たる自己の收益に比して過大なることを覺知して小作料の增額を計るに至り、茲に初めて從來は殆んど法律の保護などを考へる必要のなかつた小作人等も改めて法律の保護を希望することゝなり、從來彼等の有したる權利の餘りに薄弱なるを感じ初めたのである。けれども時はもう既に遲い。土地に關する權利はすべて地主にあつて、小作人は唯地主から其土地の賃貸を受けて居るに過ぎないのである。彼等の權利は物權にはあらずして債權に過ぎない。併し公平に云へば彼等の權利はもつと强固な權利に依つて厚く保護されて居ていいのだと思ふ。從つて今後と雖も若しも地主が小作人の權利の法律上薄弱なるを利用して彼等を虐げるやうな事があれば、必ずや其所にゆゝしき小作爭議が起ると思ふ。而してこの場合吾々はどうしても地主に同情することが出來ない。何故なれば、彼等の土地はもと／＼拂下げに依つて無償に得たものであり、之をして今日の如き耕作地たらしめたものは實に小作人の勞力であり、而して小作人の勞力は封建時代のそれ程にも充分に報ひられてゐないのだから。

昔しは開墾に從事した百姓は土地其物の上に或る程度の所有權を與へられた。彼等の得た權利は決して單なる借地權ではなかつた。此事は土佐藩に於ては「通俗地主を呼で底地持と云ひ、永小作人——即ち開墾をした百姓——を上地持又は中地頭と稱し」（帝國農會發行本邦永小作慣行六二頁參照、）又大阪附近に

於ては他人に屬する濕地其他の荒蕪地に「地上ナシ開墾シテ畑地ト成シ」たやうな場合に「之ヲ上土權ト名付ケ地盤ノ所有權ハ地主ニアルモ地表ノ所有權ハ小作人ニ在リ古來自由ニ其上土ノミヲ賣買シ地主モ之ヲ承認シ來リタル」事實があつた（大審院大正六年二月一〇日民事第三部判決に引用された大阪府誌の記載參照）のに依つて明白である。無論彼等開墾者が「上土」を所有したと云ふのは、今日の法律學に於ける意味に於て土地の表面と地下とが異別の所有者に屬したと解すべきではなく、寧ろ開墾者の權利が强固な權利即ち所有權であることが——彼等の開墾に依つて作つた——「上土」なる有形物に依つて象徵されて居るに過ぎないとは思ふけれども、此一事に依つても當時の法律が如何に開墾者の權利を厚く保護したかを推察することが出來ると思ふ。

所が、徳川時代に於てかくして發生し又かくの如くに厚く保護せられたる開墾者の權利も、明治初年に於ける地租改正と共に段々と繼子扱を受けるやうになり、遂には現行民法に依つて「永小作權」と稱する一種の借地權にまで引き下げられたのであつて、其詳細は後に一括して之を述べる。玆には先づ之れから永小作權發生の其他の諸場合について一通の説明を與へねばならない。

三

昔土佐藩では農地兼併の弊を防ぐ爲めに田地の所有を農民にのみ許し士工商には之を許さなかつた。其結果農民と士工商との間には公然と田地の賣買をすることが出來なかつた。けれどもいかにやかましい封建制度の下でも實際の經濟的需要は法律を以て之を抑壓することが出來なかつた。當時の農民も亦借財其他の必要上田地賣却の必要に迫まられたのである。而かも公然之を賣却することは許されないので、彼等は多く自己の所有田地の上に永代小作米——加地子米——を收得する權利を設定した上之を他人に賣却して、金の融通を受くることゝし、藩主も亦之を默許した。かくして元來田地所有者たりし百姓は耕作權者となり、加地子米收得權を讓受けた者は又其土地の上に永代の小作米取得權を得るに至り、玆に土地所有權の分割を來したのである。併し先きに述べた開墾の場合には、地主の方から耕作權を小作人に分與した爲めに所有權の分割をましたのであり、今玆に述べて居る場合には地主たる百姓の方から小作米收得權を他人に讓渡した爲めに土地所有權の分割を生じたのであつて、結果だけから見ると全く同じことではあるが、之を生ぜしめた沿革に至ると二者は全く反對である。土佐の永小作は明治初年以來屢々當局者を惱ました有名なものであるが、其起原

をたづねると、其中には先きに説明した開墾に起因するものと今玆に述べて居るやうなものとあつて、前者を新田小作と稱するに對し後者を本田小作と云ふて居る。いづれにするも、其等の場合には一の土地の上に耕作を目的とする所有權と小作米收得を目的とする所有權とが併存したのであつて、小作人の權利は決して他人の所有地の用益權ではなかつたのである。然るに明治の初年地租改正の時以來政府は漸次この小作人の權利を厚く保護せざるに至り、遂に現行民法に至つては之に與ふるに「永小作權」の名稱を以てし、之をして他人の土地の單なる借用權――法律學者の所謂「他物權」の一種――たるに至らしめたこと先きにも一言した通りである。

明治政府が何故にかくの如きことをやつたか。其理由を適確に説明することは極めて困難な問題である。併し私一個の考としては、其主なる理由は維新後に於ける新政府が地租政策の確立に努力したことに存するのだと思ふ。無論從たる理由としては當時歐洲よりしきりに入り來つた所有權尊重の思想が當局者の新政策斷行に勇氣を與へたと云ふこともあらうけれども。維新以前に於ては封建的土地制度の特色として地租と地代との區別は必ずしも明確ではなく、一個の土地の上に封建君主が年貢米をとる權利を持つて居る以外、其下の臣下も亦或る程度の年貢米收得權をもち、地主も亦年貢米――「加地子米」――をとる權利を持ち、最後に百姓――「作主」――は殘りの米を取得する權利を持つて居た。所が封建制度沒落の際には何所の國でも地租をとる權利は之を國家に集中したい。從つて從來中間にあつて年貢米をとつて居た者を何とか處分せねばならない。其所で例へば獨逸の如きでは多くの場合、私權としての物上負擔權 Reallasten を認めて之を封建的中間地主に與へ、其代り今日の意味に於ける土地所有權は之を百姓に與へることゝした。之に反し我國では土地所有權は之を封建的中間地主に與へ、下の百姓には永小作權なる他物權を與へることゝしたのであつて、彼我の此點に關する處分は正反對のものであつた。明治政府の當局者は恐らくかくして與へた土地所有權が今日の如き横暴な超國家的なものにならうとは夢にも思はなかつたのであらう。所が事實は其後憲法の制定に依り又民法の規定に依つて絶對無限の力強いものと化し、而して――獨逸であれば土地所有權として待遇されたかも知れない――小作人の權利は單に他人の土地の借用權として取扱はるゝに至つたのである。

從つて此點から考へると、今日の「永小作權者」は明治政府の地租政策の「犧牲者」だと云ふても過言ではないのである。

四

尙以上の外にも、永小作の起原と認むべき事實は極めて多い。帝國農會が大正四年に發表した――永小作慣行の專門的研究者たる小野武夫氏の調査にかゝる――「本邦永小作慣行」に依ると、それが色々に分類されて居る。例へば、先きに述べた土佐の本田小作に於けるが如く地主たる百姓が土地負擔たる加地子米收得權を設定して之を他人に賣つたと云ふ――いはば獨逸の中世Rentenkaufに相當すべき――事例は他にも亦少くないやうである。又之と反對に、他人から金を借りて辨濟の出來ない百姓が已むなく所有の田地を手離すに際し、比較的安價に之を賣却し其代償として永小作權を自己に留保した例も稀れでない。尙其外、或は寺領地を耕作せざる爲めに「永代小作」すべき權利を百姓に與へた場合もあり、或は豪農が家附の內百姓に永小作權を與へて獨立の家を構へさせた場合もあり、又或は單に永年小作を續けたと云ふことを根據として永小作權を認められたやうな事例もある。其他細かに分けると尙色々の場合がある。

其いづれの場合たるを問はず、永小作權本來の特色は永代或る土地を耕作するに至つた。而して其權利と地主の權利との關係は場合に依つて必ずしも常に同一ではなかつたらしいが、兎に角今日の法律に於けるが如く永小作權者が地主の所有地上に之を制限すべき永小作權を持つて居たと云ふよりは、寧ろ地主も永小作權者も共に同一地上に或る程度の所有權を持つて居たものと解していゝやうである。

所が、明治維新以來、丁度歐洲に於て封建制度沒落後の土地制度が羅馬法流の絕對的土地所有權の思想を本として規律されることになつたと同じやうに、吾國の土地制度も亦全く近世歐洲大陸のそれと類似したものに變つた。從來は一個の土地の上に上下數人の者がそれ〳〵或る程度の所有權を持つて居た所謂分割所有權の制度が行はれて居たのを變へて、土地所有權は之を地主一人の手に集中し、他はすべて地主の許與を本として制限的の用益權を有するに過ぎざるものとする制度を行ふに至つた。而して其變更を斷行した主たる原因が明治政府の地租政策に在つたこと先きにも一言した通りである。

併し、すべての法律改正が事實上極めて困難なものであるやうに、明治初年のそれも中々容易ではなかつた。殊に土地制度の根本的改正は至難の業であつた。政府は之を斷行する爲め、地租改正事務局を設け幾多の法令を制定して、封建的の分割所有權其他今日一般に行はれて居るやうな羅馬法流の所有權思想を以てすれば解し難い各種の土地制度を、すべて無理矢理に現在のやうな土地所有權に變へて仕舞はうと努力した。それで、例へば先きに述べたやうな土地制度の行はれて居た高知縣に地

劵渡方規則（明治五年大藏省達第二五號等）を施行せむとするに際しては、從來の加地子米收得權者——「底地持」——を土地所有者として之に地劵を與へた。けれども從來「底地持」の持つて居た權利は完全な所有權ではなく「上地持」即ち小作人の權利と併むだ制限的の所有權に過ぎなかつたから、之に向つて完全な土地所有者としての地劵を與へることは不當であつた。其所で彼等に與へる地劵には土地の實價を記さず、「譬ば一反歩に付所得米一石此代價百圓相當の處前條の如く永小作人有之地主纔かに五斗丈け所務致し來り候分は地劵の代價も亦五十圓と相記し」たのであるが、明治六年愈々地租改正條例（明治六年太政官布告第二七二號等）を施行するに當つては、右地價の記載を「土地の眞價」に代へなければ地租賦課の基礎が立たない。併し、それにはどうしても土地の負擔になつて居る永小作權を消滅させなければならない。所がさうすれば又「小作人は自然破産と相成る道理」だから中々承知をしない。今日吾々が冷靜に考へて見れば、此場合地主には五十圓の地劵小作人にも亦五十圓の地劵を與へて、双方から其地價額に應ずるだけの地租を納めさせればよかつたのだと思ふ。然るに、當時の當局者はかゝる分割所有權的の制度を好まなかつた。その位ならば土地そのものを二人に分けてやる方がいゝと考へた。其所で高知縣令から政府に向つて處分方に關する伺が出た際にも政府は之に向つて「書面永小作の儀は元來地主と小作人との約定に候儀に付土地を小作人に買受候歟永小作の權利を地主に買受候歟双方熟議の上私有の分界可相立」云々なる指令を發した。依つて高知縣令は「右指令に基き地主及小作人等に小作權を處分すべき旨を訓諭し、其結果一部に於ては或は土地を折半し或は地主六分小作人四分或は小作人六分地主四分等の方法を以て分地致しなし」たけれども、中々一般には旨く行く譯がない。其結果「終に政府は當初の指令を取消し、舊慣其儘に差置くべしとの訓令を發せられ」、「租税諸公課の如き依然永小作人の負擔する所」となつて、其後に及むだのである（右伺及び指令の全文は先に引用した「本邦永小作慣行」二二七頁以下にのつて居る）。之れは最も顯著な一例に過ぎないけれども、封建的土地制度から今日のやうな土地制度に移り變はる事が如何に困難であつたかは此一事を以ても推察することが出來ると思ふ。

明治初年に於ても、永小作人の權利は既にかくの如くに脅かされ初めて居た。けれども、尚それが地主の權利と對等な立派な權利として認められて居たことは上記土佐の事例についても之を知ることが出來ると思ふ。所が、明治も既に三十年を經來り封建の遺制漸く人の記憶より去らむとする頃、現行民法が制

定された。さうして其中では「永小作權の存續期間ハ二十年以上五十年以下トス」(第二七八條)と定め、又「民法施行前ニ設定シタル永小作權ハ其存續期間ガ五十年ヨリ長キトキト雖モ其効力ヲ存ス但其期間ガ民法施行ノ日ヨリ起算シテ五十年ヲ超ユルトキハ其日ヨリ起算シテ之ヲ五十年ニ短縮ス」「民法施行前ニ期間ヲ定メズシテ設定シタル永小作權ノ存續期間ハ慣習ニ依リ五十年ヨリ短キ場合ヲ除ク外民法施行ノ日ヨリ五十年トス」(民法施行法第四七條)と定めた爲め、玆に本來は分割所有權であつた所の小作人の權利が單なる他物權になつたのみならず、本來「永代小作」することを目的として居た權利が民法施行後僅かに五十年にして消滅せしめられることゝなつたのである。

併し此の新法に對しては、民間からも又學者の間からも盛に反對の聲が擧げられた。其結果遂には法律の一部を改正するの已むなきに至つたのであるが、其顚末の記述は之を次回に讓らうと思ふ。

(此項未完)

巡回 農民學校內容

賀川豐彥氏を中心とする日本農民組合の第一回巡回農民學校はいよ〳〵來る八月二十一日より同二十七日まで大阪府河內郡津田村か若しくは山田村(會場未定)に於て開校することになり既に各講師の擔任課目及其他諸般の準備もほゞ整ふた。今回の試みは農民の自發的要求から出たといふ事が特に注目すべき事項で組合は唯その要求に促されて計畫したまでのものである相だから聽講料の如きも此種の試みには珍らしい通券五十錢一回十錢を徵收し以て會場の諸入費に宛てることになつてゐる。開校時間は午前六時より八時までと及午後七時から九時半迄の二回で午前は定員五十名とし、午後は二百名まで聽講を許すことになつてゐる。今日まで確定した教科目は

蔬菜栽培法(松山元治郎氏)生物學基礎知識 賀川豐彥氏)農村衞生(村上大阪府農會技師)若種栽培法(平野農場村本氏)、等で其の他に肥料學一班等もある、就中村本氏の若種栽培法は從來の黃熟收獲に伴ふ營養沃の減殺を防遏し質量共に完全なる稻作法を教ふるもので農民からは多大の期待をもつて迎へられてゐる相だかくして夏季の農民學校は技術方面に重きを置き冬季に於て思想方面に全分に努力を拂ふ計畫であると、尙八月二十七日の最終日には全國組合の理事會を開き同時に大演說會を開く豫定であると。

飢えたる露西亞を救へ

山川均

一

『諸君の受けた飢饉に關する報告は、いづれも皆な、實際の眞相を傳へて居らぬ。それは言語に絕してゐる。民衆は文字通りに、蠅の如く死んで居る……』昨年十二月四日を以て伯林に開かれた、露國飢饉救濟會議に於ける報告のうちに、コーテリール氏は斯う云つて居る。この會議はナンセン救濟團、萬國赤十字社、國際勞働者飢饉救濟委員會を初めとし、世界の殆んど有ゆる國々に於ける、殆んど有ゆる救濟機關を代表したものであつて、唯だ之に參加しなかつたのは、少くとも文明國のうちでは、日本の一國である。

コーテリール氏の視察した人口四百の一村落では、一日に八人から十人まで死亡し、人口九千の一村落では、一日に五十人の割合で死んでゐた。飢民の死骸が道ばたに轉ろげてゐるのは普通のことであつて、少し隔たつた所まで行くには、必ず此の悲慘な光景にぶつかる。墓場には、男や女や子供の丸裸の死骸が、二十も三十も、穴が一杯になつた爲に積み上げてある。この死骸がまた骨と皮ばかりで、顏には死ぬるまでの云ひ知れぬ苦みが刻まれて居る。

ナンセン博士の報告によると、サラトフ州の農民は、文字通りに、秋の暮に集めた麥藁と水とで辛くも命をつないで居る。彼等は麥藁を碎いて、それに樅の樹の皮や、粘土や、家畜の屍骸から取つた骨屑とを混ぜて、之を唯一の營養物として食つてゐる。多くの百姓の家には、死骸が何日も埋めずに其まゝになつて居る。大抵の家では、一家族を擧げて、餓死を待ちつゝ床に横はつてゐる。サマラ州も同じであつて、どの村へ往つて見ても、埋葬せずに其まゝにしてある小兒の屍骸は、飢えた野犬の喰ふに任せてある。

飢饉地方に向つた救濟委員の一人は、飢民が線路の上に斃れて居る爲に、幾度びか列車を停止しなければならなかつたと云ひ、又た他の報告者は、母親は食を求めて泣き叫ぶ子供の聲を聞くに忍びないで、自ら我が子をヴオルガの河中に投じてゐることを報じ、更に他の報告者は、サマラ州の或る地方では、親の死屍を食つた一少年のあることすらも傳へて居る。飢饉の慘害を蒙つた地域は、全露の三分の一に及び、人口三千萬、その内の八百萬人は餓死に曝されて居ると云ふことである。『飢えたる露西亞を救へ』といふ運動が、今や世界的の大運動となつたのは當然のことである。

二

露西亞の飢饉は、『過激派』の惡政の結果であると云ふ説がある。或はそうかも知れぬ。けれども若し露國の飢饉が、勞農政府の罪であつたとすれば、それは勞農政府が、雨を降らさなかつた罪である。

三年の間、外は列國の帝國主義に對し、内は是等の資本主義國の軍資と彈藥によつて支へられた反革命軍に對して、惡戰苦鬪した露西亞の民衆は、一九二一年に至つて初めて平和の曙光を見た。東の方からはコルチヤク軍が、ヴオルガの流域に沿ふてサマラからカザンの線にまで進出し、南からはデニキン軍が莫斯科に迫り、一時は勞農露西亞の版圖の四分の三は、是等の反革命軍の占領に歸してゐたが、一九一九年の五月二十日にはコルチヤク軍はサマラの向ふで大敗し、翌二〇年の一月六日には、赤軍はデニキンを擊破した。十月十二日には波蘭との休戰條約が調印され、十一月十四日にはセバストポールが陷入り、ウランゲンは最後の敗軍をした。斯くて武力干渉の望みが絕えたので、翌二一年三月十六日には英國との間に通商條約が結ばれた。露西亞の民衆は、初めて平和の裡に、經濟上の建設に全力を傾注することの出來る時が來た。社會主義共和國の前途は初て光明に輝いた。

この時、飢饉が襲來した。

コルチヤク軍とデニキン軍の掃蕩によつて、初めて内亂狀態が鎭定した一九二〇年にも、ヴオルガ地方には大旱魃があつた。この旱魃は、一九一一年の大旱魃以上に甚しかつたと云ふことで、同年の秋作は、サマラ州の耕地三千七百七十二萬二千エーカーのうち、實際耕作せられたのは、僅かに百四十八萬三千エーカーとなつた。其上旱魃の結果と、農具と家畜の不足から勢ひ土地の耕やし方が淺くなつた爲め、從來秋作は一エーカー當り九百三十四ポンドの收穫があつたものが、僅かに四十四ポン

ドに激減した。

ところが翌一九二一年は、ヴォルガの流域全體に亘つて、一層激しい旱魃があつた。之は同年の天候を、サマラ州に於ける過去十七年間の平均天候と比較して見ればよく分る。

平均氣溫（攝氏）

	四月	五月	六月
十七ケ年平均	五	一三	一五
一九二一年	九・一八	一九・三	二四・九

土壤平均溫度（攝氏）

	四月	五月	六月
十七ケ年平均	六	一七	二五
一九二一年	一三	二五	三二

平均雨量（ミリメートル）

	四月	五月	六月
十七ケ年平均	二一	三八・八	四六・九
一九二一年	一・七	〇・三	五・一

蒸發（ミリメートル）

	四月	五月	六月
十七ケ年平均	五五	一二八	一三六
一九二一年	八八	二一三	二八一

これが『過激派』の暴政の報ひである。そしてその結果は知るべしである。畑の上のものは殆んど一本も殘らず、枯死して了つた。僅かに生殘つたものも、とても刈入れの手間に値ひせぬほどの實を結ぶに過ぎなかつた。それすらも愈々食物が欠乏したので、一本づゝ叮嚀に刈取られた。前年の旱魃の爲に、二一年の春作は既に二百八十三萬二千エーカーに減じてゐた所へ一層激しい旱魃が續いたので、春作の平均收穫一エーカー當り千三百三十四ポンドに對して、二一年の春作は一エーカー當り僅に百二十ポンドに減少し、サマラ州全體の穀物の收穫は七萬噸に過ぎなかつた。然るに一人一日の食糧を十四オンスと見積つて、サマラ州の穀物所要額は、三十三萬九千四百六噸となり之に五十三萬九千六百噸の種子を加へると、總計九十三萬九千六噸となり、サマラの一州だけでも、六十六萬九千六噸の穀物が不足することゝなる。（近東救濟團遣露委員の報告による）

そこで一九二一年の秋には、恐る可き飢饉が襲來した。

三

之れはサマラ一州の數字であるが、一體この飢饉の慘禍は、どれ程の範圍に亘つて居るか。或人は露西亞の飢民は二千萬と云ひ、或る人は二千五百萬と云ひ、また他の報告者は三千萬と

云つて居る。之は要するに、調査の標準が異つて居るからである。飢饉の慘狀の最も甚しいのは、歐羅巴の穀倉と云はれるヴオルガ流域地方であるが、ニジニノヴゴロツド、イエカテリンブルグ、ペルム、ペンザ等の外にも、ドンの流域、北部コオカサス、ウクライナの一部分にも甚しい被害がある。倫敦駐劄露國通商委員の發表した報告によると、歐羅巴及びアジア露西亞の全耕地は九千九百八十六萬七千エーカーであつて、其の人口八千九百十三萬七千人であるが、全然又は一部分作物の取れなかつた地方は約その三分の一、即ち三千二百萬エーカーに達し、この人口は二千五百八十八萬九千人である。若し之にウクライナの被害地を加へると、面積五千六百萬エーカー、(全耕地の四割)人口三千七百二十一萬人となる。そして被害の最も甚しいヴオルガ及びウラルの兩地方だけでも、約二千五百萬の人口が現に飢餓に曝されて居るのである。第九回全露ソヴイエツト大會に於けるカリニンの報告にも、現在(一九二一年)飢民として政府に登錄せられて居る人口は二千二百萬であつて、尙ほ此外にも、飢饉に近い狀態にある者が約五百萬人に上ぼると云つて居る。

是等の諸地方に於ける一九二一年の春作の收穫と、穀物の所要額に比較したならば、飢饉の影響が如何に大なるかを知ることが出來る。同じく露國通商委員の報告によると、アストラハン、バシキール共和國、ヴオチアク地方、ヴイアトカ、キルギース共和國、マリー地方、ヴオルガ獨逸人コムミユン、サマラサラトフ、シムビルスク、ダツタン共和國、ウフア、ツアリツイン、シユヴアシ地方に於ける穀物の收穫は二百七十六萬八千噸であるが、此の地方に於ける穀物の所要額は四十六萬四千噸であつて、差引一百二十九萬五千噸(即ち所要額の三分の一)の不足となつて居る。若し各地方について見れば、不足額の割合は一層甚しく、ヴオルガ獨逸人コムミユンの如きは、不足額は所要額の三分の二に達して居る。カメネフの報告によると、一人當り一日凡そ十二オンスの穀物を支給するとして、ヴオルガ地方だけの飢民を救ふ爲にも(昨年の十月から今年の收穫期までの十ケ月間に)百二十六萬噸の穀物が必要である。然るに露西亞の國内では、約四分の一の穀物を供給することしか出來ぬので、殘餘の四分の三(即ち九十四萬五千噸)は之を國外からの供給に待たねばならぬ。

然しながら單に飢民に食物を與へたゞけでは、飢民を救ふことは出來ぬ。辛うじて二千五百萬人を、目前のさし迫つた餓死から救ふことが出來たにせよ、本年少くとも、一九二〇年の秋作と一九二一年の春作に均しい面積の播種が出來なければ、一

九二三年も亦飢饉である。否其の慘狀は一層甚いに違ひない。そこで從來の露國の大飢饉は、何時でも兩三年に亘るのが常であつた。農業人民委員の報告によると、飢饉地方に於ける昨年の秋作の播種豫定面積は一千五百三十二萬二千エーカーであつたが、實際播種せられたのは九百七十八萬九千エーカーであつて、豫定の六割三分九厘に過ぎず、一九二〇年の播種に比較しても、その七割二分八厘である。近東救濟遣露委員の報告によると、ヴオルガ地方を再び歐羅巴の穀倉とする爲には、最小限度に見積つても、飢饉地方に一千八百八十八萬六千エーカー(一九二〇年標準)の播種をしなければならぬ。そして一エーカーに對して種子百ポンドの割合とすれば、九十四萬四千三百噸の穀物が必要である。然るに政府が穀物税のうちから、種子として供給することの出來る豫定額は、僅かに十六萬二千噸に過ぎないから、約八十萬噸の不足とある。そこで飢饉地方の食糧の不足額九十四萬五千噸と合せて、都合百八九十萬噸の穀物の不足額は、之を國外からの供給に待たねばならぬ。

以上は焦眉の必要ある食料用と播種用の穀物だけの計算であるが、其外にも農具と家畜の不足がある。穀物以外の生活必需品がある。單に露國の飢民を當面の餓死から救ふばかりでなく、眞に飢饉慘狀から脫せしめる爲には、全世界の協力を必要とすることは、以上の數字によつても明かである。

四

一九二〇年及び一九二一年の旱魃に、『過激派の暴政』を懲戒するといふ嚴そかな天意が含まれてゐたかゐなかつたかは別としても、その結果は同じことである。この超自然的の旱魃も、自然的の旱魃と同じように、その結果は飢饉と餓死とであつた。

然しながらこの飢饉の慘禍を、より甚だしくしたものは、必ずしも自然的の理由のみではない。それは慥かに人間の負ふ可き責任であつた。そこで或人々は、この責任を『過激派』に負はしめようとする。

斯ように露國の飢饉は、一九二〇―二一年の大旱魃といふ自然的の原因によるものではあるが、それには色々の社會的の條件が加つて、その程度に於ても範圍に於ても、一層重大となつて居る。私は是等の社會的の條件を說明するに就ては、主として近東救濟遣露委員の報告に據らうと思ふ。この委員會は、紐育の國立應用農事研究所長アルバアト・ジョンソンを委員長とし、曾て露都駐剳米國大使館の書記だつたパキストン・ヒッベンを幹事として昨年八月に編制され、同年八月十六日、ヂョルヂア・勞農社會主義共和國の首府チフリスを出發し、九月十二日

に至る二十七日間に亘つて、歐露の飢饉地方を踏査したものである。飢饉に就ては勞農政府側から發表せれた色々の文書や材料があるにも拘らず、此點に就ては、私が特に此の委員會の報告並びに意見に據つたのは、右の遣露委員は資本家の援助の下に成立つたものであり、從つて『公平』だからである。

旱魃の影響を甚しくした第一の條件は、露國に於ける耕作法の幼稚なことである。若し灌漑の設備が發達して居れば、天候の影響も或る程度までは緩和することが出來る。また土地が深く耕やされて居れば、從つて多くの水分が貯へられて居るので、或る程度までは雨量が少くても差支ない。然るに露國の場合は、農具と家畜と勞力との缺乏の爲に、ヴォルガ地方に於ても平均四寸の深さに耕やされてゐたに過ぎぬ。また一回若くは二回の收穫が全然失はれたにしても、其地方又は他の地方に穀物の貯藏があれば、それだけ飢饉の影響を緩和することが出來る。ところが露國の農業の生産力は極めて低く、戰前に於ても毎ヘクタールに對する平均收穫高は白耳義の二一・一（キンタル）、英國の二〇・二、獨逸の一六・八、佛蘭西の一三・二に對して、露國は僅かに六・四であつた。

殊に開戰以來、播種反別は年々に激減して居つたので、飢饉の爲に穀物を貯藏するなどゝは、思ひもよらぬことであつた。其上に交通機關の混亂は、飢饉地方の救濟を一層困難にした。

然しながら斯ような形勢は、決して偶然の事柄でもなければ、また必ずしも農民の罪でもなく、それには相當の社會的の原因があつたのである。

五

戰爭前には、露國の農民一家族の耕作地は平均八エーカーであつた。そして當時の土地制度によると、農民は地主から八エーカーの土地を借りて居れば、借地料の代りとして、同じく地主の爲に八エーカーの土地を耕作しなければならぬ。斯ように農民は、自分の耕地を增せば增すだけ、地主の爲めに耕作すべき土地も增すので、農民が耕作を增加し得る最大限度は直ちに判注する。そして之れ以上の土地を耕作するには、機械なり餘分の家畜なりが必要であるが、農民にはこの餘分の資本を投下する力がない。そこで農民は地主から多くの土地を借りて自分で耕作しないで、借りた土地なり買つた土地なりは、之を他の農民に又た貸しをする。從つて少數の富裕な農民も、大規模な借地農業者とはならずに、小地主となる。そして其結果露國の農業は近代的の機械力を使用する大規模の農業に發達する事が出來ないで、何時までも原始的な農具による小規模の農業に止どまつ

た。斯ように農業技術の幼稚な結果は、比較的多くの勞力を必要とするので、戰前に於ても露國の耕地の三分の二は、大地主の手にあつて勢ひ荒廢に委せられてゐたのである。

十一月革命の結果は、著しく農民の土地を增加した。飢饉地方の中心に位ひし、且つ最大の州であるサマラでは、大地主から沒收した土地は、殆ど全部農民の間に分配された。其の面積は二百五十萬エーカーであつて、農民は一家族平均、約七十五エーカーの耕地を得た譯である。けれどもサマラ州では、耕地の全面積三千七百七十七萬二千エーカーのうちで、僅かに其の二割九分八厘（一千七十九萬二千エーカー）が耕作せられてゐたに過ぎなかつた。そして一九二〇年には、實際の耕作反別は更に其の四割、即ち四百三十一萬六千八百エーカー（全耕地の一割二分）に激減して居つた。そこで革命の結果、農民の耕地は七十五エーカーを增したにも拘らず、農具と家畜と勞力との欠乏して居る限り、農民は是等の土地を利用することが出來なかつたのである。

三ケ年間の帝國主義的戰爭が、如何に多くの壯年と靑年とを農村から奪つて、戰線で屠殺したかは云ふまでもないが、官僚と軍閥との支配を脫した露西亞は、國內の反革命軍と之に呼應する資本主義列國の武力干涉に備へる爲に、尙ほ三年の間、四百萬の赤軍を維持しなければならなかつた。そして之が爲には農村の勞働力は著しく不足を來した。そしてこの責任は、當然資本主義的帝國主義と、其の資金によつて動く反革命主義者の負ふ可きものであることは云ふまでもない。

露國の農民は戰爭以前からも、耕作に必要な充分の馬を持つてはゐなかつたが、戰爭は更に、多數の馬を農民から奪ひ去つた。農業人民委員の統計によると、一九一六年から一九二〇年までに、露西亞全土の馬は一割六分減少した。殘餘の八割四分のうち、果してどれだけが農業に用ひられて居るかは明かでないが、勞農政府の下では、私人の馬車や、競馬や、其の他の娛樂に用ひられて居る馬は全く無くなつたので、都會に殘つて居る馬は極めて少數であるにも拘らず、農村は到る所、耕作用の馬が著しく欠乏して居る。年々穀物の收穫の減ずるのは、一つには耕やし方が淺くなる爲であつて、ヴォルガ地方の如きも平均四寸となつたことは前述の通りである。そして其の原因は、主として、馬の不足である。ところが飢饉の爲に、農民は僅かに生き殘つた馬をも屠殺して食料として居るので、之はやがて翌年の收穫を減少し、飢饉狀態を長びかせる原因となつて居る。

遣露委員の踏査したところによると、ヴォルガ地方の農民は、曾て全耕地の耕作に要する頭數の三分の一以上の馬を持つて居

たことはない。そして現在では、其數は更に半分以上に減じて居り、翌年は更に激減するに違ない。

然らば馬に代はるべき耕作機はどうかと云ふと、之は其他の農具と同じく、開戰以來の七年間は、輸入は殆んど杜絶し、修繕すらも不可能となつてゐた。歐露の耕地は約三億エーカーであるが、實際に耕やされたのは、曾て二億六千六百萬エーカー以上に上ぼつたことはない。ヴォルガ地方に就て見ても、實際に耕作せられたのは、平均、全耕地の三割に過ぎなかつた。そして、露國の農民には、辛うじてこれだけの耕作のできる農具しか無かつた。そして其れとても極めて原始的な農具であり、且つ開戰以來七年間の使用によつて大部分は廢物となつたが、此間農民は殆んど一挺の新しい鎌を買ふことすらも不可能だつたのである。之は第一には、開戰以來、露國の輸入は軍需品が大部分を占めることゝなつたのと、革命後は、資本主義列國の經濟封鎖の爲に、農具の輸入が全く杜絶した爲である。そこで若し露國の農民に食料を與へ、種子を與へても、同時に農具を供給することが出來ぬなら、何時までも飢饉の狀態を免れぬ。遣露委員の計算によると、飢饉地方の農民を救ふ爲には、二千臺――少くとも千五百臺の耕作機を送る必要がある。勞農政府は農具の輸入に努力し、一九二一年には前年に比して遥かに輸入額が增加し、鎌だけでも一九二〇年の百十一萬五千挺に對して四百三十一萬六千挺に增加して居るが、尙ほ容易に所要額を滿たすに足らぬ。斯ように農具の缺乏は、飢饉の影響を甚しくする有力な理由となつて居る。そして農具の缺乏は三年間の帝國主義的戰爭と、經濟的封鎖との賜物である。『過激派の暴政』は露國の農民の多年の渴望に應じて、彼等の耕地を著しく增加したにも拘らず、之が爲に農業の生産力を增して飢饉の襲來に備へることを不可能とし、飢饉の救濟を困難にした責任が、何者の上にあるかは自明である。

六

飢饉の影響を甚しくしたものは、農業の生産力が減じたと同時に耕作面積の減じたことである。開戰以來、露國の實際の耕作面積が漸次に減じたことは事實であつて、此勢ひは革命後になつても阻止することが出來ず、勞農政府は『播種運動』なるものを起して、極力耕作の擴張に努めたが、耕作地は依然として減少した。そこで此の耕作地の減少も、勢ひ『勞農政府の暴政』の結果であると云ふことになつた。農民は勞農政府に反對して年々耕作地を縮少した、そして終には自分が餓死するまでに減少したといふ譯である。

此點に就ては、近東救濟合遣露委員の報告は、次の如く云つて居る。

『……この地方は人口二千萬を有し、其の八割五分は小農である。彼等は眞面目で、勤勉で、且つ冷靜である。是等の農村の多くは、幾時代かの間、共産的の土地制度に基づいて土地を所有して居るにも拘らず、彼等の間には共産黨員は割合に少ない否な共産主義乃至はボリセキズムの何たるかを解する者すらも多くない。けれども其れにも拘らず、一般に、現在の政府に對して、決して積極的に敵意を有しないばかりでなく、寧ろ如何なる政府にも服從する柔順な人民である。彼等は現在の政府を鞏固な政府と思ひ、何等の變化をも豫期して居らぬ……』

『本委員の觀察によれば、露西亞の農民には、如何なる理由の爲にもせよ、故意に生産を最少限度に縮小しようとする傾向は、斷じてない。彼等は今日も曾ての通り熱心に、農具や設備の許す限り最大限度の土地を耕やそうと努めて居る。本委員は此の見解を以て露國の形勢に就て今日外國に行はれて居る先入の思想を覆えすものであることを熟知する。けれども吾々は實際、飢饉地方の眞中で、どん栗の粉で造つたパンや、日向葵の種子や穀を食ひながら、翌年の收穫を見當てに種子を播いたり耕やしたりして居るのを目撃した……』

『本委員は此の所に、次の如き確信を披瀝したいと思ふ。卽ち露西亞に於ける耕作地が漸次に減少したのは、前述の如き色々の原因、卽ち農業上の設備を自づから制限した舊い土地制度、過去七年間、農民が農業上の用具や設備を擴張することの出來なかつたこと、戰爭の爲に馬を失ひ、人手の減じたこと、そして最後に、一九二〇年及び二一年の旱魃に歸すべきものであつて、農民自身が、故意に生産を縮小した結果でない。そしてこの逆境に於ける彼等の勤勉と勇氣とに對しては、本委員は最高の敬意を表するものである』。

斯ように『過激派の暴政』の爲めに生産を減じたといふ說は外國の資本家階級の心理を反映したものかも知らぬが、少くとも露西亞の農民の心理ではなかつた。そして『過激派』の政府も極力、農民の生産力の増加に努力した。遣露委員の報告は斯う云つて居る。

『この地方の農民の用ゐて居る農業方法は、幼稚にして不適當なものである……勞農政府は、近代的の農業方法を敎へる爲に努めて居る。委員一行は、農事敎育列車を視察したが、それには講習の爲の特別車や、近代的農業機械を運轉して見せる特別車を聯結し、試作用に配布する種子をも積み込んで居る。この列車は莫斯科から農業地に差し向けられたものである……勞農

政府は又た耕作機デモンストレーションをやつて居る。卽ち、政府所有の數多の舊式大形の耕作機を用ひて、廣大な土地を耕やして見せて居る……』

然しながら露國の農村は帝制時代から、殆んど常住的の飢饉狀態ともいふ可き有樣であつて、農民は最低の生活をし、剩餘の穀物は、悉く大地主の手によつて外國に輸出せられてゐた。そこで一度不作があれば、忽ちほんとの飢饉となつた。斯ような狀況の下に、農民が不時の爲に穀物を貯藏するなどゝいふ事は望む可からざることであり、農業方法の進歩も到底不可能であつた。勞農政府は農民の智識を高め、農業の生産力を增加する爲には、目醒ましい活動をしたにも拘らず、『革命が此方面に奇蹟を行はなかつたことは、怪むに足らぬ』ことであつて、『天候不順の結果は、勞農政府の下に於ても帝制政府の下に於けると同じく、勢ひ飢饉となるのである』。遺蹟委員の報告は次の如く云つて居る。

『よし新政府の意は、土地の生産增加の促進にあつたにせよ、政府には此目的を成就すべき力がないことは明白である。何故ならば、露國にある農具や設備は、曾て全耕地の三割を耕作するに足る以上であつたことがない。そして戰爭中、續いて經濟封鎖中は、農具や設備を增すことが出來なかつたばかりか、旣にあるものを修繕することすらも不可能であつたからである。要するに一九一四年以來、露國の農業生產物は徐々に、阻止することの出來ない勢で漸減して居つた。そこで一朝不作に逢へば、被害は一層甚しく、到底自力を以て支へきれぬことは必然だつたのである』。

そこで一九二一年の大飢饉が襲來した。

七

この飢饉が唯だの旱魃の結果であつたか、それとも『過激派の暴政』の爲の旱魃の結果であつたかは、暫らく人々の好き嫌ひに任せておく。若し唯だの飢饉なら、吾々は二千五百萬の同胞をこの飢饉から救はねばならぬ。若し特別の飢饉なら、吾々には二千五百萬の同胞を、この特殊の飢饉から救はねばならぬ。唯だの飢饉であると、特殊の飢饉であるとを問はず、二千五百萬人の生命が、危險に曝されて居ることには變りがない。今日全世界の有ゆる國、有ゆる階級の間に、露國飢民救濟の大運動が起つて居るのは、固より當然のことである。各國の無產階級が其の旗手として前衛として進んでゐる露西亞の無產階級の爲に、飢饉地方の救濟に全力を盡して居ることは無論であるが、今日では各國の資本家階級と其の政府と雖も、最早や傍觀する

ことが出來なくなつて來た。彼等は初には、武力の干渉と經濟封鎖とによつて、露西亞の無産階級を征服しようとした。次には國内の反革命を援助して、勞働者の政府を覆へそうとした。そして全て是等の望みが消滅した時に、旱魃と飢饉が來た。彼等は飢饉による二千五百萬の同胞の餓死と、餓死の恐怖による絶望的の反亂とに、一切の希望を繋いでゐた。現に歐羅巴の或る資本主義國では、飢饉に乘じて再び武力干渉を行はうとする計畫すらも進捗してゐたのである。

けれども此の最後の一縷の望みの消え去つた時、彼等は漸やく露國の協力なくしては――露國を經濟的に搾取しないでは――全歐羅巴の經濟的復興の不可能であることに氣がついた。露國の經濟的封鎖から對露通商へ!。武力干渉から利權の競爭へ!。反革命軍の尻押しから亡命將校の上陸禁止へ!。全世界の資本家階級と其政府とは、俄かに人道的となつた。

然しながら世界の資本家階級と其政府が露西亞の飢民に與へたところは、彼等が飢民から奪つたものを償ふには足らぬ。彼等はコルチヤク、デニキン、ウランゲル等の反革命軍を助ける爲に費した、百分の一をも露西亞の飢民に與へては居らぬ。そして彼等が反革命軍を助けた資金と彈藥とは、飢饉の第二の原因となつたものである。若し露西亞の飢饉が自然の飢饉でなかつたとすれば、此の意味に於て慥かに人爲の飢饉である。列國の資本家階級と其の政府の手には、飢饉の爲に同胞の死屍を喰つた飢民の唇の血が流れて居る。

日本の政府は、露國の經濟的復興を妨げる以外に、何等の意義もないシベリア占領の爲に五億圓を費やした。

一九一八年にチエク・スロヴアク軍がカザンで掠奪した金塊はコルチヤクの手に歸したが、其後押收さ　たコルチヤク政府の公文書によると、其内三千八百五十貫は佛國に、二千二百七十貫は英國に、三千七十貫は英佛兩國に、そして五千二十貫は某國に渡したことになつて居る。日本の民衆は露西亞の飢民の爲に、何を與へるであらうか。

飢えたる露西亞を救へ! 資本家階級と其政府とは、自己の良心を安ずる爲めに、

勞働者と民衆とは、地上に於る×××××××××××××××××。

生命宗教の本質

賀川豊彦

神の葬式と神の創造

ベルグソンが「物質と記憶」の中に『或人が神を破壞しても人間は直に之を再び創造する』と書いて居ることを私は思ひ出す。一時、あれ程盛んであつた『神を葬れ！』の聲が新理想主義哲學の勃興と、各種新興科學の貢献によつて沈默せしめられたのは、十九世紀末からのことである。

それがロシヤのボルセヴヰキ革命によつてまた一部の人々の間に、唯物主義を鼓吹して無神無靈魂の革命だけをやりさへすれば夫で善いのだと唱へる人が出て來たとは面白い現象である

其人達の間には『神など信ずる人間に碌なことは出來ない』と云ふものもある。そうかと思ふと、人間生活に、超自然を信ずることは不必要なことである。宗教は要するに超自然に對する信仰であるから、自然と自我を標準として生活してゆく人間には必要の無いところであると云ふ人々も隨分多くあるのである。田中王堂氏が大正十一年六月號に私を批評せられたものなどは全くこの立場から出發せられたものである。

今日まで宗教的信仰に對する反對理由は幾十となくあつた。然し結局はそれは迷信であると云ふことになるのである。そして多くの人々は宗教の代りに哲學を持つてゆきさへすれば善いと云ふのである。で、一部の人々の間には既成宗教は腐つて居るから駄目だ、之からは哲學宗教でなければ駄目だと云ふことを主張する人もある。

然し、私は哲學と宗教とを充分區別したい。哲學は初めから疑はんとする意志で初めらる可きものである。宗教は初めから信ぜんとする意志から始まつて居る。二つの間には方法論から根本的に違つたところがあるのである。勿論私は哲學が宗教を批判し智的に分折し解剖してくれるのが少しも惡いとは思はない然し哲學そのものが直に宗教になるとは思はない。宗教の本質は哲學と全々違ふ。宗教は信じ得ない人間には全く閉ざされた

世界である。千萬巻の哲學書を持つてしても信ずる心を起すことは出來ない。敬虔の心は全く植えつけられたものである。それは發生的なものであつて、接種出來るものでは無い。それは引抜くことは出來る。然し植えることは決して出來ない。たゞ時によると、埋められたものが再發見されることはある。が、多くは發生的なものであり、內質的なものであり、生れ落ちてから敬虔の子に作られるのである。それはウヰリアム・ゼームスが『宗教經驗の諸相』に書いて居るやうに、人間らしい人間には凡てのものが持つて居る感覺である。

この感覺は宗教心理學の發達と共に一層明白になつて來たものであつて、原始人は尤も濃厚にあつたものが文明人には段々薄らいで來るように見えるものである。恰度人間の臭覺が昆蟲や他の哺乳動物などに比較して一層鈍れたと同じように、『敬虔感覺』と云ふ可きものは原始人に較べて文明人と云はれて居るものの間には衰えつゝある傾向が無いでもないのである。

或人は色彩に對して色盲であるように、また苦痛に對して感覺を全く失つて了ふ發狂者があるように『敬虔感覺』を全く失墜させて了ふものが、頗る多いのである。

或人は人間が太陽を拜むからとか偶像を拜むからとか云ふて禮拜の對象が迷信的であるから、敬虔そのものも全く眞違つたものであると考えるのであるけれども、それはあまり輕率な判斷であつて、「超自然」を信ぜんとする敬虔なる意志から云へばそれは決して無理からぬ態度である。たゞその人は客觀の世界に對する批判が足らなかつたと云ふだけである。彼が「超自然」を信じたいと求めて居る心は決して誤つたものでは無いのである。

今日でこそ、人間が自分の環境を自分手に支配し得る力が強くなつて來たから、超自然に對する信仰の力などそのものは段々薄らいで來たが、昔は人間より自然の力が強く人間は全く人間以上の色々な力によつて辛うじて生きて居ると云ふことを沁みじみと感じさせたであらうから、彼等がたゞもう四圍の驚く可き力を見て歸依の心の動いたのは驚くに足らぬことである。

勿論、今日になつては人類全體として成長して來たから昔のような形で宗教を信ずる必要は少しも無いのであるが、それでも生命そのものの不可思議から見れば、信ずべき世界は彼には多く殘つて居り、『生きなければならぬ』と云ふその事が、既に『信ぜねばならぬ世界』から出發するのである。

時の推移と共に信仰の內容も變つてゆき、信仰の客體も變つてゆく。然し「生命」そのものから云へば少しも變つて居らぬのであつて、昔の「生命」も今日の「生命」もその生き方に於

ては同じことである。そこで生きてゆかねばならぬ間はどうしても、昔の人が持つて居た敬虔の心は失はれることは先づ無いと私は考えて居るのである。

今日の人々は自分に随分判つたように考えて居るが、多くは病的に判つて居るか、半可通に判つて居るのであつて、もう少し判然とわかるならば　生命そのものの神秘を通して更に深い敬虔の念が湧いてくると思ふのである。

或人は美に對する感覺を缺いで居る。それと同様に敬虔と云ふ感覺を缺いで居るものがある。そんな人々に宗教を說いてもそれは實際無理な話で、胃の腑の無い人間に食物を食へと云ふ注文と同じことである。

■■敬虔感覺よりの出發■■

この感覺を持つて居るのが善いか、惡いかと云ふことはこの感覺そのものとは別問題である。然し宗教を否定せんとするものはこの感覺がある事が反つて社會革命に邪間になると云ふ。然しどんなにこの感覺を搾り取らうとしても、それが內側から生えてくる間は取り去らうとしたところで取り去れるものでは無い。それはベルグソンの云ふ通りに、常に新しい神を創造してゆくだけの力を持つて居る。それと云ふのも、神が新しく生れるのでは無くて、感覺が絶えず新しい力で目醒めてくるからである。

宗教感覺は實に妙な力を持つて居るものであつて、いつも『自分以上の力』が加はつて居ることを信じ且つ感ずるのである。之が『自分だけの生活』を主張するものには邪間になることは勿論である。それで、或人に云はすればそれはあまりに卑怯であり且臆病な道であり、或人には奴隷生活であると見えるのである。

然し信ずるものには自我以上の力の加はることによつて更に自我が高擧せられることであり、それは勝利の生活であると考えられるのである。

要するに問題はその感覺のあることが善いことか惡いことかと云ふことになる。然し私等のように既に『拜む心』を持つて居るものにはそれを取り去れと云ふても取り去れ得るものでは無い。それは恰度、眼を持つて居るものに、光を感じるなと云ふことと同じことである。

それは理屈でもなんでもない、生命と共に生え上るものである。それが生えることが惡いとすれば、死ぬより外に仕方が無い。

私は客觀の神を語るのでは無い。生命と共に植えられた、私

の心の中に育てゆく敬虔感覺の内容に就て語りたいのである。

生命としての神

私の敬虔感覺は私にこんなに敎へる——

——「私」は「生」きて居ることを「信」ずる。

——「私」の「生」きて居るのは私の「力」だけでは無い。

——「私」以上の「生命」の「力」は私の神である。私は之を

——拜む。

これは理屈でもなんでもない。私は信ぜざるを得ないのである。

× × ×

私は先づ「生命」といふことから出發する。

それは「力」である。

それは私は内在する。その癖「私」それ自身では無い。私はどうしても「生命」それ自身を私が支配して居るとはよう考え無い。寧ろ「生命が私を支配して居るように感じるのである。そこに私は生命の神に跪拜するのである。

それで私は「生命の神の外何の神をも信じて居るのでは無いそれは私に取つては實在の實在であり、價値の價値である。否それは實在にして價値、價値にして實在なるもの、現象と本體とを同時に見せてくれるものである。價値にして實在と云ふことが出來ないと或人々が云ふが生命に於ては之は事實である。それは『生命』である。それは成長し、流轉し、それは法則の中に體現し、法の中に安定して居る。それに「私」として意識に導かれたものである。それは幾何學的絶對では無いけれども價値の上に於ける絶對である。それは『生命』である。「生命」を物質的に分解せんとする人がある 然しその時に生命は生命で無い。それは條件であり、具備すべき約束であつて、「生命」そのものでは無い。「生命」は「生」きる可き世界であつて、論じたり、考えたりする世界では無い。それは刻々に進んで行く世界である

それは目的の無い世界であるかの如く見える。然しそれは「私」として意識することによつて、內的目的を持つて居る。

それは物質ではあり得ない。それは「力」である。それは私に内在する自然だけでは無い。それは「私」に「超越」する力であるからそれは超自然である。

それでは「超自然」だけかと云へば超自然だけでは無い。それは「私」に内在する。

かくして、私は「生命」を私の「神」として信じて居るのである。此處に宗教的感覺は宗教的客體と全く接近する。

生命は死なゝい

おまへが死んだ場合におまへの神——即ち「生命」も死んで了うでは無いか？それでもおまへはその死ぬ可き神を信ずるかと問ふ人もあらう

私の神は死なぬ。それは「生」であつて「死」では無い。

私は死ぬ。死ぬのは「私」であつて「生命」では無い。「私」が「生」きて居た後に「生命」が私を他の世界に運び去るだけのことである。「生命」そのものには少しも變動は無いのである。私は「生」きて居て、「生命」の世界を發見しただけである。私は生命によつて支えられ、生かされ動かされ、有り得ただけのことである「私」と云ふものが「生命」によつて、意識の世界に産れ出でたればこそ「私」以上の「力」のあることに氣が付いたのである。私が消えたからと云ふて、私を支えてくれた力が消え失せるとは信ぜられない。

私が自分勝手に産れて自分勝手に私の見た世界を片附けてゆけるのであれば私は死ぬことによつて、内在目的を持つて居た力の持主の生命が敗滅に歸すると云ひ得るかも知れ無いが、「私」としては、内的目的を内側から一寸と覗かせて貰つた切りであつて……恰度大きな天文鏡を覗いて、鏡に星の運行の映つて居るのを見せて貰つたが、すぐ、頭を引き込めたので、星の運行の世界が見え無くなつたと云ふのと同じことである。

私が頭を引込めたからと云ふて星の運行は止つたわけでは無い。私だけにはその運行が見えないのであつて、星は矢張り進行を續けて居るのである。私が、生命に於ける場合も全く同樣である。

「私」は「生命」を内側から覗かせて貰ふたのである。「私」は生命の内側に存在する星の運行をみる瞬間の心持ちである。私を通して生命が流轉して居ることがよく見えたのである。そして「私」が内側を覗くことを止める。然し生命は矢張り運行を續けて行くものであると云ふことは信ぜられるのである。

生命は——普通の人の考ではたゞ、一種の物質を寄せ集めた時の一時の現象のように考えられるが、それは大きな誤謬であつて、「物質」と云ふものが考えられるのが、第一既に、生命あつて考えられ、見ることの出來るものなのである。

生命を内側より見るからこそそこに物質が現れ、色々の現象が現れるのである。それは「生命」の芝居であるのだ。

生命と物質

今日の人々の中でも極く簡單な考を持つものがまだ太陽が地

球を廻つて居ると考へる如くに、生命があるから「物質」が考えられ且知ることの出來ることを忘れて了つて、「物質」が「生命」を産むように考へて居るのである。

マルクスや、その信奉者が、「物質」のみで世界が出來て居ると考えることの大きな誤謬は此處にあるのである。

世界を「私」と云ふ内側から覗く時に、それは「物質」と云ふ現象の世界が見えたに止まるのであつて、その本質は生命の世界であり、力（エネルギー）の世界であるのだ。

物質の世界は生命の世界に取つては現象の世界であるのだ。それは本質的のものでは無いのだ。それは人間の眼に感ぜられた或限定せられた世界の現象なのだ。

昔人間の感覺が鋭かつた時には物質の世界は力の表現、靈の現れ、見えざるものの言葉として意味のあるものであつた。それで物質は、たゞの物質では無かつた。力の現れであつたのだ。それが、人間の感覺が鈍れてくると共に、物質は言葉としての意味が無くなり、たゞ語らず云はさる不透明體と化して了つたのである。

然し、我等が更に物質に就て研究を進め、宇宙そのものの組立てを研究して行く中に、それは要するに力の世界の或る現れである事が氣附かれてくることを思ふのである。電氣物質觀はこの方向に一歩を進めたものであるが、物理學の進歩と共にエネルギーの進化に就て更に一層教えられることであらう。

力の世界を意識するのが生命の世界である。力の世界も結局は生命から出發すべきものである。

それで私が生命の世界を本質的だとするのは間違つたものでは無い。私は「死」の反對の「生」を云ふて居るのでは無い。私の云ふて居る生命とは―理屈を云ふ前に既に存在する先驗的な『生命』――それは充分形而上的なものであつて、而も内在しては私が今體驗して居る形而下的力そのものでもあるのだ

■法の世界と生の世界の相違■

或人はそんな形而上的な「生命」を信じても、何にも効能は無いと云ふ。その生命に祈禱したり、讃美を捧げたりすることは間違つて居ると云ふ、

法則としての「生命」を信じて居れば善いではないか、それを「神」として拜まなくても善いでは無いか！そんなセンチメンタルなことをよしてくれと云ふ。

然し現象としての世界にも知的の世界と、美の世界と、善の世界があつて、アミアーバを研究をしつゝも美人を欲求すると云ふような妙な心理が動くと同じように、生命の世界に住んで

らつて居るものは、たゞ『法』を「知」るばかりでなしに生命として生きて行く必要があり生命として生きて行くには美も追ひ求めねばならず善をも果さねばならず、眞、善、美の人間だけの要素の外に生命に對する讃美と感謝と、成長に對する希望が、自ら加はつてくるのは何の不思議なことは無い。

歸依の問題

或人が、人間に賴むように祈禱するのがおかしいと云ふ。祈禱と云ふものを人間の利己的欲望のみ發生すると考へるから迷信だと云ふので、祈禱は「生命」に教えられた要求であり、成長であり、親しみであり、依嘱であり、生命への奉仕であると考へた時に少しも間違つたものでは無い。

生命は生命として置いておけば善い人格視するのが間違つて居ると云ふ人がある。

私はそれを正反對に考へる。宇宙生命の內側は、良心のある「私」と云ふ人格を通して覗くことが出來たので、宇宙の內側に向いた方には「私」と云つたようなものがあり得ると云ふことを私は信ずるのである。

私は「生命」を體驗した。それは神の力であり、神であることを私は信ずることを既に述べた。

その神としての生命は「私」と「良心」に內住するものである。それは人格を通して體驗し得るものである。生命は「私」の「良心」では無いが、私より以上の人格であつても少しも差支えは無いのである。

神が人格者であると云ふのは、私が理論を持つて說明した後に信ずるものでは無い。生命が「私」の親であるから、人格を產み得る力こそ持つて居れ、人格以下のもので無いと信ずるのである。

宇宙勢力を人格化することはあまり子供らしいでは無いかと云ふ人もあらう。然し人格を宇宙から拔き去る必要は少しも無いではないか！

それは人格以上でこそあれ、たゞ法則とか勢力とか云ふことだけではあり得ないと私は「生命」としての神の體驗によつて信じ且味ふのである。

何にしても「私」は生命を意識して居るのであるから、生命に對する讃美にしても、要求にしても感謝にしても「私」を脫却してせよと云ふことは全く無理なことである。

佛教のような最も高等な心理宗教が、偶像拔きの心理的解脫を體驗し、「私」を離れた『法』の世界を體驗しようと努力して

も結局は、それが人格化せられたものになるのは生命の上に立つて居る「私」を離れて別の法則と云ふものが無いからである。

佛教に於ても凡ての眞理が人格化されてあるのは、つまりは人格を無視して生命の體驗が出來ないと云ふことになるからである、

それで、私は人格を破壞することによつて「法」の體驗は出來ないと思ふ。寧ろそれを完成することによつて生命の世界が完全に體驗せられるものと思ふのである。

それで生命を人格化して考へることは勿論差支え無いのみならず、生命そのものの中に人格的要求が含まれて居ることを考えることも差支えないと思ふ。從つてその神に、求め、讃美し、歸依することは少しも間違つて居らないと私は信じる。

■自然と人格■

よく人は自然と人格とを區別して考へる。自然は人間より大きくて、人格は自然が偶然の結果作つたものであるかの如く考へるのである。そして非人格的な自然が宇宙の本體であつて、人格的法則は自然界の例外であるかの如く考へる人がある。

然し其は大きな間違ひであつて、人格があるから自然が考へられるのであり、自然が人格より大きいものだとすれば自然は人格を含むことになるので、自然の中より人格を除き去ることは出來ないことであつて、『人格的自然』と云ふか、自然は人格を產むと云ふことになるのである。

生命と人格の關係も同樣である。生命の內容は矢張り人格の中に發見せられる凡ての要素を含んで居ることになり、之を人格的に見て少しも差支え無く——また人格的に見ねばならぬことになり、人格が生命を意識するのであるから。自然と、人格的のものの外考へることが出來なくなるのである。

それで「生命」としての神に對しても、人格的に跪拜することは少しも差支え無いと私は信ずるものである。

ロッチエが云ふて居る通り『完全な實在とは完全な人格を云ふのだ』と云ふことであるが、生命に於ける體驗に於ては、たしかにそのことを教えられるのであつて、生命宗教は充分人格宗教であらねばならないのである。

■永遠の否定より永遠の肯定への過程■

田中王堂氏は、此世に一度愛想をつかして自殺まで決したものが再び實在の驚異に撃たれて「生」を肯定すると云ふ態度に出ると云ふことは不徹底で無いかと私を評して云はれたが——「生命」としての「神」がまだわから無いで、凡て「私」を標

神として出發として居た時に此世は凡て矛盾に充ちて居て、とても生きて居れさうにもなかつたのである。それが、生きてゆくのは、自分一人で生きてゆくのでは無い、生命の神に生かしてもらつて生きてゆくのだ、自分ひとりの道であるならとてもやつてゆけないが、生命が自分の中に生きて來て、自分があらんかぎりの成長をし、生命が自分の中に生き上つて來た時にそれは自分の世界とは云ふものの神の世界であり、生命の世界であるとゆうことがよく意識されて來たのである。

それで今迄の小さい自分と違つた所謂『實在の驚異』——『生命の不可思議』にうたれたのであつた。

恰度それはカーライルの衣裳哲學の中に出てくる永遠の否定から永遠の肯定への推移のようなものであり、ヘーゲルの「正」、「反」、「綜合」の論理の推移の如く、死線の上に彷徨して居たものが、絶對肯定の世界に浮び出たのは不思議なことのやうに見える。

然しそれは少しも不思議なことでは無い。宗教を理解しない人にはそれは不思議であるかも知れぬが、自分の外に更に大きな力が有つて、自分を生かしてくれると云ふ信仰の這入る時にそれは決してあり得ない心境を辿るものでは無い。

何故、永遠の否定から永遠の肯定に移り得るか？

理屈から云へば、否定して否定し盡せば、自分が自殺せねばならぬと云ふことも結局は否定せねばならぬことになる。凡てがわからぬと云つた疑惑の淵にさ迷ふて居るものが、人生は價値が無いと云ふ判斷がどうしてつくか？　その判斷がつか無い程迷ふて居る可き筈である。

それで否定の否定は肯定になる。

ヘーゲルの理屈は此處から出て來た。カーライルの否定から肯定への橋渡しもこの論理的架橋から來て居る。

さて私の場合は少し違つて居る。

それは「生命」そのものゝ不可思議を見たことに起因する。否定から否定に移り、絶對の否定から絶對の肯定に移り得るその論理的流轉の世界は結局は生命の流轉の上に基礎を置いて居るものであつて、生命はまだ凡ての幕を明けて居ないと云ふことに歸着するのである。

生命の劇曲は、私に取つては、まだ始まつたばかりであるのだ。それが善いか悪いか充分生きて見ねばわからないのだ。幕は段々明いてゆく。それで否定をも否定しなくちやならぬことにもなるのである。

『そうだ、生命の幕はまだ明いたばかりだ芝居は神がうつて居るのだ、神によつて生きて行く。』と云ふことが私の救とはな

つたのであつた。

それが私に取つては永遠の否定から、永遠の肯定に移り得た理由であつた。

それは理屈でもなんでも無い。『生命は生きなくちやならぬものだ。死ぬ可きものでは無いのだ！』かう考へることによつて、私は初めて「生命」が私に齎らしてくれる不思議な宇宙大に開展する劇曲を見せて貰う氣になつたのだ。

今迄は自分ひとりで芝居せねばならぬと思つたから氣を病んで居たのであつた。私が創造主で、私が、進化せしめるもので私が全能者であらねばならぬと考えたから、相對の世界を突き破つて、私の意志の儘に支配してみたいと云ふ支配意志の强かつたものが、今度は私は役者の一人に廻してもらつて、「生命」にその誠を讓り、生命に萬事を引受けてもらつて、私は役者であり且觀客であるといふ立場に廻つたのである。

そういう場に立なつて見ると、人生と云ふところは實に面白いところでとても、今迄考えて居た世界とは全く違つて來たのであつた。

今迄は、悪が悪だけにしか見えなかつたものが、幕があくと共に、それが妙な役割を務めて居るものであると云ふことがわかつて來たのである。

勿論まだ充分わかつたわけでは無い。然し兎に角、決して死を急ぐべきものでは無くて、生命の神が『舞台から去れ』と命ぜられるまで自分の役割は果さなければ、ならぬものであると云ふことがよくわかつて來たのである。

之を私は死線を越えての境地と考へて居るのである。

■ 永遠の疑問と絶對の信仰の境界線 ■

それで人生には不可解のことが多い。或は幾萬年經つても不可解の連續であるかも知れ無い。そうかと云つて生命にあきらめをつけることとは卑怯なことであると云ふことがよくわかつて來たのである。幾百萬年たつて不可解であつても、生命の世界はそれで幕が閉ちたわけでは無いのである。幕が閉じるまで、芝居は續くのである。わからぬことはわからぬとして置いても生きてゆくには少しも差支へは無い。

それで人間の仕事としては「生きる」ことと「强く生きる」ことが第一の仕事であらねばならないのである。

相對の世界に置かれて居る以上、對手の考へが凡て判らう道理も無し、全能者で無い以上世界の組立が凡てわからう筈も無い。然し强く生きることによつて、過去を振り返つて見ると、段々賢くなつて居るやうなことも考えられるのである。

それは經驗の世界である。先づ生きた後にわかつてくるのである。經驗することが辛いなら仕方が無いが、世界の鍵は經驗しないものは判ら無いと云ふことは强く生きるものにのみ生命の劇曲が啓示されると云ふことになるのである。

生命は活動することである。活動するものにのみ生命の內容が啓示されるのであつて、演繹的に一方から覗いてみてもそれで生命內容が啓示されるもので無いといふことが、私に判つて來たのである。

『智識は生產である』と云つた人があるが、生命の產物であることは確かである。强く生きるもののみが、組立てゝゆく宇宙は決して完成して居るものでは無いのである。

智識は永遠に生產である。動きつゝ、成長しつゝ、周圍の成長と流轉に繼はつて、常に新らしく組立てられ乍ら進んでゆく劇曲であるのだ。

旣にあるものを——靜止して居る世界を鑛脈か何かを發掘するやうな積りで探索してゆくのを智識と云ふのでは無い。

智識は生命を離れて存在しない。生命は常に成長して居る それで成長する生命を內容とする智識は永遠に生產であるのだ。それで『生』を斷つて完全な智識はあり得ないのだ。休止と共に智識は墜ちて了うのだ。

完全な智識を得る爲めにも私は强く生きねばならぬ。

こんなに考へると、不可解の世界とは、つまり私が生產し無い世界を意味し——別の言葉で言へば、私が劇の役割を演じ無い世界と云ふことになる。

それで時間の來ない世界は永遠の不可解として殘るのである。だから永遠の不可解は生きてゆくに少しも差支え無いのである。永遠の疑問と絕對の信仰は此間に何等衝突を來さ無い。

生きてゆく爲めには生命に對する信仰が無ければならぬ。そして、生命に對する信仰は永遠の疑問に打勝つ第一の鍵となるのである。

かうして、純粹の信仰と純粹の疑惑は少しも相衝突しないで、生命の劇曲には相連らなつて存在することが許されることを私は見るのである。

良心と神

善とは何であるか？

善とは價値の撰擇である。

價値とは何であるか？ 價値とは生命の成長を基準として測定せられるものであつて、生命の成長を助ける爲めに二個以上の撰擇をせねばならぬ場合に於ける自由意志の量的或は質的の

心理的標準である。

何故に自由意志が發生したか？　何故撰擇せねばならぬような世界が出來たか？

之は生命そのものの根本に關係するものであつて、生命の本體が流轉、變移（ヴァニーシヨン）を原則として居ると考へるより外に仕方が無いのである。生命には何故に流轉と變移があるか？　それに就ては私は知らない。知つて居る範圍は、私と云ふ變移を通じての内的目的の撰擇の許されて居る小宇宙だけであるから、もし小宇宙に啓示されて居るところだけで判斷することを許してくれるなら、それは獨自の自己決定が出來て、自分が自分の内容を創造の出來るような境地を開く爲めであると考へられるのである。自分が自分を創造するような實在を價値によつて自由に造り得る世界が小宇宙の中に示された宇宙生命の目的の如くに考へられるのである。或人は之を意味の世界ローゴスの世界と云ふが、此境地は價値によつて實在が生産せられる世界である。小宇宙に於てはこのことが最もよくわかるが、生命そのものは小宇宙に取つては、價値の内容としてよりか實在としての方がより多く示されて居るのである。なぜならば、生命は「我」の内容以上であるからである。生命には「我」が内容と爲切れない程澤山のものが盛られて居る。それは價値として意識内容に上らずして、たゞ現象として過ぎ行くのである。

それで宇宙生命が何故變移するかと云ふことに就ては人間は全々知らない。知つて居るのは小宇宙を通じてだけである。「私」と云ふ小宇宙を通じてみた時には、それは宇宙意志——即ち生命が、自己の内に自己内容を創りつゝあるのであつて、それは自己の内に意味の世界を創造し、自己を自己が決定して居るのである。そしてこの開展は歷史的に見て進化として現れ、自己内容を自己が創造し得ない被決定的のものから、一歩、一歩と進んで自己決定の出來る自由意志の世界に進んでゆく順序として讀めるのである。

つまり、進化とは被決定的のものから、自己決定に歩みよる力の進化の歷史を指すのである。然しこれも力そのものの盲目的推移と見ることは出來ない。

凡ては内在目的のある『私』から見てわかる通りに、それは宇宙生命から見れば自己内容の自己創造であると考へるより外に道は無いのである。即ちそれは自己から見れば創造であり、力（エネルギー）から見れば進化である

善はそれであるから自己創造であり、生命の世界から云へば進化である。

道德に道ありや？

或人は道德には不變道德と可變道德と二通の道德があつて、昔は不變道德と云つた樣なものを信じ得たが今日では可變道德ばかりで絶對道德と云ふものは無いと云ふ人もあるのである。

然し道德は昔から一つしか無いので……それは生命の道である。生命の實在性から云へば道德は昔から不變的なものであつて、生命の成長性價値から云へばそれは可成り可變的なものに見えたのである。

然し結局は二つのものでは無くて一つのものである。即ちそれは「生命の愛護」と云ふことであり、自己から見れば生命內容の自己創造と云ふことであり「生命愛」と云ふことである。

生命を殺すことは如何なる時代でも惡とせられて居た。勿論、敵を殺すこともあつたし、自己を殺すことも有つた。然し宇宙から生命の凡てを斷つと云ふことは如何なる野蠻人でも惡であると考えて居たのである。それは敵の生命を殺した。然し自己の民族の生命は尊重した。それは自己を殺した。然し自己の民族の血は尊重した。

その場合には敵とか、自己とかの外に、永遠性を持つた民族の生命と云ふものが價値判斷の標準になつて居るのである。

それでどんな時代でも、民族の生命全部を否定し去るような道德は有つたことは無い。つまり道德の根本は生命の肯定から始まるのである。

肯定せられた生命は或時には生存競爭の形で、或時には相互扶助の形で守護せられて行く。生存競爭も相互扶助も「生命の愛護」と云ふことから出た相對的な見方であつて、生存競爭と云ふものの生存全部を否定する運動では無い。自己と自己の種族を保存してゆかうと云ふ力爭である。相互扶助と云ふも生命愛護の爲めに互助が都合が善いと考へられる場合に起るものを云ふのである。

生命の肯定の後に來るものは、生命內容の創造である。即ち愛の問題である。雌雄淘汰が起る。そこで姦淫する勿れと云ふ道德が起る。

雌雄淘汰の法則は人間世界に於ては今日まで多く生存競爭の犧牲になつて來て居るが、然し、民族の血の淨化と云ふことから見れば姦淫はいつの時代でも罪とせられて來たものであつて、一夫多妻の時もあつたし、一妻多夫のところもあらうけれどもそれならそれで民族の血は重ぜられて來て居る。人類が進化して、民族より個性の人格が重ぜられるようになつては姦淫

は更に罪なこととして考へられるようになつて居る。
盗みの罪であることは、生命と勞働の結果である財貨を生產的に創造せずして、寄生的に消費しようと云ふことになるからである。
嘘僞の罪であるとも生命の內容の成長を防害するからであり貪慾と剩餘價値の發生の罪であるとはそれが餘りに獨占的であるからである。之を包括して云へば生命愛である。愛である。から考へる時に道德と云ふものが可變的であるにしてもそれは成長の斷層に於ての程度の問題であつて、「生命」そのものを重ずることに於ては世界の道德は凡て一致して居るのである。(勿論生命と云ふても個體の生命で無く、民族を通じ又人類を支配する大きな生命を意味して居る)
それで純眞な宗教――それは生命そのものに跪拜しようと云ふ宗教に於てはその祭壇がたゞ道德善に於てのみ發見せられるのである。
つまり拜む可き生命は生きて行く可き生命であると云ふことになるのである。勿論形式の上には此處に超越的生命と內在的生命との分離がある。即ち我等は超越的生命を「神」と呼び、內在的生命によつて、生きて行く事を良心と呼び「善」の世界と呼ぶ。
だから、宗教の眞の禮拜は感情的にお念佛を繰返したり、讃美歌をあげることで無い。聖く美しく良心に生きると云ふことである。即ち良心生活がたゞ一つ神への祭りとなるのである。

宗教內容としての科學

此處まで來ると科學も宗教の內容となつてくるのである。田中王堂氏が、私が物理學や化學に反對でもして居るかの如く解して居られるがそれは大きな間違であつて、私は科學の讃美論者である。私が科學を讃美するのは生命內容としての科學の讃美であるからであつて、科學が必しも生命から獨立して居るものとは考え無いのである。
私は生命の世界には今日までの科學が教へられぬ自由意志に合致するような色々な事があると考へて居る。「生命」は自己決定をすると云ふ意味に於ての全能性であるから、之を信ずるものには必然性の外に或目的に沿ふ步みを取ると考へても少しも差支えが無いと云ふ意味で奇蹟を信ずると云ふたことが田中王堂氏には私が必然性の世界を否定するように見えたかも知れないが、私は生命には內的目的があることを信ずる。それで凡てが必然的のものばかりでは無いと考えて居る。「私」を通じて小さい乍らも自由意志が發生して居る以上、生命はその內的目的

を打殺さ無いように保護してくれると信じて少しも差支えの無いことである。それで昔の人々の云ふ奇蹟の信仰と違ふかも知れぬが、生命の世界は今の科學的知識と云ふことの外に色々な內的目的を補助する力添えがあると信ずることは宗教意識に取つては無くてならぬ條件である。

科學は科學で宗教に對する大きな寄與を持つて居る。科學それ自身が今日では大きな奇蹟である。科學は我々の爲めに大きな自己內容を創造してくれた。科學によつて人間殿堂の裝飾が整ふて來たのである。

科學は價値によつて發生する。それは一種の藝術である。普通の藝術は客觀の世間に盛られるものであるが、科學の藝術は腦底に彫まれるものである。科學は宇宙を新しく組立てゝくれる。それはまた新しき世界の創造である。から考へる時に、新しい科學は生命の內容を形造つてくれる宗教的動機ともなり禮拜ともなるのである。

科學と宗教が衝突すると考へた時代は過去の夢である。永遠に新しき生命宗教は科學によつて藝術よりも大きな宇宙創造の大事業に參與することが出來るのである。

■■生命宗教と生命經濟■■

マルクス一派は唯物史觀を取つて宗教を排斥する。然し之は生命宗教に取つては云はれも無いことであつて、生命宗教は經濟生活を避忌するものでは無い。

經濟は生きんとするから産れ出たものである。それは物そのものの運動では無い。それは力の問題である。價値の問題である。それで私はマルクスのいふような素朴的唯物史觀を一面の眞理のみを語るものとして更に本能を基礎にする唯心的經濟史觀を唱へたが、人間は生きるが爲めに、力を要求する。そして力の結晶して居る物質を要求するのである。ところが多くの人々はこの表面的な物質のみに氣がついて力と生命に氣がつか無いのである。それで力と生命とを回復したいと云ふのが生命價値說から出發する社會主義の運動である。マルクスも此點は勞力價値說を主張して力と生命が資本より價値あるものであることを說いたが、勞力價値はまだ眞理の半分しか說明して居らないが、それは正しい。私は經濟價値の發生は勞力價値ばかりで無く、生命を基調とする使用價値にもあることを信ずる。たゞ無暗に勞働してもそれで價値の發生したものでは無い。凡ての勞働が神聖なのでは無い。人類の內的目的に合致する勞働のみが神聖なのである。だから、凡ての勞働者を奉ることが善いのでは無い。人生を破壊するような酒を製造したり、人[illegible]を

助長せしめるやうな、兵器製造に從事して居る勞働者は必しも神聖なりと云ふことは出來ないのである。生命價値を生產するもののみが眞正の勞働者である。

それで社會經濟の運動も生命價値を基礎とせねばならぬ。つまり宗教を離れて眞の社會經濟運動は有り得ないのである。今日の經濟は生命價値の批判から餘りに遠く離れ過ぎて居るのである。生命價値即ち私の云ふ宗教價値から遠れて眞の經濟價値は無いのである。それと同時に、生命と勞働を離れて眞の宗教は無い。眞の宗教は街頭と工場と田園にあつて、寺院と教會の中には無い。

生命宗教と生命藝術

藝術家は私の藝術はあまりに宗教臭いから藝術にならぬと云ふ。それらの人々の云ふ藝術は今迄の宗教家の唱へて居た宗教と同じやうな意味での分化的な藝術を指して居るのである。

私の藝術は科學が直に藝術になり得るやうな觀照的心境を指して居るのである。それは生命藝術である。普通の藝術は人間の外側に美を求めんとして居るが、私の藝術は人間それ自身の中に美を要求するのである。それは美しく歌ふことである。それは美しく踊ることである。美人になることである。それは美しく生きることである。美しく生きる爲めには聖くあらねばならぬ。かうして、私は神の心持ちで人生の芝居を外側から眺める。それは正に人生藝術である。人生藝術を私は宗教と云ふのである。それは神の心持ちで眺める可きものであるからである。

こんなに考へると生命宗教を離れて道德も科學も藝術も無いことになる。

惡の問題

哲學が解き得ない「惡」の問題も宗教は解き得ると誰かゞ云ふたが惡は宗教に於ても全く解き得る問題では無い。

神が善であれば何故神は惡を作つたかとすぐ人は云ふ。

惡は實在では無い。それを間違へてはいかぬ。惡は生命の延びて行く上に存在する價値の上の過程である。生命そのものは惡では無い。生命の內容を創造し、生命を進化せしめんとするに當つて惡が感ぜられるのである。即ち病氣、老衰、不具、癈疾、低能、白痴、發狂、死亡と云ふたやうな惡は、生命の內容を標準として考へられた「惡」であつて、生命が進化すべきものであると考へられるにかゝわらず變則なものが出來ると考へるから「惡」と見られるのである。

その外、各種の災害、天災も生命を基準に考へられる惡であ

る。又、性格惡の如きも生命の價値判斷から出たものである。凡ての不調和、不完成、不完備等は進化論の發達によつて色々と指摘されて居る。それに對して私はライプニッツのように豫定調和も說かなければパトラー監督のように全備の神を敢て說かうともしない。

たゞ私は生命はその不調和、その不完備、不完成にかゝわらず、それ等を越えて強く生きるものであることを說きたい。それは不調和を貫いて、生きるかの如く見える。それは不完備、不完成を苦にせぬかの如くに見える。生命の悲劇も苦難も、そんなこと事におかまい無く、生命は強く生え上る。宇宙には今日までどんな變動があつたかも知れぬ。多くの恒星が落ちて行つた事もあつたらう、彗星と彗星とが衝突したこともあつたらう。地球の上に於ても、大きな變動が幾千萬回繰返されたことか知れ無い。最近の支那の大地震には山が三哩も波形に移行して行つたと云ふから、これまでに人類は山の移行するのを度々見たことであらう。然し生命はその危險を打越えて成長して來たのである。生命は死そのものをも征服して延び上る。死は生の附錄にしか過ぎない。

惡は生命に勝つものでは無い。之は決して間違つた者では無い。宗教は惡を除くことは出來ない。然し生命なる神を信ずることによつて、充分惡に勝つことが出來るのである。

宗教によつて惡に勝つとが出來ると云ふことは、原始宗教から高等宗教に到るまで、凡ての宗教經驗が示して居る。宗教は惡に勝つ爲めの信仰であつたのである。たゞ下等な原始宗教では自然的な惡天災地變疾病に勝つことを祈禱し、高等宗教では性格惡に打勝つ力に就て祈願するようになつただけが違つて居る。

自然科學の進步と共に人類は自然的災厄を避け得ることを覺えて來たから今日に於ては性格惡だけに就て祈ることが多くなつて來た。

そして性格惡は道德の領域であるから、性格惡の回復は贖罪意識として良心宗教の本質をなすに到つた。キリスト教に於ては贖罪意識を以つてその基底に据え、神は罪を贖ふ力をキリストに投けたと信ずるのである。

罪思想は教條的に信ぜられる時には、天災に對する救濟を祈るのと少しも變らないものであるが、良心生活の更改の力を神が與えてくれるのだと體驗的に信ずることによつて實に強いものとなるのである。それで贖罪思想は教條的に信ず可きものでは無い。それは驚く可き道德的復活の事實として自らもそれを體驗すべきものだ。それが體驗された場合、イエスの體驗し

た宗教意識即ち生命の神が「父」として放蕩兒を抱いてくれ、その父の慈愛を第一に自覺したものが救ひ手として、その愛を知らせる爲めに罪に迷ふて居るものの爲めに傾死すると云ふ心的狀態はよく理解することが出來るのである。

救の經驗

惡は解決が出來ない、然し救ひ得ると信ずるのが良心宗教の本質である。

近代人には、この救の經驗と云ふことが如何にも卑怯に聞こえる。進化といへばよく響く。然し進化の出來ない退化狀態に居るものが、再び活力を得るのは救で無くてなんであらう。救の經驗は卑怯な經驗であるかも知れぬ。然し救はれるものには確かに神の力である。生命宗教が、たゞ一本道で、發生的のものだけであるならば、それは惡に打ち勝つ力は持つて居らないものである。然し再生的の力をも持つて居ると信ぜられ、經驗せられる時に、それは惡に勝つ救の力であるとして信ぜられるのである。この再屈折の宗教意識は良心宗教のみが持つて居る機能であるが、進化ばかりでなしに、再進化の力が生命の中に秘められて居ると信ずることによつて惡はその勢力を失ふことになるのである。それでも人間の方から見れば、それは進化だけであると考へられるかも知れぬ。然し神から見れば、それは救であり、宗教的に云へば救はれた一生である。

性格惡が救はれると云ふ經驗が得られるとすれば、その他のものは凡て救はれ得てあまりありと考へるのが、良心宗教の信仰である。之は全く心理的の經驗であつて、之を經驗しないものには殆ど窺知することの出來ない世界である。

宇宙とその運命

宇宙はどうして組立てられて居るか？　物質はどうして出來て居るか？　この問題も宗教は說くことが出來ない。之も信ずるだけである。生命と良心の世界を除いて了へば、宇宙に目的がありとは見え無い。それで外側ばかり見て居るものは、宇宙は無目的の法則ばかりで縛られ、因果律のみが支配する世界のように見える。

然し知識によつて、宇宙から神を探し出すことが出來ない時にも、生命と良心を信ずることによつて、神の內在目的を信ずることが出來るのである。

私は物質がどうして出來たかを知らない。今日電氣物質觀が教えられても、それは物質の心になつて成長の跡を宙迪つたわけないからはつてときりしたを云ふことは出來ない。そして宇で

の組立ては永遠に疑問として殘るであらう。

たゞ我等は相對の世界に置かれて居ることをよく意識する。そして相對の世界に於て相互的關係は全く物質を通じてせられて居ることをも知つて居る。それで現象としての物質は相對性に何か關係あるものであらうと考へられる。然しそれも我等が充分知つて居るわけではない。

現象的相對性の世界に於て、一つ絶對的のものがある。それは生命である。それでこの生命の世界から見れば物質はその生命の表象であるかの如く見える。我等はそれ以上のことを知らない。生命が價値の上に實在性を持つて居る故に宇宙の組立ては、一元的な生命の創作であらうと信ぜられるのである。それで創世紀などが、良心宗教を基點として『始めに神天地を創り給へり』と書いて居るが、之は信仰から出た記錄であつて、天地の創造を見て來て書いたわけでは無い。然しかう書いた處で進化論と少しも衝突しないことは、先にも論じた通りであつて、生命を除去したエネルギーの歷史的變移の記錄として見れば進化と見ることが出來るが、それではその進化の條件と力は何處から出て來たかと云へば進化論は說明出來ないのである。

それで、宇宙を見る時に、それは、生命として神の宇宙であると信ずより外に道は無いのである。即ち、宇宙は神の攝理の儘に動くと信ずるより外に道は無い。凡ては、生命を基底として動く。

人間殿堂の禮拜

今迄の宗教は感覺のみに生きて居て、本源の生命の神としての體驗に缺乏するものが多くあつた。それで木の家で、神を拜むことを宗教と考へて見たり、山に引籠つたり、尼僧生活を送つて辛じて宗教的經驗を維持して來たのである。最も高尙な佛教やキリスト教にしても、生命宗教である可き筈であるかゞわからず、多くは分化した感覺宗教に墮落して了つて居るのである。

そうかと云ふて、私は今日までの凡ての宗教を全部否定しようとは考へない。宗教感覺は實に尊いものである。佛教にしてもキリスト教にしても、實に尊いものを今日まで保存して來てくれた。佛教に於ては凡ての偶像を排けて、「法」の世界を指してくれたことによつて、キリスト教に於ては「人格」そのものが、佛教で云ふ「法」であると云ふことを指示して、生命宗教の本質が一層明瞭になつたのであつた。

たゞ不幸なことには、人間の弱點として、「法」を指示した佛教も「人格」を指示したキリスト教も、その眞理を教へた人間

を崇拜することゝ、神に生きると云ふことを全く混同して了つたと云ふことである。

私はキリストは褒いと思ふ。然したゞキリストを神とする事によつて人間が救はれるのではないと思ふ。キリストの宗教的體驗を自ら體驗することによつて、始めて救の經驗は得られるのだと思ふ。キリストだけが、神から來たとしたところで、私がそれが何を意味し、自らも神の子の體驗に這入らなければそれは何の救にもならない。キリストが一人神の子になつたところで、我等が捨てられてあるならば、之も駄目な話である。我等は救はれたい。新しき生命と神の子の自由に這入りたい。罪と惡に勝ちたい。キリストの神を自分の神としたい。この憧れがあるから、キリストの意識した贖罪意識がよくわかるのである。

キリスト一人が神の子になつたところで、それで我等の救にはならない。今迄の宗教はプロテスタント・キリスト教にしても宗教感覺の分化だけを八釜敷云ふて、内在神即生命としての神——聖靈の宗教の經驗と云ふことに就ては少しも體驗を教へなかつたのである。イエスは之に就て繰返し教へて居るが、弟子達は、イエスがあまりに大きかつた爲めにイエスに眩惑せられて、自己の體驗する宗教と云ふものを疎かにしたと云ふ感じが無いでも無い。

この結果が羅馬舊教に於ける偶像復興となり、新教に於ては體驗の無い教條宗教となつて了つたのである。

私はイエスの指した生命宗教を既成宗教だと云ふて排斥する必要は無いと思ふ。それを更に發展して行けば善いのだと思ふ。生命宗教は永遠に古び無い。それは人間殿堂を祭壇として神を禮拜せんとするが故に、今迄の凡ての宗教經驗はこの爲めに寄與すべきだと思ふ。佛教もその人間的眞理と經驗を持つてその祭壇に捧げ人間殿堂の禮拜を飾る可きだと思ふ。

かうして、舊いものは舊い尊い經驗を持つて、新しい科學や藝術は、その新しいものを持つて、人間殿堂を飾り、生命の神に翼（は）ぐまれ强められつゝ强く聖い生活をするのが眞正の宗教であると、私は信じて居るのである。

支那文明と西洋



バートランド・ラッセル

現在の支那に於ては、吾等の文明と、支那帝國固有の文明とが密接に接觸して居る。此の接觸から、その兩親のうちの何れよりも優れた新文明が産れるか、それとも此の接觸は單に固有の文化を破壞して、米國文化を以てそれに代へるに留まるかどうかは、未だ疑問である。異文明の接觸は、過去に於ては屢々人間の進歩を示す道標となつた。希臘は埃及から、羅馬は希臘から、亞刺伯亞人は羅馬帝國から、中世期の歐洲は亞刺比亞人から、復興期の歐洲はビザンチユーム人から學んだのであつた。是等の場合の多くは、弟子がその師を凌駕したのである。支那の場合は、吾々が支那を弟

子として見るならば、再びさういふことになるかも知れぬ。實際、彼等が吾々から學ばねばならぬと同じ位、吾々も彼等から學ばねばならぬのであるが、吾々がそれを學ぶ機會は遙かに少いのである。私が、吾々を支那人の弟子として見ずに、支那人を吾々の弟子として遇するとしても それはたゞ私が吾々が教へて貰ふことはむづかしいと思ふからにすぎぬ。十六世紀の西班牙と亞米利加を除いては、私は、支那と歐洲との文明ほど、久しい間別々の道を辿つて發達した後に、互に接觸し合ふようになつた二つの文明の例は思ひ出すことが出來ぬ。此の異常な分離を考へて見ると、歐洲人と支那人との間の理解が今以上に困難でないことは不思議とするに足るのである。此の點を明白にするために、しばらく此二つの文明の歷史的起源に遡ることは無駄ではあるまい。

西歐と亞米利加とは實際に同源同質の精神生活を有する。それについては三つの源泉に遡ることが出來る.即ち（一）希臘文化（二）猶太の宗教と倫理學（三）それ自身が近代科學の所産たる近代的工業主義である。吾々は今日まで、奇妙に別々のものとなつてゐるプラトーと舊約聖書とガリレオとを、是等の三つの要素を代表するものとすることが出來る。文學と藝術、哲學と純粹數學、及び吾々の社會生活のうちの都會的な部分は希臘人から傳來された。その味方によつて『信仰』とよばれる狂熱的信念、罪惡の觀念を伴ふ道德的熱情、宗教的偏執、及び吾々の國家主義の一部分は、猶太人から來てゐる。また力と力の意識、即ち吾々は神と等しく、非科學的な人種に對しては、當然生殺與奪の權を握る者だといふ信念は、工業主義に應用された科學に由來して居る。また殆んど總ての眞實の知識がそれによつて得られたところの經驗法もそれに由來した。私は此等の三つの要素が吾々の心性の大部分を代表するものと思ふ。

是等の三要素のうち、支那の發達に對してこれといふ程の影響を與へたものは一つもなかつた。支那は、その歷史の發達に於ては大河帝國であつた。所で埃及及びバビロンもやはり大河帝國で、そのために埃及やバビロンが希臘人や猶

太人に與へた感化に依つて、吾々の起源に寄與したのである。恰かも埃及及びバビロンの文明が、ナイル河、ユウフラテス河、及びティグリス河の肥沃な沖積土の土壌に依つて生じたように、支那の原始文明も黄河に依つて可能となつたのである。孔子の時代に至つてさへも、尚ほ支那帝國は南北孰れにも黄河をあまり隔つた所までは延びて居なかつた。けれども此物質的及び經濟的事情の類似にも拘らず、支那人の心的狀態と、埃及人及びバビロン人のそれとの間には共通の點は殆んどない。共に紀元前六世紀に屬する老子（註）と孔子とは、吾々が近代支那人の特色と考へるような特徴を既に備へて居つたのである。

（註）老子に就いては、彼の名を冠した書物に著者不詳であつて、老子死後、二三世紀を經て編纂されたものらしい。

あらゆる事を經濟的原因に歸する人々は、古代支那人と埃及人及びバビロン人との間の差違を說明するのに、それを引合に出すことは出來まい。

私自身としては、それに代る別の理論を提供することは出來ぬ。私は現在のところでは、科學は國民性を充分に說明し得るものではないと考へる。氣候と經濟的事情とはそれを部分的には說明するが、全部を說明はせぬ。恐らく、モーゼやマホメットや孔子のような、草創時代に現はれた、優れた個人の性質が大に關係するものではあるまいか。

最も古くから知られて居る支那賢人は、道教の創始者 老子である。本當は『老子』といふのは本名ではなくて、單に『老いたる哲學者』といふことを意味する。彼は孔子と同時代の先輩人であつて、私の心にとつては孔子より遙かに興味ある人物である。彼は、何人も、いかなる動物も、いかなる物もすべて各々其の人なり物なりになつて自然な、行爲の道、又は樣式を有し吾々は自ら此の道に從ひ、また他人にもそれに從ふやうに奬めねばならぬと主張した。此の『道』

は普通の『道』のことであるが、『吾は道なり、眞なり、命なり』といふ聖書の中にあるように、多少神秘的な意味に使つてある。私は、老子が死は『道』から離れる結果で、吾々が悉く嚴密に自然に從つて生きたならば、吾々は天體のやうに不滅となるものだと想像したものと思ふ。後世に於ては道教は單なる魔術に墮落して、主として不老不死の藥を求めることと關係した。然し死から逃れやうとする望みは、最初から道教哲學の一要素であつたと考へる。

老子の書物は極めて短いが、彼の理想は門弟である莊子に依つて發展せられた。莊子は其の師よりも興味があるといつてもよい位である。二人の唱道した哲學は自由の哲學である、彼等は政府及び自然に干涉するとはすべて邪惡視した。

彼等は、彼等が『古への聖人』と呼んだ人々の平穩な生活と比較して、近代生活の遽しさに不服を唱へた。生物は多種多樣なるにも拘らず、道は或意味に於て唯一つであり、萬物が道に從つて生きさへすれば世の中に鬪爭はなくなるといふのであるから、道教には神秘主義の臭ひがある。然し、此二賢人は既に諧謔と抑制と、控え目に物を云ふ支那人の特質を備へて居る。彼等の諧謔は、『馬を御することに通じて』ゐると云つて馬を馴らし、遂に、十匹について五匹づゝ死なせて莊子の伯樂の話に現はれて居る。彼等の抑制と控え目な言方とは、西洋の神秘主義者と比較して見ると明瞭である。此二つの特質は支那のあらゆる文學藝術にも現時の教養ある支那人の會話にも表れて居る。支那人は總ての階級を通じて洪笑を好み、冗談を言ふことが大好きである。教育のある階級では歐洲人に分らずじまひのことも多いほど諧謔が巧みで微妙である。そして支那人は歐洲人に分らぬと猶更得意になる。彼等の控え目に物を云ふ習慣は著しい。一日私は北京で中年の男の人に會つたが、其の人は私に向つて、此の國では政治學が新しいので、自分は學問としてそれに興味を持つて居ると語つた。私は彼の話すのをそのまゝに聞いて居たが、後ちに至つて其人は嘗つて或洲の都督であつて、長年の間非常に有力な政治家であつたことが分つた。支那の詩には一見熱情が缺けてゐるが、これも物を控え

目に云ふ習慣に基因するのである。彼等は賢人は常に物に騷がぬ者だと考へて居る。そして熱情の動く時はあつても、（實際は彼等は極めて激し易い民族なのである）熱情は惡いことだと考へてゐるので、それを藝術の中に傳へ殘すことは好かぬ。私の知つて居る限りでは、人々に强烈なものを嗜好させるに至つた吾々のロマンテイシズムの運動のようなものは、彼等の文學には見當らぬ。中には非常に微妙なのもある。其の古代音樂は、漸く聞えるか聞こえぬか位の響きしか立てぬ。彼等は、藝術上に於ては微妙ならんことを志し、生活上に於ては合理的ならんことを志して居る。不羈奔放な强者や熱情の恣な表現は讃美されない。西洋のざわ〳〵した生活の後ちに、支那に觸れると、人は最初の中は、支那人が與へようとする効果を全然感じない。けれども支那人の生活の美と威嚴とは漸次に顯はれて來るので、結局支那に一番長く住んで居た外國人が、最もよく支那人を愛することゝなるのである。

道家は魔術師として殘つては居るが、智識階級の愛顧は儒教のために奪はれてしまつた。私は孔子の價値が分らぬとを告白せねばならぬ。彼の孔子の作物は大部分禮法の些々たる問題を扱かつて居り、彼は主として色々な場合の正しい作法を人々に教へることに力を入れた。けれども、彼を他の時代の、また他の人種の傳說的な宗教的教師と比較するときは、たとへそれらは主として消極的なものにもせよ、尙ほ彼には多くの長所があることを認めねばならぬ。彼の所說は宗教的教養を含まぬ、純粹倫理學の一つであつて、それは有力な僧職をも作らず、迫害をも起させなかつた。それは確かに微妙な作法と完全な禮儀とを持つた全國民を生み出すことには成功した。また支那の禮儀は單に慣例的なものではない。其れは前例のないような場合にも準據して好いものである。それは又一つの階級に限られて居らず、最も下賤な苦力の中にまで存在して居る。白人の野獸的な暴戾が、暴に答ふるに暴を以てし得ない落着いた威嚴を以つて、支那人に受けられるのを見ることは實に恥しいことである。歐洲人は屢々これを弱點と看做すが、これは實は力である、即ち

從來支那人が其の征服者を總て征服するために用ゐて來た力なのである。

支那の傳統的文明に一つ、唯だ一つの重要な外來の要素がある、それは佛敎である。佛敎は基督敎時代の初期の世紀に印度から支那へ渡來して、其の國の宗敎上に確乎たる地位を獲得した。吾々は猶太人から傳來した偏屈な見方から、人は一つの宗敎を信ずればもはや他の宗敎を信ずることは出來ぬものと想像する。基督敎とマホメツト敎の敎義は、其の本來の形に於ては、誰も兩方を採り入れ得ぬように出來て居る。然し支那に於ては、此の不一致は存在せぬ。何物も互ひに兩立せぬといふことはないので、佛敎徒で同時に儒敎徒たる人もある。日本でも同じように、多くの人は佛敎徒で同時に神徒である。けれども佛敎と儒敎との間には氣質的の相異があるので、そのために、これを兩つながら信じても、どちらか一方に重きをおくようになるのである。

佛敎は、吾々が宗敎といふ言葉によつて解する通りの意味に於ての宗敎である。佛敎は神祕的な敎義と濟度の方法と來世とを有する。佛敎は、それが宗敎的信仰を持たぬ人にとつては當然だと看做して居る所の絕望を癒さうといふ、世界に對しての使命をもつてゐる。其れは唯だ或る福音によつての外救治せられぬ本能的な厭世觀を假想して居る。儒敎にはさういふ所が全然ない。其れは人々は根本に於て世界と調和してゐるものであつて、生きることを奬勵する必要は少しもなく、たゞ如何に生くべきかの點についてのみ、敎訓が必要なのだと假定してゐる。そして其の倫理的敎訓は形而上學的或ひは宗敎的敎養に基づかず、飽まで世俗的である。支那に此二つの宗敎が共存した結果は、宗敎的な瞑想的な性質を多くもつた者は佛敎に傾き、活動的な事務的な人物は、常に官學となつて居り、且つ文官志願者の試驗に用られた所の儒敎に滿足して居たのである。其の結果、幾多の時代を通じて支那の政府は文學的懷疑家の手中に在り、その施政には、西洋の國民が其の支配者に對して要求するような精力と破壞的な性質とが缺けて居つた。實際、彼等は極め

て精確に莊子の格言を遵守した。そこで人民は、內亂が不幸を齎したときの外は幸福であり、屬國は自治を許され、そして支那の莫大な人口と富源とにも拘らず、他國民は支那を恐れる必要はなかつたといふことになつたのである。

支那文明と歐洲文明とを比較すれば、希臘にあつたものが大抵支那でも見出されるが、吾々の文明の他の二要素、卽ち猶太敎と科學とは支那にない。支那に於ては單に上層階級のみならず、全ての國民を通じて實際に宗敎がないのである。極めて明確な倫理的經書はあるが、其れは峻烈なものでも殘虐なものでもなく、『罪』の觀念を含んで居らぬ。歐洲の影響を受けた極く最近まで、科學も工業主義もなかつた。

此の古代文明が西洋と接觸した結果はどうなるであらうか。私は政治的または經濟的の結果を考へるのでなく、支那人の心的狀態に對する影響を考へるのである。で西洋との文化的接觸は、勿論政治的及び經濟的接觸の性質によつて影響を受けねばならぬので、此二つの問題を全然引離すことは困難である。然しそれにも拘らず、私は、出來得る限り、文化の問題を切離して考察したいと思ふのである。

單に國家的勢力を獲得し、西洋の侵略に抵抗し得んがためのみでなく、非常に多數の人々が學問其れ自身を可いものだと考へて居るので、支那人は西洋の學問をしようとする非常な熱心をもつてゐる。支那に於ては學問は傳統的に崇められて居るが、昔は、智識の追求は古典文學に限られて居つた。が現在では西洋の智識の方がより有用であると一般に認められるようになつた。科學、經濟學、法律又は政治學を學ぶために每年歐洲の大學に遊ぶ學生も多ければ、米國に遊ぶ者は一層多い。これ等の人々が支那に歸れば、敎師、文官、新聞記者又政治家になる。彼等は特に支那人の物の見方、特に智識階級のそれを急速に近代化しつゝある。

支那傳來の文明は進步が停止して、藝術及び文學の方面にも優れたものを出さぬようになつた。それは民族の衰微に

よるものではなくて、單に新しい材料の缺乏に基くものだと私は考へる。西洋知識の流入は、丁度必要な刺激を供給する。支那の學生はよく出來て極めて怜悧である。高等教育は資金の不足と圖書館の缺乏とに惱まされては居るが、最も優れた人材の缺乏に惱むことはない。支那文明は在來科學を缺いて居たとはいへ、それは科學に對する敵意は毫も含んで居らず、隨つて科學的知識の普及は、歐洲では教會が試みたような妨害に遭遇することはなかつた。支那人にして鞏固な政府と十分な資金とを得ることが出來たならば、次の三十年間に、彼等が立派な科學上の產物を産み初めるに違ひないと私は信じてゐる。

彼等は新進氣鋭であり、復興時代のあらゆる熱情を備へて居るので、吾々を凌駕することもいかにも有りさうに思はれる。實際、若き支那に於ける學問熱は、十五世紀の伊太利に於ける復興期の精神を常に偲ばせるのである。

支那人が吾等から學びたいと望むことは、富や軍事的勢力を齎らすものではなくて、寧ろ倫理的及び社會的價値、若くは純粹な智的興味のものであることは、極めて顯著なことである。彼等は決して吾々の文明に對して無批判でない。或る支那人は、一九一四年以前には、彼等はそれほど批評的でなかつたが、戰爭は彼等に西洋の生活樣式に不完全な所があるに相異ないと考へさせたと私に語つた。けれども西洋に對して智識を求める習慣は極めて强く、青年の中には、ボリセヰズムは彼等の求めて居るものを與へ得ると考へる者もあつた。が其の望みも亦た失望に惱まされて居るに相異なく、間もなく彼等は新しい組織によつて彼等自身の救濟を仕遂げねばならぬことを悟るであらう。

吾々の文明の特別な長所は科學的方法であると私は斷言する。支那人の特別な長所は人生の目的に關する正しき概念である。此二つの長所が徐々に一致結合することを人は望まねばならぬ。

老子は道の運用を『生而不有、爲而不恃、長而不宰』と述べて居る。人はこれ等の言葉から、内省的な支那人が考へ

て居るような人生の目的の概念を得るとが出來ようと私は考へる。そしてその目的が大抵の白人が志してゐる目的とは大に異つて居ることを認めねばならぬ。所有、自恃、支配は國民的にも個人的にも熱心に、求められて居る。彼等はニイチエ哲學によつて建設せられた。そしてニイチエの弟子は獨逸に許りゐる譯ではない。

然し、諸君はかう云はれるかも知れぬ、即ち君は西洋の實際と支那の理論とを比較して居つたのである。君が西洋の理論と支那の實際とを比較したならば、差引きは全く異つた結論に達したであらうと。勿論この言葉には多大の眞實が含まれて居る。老子が吾々に對して忘れることを望むだ二つの事の一つである所有は、確かに普通支那人の心には貴重なものである。民族としては、彼等は金に執着を持つて居る—それは恐らく佛蘭西人種ではないが、確かに英人或ひは米人よりは強からう。—彼等の政治は腐敗して居り、有力者は恥づ可き方法で金を作る。是等全てを否定することは不可能である。

それにも拘らず、他の二つの邪悪、即ち自恃と支配との點に於ては、支那人の實際の方が明白に吾々より優れて居ることを私は承合ふ。他の國民に壓制を加へ、又はその上に君臨しようとする慾望は白人種間に於けるよりも遙かに少ない。國際上に於ける支那の弱點は、故意に、常に唯一の理由とされてゐる賄賂沙汰の悪習と同じ程度に、此の美徳にも基いて居るのである。若し世界に『戰爭をするには餘りに自負に富みすぎた』國民があるとするならば、其の國民は支那であらう。支那人の天成の態度は、禮讓を以て人に對し、人からもそれを期待することを示す寛容と親睦とである。支那にして若しそれを欲したならば、彼等は世界中の最強の國民となれたであらう。けれども、彼等は唯だ自由を望んで、支配を欲せぬ。他の國民が支那人をして、自己の自由のために戰ふことを餘儀なくせしめることは無いとも限らぬ。そして若しさういふことがあれば、彼等は其の美徳を失つて帝國に對する嗜好を養成するかも知れぬ。然し現在で

は、彼等は二千年の間帝王を戴いて來た民族でありながら、帝國に對する愛情は、極めて輕微なものである。

支那には屢々戰爭があつたとはいへ支那人は天性平和的な考へ方をする。白居易はウォーレー氏によつて譯された詩の中に、『腕を挫いた老人』と題して、兵役を免れるために自ら不具者となつた補充兵を勇士として歌つてゐるが、私は何處の國にもこんな詩人は見たことがない。

彼等の平和主義は、其の瞑想的な考へ方と、見たまゝの姿と變へることを好まぬ事實とに基いてゐる。彼等は——その繪畫が示すように——人生の樣々の種類の獨特の表現を觀察することを樂み、あらゆるものを既成の型に入れるとを望まぬ。西洋の諸國民を風靡し、吾々の活動的な衝動を合理化する所の進歩の概念を持つて居らぬ。進歩は、勿論、吾々の間に於てさへ極く新しい理想である。其れは吾々が科學と工業主義とのお蔭で得たものゝ一つである。現代の教養ある支那人は、恰度彼等の最も古い賢人が語つた通りに語る。これで見てもいかに進歩が遲々として居つたかを人が指摘するならば、支那人はかう言ふであらう。既に優れたものをもつて居る以上、どうして進歩を望むのか。最初は、かような見地は歐洲人には橫着千萬に見える。然し段々に自分自身の智慧に就いて疑ひが生じて來、結局吾々が進歩と呼ぶ所のものゝ多くは、吾々を望ましい目的地に一歩も近かせることのない、單なる落つかぬ變化に過ぎぬのだと考へ始める。

支那人が西洋に求めたものを、西洋が支那に對して求めたものと比較することは興味がある。支那人は知識が叡智への入口となることを望みつゝ、——私は此の望みは通例滿たされぬと思ふ、——知識を西洋に求めるのである。白人は三つの動機を以つて支那へ渡つた即ち、戰はんため、金を作るため、そして支那人を自己の宗教に改宗させんがためである。是等の動機のうち最後のものは理想主義的であるといふ長所を持つて居て、多くの勇敢な人々を感激せしめた。然

し、兵卒も商人も宣教師も皆等しく吾々の文明を世界に印しようとかゝつて居つた。彼等はいづれも或る意味で、喧嘩好きである。支那人は吾等を儒教に改宗させる意志はない。彼等は『宗教は多いが、道は一つである』と言ひ、之れを以て、彼等は吾々はするが儘をさせて平氣で居る。彼等は善い商人であるが、其の方法は、絶えず利權と獨占權と鐵道と鑛山とをねらい、砲艦の援助をかりてその要求を達しようとする支那在留の歐洲商人の遣方とは全然違ふ。支那人は、そのために戰はんことを要求される理由が、戰ふだけの價値がないため、且つ彼等がそれを知つて居るために、概して軍人としては上出來でない。然しそれは唯だ彼等が道理に合つて居ることを證言するに過ぎぬ。

支那人の寛容は、歐洲人が自國での經驗から推して、到底想像し難い底のものであると私は考へる。吾々は自分らの祖先よりは寛大なので、自分達は寛大な者だと想像する。然し吾々は尙ほ政治的及び社會的迫害を行ひ、更に其上、吾吾の文明と吾々の生活方法とは、他のいかなるものよりも無限に優れたものであると堅く確信し、そのために支那人のやうな國民に出遭ふとき、吾々が彼等に對してなし得る最も親切なことは、彼等を吾々自身のやうにすることだと考へるのである。私は此の考へは非常な間違だと信ずる。一般の支那人は、慘憺たる、貧苦の中に居ても、一般英國人より幸福である、それは支那の國民は吾が英國人よりも人道的な、文明的な考へ方の上に立つて居るので、より幸福なのだと私は信ずる。動搖と喧嘩好きとは、表面に現れた災害を醸すに留まらず、吾々の生活を不平滿々たらしめ、美を享樂する能力を奪ひ、瞑想に伴ふ美德を不可能にする。此の點に於ては、過去百年の間に、吾々は急激に惡くなつてしまつた。

私は、支那人が反對の方向に行き過ぎてゐることは否定せぬ。然し實に此の理由によつて、私は、東西の接觸は双方に有益であらうと思ふ。彼等は吾々等から實際的の能率の必要缺く可からざる最小限を學び、吾々は彼等から、他の總ての古代國民が滅亡したに引換へ、彼等に殘存することを得しめた、瞑想的な叡智について何物かを學ぶことが出來よう。

take a pleasure—as their pictures show—in observing characteristic manifestations of different kinds of life, and they have no wish to reduce everything to a preconcieved pattern. They have not the ideal of progress which dominates the western nations, and affords a nationalization of our active impulses. Progress is, of course, a very modern ideal even with us; it is part of what we owe to science and industrialism. The cultivated Chinese of the present day talk exactly as their earliest sages write. If one points out to them that this shows how little progress there has been, they will say: "Why seek progress when you already enjoy what is excellent?" At first, this point of view seems to a European unduly indolent; but gradually doubts as to one's own wisdom grow up, and one begins to think that much of what we call progress is only restless change bringing us no nearer to any desirable goal.

It is interesting to contrast what the Chinese have sought in the west with what the west has sought in China. The Chinese in the west seek knowledge, in the hope which I fear is usually vain that knowledge may prove a gateway to wisdom. White men have gone to China with three motives: to fight, to make money, and to convert the Chinese to our religion. The last of these motives has the merit of being idealistic, and has inspired many heroic lives. But the soldier the merchant, and the missionary are alike concerned to stamp our civilization upon the world; they are all three, in a certain sense, pugnacious. The Chinese have no wish to convert us to Confucianism; they say "religions are many, but reason is one", and wish that they are content to let us go our way. They are good merchants, but their methods are quite different from those of European merchants in China, who are perpetually seeking concessions, monopolies, railways and mines, and endeavouring to get their claims supported by gunboats. The Chinese are not, as a rule, good soldiers, because the causes for which they are asked to fight are not worth fighting for, and they know it. But that is only a proof of their reasonableness.

I think the tolerance of the Chinese is in excess of anything that Europeans can imagine from their experience at home. We imagine ourselves tolerant, because we are more so than our ancestors. But we still practise political and social persecution, and what is more, we are firmly persuaded that our civilization and our way of life are immeasurable better than other, so that when we come across a nation like China, we are convinced that the kindest thing we can do to them is to make them like ourselves, I believe this to be a profound mistake. It seemed to be that the average Chinaman, even if he is misembly poor, is happier than the average Englishman, and is happier because the nation is built upon a more humane and civilized outlook than our own. Restlessness and pugnacity not only cause obvious evils, but fill our lives with discontent, incapacitate us for the enjoyment of beauty, and make us almost incapable of the contemplative virtues. In this respect we have grown rapidly worse during the last 100 years. I do not deny that the Chinese go too far in the other direction; but for that very reason I think contact between east and west is likely to be fruitful to both parties. They may learn from us the indispensable minimum of practical efficiency, and we may learn from them something of that contemplative wisdom which has enabled them to persist while all the other nations of antiquity have perished.

could give what they were looking for. That hope also must be suffering disappointment, and before long they will realize that they must work out their own salvation by means of a new synthesis.

The distinctive merit of our civilization, I should say, is the scientific method; the distinctive merit of the Chinese is a just conception of the ends of life. It is these two that one must hope to see gradually uniting.

Lao-Tze describes the operation of Tao as "production without possession, action without self-assertion, development without domination". I think one could derive from these words a conception of the ends of life as reflective Chinese see them, and it must be admitted that they are very different from the ends which most white men set before themselves. Possession, self-assertion, domination, are eagerly sought, both nationally and individually. They have been erected into a philosophy by Nietzsche, and Nietzsche's disciples are not confined to Germany.

But, it will be said, you have been comparing western practice with Chinese theory; if you had compared western theory with Chinese practice, the balance would have come out quite differently. There is of course a great deal of truth in this. Possession, which is one of the three things that Lao-Tze wishes us to forego, is certainly dear to the heart of the average Chinaman. As a race, they are tenacious of money—not perhaps more so than the French, but certainly more than the English or the Americans. Their politics are corrupt, and their powerfull men make money in disgraceful ways. All this it is impossible to deny.

Nevertheless, as regards the other two evils, self-assertion and domination, I notice a definite superiority to ourselves in Chinese practice. There is much less desire than among the white races to tyrannize over other people or to lord over them. The weakness of China internationally is quite as much due to this virtue as to the voices of corruption and so on which are usually assigned as the sole reason. If any nation in the world could ever be "too proud to fight", that nation would be China. The natural Chinese attitude is one of tolerance and friendliness, showing courtesy and expecting it in return. If the Chinese chose, they could be the most powerfull nation in the world. But they only desire freedom, not domination. It is not improbable that other nations may compel them to fight for their freedom, and if so, they may lose their virtues and acquire a taste for empire. But at present, though they have been an imperial race for 2000 years, their love of empire is extraordinarily slight.

Although there have been many wars in China, the natural outlook of the Chinese is very pacifistic. I do not know of any other country where a man would have chosen, as Po-Chui did in one of the poems translated by Mr. Waley, called by him "The old man with the broken arm", to make a hero of a recruit who maimed himself to escape military servies. Their pacifism is rooted in their contemplative outlook, and in the fact that they do not desire to change whatever they see. They

fierce or persecuting, and does not contain the notion of "sin". Except quite recently, through European influence, there has been no science and no industrialism.

What will be the outcome of the contact of this ancient civilization with the West? I am not thinking of the political or economic outcome, but of the effect on the Chinese mental outlook. It is difficult to dissociate the two questions altogether, because of course the cultural contact with the west must be affected by the nature of the political and economic contact. Nevertheless I wish to consider the cultural question as far as I can in isolation.

There is in China a great eagerness to acquire western learning, not simply in order to acquire national strength and be able to resist western aggression, but because a very large number of people consider learning a good thing in itself. It is traditional in China to place a high value on knowledge, but in old days the knowledge sought was only of the classical literature. Now-a-days it is generally realized that western knowledge is more usefull. Many students go every year to universities in Europe, and still more to America, to learn science or economics or law or political theory. These men, when they return to China, become teachers or civil servants or journalists or politicians. They are rapidly modernizing the Chinese outlook, especially in the educated classes.

The traditional civilization of China had become unprogressive, and had ceased to produce much of value in the way of art and literature. This was not due, I think, to any decadence in the race, but merely to lack of new material. The influx of western knowledge provides just the stimulus that was needed. Chinese students are able and extraordinarily keen. Higher education suffers from lack of funds and absence of libraries, but does not suffer from any lack of the finest human material. Although Chinese civilization has hitherto been deficient in science, it never contained anything hostile to science, and therefore the spread of scientific knowledge encounters no such obstacles as the Church put in its way in Europe. I have no doubt that if the Chinese could get a stable government and sufficient funds, they would, within the next thirty years, begin to produce remarkable work in science. It is quite likely that they might outstrip us, because they come with fresh zest and with all the ardour of a renaissance. In fact the enthusiasm for learning in Young China reminds one constantly of the renaissance spirit in 15th century Italy.

It is very remarkable that the things the Chinese wish to learn from us are not those that bring wealth or military strength, but rather those that have either an ethical and social value, or a purely intellectual interest. They are not by any means uncritical of our civilization. Some of them told me that they were less critical before 1914, but that the war made them think there must be imperfections in the western manner of life. The habit of looking to the west for wisdom was however very strong, and some of the younger ones thought that Bolshevism

to watch the brutal insolence of white men received by the Chinese with a quiet dignity which cannot demean itself to answer rudeness with rudeness. Europeans often regard this as weakness, but it is really strength, the strength by which the Chinese have hitherto conquered all their conquerors.

There is one, and only one, important foreign element in the traditional civilization of China, and that is Buddhism. Buddhism came to China from India in the early centuries of the Christian era, and acquired a definite place in the religion of the country. We, with the intolerant outlook which we have taken over from the Jews, imagine that if a man adopts one religion he cannot adopt another. The dogmas of Christianity and Mohammedanism, in their orthodox forms, are so framed that no man can accept both. But in China this incompatibility does not exist; a man may be both a Buddhist and a Confucian, because nothing in either is incompatible with the other. In Japan, similarly, most people are both Buddhists and Shintoists. Neverthless there is a temperamental difference between Buddhism and Confucianism, which will cause any individual to lay stress on one or other even if he accepts both. Buddhism is a religion in the sense in which we understand the word. It has mystic doctrines and a way of salvation and a future life. It has a message to the world intended to cure the despair which it regards as natural to those who have no religious faith. It assumes an instinctive pessimism only to be cured by some gospel. Confucianism has nothing of all this. It assumes people fundamentally at peace with the world, wanting only instruction as to how to live, not encouragement to live at all. And its ethical instruction is not based upon any metaphysical or religious dogma; it is purely mundane. The results of the coexistence of these two religions in China has been that the more religious and contemplative natures turned to Buddhism, while the active administrative type was content with Confucianism, which was always the official teaching, in which candidates for the civil service were examined. The result is that for many ages the government of China has been in the hands of literary sceptics, whose administration has been lacking in those qualities of energy and destructiveness which western nations demand of their rulers. In fact, they have conformed very closely to the maxims of Chuang-Tze. The result has been that the population has been happy except where civil war brought misery; that subject nations have been allowed autonomy; and that foreign nations have had no need to fear China, in spite of its immense population and resources.

Comparing the civilization of China with that of Europe, one finds in China most of what was to be found in Greece, but nothing of the other two elements of our civilization, namely Judaism and science. China is practically destitute of religion, not only in the upper classes, but throughout the population. There is a very definite ethical code, but it is not

all live according to it there will be no strife in the world. But both sages have already the Chinese characteristics of humour, restraint, and under-statement. Their humour is illustrated by Chuang-Tze's account of Po-Lo, who "understood the management of horses", and trained them still five out of every ten died. Their restraint and under-statement are evident when they are compared with western mystics. Both characteristics belong to all Chinese literature and art, and to the conversation of cultivated Chinese in the present day. All classes in China are fond of laughter, and never miss a chance of a joke. In the educated classes, the humour is sly and delicate, so that Europeans often fail to see it, which adds to the enjoyment of the Chinese. Their habit of under-statement is remarkable. I met one day in Peking a middle-aged man who told me he was academically interested in the theory of politics; being new to the country, I took his statement at its face value, but afterwards discovered that he had been governor of a province, and had been for many years a very prominent politician. In Chinese poetry there is an apparent absence of passion which is due to the same practice of under statement. They consider that a wise man should always remain calm, and though they have their passionate moments (being in fact a very excitable race), they do not wish to perpetuate them in art, because they think ill of them. Our romantic movement, which led people to like vehemence, has, so far as I know, no analogue in their literature. Their old music, some of which is very exquisite, makes so little noise that one can only just hear it. In art they aim at being exquisite, and in life at being reasonable. There is no admiration for the ruthless strong man, or for the unrestrained expression of passion. After the more blatant life of the west, one misses at first all the effects at which they are aiming; but gradually the beauty and dignity of their existence become visible, so that the foreigners who have lived longest in China are those who love the Chinese best.

The Taoists, though they survive as magicians, were entirely ousted from the favour of the educated classes by Confucianism. I must confess that I am unable to appreciate the merits of Confucius. His writings are largely occupied with trivial points of etiquette, and his main concern is to teach people how to behave correctly on various occasions. When one compares him, however, with the traditional religious teachers of some other ages and races, one must admit that he has great merits, even if they are mainly negative. His system is one of pure ethics, without religious dogma; it has not given rise to a powerful priesthood, and it has not led to persecution. It certainly has succeeded in producing a whole nation possessed of exquisite manners and perfect courtesy. Nor is Chinese courtesy merely conventional; it is quite as reliable in situations for which no precedent has been provided. And it is not confined to one class; it exists even in the humblest coolie. It is humiliating

any appreciable part in the development of China. China belongs, in the dawn of its history, to the great river empires, of which Egypt and Babylonia contributed to our origins, by the influence which they had upon the Greeks and Jews. Just as these civilizations were rendered possible by the rich alluvial soil of the Nile, the Euphrates, and the Tigris, so the original civilization of China was rendered possible by the Yellow River. Even in the time of Confucius, the Chinese Empire did not stretch far either to south or north of the Yellow River. But in spite of this similarity in physical and economic circumstances, there was very little in common between the mental outlook of the Chinese and that of the Egyptians and Babylonians. Lao-Tze* and Confucius, who both belong to the 6th century B. C., have already the characteristics which we should regard as distinctive of the modern Chinese. People who attribute everything to economic causes would be hard put to it to account for the differences between the ancient Chinese and the ancient Egyptians and Babylonians. For my part, I have no alternative theory to offer. I do not think science can, at present, account wholly for national character. Climate and economic circumstances account for part, but not the whole. Probably a great deal depends upon the character of dominant individuals who happen to emerge at a formative period, such as Moses, Mahomet, and Confucius.

The oldest known Chinese sage is Lao-Tze, the founder of Taoism. "Lao-Tze" is not really a proper name, but means merely "the old philosopher." He was an older contemporary of Confucius, and to my mind a far more interesting man. He held that every person, every animal, and every thing has a certain way or manner of behaving which is natural to him or her or it, and that we ought to conform to this way ourselves and encourage others to conform to it. "Tao" means "way", but used in a more or less mistical sense, as in the text: "I am the way and the truth and the life." I think he fancied that death was due to departing from the "way", and that if we all lived strictly according to nature we should be immortal like the heavenly bodies. In later times Taoism degenerated into mere magic, and was largely concerned with the search for the elixir of life. But I think the hope of escaping from death was an element in Taoist philosophy from the first.

Tao-Tze's book is very short, but his ideas were developed by his disciple Chuang-Tze, who is almost more interesting than his master. The phylosophy which both advocated was one of freedom. They thought ill of government, and of all interferences with nature. They complained of the hurry of modern life, which they contrasted with the calm existence of those whom they called "the pure men of old." There is a flavour of mysticism in the doctrine of the Tao, because in spite of the multiplicity of living things the Tao is in some sense one, so that if

---

*With regard to Lao-Tze, the book which bears his name is of doubtful authenticity, and may have been compiled two or three centuries after his death.

Chinese Civilization and the West.

By Bertrand Russell.

There is at present in China a close contact between our Civilization and that which is native to the Celestial Empire. It is still a doubtful question whether this contact will breed a new civilization better than either of its parents, or whether it will merely destroy the native culture and replace it by that of America. Contacts between different civilizations have often in the past proved to be landmarks in human progress. Greece learnt from Egypt, Rome from Greece, the Arabs from the Roman Empire, mediaeval Europe from the Arabs, and Renaissance Europe from the Byzantines. In many of these cases, the pupils proved better than their masters. In the case of China, if we regard the Chinese as the pupils, this may be the case again. In fact, we have quite as much to learn from them as they from us, but there is far less chance of our learning it. If I treat the Chinese as our pupils, rather than vice versa, it is only because I fear we are unteachable.

With the exception of Spain and America in the 16th century, I cannot think of any instance of two civilizations coming into contact after such a long period of separate development as has marked those of China and Europe. Considering this extraordinary separateness, it is surprising that mutual understanding between Europeans, and Chinese is not more difficult. In order to make this point clear, it will be worth while to dwell for a moment on the historical origins of the two civilizations.

Western Europe and America have a practically homogeneous mental life, which I should trace to three sources: (1) Greek culture; (2) Jewish religion and ethics; (3) modern industrialism, which itself is an outcome of modern science. We may take Plato, the Old Testament, and Galileo as representing these three elements, which have remained singularly separable down to the present day. From the Greeks we derive literature and the arts, philosophy and pure mathematics; also the more urbane portions of our social outlook. From the Jews we derive fanatical belief, which its friends call "faith"; moral fervour, with the conception of sin; religious intolerance, and some part of our nationalism. From science, as applied in industrialism, we derive power and the sense of power, the belief that we are as gods, and may justly be the arbiters of life and death for unscientific races. We derive also the empirical method, by which almost all real knowledge has been acquired. These three elements, I think, account for most of our mentality.

No one of these three elements has had

エスペラント研究

國際補助語エスペラントと
エスペラント主義に就いて（一）

伊藤徳之助

昨冬の議會に Esperanto に關する請願が提出されてから、エスペラント語に就いて、新村博士、關口氏（朝日新聞）、伊賀氏（日米感想）小坂氏等の所說が、新聞雜誌に數多く散見する樣になり、日本エスペラント學會の會員も著しく增加し、各地に約四十有餘の會合が成立した。明治三十九年日本に紹介されてから十六年、漸くこの運動の芽が、吾が國に萠えそめたことを見ると、更に一日も早く、その收穫を收めたいと切實に想はぬ日とてはない。

獨斷や、先入主に捕はれて、新らしい思想に反抗しやうとする人でない限り、自分の周圍をあるがまゝに眺めて、物事を正しく理解、批判してゆく人々には、國際語の必要は、說く迄もない切實な緊急な問題である。

各國民の間の、（國家としても、個人としても）意志の疏通を妨げるものは、萬里の長城よりも、一に言語の障壁であることは、今更これを論ずる迄もない。

國際補助語エスペラントの、言語學上の問題よりも、讀者には社會運動について、悉く述べる方が、多大の興味を惹くことであらうが、丁度種々の用事が重り合つた上に、時日の切迫に文献を徴する暇もないこと、文化の中心を離れた片田舍で、乏しい私の藏書にのみ依らなければならないため、何れの問題にも深く立ち入ることができず、寔に不本意乍ら、杜撰な紹介にとゞまるのを殘念に思つてゐる。今後改めて委しく論じたい。

偉大な先覺者が、新らしい思想を世の中に導いた時、嘲笑と迫害の手が、如何にこれに酬いるかは、古今東西いつも變らない事實である。豫言者は故郷にいれられず、その迫害の如何に殘酷であるかは一々例を擧げる迄もなからう。多大の犧牲を拂つて人類の幸福の爲めに、新らしい思想を說いても、これを享くべき人々は、頑な先入主に捕はれて、或は多勢の輿論に支配されて、却て嘲笑を以て迎へる。

教義を廣めたキリスト、日蓮に限らず、Copernicus が地動說を唱へたとき、神學者が、今日から見れば愚にもつかね神學の教義を楯に如何に迫害したか。アメリカを發見する迄に、Columbus は數十年の間、貧苦と嘲笑とを如何に耐え忍んだか。今に到つて考へれば、寧ろ餘りに當然すぎる事實が解らずに、常に世人は多數を恃んで反對を事としてゐる。

先覺者の悲哀、開拓者の犧牲、ツルゲネフの散文詩に、馬鹿者の一編がある。一人の男が、何とかして偉くならうとして、遂にあらゆる事物を誹ることを考えついた。世人はその人を崇ひ、その門に爭つて聚つた。集る人々と、その男と、果して何れが馬鹿者だらう。世の中に産れ出でる新しい思想を、悉くこの男の様に、一概に貶してゐる擔板漢が、堂々たる有識者の中にさへもゐる。

一切の物に、大きな惰性がある。移り變るものを、もとにひきとゞめやうと、彈性の力が働く。その力をうち破つて、彈性の限界をこして、新らしい平衡の狀態に導くために、先覺者は常に戰はねばならない。寐てゐる世人を、迷ひからよび醒ますために。

人類の平和を憧れ、エスペラントを發明した Zamenhof も等しくこの運命を免れることはできなかつた。狂人とのゝしられ、危險思想と排せられ、理想家の夢と嗤はれ、物質上に精神上に、あらゆる困難と戰つて攫めなければならなかつた。幾十年月も過ぎるならば、何故汽車の發明に際して、當時の人々が反對したか、今日吾々が怪しみ解することができぬと同様に、エスペラントの必要を、大正の人々が感ぜず、却て誹謗する程の者が、有識者の中にさへ存在してゐる事が、不思議にたえないであらう。

「理想郷は、今日の幻ながら、明日の現ぞ」(La Utopio estas la revo de hodiaŭ kaj la realo de morgaŭ.) と。吾等はこの理想郷の實現に努めなければならぬ。

第一に說くべきは、國際語 (internacia lingvo) 即ち國際補助語 (internacia helpa lingvo) は果して必要であるかといふ問題である。この問題は、既に幾分說明した通り、現今少しく目

を大勢にそゝぎ、偏見に捕はれてゐない人々には、論ずる迄もない、明瞭すぎる事柄である。十數年後の時代には、さても迂濶な議論を闘はしてゐたものだと嗤はれやう。然し、現在尚ほ社會の先覺者であるべき大學教授や新聞記者の中にも、その必要を覺らぬ人々の多いことを思へば、一言せざるを得ない。

國際關係が日に益して密接になつてくるときに何か手段として國際補助語の必要なことは、理想以上一歩を進めて實行上の問題である。國際聯盟、勞働、赤十字、ゼノア、ヘーグ等の諸會議、個人としては科學に商工業に、その必要は切迫した問題である。萬國に共通なメートル法の度量衡を制定し、萬國著作權や特許權を承認し、萬國郵便協定に加入してゐる日本人が、何故ひとり國際補助語を別様に考へるのだらう。商船が各國の港灣に出入する時、もし萬國信號を用ゐなかつたら、如何に不便を感じることとであらう。あまりに明白な事實に對して、盲目な人々を憐む許りである。

今尚ほ加特力教の僧侶達がラテン語で御互に會話する様に（彼等はラテン語のみ神様の投げた言語と盲信してゐる）古く科學者はラテン語を共通用語にしてゐたのを、今日では生物學者の外は各自種々の國語を用ゐ、その爲めに語學が如何に多くの時間と勞力を空費しなければならないだらう。―日本に偉大な科學の産れない所以である。

國際補助語の必要は、縷々述べる迄もなく、寧ろ國際補助語として、如何なる言語を擇ぶべきかゞ問題となる。この解決として

（一）現存する國語の何れか一つをとるべきか
（二）既に滅びた、ラテン語、ギリシア語、ヘブライ語等の中から擇ぶべきか。
（三）現今迄に發表された人造語の一をとるべきか
（四）委員を設けて、人造語を造るべきか

の四途がある。

第一の問題は、事新らしく論ずる迄もなく、既にエスペランテイスト並に非エスペランテイストも等しく不可であるといふ結論に、歐洲の各國に於いて、各種の會議で到達してゐる。

イギリスに於いてさへ、英語を國際語として採るべきでないといふ説は、商業會議所にても、大英協會にても亦科學用語としても認められてゐる。現に國際聯盟に於いて、英佛の二語を用語としてゐるが、その爲めに如何に英米以外の國家がハンデイキヤップをつけられてゐて、如何に不利を招きつゝあるか。その用語を母國語とする國民にのみ特權を與へ、他國は屈辱を忍ばねばならない。

國際問題を解決する鍵として、言語はどうしても國家民族にとつて中立性を帶びてゐなければならぬ。これは國際聯盟に於いて、悉く誰しも認めるところで、藤澤君等の多大な努力と新渡戸博士安達大使等の贊同により、總てエスペラントが用語として認められるに到らう。

イギリス人が、掛り結びの多い佛語に拙く、フランス人の英語の發音は殆ど役にたゝない。生れ落ちた時から朝夕耳に親んでゐる國語でない限り、他國語を習得するのに困難なことは日本人のみに限らない。

第二に死語となつたものを復活することは望めない。ラテン語を神様の言葉と盲信する、加特力教の僧侶以外に、その複雜な語尾の變化が役にたゝないのに加へて、今日の新らしい時代の思想を盛るには、既に用ゐふるした舊い皮袋である。

然れば吾々は國際語として中立的な人造語をとるより外に手段はない。エスペラントを特に主張する所以は、現今迄に考案された百余の人造語の中で、最も簡易で、殊に日本人にとつても、その造語法が日本語に類似してゐるの便があるからである將來考案せられるかもしれないものの中に、如何なる點から見ても缺點のない者ができるかはしらないが、吾々はその樣な夢想や、無形のものをとつて論ずることはできない。吾々の固執する點は國際補助語の思想である。その言語の形式は、或は變ることがあるとしても、現在に於いて最も完全なものとしてエスペラントを擧げねばならない。

フランス語陶醉者から「信仰の厚いエスペランテイスト」と嘲られやうとも、フランス語の雜誌は何れも三號雜誌の運命に留るのに、エスペラントの雜誌は、日本のみに Revuo Orienta, Verda Ombro, Espero 及び Verda Utopio の四種印刷され、日毎に進展してゆく國際化運動の趨勢を誰か否み得やう。吾等は理想として、人類の興榮を胸に刻き、その理想の實現に努めねばならぬ。

エスペラントとは如何なる言語であり、又エスペラント主義とは何を意味するかを、少しも研究しないでゐて、反對の爲めに反對を事とする人も多い。其の多くの反對論は

（一）國語を亡ぼすといふ考
（二）民族的精神を破壞するといふ説
（三）民族の背景のない言語は存在しないといふ考
　　人造語には生命がないといふ説
（四）エスペラントとエスペラント主義を混同してゐる考
（五）誤つた英國崇拜狂に捕はれて、英語を知つてゐれば役にたつといふ度し難い考

（六）エスペラント主義と他の社會主義と混同してゐる人

（七）現在多くの外國語を習つてゐる上に、更に殖えるのは重荷であるといふ説

（八）毛嫌ひや、只反對の爲めに反對する人

第一に國語を亡ぼすといふ考は、全くエスペラントの目的を理解しないから起るのである。エスペラントは本來、異る言語を用ゐる國民が、互に意志を疏通し、他の國民の所有である國語を借りて、自分の考を誤つて發表するのを防ぐ爲めに、中立性の言語を造つたので國際間の補助語である。日本にはじめて紹介された頃に用ゐた世界語といふ名は、誤解を起し易い。ザメンホフ博士も屢演説してゐる通り、他の現在存する國語を、決して廢止しやうなどといふ、思ひ昂ぶつた考は少しも含まれてはゐない。

似而非愛國者（ショビニスト）は寔に御目出度い極である。殊に少しも他の人々の説を聞きもせねば、受け容れないで只々一種の型を設けて、口に愛國を説くけれども、それは本當の愛國とは大いに隔つてゐる。彼等は極めて少さい獨斷の範疇を設けて、狭い垣を造つて、人も自分も只その垣の中に入れて、入らぬものを一概に排さうとする。

エスペラントは決して國語を亡ぼすものではない。然し又、翻つて考へるのに、國語と國家、民族等の關係はどれ程密接なものだらう。現在の事實として、もし民族と國語とが、深い關係を持つてゐるものであるなればしらず、少し冷靜に考察してみるならば、日本語に於いても種々の疑問が起る。

現に吾々が用ゐてゐる言葉の中、どれだけが本當の日本語と稱すべきものだらうか。奈良朝平安朝に於いては、吾々よりも文化の程度の高かつた隋唐の影響をうけて、無暗に多くの支那語がとりいれられたことを。吾々の用ゐる假名さへ、平安朝初期の發明ではなからうか。其後紅毛との交通が開けてから、オランダ、スペイン、ポルトガル等の言葉が、日本語にとりいれられ、今日では吾々が少しも意識しないで、怪しまずに用ゐてゐる。卑近な言葉で繻絆の如きは、ポルトガルの gibano であると云へば、驚く人も多いであらう。

清朝の初めに當つて、努めて滿洲語を支那に用ゐやうとしたにも拘らず、それが行はれなかつた一つの理由は、文化の程度が漢民族の方が高いからであつた。

併し又、ドイツに於いて外來語を排さうとする運動。ベルギーにてフラマン語のみを用ゐる大學を設立する運動。アイルランドにて英語を用ゐぬ運動。チエコスロバキア、フンガリア等の諸國にて、夫々民族の自立とともにその國語の復活。現在歐

洲に四十有九國語が存在してゐる事を思へば、國語を守るといふことは、似而非愛國者でなくても定に大切な事であると思へる。

然らば猶ほ更の事、征服者と、征服者との間に於ける關係にある様な他國語を甘んじて用ゐることは、耐え難い屈辱である。この屈辱をしも忍べるならば、同時に國語の亡びるのも忍び得る譯ではなからうか。

時には手眞似や繪で事足りるといふ人もある。單に簡單な物體の形を示すのなら（それでも Dumas が傘を注文したら蝙蝠傘をもつてきたといふ話もある）事足りぬ事もなからうが、筆者自身にもわからぬ繪をかく、未來派ならばしらず、複雜した思想をどうしてそれで表はせやう。

次に人造語には生命がないと思ふ人も多い。殊にエスペラントよりも以前に、又後に考案された數多くの人造語が、恐く不成功に終つた事は、人造語に對する大きな障碍ではあるけれども、これは却て人造語の可能に對する反對の結論よりも、獨りエスペラントが如何に優つてゐるかを裏書きするものではなからうか。

新渡戸博士は、人造語には生命がないといふ非難はあまり當つてゐない。例へば自動車は生命がないけれども、生きた馬よりも、より大きな仕事をしてゐると、說かれてゐる。

嘗て言語學者 Jacob Grimm は、すべての言語は、全く人間の勝手に考へたものであることを述べたが、この說を擧げる迄もなく、言語は或る意味に於いて、夫自身人造語であると云へる。

自然語といふのも、人造語といふのも、前者は永い年月の間に自然に發達してきたもので、次第に今日の形をとるに到つたものである。後者は人爲的に造つたものであるが、それが立案者の氣儘に勝手に作りあげたものでは、今日國際語としては、一人に便利であつても他の者に不便であつて、生命がないかもしれない。然し幸にエスペラントは、今日多くの民族に用ゐられてゐる所謂自然語のインドゲルマン語を土臺にして、永い間の使用で、蓬の様に亂れた文法や發音を整理したものであるから、又自然語といつて少しも差支ない。

殊に所謂自然語であつて、斷えず變化してゆくものでは、國際補助語として役にたゝない。エスペラントにては、時代の進歩につれて、新らしい意味の語はとりいれてゆくが、文法の變化は許さない。

第四に反對する人の中には、エスペラントとエスペラント主義とを混同してゐる。ザメンホフ博士も述べてゐる通り、エスペ

ランテイストは各自自由である。少しも他の同志の意見、主義に拘束せられてはゐない。ケムブリッヂに於ける第三回エスペラント大會にて

Ĉiu Esperantisto restas homa libera kaj uuni Esperantistoj ne respondas por la ideoj de aliaj Esperantistoj.

と演説されてゐる。

エスペラント語の精神、内的觀念とも云ふべきエスペラント主義を體得しない人々でも、エスペラントを用ゐる人ならばエスペランテイストと云つて差支ない。エスペランテイストは必ずしもエスペラント主義者ではない。然しエスペラント主義者は悉くエスペランテイストである。エスペラント語を用ゐ、語り書く人々の間に、愛國主義者もゐる。似而非愛國主義者もゐる。人道主義者もゐる。共產主義者もゐる。社會主義者もゐるそれは等しく日本語を用ゐる人々にも、各主義者の存するのと同じとであるエスペラント主義と是等の主義とは全然何の關係はない。然し口に愛國を唱へて、民族の間に爭を助長する、似而非愛國主義者はザメンホフ博士の最も忌み嫌つたものである。

假令エスペラント語を用ゐる人が、自己の利益にのみ走つて淺ましい目的に用ゐやうとも、罪人であらうと、エスペラント主義を何等理解しないでゐやうと、エスペラント語を用ゐる人をエスペランテイストと云つてもよい。

エスペンラトは、音譜とか信號とか、電信の記號の様なものである。その本來の目的は、國民間の無理解を防ぐのであるから、その精神を擴張して、愛他主義の起つてくるのは當然の成行である。單なるPhänomenologieに滿足のできずに、atomistisch に進むのが、少し心的に眼醒めた人の辿るべき筋であるが、只表面の現象に捕らはれて、そこに留まつてゐる人も多いそれと同じくエスペラントを、單なる手段として用ゐたいと思ふ人は、或は何等イスモに縛られるのを欲しない人々は、少しも何の拘束はなく、自由に用ゐて差支ない。

それにあき足りぬ理想家は、萬國の協和、人類の平等……を說くのである。エスペラント主義に同意せずとも、エスペラントを用ゐる人が一人でも多くなれば、それは又エスペラント主義者の等しく滿足する處である。

最も度し難い反對者はアングロマニアである。彼等は英語のみを唯一のものと思ひ込んでゐる、然しこれは軈て覺めるべき夢にすぎない。

もしその拜英狂が、似而非愛國者(シービニスト)であれば幸である。吾々は何故貴方は、切角御立派な似而非愛國主義を御忘れになつて、他の國民の所有物を御用になるのかときゝたい。文化の程度の

低い國民が、歎むを得ず文化の高い國民の言葉を借り、被征服者が、泣くなく征服者の國語を用ゐてゐる。それでは折角の似而非愛國主義を棄てゝ、甘んじて日本をイギリスの下に置くことになる。

屢英米以外の外國人から、日本は立派な獨立國であるのに、何故こんなに英語を用ゐてゐるのかときかれる。"Mi estas treége mirigita, ke Japanujo, nun unuaklasa kaj sendependa imperio, tiom multe dependas de la angla lingvo." と既に一九〇六年に Vonago は書いてゐる。

更に英語だけ知つてをれば、役に立つと思ふのは大きな幻想である。旅行者は、大戰前には五箇國語を知つてゐれば、歐洲を旅行することはできたと云ふが、それでも或るロシア人の書いたものに、一歩足をフインランドに入れると全く何も通じない樣である。今日では猶更、四十有九國語を知つてゐなければ、とても歐洲を通るわけにはゆかない。今迄の日本の漫遊者の樣に、ベデカー片手に、大都會の美術館だけを素通りするのならばしらず、これから日益しに密接になつてくる國際間の問題は、とても英語などで解決はできない。

ポーツマスの條約の時、パリの大新聞 Le Matino 紙に、日本の通譯が極めて拙かつたことを述べてゐる。Witte は、ロシア語或はフランス語で意見をのべる。それをロシアの通譯は英語に譯す。日本の通譯が日本語に直す。小村大使は日本語で述べるのを、通譯が英語に譯し、ロシアの通譯がロシア語にする。何といふ煩はしさであらう。煩はしくとも、意味が誤らなければ、時間の空費をいとはばそれでも忍べる。然しルマテン紙は、日本の通譯が極めて拙く、肝要の點よりも、細い字句の末で互に爭つてゐた上に、又後になつて氣付いて、新に議論を初め直さねばならなかつたと、嘲つてゐた。

これはひとりポーツマスの條約會議に限らない。又日本人に限らない。あらゆる國際間の會議に伴ふ、悲喜劇であることは例擧する遑もない。過去の生活經驗の異る二つの國民は、自ら思想を發表するのに、異る形式を用ゐるから、一方には何等不合理もなく、極めて自然の表現の形式も、他の者には實に不自然な珍らしいことに見え、それに慣れることは難しい。

大雨を cats and dogs といふ英語と、瀧の樣に降るといふ日本語。Merry cricket も、日本人には、物の哀をさそふ秋の虫である。夜蜘蛛は不吉を忌む日本人と、morning spider mourning, evening spider joy いふ國民、蜻蛉を la demoiselle といふフランス人と dragon-fly といふイギリス人。この思想、觀念の差異をどうしやう。

すでに古く人類はバベルの塔を築き、言語の差異から起る無理解が如何に人類にとつての大悲劇であるかは、今日なほ Barbarisme, barbare 等の言葉が殘つてゐるのでも推量される。

遙に二千年の昔、豫言者 Zefaniah は、萬人に共通の言語の必要をとき、又近く聖者、バハイオラは、アラビアの沙漠に靈感をうけ、人類共通の用語エスペラントを用ゐるバハイスマを宣傳してゐる。

現今吾々の抱く國際語といふ感念の創唱者は、實に、Leibnitz であると云はれてゐる。屡彼は lingua universalio といふ言葉を用ひ、又萬國書法 (Pasigrafio) を考へたとして紹介されてゐるけれども、彼の云ふ lingua universalio は、今日吾々の考へてゐるやうな言語ではなく、全く形而上の pasigrafio にすぎないと、普通の説を近頃 Dietterle は駁してゐる。

實行上の問題として、第一に人々の頭に浮んだのは、所謂萬國書法である。日常吾人の使用してゐる漢字は、全く支那人と音讀を異にしてゐるけれども、字の意味には二三の例を除けば甚しい差異はない。互に不完全乍ら、筆談によれば意志を通ずる事ができると同様に、世界共通の一種の書體を案出しやうと企てたものが寔に多いが、その努力が失敗に歸したのは寧ろ當然である。

言語を分類して、いくつかの種族部門に分つて、字義を定めやうとした Wilkisns. の如き或は各國語の辭書の言葉に番號を附して、その數字を並べて文章を作らうとした人、支那語を基礎として萬國語を編んだ Müller 中には人間の思想を凡そ五百の根本的の共通な思想の元素に還元して、それを表はす記號を定め、その組み合はせによつて思想を表はさうと企てた人もあるが、言語は單に單語の組合せでは不充分でその配列の形式が、各國とも異なるといふ事實を忘れてゐる。

其の他、音譜の如きものによらうとした人、中には數字で言語を造り、語根となるべき一般的概念に、その働きを表はす數を加へて、思想を表はさうとしたものもある。

象形文字によつて、この難問題を解決しやうと試みたものには Görlitt 等が擧げられる。

然しいづれにしても、書いて思想を表はすと同時に、自由に話し得る言葉によつて通ずる様にしない限り、多大の不便を免れることはできない。この見易い結論に歸着する迄に數世紀に亘つて、空しく數十の考案が企てられ、漸く正しい解決の曙光は第十世紀の末に認められた。

國際語としてエスペラントの前に、成功の緒を見出したものはVolapükである。これはvola(世界の) pük(言語)の二語を組み合はせたもの、即ち「世界語」を意味してゐる。Baden の Johann Martin Schleyer 僧正が一八七九年、五十有餘の國語を研究した際考案したもので、ドイツにてはエスペラントの紹介される迄可成り普及されてゐたが、エスペラントを知るとともに、多くのヴオラピユキストは皆熱心なエスペランテイストとなつてしまつた。ことにエスペラント普及の初めの頃忘れる事のできない搖籃地である Nürnberg の一團は、その初め悉くヴオラピユキストであつたのは、エスペラントがヴオラピユークに積つてゐる事を證明するに足りる。

その長所として擧げられるものは、(一)文法が極めて容易い(二)不明瞭や、兩意が起らず、(三)文章上語の配置が自由である、等である。まことにこれは、當時の奇蹟である。人類が數千年の久しい間、空しく求めてゐた言語は、シュライエルによつて生れた。當時の先覺者が、如何に喜び躍りて、熱心にこの恩恵にあづからうと努めたらう。

然しその願は空しかつた。ヴオラピユークには、未だあきたりない多くの欠點が擧げられる。第一に發音が極めて難しく、例へば bap, pab, pap, päp, pep, pöp, の様に紛らはしい音が多い。その上語彙が勝手であつたので、文法は容易いにしても單語が難しく、すぐ忘れて了ふといふ。エスペラントを知つてから、その死に到る迄、熱心なエスペランチストとして、詩人として有名な Grabowski も、自分は語學の才はあるけれどどうしても熟練な Volapükist になれなかつたと述べてゐる。きくところに依ると、シュライエル自身も會話するときに片手に辭書を離さなかつたといふ。ボラピユークの亡びたのは、自滅したものであつた。殊に新語を造るのに何等の規約もなく、一々考案者の獨斷に任せてゐたのは、大なる過誤であつた。この最後の點は特にザミンホフは、ヴオラピユークの徹を踏むなと戒めて、自己が考案したといふ特權を主張しないで、言語上の問題は一切言語委員に任せることを力說してゐる。

一八八九年パリに於いて第三回(そして最後)の大會を開いたを名殘りに、ヴオラピユークは滅びていつた。多くの人々はこの人造語の滅亡が國際語に不可能を證明するものと考へ、又エスペランテイストは、それがどれ程エスペラント普及を碍げるものであるかといつて、却てヴオラピユークの考案をのゝしり、シュライエルを謗る。

然るに大人格者であるザメンホフは、エスペラントの大會に於いて、屢(第一、四、七)シュライエルを賞讃し、感謝の辭

を捧げてゐる。まことにシユライエル僧正も、言語によつて國民間の無理解をとき、四海同胞を實現しやうといふ、强い理想を把持してゐた。ヴオラピユークは、その理想を實現するが爲めの手段であつた。人道主義と嗤ふ人は嗤へ、理想字と嘲る人は嘲るとも、愛國の假面の下に、民族の爭鬪を助長する似而非愛國者の犧牲になつて苦しむ國民を救ひ人類愛を說く、その偉大なる思想を、心から讃美しなければならぬ。

エスペラントの發表後、Idiom neutral, Universal, Novilatin Wede 等の國際語が考案された中で、第三インターナショナルに於いても、又昨年九月エデインバラに開かれた British Association にても、エスペラントか Ido の何れかを採用しやうと論ぜられてゐるが、このイド語は一九〇〇年パリ萬國平和博覽會の時、國際補助語に關して設けられた委員が、一九〇七年イドと稱する國際語案によつて、エスペラント語に修正を加へたもので、その改良の諸點は

(一) エスペラントに用ゐたフランス語の circonflex の樣な山形の記號をとる。

(二) エスペラントの特徴の目的格や、形容詞の數を名詞に一致させること等をやめる。

(三) 語を誘くのに規則を設ける。

(四) 新らしい語根を取り入れる

イドは即ちエスペラントを改良したものにすぎないが、然しこの改革は却つて思はぬ障碍を齎らしてゐる。

現存國語が、斷えず時代とともに變化してゐるために、少し時代が變ると古典的のものとなつて了解するに苦しむ。エスペラントにては、この改良に制限を設けてあるから、ザメンホフが當初に發表したものと、今日吾々が書くものとに、既に三十余年の年月がたつてゐるけれども、殆ど差異がない。只個人的の文體、巧拙の差異によるのであることが、如何に御互の理解に重寶であろか。イドは改良に次ぐに改良、斷えず流動してゐて、昨日のイドと今日のイドと、全く形態を異にしてゐる。その上イドには動詞の變化强勢等の規約が複雜して、且つ接頭語換尾語が多きにすぎる。イドはエスペラントをラテン化し過ぎたものである。イド語の團體は Zülich に本部を設け、國際語聯合と稱してゐるが、彼等は理論にのみに走りすぎて實用にならず昨年 Wien に開いた大會には、會するもの僅に六十人にすぎなかつた。

最近イギリスの化學者 Donnan 氏は Nature 誌上に、科學用語としては、英語でもラテン語でもなく、イドをとるべきであるが、イドは其出發點に於いて誤をしてゐるから、結局エス

ペラントを採用すべしと論じた。

新渡戸博士も言はれた如く、要するにイドは學者の書齋より外に出でぬ、實用にならぬ畸形兒である。

曾て American philosophical society は、國際語の可能を討議し、國際語とし言語の備ふべき性質は、國家に對して全く中立的であり、文學の綴は音聲的である。即ち發音通り綴らねばならぬ。又文體を異にする多くの諸民族が用ゐる爲めに、又文章構成法が極めて自由であるべき事等を擧げた。偶々エスペラントの發明を知りその普及に盡力しやうとした。

同じ文字を種々に發音する英語、無音綴が多く動詞の變化の複雜で、文章論に規約の多い佛語等は、到底國際語としての資格を備へてゐなければ、英、獨、佛等の國語が皆文章構成法を異にしてゐて、その特徴に慣れるのは難しい。エスペラントの特徴の二三として

(一) 發音通りに綴る、
(二) 强音の位置が一定してゐる
(三) 品詞に一定の語尾を附してゐる。
(四) 名詞に性の區別がない、
(五) 目的格を設けてある、
(六) 數詞が日本語と同樣に組み立てられる。
(七) 疑問詞を用ひない時の疑問文には、ĉu を用ゐる。
(八) 接頭語、接尾語を用ゐて造語法が簡便である。
(九) 文法は僅に十六條であつて例外が一つもない
(十) 特殊な便利な相關詞と、前置詞がある。

これだけの諸點を擧げただけでも、少しく外國語の不規則な文法の學習によつて惱まされた人々は、沙漠のオアシスと思ふであらう。

是等の特徴に對して、言語學者の或る者は種々の非難を加へる。然し夫等は、吾々にとりて左迄重要な問題とも思へない。吾々は此の點について、割合に保守的である。見解を異にする說のまゝ斧鉞を加へてゐるならば結局イドの轍を踏んで、イソップ物語にある驢馬賣りの樣になつてしまふ。

殊に問題となるは第五の目的格を設けたとである。目的格の用法は、

(イ) 動詞の直接補語となる時、(ロ) 運動の方向、(ハ) 動作の行はれる時期(ニ) 期間、度數、(ホ) 度量、價額等の場合に用ふるが、それに對して、目的格を設けたことが、エスペラントの最大の欠點であると非難する學者が多い。然し、佛語の樣に、詞の文章上の位置によつて、その職分を定めるものでは種々の文章構造を有する諸國民に共通に用ゐられる言語として

は、採用し得ない事であるのは、一々數國語を例擧して對照する迄もなからう。却つて日本人には、この目的格を用ふる事が、極めて便利である。

又、言語は發音通り綴るとは云ひ乍ら、發聲法を異にする諸民族が用ゐて、果して豫期した程に意味が通ずるか疑ふ人もある。それが杞憂にすぎないことは、既に十數會の大會が、證明して餘りある。實際日本人にはlとrの區別が發音し難く、ドイツ人は語の初めにあるSを濁つたり、stやspをsht, shpと混じ、フランス人は語尾に强音をつけたり、hを發音しなかつたりするやうであるが、それは却つて、各人の御國訛り位にしかきこえないで、少しも理解に差支ないといふ事實が、雄辯に語つてゐる。

嚴密に批評することをゆるすならば、其他の點に於いて、ザメンホフも二三の誤をしてゐる樣であるが、然しそれは些々たる瑕瑾であつて、それがエスペラント全體の良否を云々するには足りない。

殊に數詞だけでも、フランス語の不規則亂雜なのに悩んだ人は、日本式の數の構成が、如何に簡單で便利であるか云ふ迄もなからう。（未了）

（註）こゝに用ひたエスペラント主義といふ意味が、所謂その精神或は內的觀察、もしくは人類主義を意味するので、エスペランテイストの中には誤つてゐると考へる人もあらうが、此の點に就いては後に詳說する

この稿を終る頃になつて、丁度Generoで發行されるEsperantoの五月號が到着した。四月國際聯盟局に開かれたエスペラント教授に關する大會を報じてゐた。二十八國より約百人の委員が集り日本の委員としては藤澤・宇佐美、川西氏等が見える。新渡戸博士は聯盟事務次長として幾多の好意を示されてゐる。

エスペラントの創始者ザメンホーフの傳

廣田洋二

ポーランド、ワルソー市、ノヴォリピエ街に面した家の中。粗末で小さくはあるが、さつぱりした室の中央に卓子を出して

七八人の若い學生が集つて居た。十二月の五日といへば窓の外にはもう冬が迫つてゐたが、中は溫くて元氣が漲つてゐて春のやうに若々しく感じられた。右手に紙片を持ち、左手をテーブルの一隅に置いて體を支へて、緊張した血色のいゝ若者が立つてゐる。滿座の不安さうな好奇心に充ちた視線はその男に惹きつけられてゐる。ドイツ語でも、ロシア語でもポーランド語でもない耳なれない發音の言葉で綴られた詩の一節が讀まれてゐるのであつた。

一八七八年のこの日に、ルドヴィコ、ラザロ、ザメンホーフは、少年の時からの念願であつた「世界の言葉」を一通り完成したので先づ仲間に發表することにした。友達の中には、彼の熱心に動かされて、この新らしい言葉を既に習てゐた者もあつた。けれ共之等の熱心な人達でさへ、今その眼前に蠢めいてゐる生命の果して何者であるかを、到底理解しては居なかつたらう潤ひある若い聲は四壁に反響しながら續いて行つた。喜と希望とに陶醉の中で若者の眼は夢みるやうに輝いた。消えるやうに詩は了た。戸が靜かに開いた。中年の女が菓子鉢を持つて入つて來た。さうすると、ルドヴィコは、とんけうな大聲になつて「お母さん、それを皆に澤山やつて下さい。」と云ふのが私には聞えるやうな氣がする。彼にとつては、この發表の會の席に、このいゝお母さんが仲間になつて居て呉れることは非常な嬉しいことに違ひなかつたらう。何故かといふと、ルドヴィコの父親は嚴格其者のやうな人だつたので子供達はよく叱りつけられて、口惜しがつたり打萎れたりしてその書齋から出て來たものだが、そんな時、何時も一番先に來て、眼には涙をためて頭を撫でゝ呉れたのはこの母だつたし、もつといゝことには、懲罰の爲に晝食を取上げられた時でさへ、父の晝寢の隙に、密と何か、かにか届けて呉れたのは——その癖、きまつて「今度限りですよ」と附加へられたのではあつたが——いつも、この母だつたからである。だから、今貧しい中から、態々御菓子を拵へて來て呉れたのを見ては、彼も少し夢中にならずには居られなかつた。

エスペラントの完成に就ても、この母は深い同情を持てゐて呉れた。父の方は、エスペラントを隨分苦い目に合はせたものである。第一、今云つた發表會の數月後、父はルドヴィコのエスペラント手帳を一纏めに取上げて自分の机にしまひ込んで返さなかつたり、二年後には、彼の留守にエスペラント手帳を皆燒きすてゝ灰にしてしまつたことなどがある。息子の立身を氣遣ふ親心の有難さではあつたらうし、昔から息子の仕事を諒解した父親といふものゝあつた例(ためし)はないのであるが、エスペラントにとつては實に生命にかゝる事件であつたのである。

ザメンホーフの家は兩親ともユダヤ人で、父はマルクスと云つて一八三七年生、母はルザリア、ソフエル、一八三九年の生れで、商人の娘であつた。父は嚴格な學者肌の人で、ルドヴィコの生れたビアリストク町や、その後長い間住んだワルソーなどで、學校に教鞭をとつて、外國語や地理を擔當してゐた。ルドヴィコが「世界の言葉」を創めたに就ては、父のこの語學に對する天分を享けてゐるとも多かつたのだらう。この父は七人の子があつて――ルドヴィコを總領に男四人女三人――一生貧乏して居た。外字新聞の檢閲などを兼職して生計の補にしてゐた。

生活の經濟的基礎の不安定には、ルドヴィコも一生惱まされた。廿六の年に醫師免狀を得て開業したのだが、貧民階級にばかり同情したので收入が尠かつた上に、自分の診てゐた病人が死んだ時、その家から謝禮を持つて行くとルドヴィコ先生の方は重さうに頭をあげて「私は癒せなかつたのですから、夫は頂けません。」と斷つたりするやうな良心を持つてゐたので、遂に或時、死んだ子のあとに惱む母の苦しみを見て堪らなくて、廢業してしまつて、一生眼科醫をしてゐた。

眼醫者になつてから暫くして、一八八七年の夏廿八歲のルドヴィコ、ザメンホーフは、クララ、ジルベルニクと戀の結婚をした。結婚して直ぐ、二人は、「ドクトロ、エスペラント」と署名したエスペラント語の「第一書」を世界の各地に發送するので忙しく働いた。美しい廣い額が、思慮深さうに、ランプの光に輝いてゐると、側で、元氣の溢れた人のいゝクララが、愉快さうに細そりした腕を動かしてゐたのだつた。一生の仕事が愈々世界に發表されることになつた。ザメンホーフ自身は、この時「遂に、私のルビコンが來た」と云つた。

新しい言葉を、こゝまでに完成するのには、ザメンホーフは父に手帳を燒かれてから、誰にも發表しない約束で、再仕事に取かゝつて七年の螢雪を積んだのであつた。飜譯を造つたり練習したり、又何度も自費出版を企てたが、經費の都合が思ひ止まらなくてはならなかつたりしてゐる恰度その時、クラゝの父が非常に賛成して出資して呉れたので、愈々「世界の言葉」は直に世界の審判の下に置かれることになつたのである。

自分の創作、そして同時に自分の生活の全體である者を世界の人の前に出すに當て、ザメンホーフの胸には、之で人間は今より少し善くなるのだといふ喜が躍つたのであるが、一方にはその內氣な性質から甚い心配にとざゝれてしまつた。人々は、この計畫を何と思つて呉れるだらうか。

彼の心には、育つて來た過去の思出が夏の雲のやうに湧き上つて來た。……家……町……小さな友達等……中にも、自分が

「パロノ」（男爵）など〻綽名されて居た纎弱い少年の頃、或日ビアリストクの街を歩いてゐると、人だかりがして騒いでゐる模樣である。近寄つて見ると、今しも白髮のユダヤ人が、ロシアの士官に取挫がれてゐるところだつた。町の兒等は、夫に勢を得て礫を投げつけて居た。「ユダヤの犬奴！」とか「ロシア語で物云へ！」とか罵る聲が、口ぎたなく聞えて來た。

何故、同じ人間同志があ〻まで慘に摑み合はなくてはならないだらうか。若し、お互が、習慣や宗教の異つた衣の下には皆同じ心を以て居ることが解たのだつたら！

もし、ロシア人もポーランド人もユダヤ人もドイツ人も含んだ唯一つの人類の爲に、唯一つの言葉があるのだつたら！

之が、四つの人種が雜居して、お互に言葉不通の爲に喧嘩ばかりしてゐたビアリストクで、少年ルドヴイコの柔い心に深く彫みつけられた願であつた。夢が實現された、この日に、また生きたやうにマザ〳〵と頭に浮んでゐた。

愈々手をつけてからも、始めは全く新しい言葉にと思つて ba, ca, da, be, ce, de, ab, ac, ad 等に意味をつけて見たり、ギリシヤ語やラテン語を使うとしたが、前の計畫は餘り複雜過ぎて後の二者は、餘り現代語から遠過ぎて到底實用にならないので、遂に、現代語の中から、中立語を造り出すことにした。

ところが、この方は、文法が複雜すぎるのと、夥しい語數を如何に取扱ふかといふ二點で行詰つてしまつた。暫くする間に、第一の點は、英語の研究から暗示されて、全く簡單な文法を完成するに至つたし、後の點は、街上の或菓子屋の看板にある露語の「Skaja」といふ語尾から、接頭語接尾語を適當に使用することによつてきり拔けてしまつたことなど——そんな苦心などが、思出となつては心持よく、次から次へ、心の舞臺を通つて行た。二、三ケ月は過ぎた。

沈んだ心持で待つてゐたザメンホーフは應へられた。その頃になつて、「第一書に對する返事や質問がボツ〳〵と來始めたからである。嬉しいことには、中に、もう新しい言葉で書綴られたのも混つてゐた。「之で愈この言葉も生れたのだ、使はれたから、」とプリヴア氏は云てゐる。

自信の出來たザメンホーフは、この後暫くして、一八九四年少年時代から愛讀してゐたトルストイに文法と辭書とを送つた。カスナヤ、ポリアナでトルストイは之を受取つて、三時間でマスターしてしまつた。そして返事には同情の言葉を送つて吳れた。

その頃から後は、エスペラントは、燎原の火のやうに地球を包んでしまつた。特に今世紀に入つてから急速に擴まつて、も

う、ザメンホーフの手を離れて言葉だけが、獨りで成長して行くやうにまでになつた。

ザメンホーフ自身も、言葉といふものは、理論で作られるものではなく、使用によつて出來上るものだと云ひ、又、「第二書」の中では、自分は決してこの言葉の「創造者（クレイント）」ではない、唯、發案者（イニチアトロ）に過ぎないのだと云つて居る。實際各國人が、その個有の國語の智識に基いて使用することになると、種々な新しい慣例などが生じて來ない譯には行かないのであつた。ではあるがエスペラントが實用されるやうになつてから、根本的の問題に就ては動搖したことのないのは、やはりブリヴア氏も云つたやうに、ザメンホーフの文法に對する努力の御陰ではあるまいか。

一九〇五年に至つて、ブーロニユースルーメールで始めてのエスペラント大會が催されて、ザメンホーフも講演を頼まれた。ところが、彼は又いつもの内氣から、今度も行かうか、よさうかと逡巡した。乘り出した船であつたにも拘らず、公衆の前で演説することが彼には苦痛だつたのである。彼は、こんな弱いところも持つてゐた。

「エスペラントは要するに一の便利なる器具に過ぎない」といふ説には、彼は斷然反對して、「効利的に之を見るのはエスペラントの邪道である　我々のエスペランチイズムは、我々の心の接近にあるのだ」と云つたり、「破壞せよ、かの國境の牆壁を破壞せよ」と云つたりする時には、彼は、心の底に、正義と愛との火を感じたから、あの小さな體からどうしてこの力がと怪まれる程の強さを持つてゐた。ところが三等車などで巴里に着いて、市長だの、文部大臣だのといふ人にエッフエル塔の頂上につれて行かれて晩餐の饗應など受ける時になると、彼は、靜に優しい、そして子供のやうにオズ〳〵した一個の面白い老人になつてしまつた。

彼は、老年期に入つてからも、大會などで、演壇に立つて、エスペラントの理想や、計畫などを話す時になると、次第に聲を高めてしまつたりする青年のやうな感激性を持つてゐた。

かうして彼の一生の最もよい力は、エスペラントの將來に費されてしまつた。彼の小さな心に宿た愛の芽生は、彼の一生のあらゆる力を喰盡して、始めて、世界の言葉となつて生れたのである。彼の造り出したものは、たゞ纔に言葉の外形をとつたに過ぎなかつたが、彼の説いたものは彼の所謂エスペランチイズムであり、彼の人類の同胞（はらから）であるべきものは、言葉を通し、言葉によつての平和であつた。彼を動かしたものも、單なる言語の興味では決してなくて、人間的な愛であつたのである。

けれども、何といふ運命の皮肉であつたらう。ルドヴィユ、ザメンホーフは世界の大戰を眼の前に見ながら、一九一七年四月の七日に永眠した。(Edmond Privat 氏の ,Viro de Zamenhof' によりて)

世界に於けるエスペラント普及の概況

萬國エスペラント協會日本總代表委員　何盛三

博士ザメンホフが國際語エスペラントを發表してから此に三十五年、其最初の十年間に於ける少數エスペランテイストが開拓者としての苦辛奮鬪の事跡は實に想像に餘ある、次の十年間漸く運動の端緒を得て遂に一九〇五年、ブーロンニユシユール・メールの第一回世界大會開催となつたが之は此運動に一時期を劃したものと言えよう、爾來歐洲大戰勃發迄徐々として而かも捗まず、斯語は各國に擴まつた歐洲大戰に復、エスペラント運動に對して一大打撃で總ての活動は一時中止の有樣であつたが慘澹たる大戰の經驗は更に適切なる國際相互了解の必要を痛感せしめ戰後に於は著しい世界の國際化的傾向と他の反面民族精神の勃興國語擁護の勢と彼此相作用して中立性國際補助語は現實に世界の要求となつた今日斯語の歐洲實際社會に日々盛に普及されつゝある有樣は吾國人一般の想半に過ぐる所であらう。

エスペラント修得が比較的容易で且つ其希望すべきものであることは他の諸家の紹介によつて一般讀者の了解せられた所であると思ふ。只今日迄の經驗によれば大多數の人は「理想良し、組織亦優秀只之を學んで直に實用に供し得ないならば、吾等は他日世間一般に行はるるに及んで之を學ばふ」と云ふ、初期開拓者の辛苦は之に付けても推想に餘あるが今日、エスペラントの普及を世に奨める吾等は既に眼前幾多の事實が十分有力に之等の人々の斯語修得に安心を與へ得ることを幸とする。

エスペラントの最大目的たる國際的相互了解は斯語が只少數

理想家の獨占物でなく極めて民主的にあらゆる社會、極めて多數の人が之を解し之を使用するに至つて甫めて十分に行はれる此意味よりしても實用を重んずる人が其實際生活に必要を認めて斯語を修得する事は共目的からも普及運動の上からも大に慶ぶべき次第である。

ザメンホフが一八八七年初めてエスペラントを發表した、『第一書』(フ・ウヌ・リブロ)に於て當時世に喧傳された獨乙人シュライエルの所謂世界語ヴォラーピュック、を批評し且其運命を豫言した左の一節は上記の意味に於ても大に味ふべきであると思ふ。(基(フンダ)本(メント)文(クレストマテオ)範第二四四頁)

「此等最後の試の一たるヴォーラーピュックが果して傳ふる如く一定數の信奉者を得たのならば夫は正に「全世界語」と云ふ思想其者が夫等の熱中し易い、獻身的に物事の開拓者たらんとする傾向の人々をして之こそ成功するだらうとの一縷の希望の下に其時間精力を犧牲にさせる丈の高遠な誘引力を持つて居るからである。併し此等熱中し易い人々の數は或一程度に達して止る、而して冷かな無頓着な世間は何を好んで此等少數人と交通し得んが爲めに敢て其時間精力を空費しょう――斯くて此言語（ヴォラーピュック）も亦從前幾多の試と同樣何等の効果を遺さずして死滅するであらう」

エスペラントの團體、雜誌、圖書、及エスペランテイストの數

エスペラント普及の狀態を示す數字は遺憾ながら適確な材料がない、併し一九二一年度萬國エスペラント協會年鑑に揭げられた國際的の協會及各國の中心團體數は四十五を數へ、各國の各地方會クラブ等の總數は戰前既に二千二百と云はれて居た、同年鑑に示す各國代表的エスペラント雜誌は總計四十三種で今日は既に六十に上るであらう、若し稍有力ならぬものを加へれば固より遙に百種を超える。此等の中には萬國(ウニフエル・サラ)エスペラント協會(アソチヲ)の機關誌エスペラント、獨逸に於ける週刊エスペラント、トリウムホンタの如き一般的のもの、國際商業評論、國際科學評論（近刊）の如き專門的のもの又はエスペランタ・フインランドレスペラント（伊太利）の如き自國紹介に力を盡すものあつて其國際相互了解に資するの大なるは到底一二ケ國自然語を用いた刊行物の及得ない所である、然らばエスペラントによつて各國の名著を味ふことが出來樣かとは直に起る質問である、斯語發表以來纔に三十餘年未だ十分世人の要求を充たすことの出來ないのは當然であるが前途頗る有望なるは最近各方面の覺醒が之を語つて餘ある、今日に於ても翻譯創作の重なるものは約五

千と數へられ尙日日に良著の出版がある、殊に文學上の傑作でエスペラントに翻譯されたものは多くは優秀で數に於ても既に少くない、舊約聖書の各部、シエクスピア、ゲーテ、シルレル、ゴーゴル、の諸著はザンホフ自ら優秀な翻譯を發表し、曾てレヴユー・オヴレヴユースの主筆ステツトが「ザメンホフの翻譯出でゝ甫めてシエクスピヤが良く世界に紹介せられた」と賛歎したのを以ても其一斑が察せられる、エスペラントに依つて從來世に知られなかつた諸少民族文學の傑作が世に紹介せらるることは最も喜ぶべき事の一つである。

さて全世界エスペランテイストの數如何との問は固より適確に答へらる筈も無いが例へば一九一四年八月正に開かれんとして大戰の爲め中止となつた第十回世界大會參加人員な約五千と豫期されたが申込濟の者丈でも三千七百三十九名に上つた。之を以て相當斯語を解する者の千分の一と假定しても四百萬一般には五百萬と稱せられたが歐洲戰後急激なる增加によつて、今日は六七百萬に上ると云ふのは寧ろ內輪の見積である、此等は其質に於て各國民の中堅たる進歩的な知識階級であることは特に注意に値する所である。

萬國エスペラント協會、萬國エスペラント大會

エスペラントを實生活に用ひて國際相互了解の實現を目的とする最大機關はスヰス國ジユネヴに本部を有する萬國(ウニフエルサラ)エスペラント協會(アソチー)である。有力なる月刊機關誌エスペラントは斯界の權威たるのみでなく、協會は世界大小の都市約千ケ所に其地方代表委員を置いて會員間に各地事情報告其他の便を計り旅行家の相談に應ずる等現に之によつて會員の受くる便益は非常に大きい。若し此會員が一冊の協會年鑑を携へて世界旅行に上れば之れによつて地方代表委員の住所を知り到處エスペラントを介して親しき友を見出すことも出來る。胸に綠星章を附して歐洲を行けば船上に車上にエスペラントで話し掛くる人に相逢ふも珍しくはあるまい。

エスペラントが如何に活きたる國際語として完全に用ひられ得るかは一九〇五年以來(一九一六―一九、中絶)每年一回開かるゝ萬國(ウニフエルサラ)エスペラント大會(コングレス)が最も良く之を示す、第十三回は昨年八月チエツクスロヴアク國の都プラハに催されたが會する者卅五ケ國二千五百余人、人種宗教言語の障壁を撤して儀式會議演說演劇音樂遠足悉く絕對中止のエスペラントを用ひて和

毎叢々宛として一週間のエスペラント國を實現し、倘同時に、科學者、醫士、商業家、教員、勞働者、少年團、盲人其の他エスペラント團體が大會を併せ行つた、該大會が公式に招待した、國際聯盟事務局國際赤十字、國際勞働事務局の代表者が衷心斯語の普及發達を各事業の爲め慶賀すべきこととして其大會から深き印象を受けたことは大に注意すべき事柄であらう。第十四回大會は本年八月八日―十六日、北歐萬湖の國と云はるる美しいフインランドの首府ヘルシンキで行はれる。

國際商業界に於けるエスペラント

従來世界商業用語として吾も他も許したかの如き英語の本國殊に其中心ロンドン商業會議所が歐洲戰後商業界エスペラント運動の急先鋒たることは英語尊重熱の特に高い我國に對する痛烈な皮肉である、一九一七年春同會議所の發起で六種の言語を用ふる七ケ國が共同して行つた所謂「國際的經驗」は其商業用語として卓絶なるを證し同地知名の實業家より組織される共通商業語委員會が其宣傳を始めたのが戰後斯界に於けるエスペラント運動の先鞭である、次にフランス、ドイツを始め歐洲各國に於ける普及は著しく、遂に一九二一年二月九日パリ商業會議所は滿場一致其管下商業學校教授科目に之を編入すること、を決議し倘國際商業發達の爲め各國商業會議所が此の普及を助成することの希望を發表した。此件に關しては日本の重なる商業會議所も其照會に接した筈であるが如何なる返答が與へられたかは未だ詳にしない、今日に於てはロンドン、パリー、ベルリン、ニユーヨーク、サンフランシスコ、其他歐米大都市商業會議所で、公式にエスペラント文書の發受を發表したものは三十ケ所に上り、且つ、戰後頻りに行はれ始めた各國の國際定期見本市にして斯語を公式用語の一とするものは本年に於て二十ケ所を數へる、之丈を以てしても如何に廣く商業界にエスペラントが實用されて來たかは察せらるることと思ふ。

學界、赤十字事業其他

一九二〇年九月ブルツセルに催された國際協會世界大會に於てイギリス語フランス語の外にエスペラントによる醫學工學の二講座が設けられ如何に斯語が學術上有要に用ひ得らるるかを示したが同大會が學術界に斯語推奬の決議を爲したのは戰後に著しき事柄であつた。一九二一年秋フランス學士院の碩學二十一名署名して斯語を學界に奬め術語辭彙編纂學術書の出版等に就て説き、又大戰の爲め事業を中止した國際エスペラント科學協會が昨年プラハ大會に於て再組織の議熟し既に準備も成つ

て、近く機關誌「科學評論（スチエンツアレヴオ）」の發行が實現しようとして居るし國際醫士協會も亦活動せんとして居る。

一九二一年四月七日ジユネヴに於ける第十回萬國赤十字大會は該「事業の目的に適ふ最有力な手段の一として」滿場一致エスペラントの普及奬勵を各國赤十字團に希望することを決議して居る。其他、建築家、商人、警察官、學校教師、鐵道從業員、郵便從業員、社會主義者、勞働者、宗教家、學生、少年團、盲人等の國際的エスペラント團體があつて各方面に活潑に斯語は普及し實用される。

教育會に於けるエスペラント

一九一六－一七年イギリス國ランカシアイマの「エッコルス」市小學校で行はれた所謂「エッコルスの經驗」はエスペラント教授の教育的價値を證するものとして有名であつて斯界に於けるエスペラント運動に一新時期を創めたものである、爾來各國小學中學商業學校等に或は必修科として或は隨意科として之を課するものが漸く多い、後段に示す國際聯盟第二回總會の決議に基いて教育界が益々斯語に關する注意を深くして來たのは當然である、ジユネヴに於けるジヤン・ジヤック・ルーソー學院は學校に於けるエスペラント教授に關し、其價値、經驗、方法等を討議研究の爲め各國教師の國際會議を發起して本年四月十八日－二十日(三日間)該會議はジユネヴに開かれ廿八ケ國の教育家十六ケ國政府の代表者約百名相會して、之を審議し、三日の短時日に他の國際會議に見ることの出來ぬ多くの成績を收めた。該大會の名に於て發表された「全世界教師團に對する宣言」は其會議の成績を要約したものであつて「エスペラントが十分實用に適するのみならず、幾多教育上の價値を有し、母國語の適切なる使用を助け現代語、古典語の修得に非常に良き基礎となつて時間と精力を節約するが故に、宜しく初等小學生時代より教授すべきものである、加之エスペラントの知識は地理世界歷史、各國の人情風俗に興味を起させ、國際聯盟の思想を兒童に教育する」等の道徳的價値の大なることを說いて居る。此國際大會の研究の結論は今後教育界に更に重要なる新らしい事實を生むの源となるであらうと考へらるる。

國際聯盟とエスペラント

諸種の國際會議に於ける用語問題は各國の利害に關する事甚だ大きい、近時の如く國際關係が益々密接となり多方面に涉つて、外交上の事件が單に外交官と云ふ一種の專門家の特殊事業でなく各國民直接の交渉となり各方面人士直接の折衝を要する

に至つて更に困難を增し來る宮廷用語であり傳統的外交語であつたフランス語も歐洲戰爭に伴ふ社會の變革に伴れて外交上の折衝に當る人の中に必ずしも其堪能者の多きを求める事の出來なくなるのは當然である、ヴエルサイユの講和會議も國際聯盟も尙英佛兩語を以て其公用語として居る、而かも聯盟第一回總會にスペイン語を其公用語とすべしとの提案が行はれたに對しイタリ代表者が亦其國語に就て同樣の提議を試むることあるべきを宣言したるが如きは能く用語問題の益々困難重要となれるを示す、戰前專らフランス語を記された、スペイン、イタリの對外文書が今日は常に其國語で記されるに至れるが如きは少くも他國當局の困難を增した所であらう、此等の事情が齎らせる自然の結果、一九二〇年十月聯盟第一回總會に於て十一ケ國代表の署名により「國際間の直接理解を容易ならしむる目的を以て國際補助語エスペラントを各國公立學校にて教授するの議」が提出せられたが第二委員會に附託されフランス語の優越權を主張するフランス代表アノトー氏の反對と議長ベルギー人イーマン氏の專制に依つて否決の運命に終つた。一九二一年秋第二回總會に當つては南アフリカ代表ロバートセシル卿提案日本代表安達峰一郎博士以下十二ケ國代表署名を以て同樣の議が提出され之に就て總會は九月十六日「本問題は世界大多數の國家に重大なる利害を有するが故に總會の討議に先立ち根本的調査を行ふの必要を認め一九二二年第三回總會は聯盟常設事務局の精細完全なる報告を得て其討議事項中に編入すること」を決議した。國際聯盟に於けるエスペラント採用問題に就ては嚢きにプラハの第十三回大會に聯盟の代表者として出席した、事務次長新渡戶博士の盡力多きに在ることを特記せねばならぬ。

右決議に基いて聯盟常設事務局は既に各國政府に對して各國の學校に於けるエスペラント教授に關する調査報告を求め吾政府も既に其回答を發した筈である。我國各學校に於ては未だ公式に之を教授するもの無きも學生間に於ける斯語の普及は頗著しく高等程度の學校に於てエスペラント會の存在せざるもの殆ど無之の盛況は既に世界の驚異を以て見て居る所である。我當局の回答は必ず此事實に就て盲目でなかつたことを希望する。

エスペラントに關する帝國議會への請願

昨年秋聯盟總會の當時ジユネヴに滯在した木內重四郞、佐竹三吾、宮島幹之助、柳田國男の諸氏約二十名は外國語難に惱む日本に取りてこそエスペラントの普及の肝要なるを痛感し、柳田氏の歸朝に託して遙々「斯語に關する公の調査を爲すの請願」を帝國議會に提出したが形式不備の爲めに受理せられない、此

に於て在京の同志者は急遽相議して二月中旬日本エスペラント學會會頭中村精男博士始め百三十九名署名、「エスペラントを中學校教授課目に編入調査の件」を開會中の帝國議會へ提出した。貴族院は審査に至らずして終つたが衆議院は其請願委員會に於て三月十五日紹介議員丸山嵯峨一郎氏説明の下に採擇に決せられたのであつた。

ザメンホフ博士苦心の結晶であつて、フランス學士院が論理と簡明の傑作と讃嘆した國際、補助語エスペラントは多年因難の進路を經て近時漸く世界の認むる所となり勝利は近し！の悦に堪えぬ。特に外國語難に悩む我日本に對しては斯語の世界的普及は無上の福音と云はねばならぬ。世界に於ける普及の概況を述べんとして甚だ粗雜に終つた本稿も我同胞中に幾人かの斯語修得者を増すの便となり得たならば筆者の非常に幸とする所である。（大正一一、六、三〇）

「舌」の叛逆としてのエスペラント

秋田雨雀

改造社がエスペラントに就いて何か書いて呉れといふことであつた。私はこの短い感想文の見出しを『舌の叛逆』といふ、あのアナーキストの君子人石川三四郎君が、ヨオロツパでエスペラント運動を批評して使つた文字を拜借することにした。

すべての文化に對して人間が主人でなければならない筈であるのに、人間は長い間文化の奴隷であつた。今でも、人間を社會の制度や信仰に對して奴隷の位置にあるものだと信じたり、また信じさせやうとしてゐる人がある。舌は、ちやうどそのやうに、言葉の奴隷にされて來た。言葉が、人類の生活に於いて用途が益々繁くなればなるほど、奴隷としての舌の役目も繁くなつた。舌は一生懸命働いた。日本の大臣の外は、人類は大抵一枚の舌しか持合はせがないので、舌の苦心は並大抵のことではなかつた。然し言葉の方では同情がなかつた。各國語は國民性とかいふ神秘性まで附け加へて、威張つて舌の運動を壓制し

た。舌はとり〲叛逆を企てた。

石川三四郎君は何んな意味で「舌の叛逆」といふ言葉を使つてゐたか、私ははつきり覺えてゐない。然し私はエスペラント運動を舌のストライキ運動であるといふ意味で、この言葉を拜借した。舌の叛逆はとりもなほさず思想が言葉の主人にならなければならないことを示してゐる。言葉が人間を支配せず、人間が言葉を支配しなければならないのだ。一體今日までの各國語、例へば、英、佛、獨、露語は可なり亂雜な不完全な發達を遂げて來たものであるが、その舌の亂雜さも不完全さも、その國民には到底離れられない味の一つとなつてゐる。國語の發達には國民の生活の姿が描かれてゐるとさへ言はれてゐる。然しそれが自國民に對して魅力があればあるほど、他國民には苦勞の種になるのである。私達は五十年間英語を研究してゐる老男爵の事を知つてゐる。やはり五十年間英文法の研究をしてゐる老英學者の姿を想像することが出來る。そして然ういふ學者のことを考へると、何故彼等の舌が叛逆を企てないかを疑ふものである。

それほどまでの苦勞をして、人類は何故に多くの難解な他國語を學習しなければならないのか？ 要するに横に進む生活を必要として來たからである。人類は横に進むためには先づ第一に言語が必要だ。言語は、言ふまでもなく、人類の意思を疏通させるために、人類によつて創造されたものであるが、今日の國語は縱(たて)に進むために創造されたもので、横に進むためには創造されてゐない。もし縱に進む國語を横に進む生活に用ゐやうとすれば、暴力が必要になる。今日の人類の苦しんでゐる言語の問題は、實にこの不合理から生れて來てゐるものである。チョイスリーダーの第一卷目から、英文法の第一頁から、この暴力が行はれてゐる。私達が中學校の課程を終へるまでに、この暴力のため何れだけ惱されたか、また專門の課程で三年、四年のフランス語、ドイツ語の學習にこの暴力のために何れだけ大事な腦味噌を絞り取られたか、考へるだけでも腹が立つ。

戰爭の製造者に直接の口實を與へるものは「言語不通」であるといはれてゐるが、今日各國民が外國語の學習のために費してゐる勞力は、決して戰爭で失はれる人間の勞力より少いとはいへない。

然も外國語の學習によつて、人類の生活が何れだけ幸福にされたか？ これは私達日本人ばかりでなく、人類全體が眞面目に考へて見なければならない問題だと思ふ。internacia lingvo(インテルナツィア リングヴォ) 國際語の必要の問題は、單に實用の問題ではなくして、言葉の持つ性質その物にあると私の主張するのはそのためなのだ。今

日の國語を何れだけ深く學習したとて、人間の意志が心からぴつたり觸れられるものではない。また觸れないやうに今日の國語が創造されて來たのである。手近い例を素いて見やう。私達はどれだけ英語に精通したとて、英語で話して、あの英國人が腹の底から打開けて呉れると思へるだらうか？　況や彼のアメリカ人をやである！　ロシア語が幾ら出來たからとて、あのロシア人の心持が解るといふものではない。ドイツ人然り、フランス人然りである。これは實に今日の國語が今日の人類を支配してゐる、價値轉倒の迷妄の醒めない內は駄目な話である。私達世界の同志が Esperantisimo（エスペラント主義を呼ぶのは、この迷妄見を打破するためなのである。

たゞ昔から中央ヨオロツパでは、多くの學者が、人類の生活を合理的たらしむるために、また人種的偏見と戰爭の原因を除去しやうとして新しい意味を持つた internacia lingvo の發明を唱へて來た。殊に一六六六年の獨乙のライプニツツと近代のレオ・トルストイの二人の如きは國際語の主張者として決して忘れることの出來ない人である。そして一八八七年のザーメンホフ博士のエスペラント語の發明によつて、殆んど二百年來絶えず唱へられてゐた人類の新しい傳統思想が實現されたのである。エスペラントの創始者であるポーランドのザーメンホフの傳記を讀んだ人は、博士が、世間の嘲笑と迫害を耐へ忍んでその言語の發明に熱中したその精神と努力に泣かされた。私は有名なエスペランテストのザーメンホフ傳を讀んだ時の記憶ほど、讀書によつて昂奮させられたことは他に滅多になかつたと信じてゐる。一八八七年に博士がエスペラントを發明して、ドクトル、エスペラントといふ名で『世界語緒言及び全程』を出版した時は、友人達は皆な驚いたばかりではなく、發明した當のザーメンホフ博士自身が自分の事業の完成に驚いたと傳へられてゐる。世界の同志は今でもこの事を自分の事として喜んでゐる。

エスペラントの言語的構成に就いては、他の人が述べるだらうと思ふから、私は精しく言はない。たゞ國際語としてエスペラントは左の三つの點を有してゐるといふことだけを記して置きたい。

1、言語的基礎を有すること。

2、平易であること。

3、藝術的であること。

第一の言語的基礎を有してゐることは、國際語が實在性を持つ最も重大な要素である。國際語の發明者の先づ第一に思ひつくことは、言語の平易でなければならないといふことであるが、

如何に平易であつても、それが言語としての基礎を持たないものは、決して行はれるものではない。例へば、A、AB、AC、AD……といふやうなアルハベットを幾ら上手に配列したところで、それは決して言語となり得るものではない。ザーメンホフ博士が、エスペラントの語彙を、今日の人類の多數の言語の母であるラテン語と、少數のギリシヤ語を土臺にして、それを補ふに現代の各國語の中の最もポピュラーな言語をもつてしたことは、それだけでも博士の發明の確實性を證明してゐると思ふ。

次ぎに何れだけ立派な言語的基礎があつても、また國際性を有してゐても、ラテン語のやうに學習に困難なものであつてはこれまた國際語として實在性を持つことが出來ない。エスペラントは現在の國語を學ぶより約五分の一の勞力によつて、學ぶことが出來るのである。

また、例へ言語的基礎があり、學習に容易であつても、もしその言語が藝術的要素に乏しいならば、これまた言語としての實在性を欠いてゐるものと言はなければならない。エスペラントが、藝術的要素を持つてゐるかゐないかは、澤山のエスペラントの創作の戯曲、小說、詩歌、及び今日まで飜譯された澤山の文學、例へば、新舊バイブル、イソボ、グリム、アンデルゼン、アラビアンナイト、セルバンテス、シェークスピーア、モリエル、ゲーテ、シラー、プーシキン、トルストイ、トゥルゲニーフ、ゴーリキー、チェホフ、ガルシン、ワイルド、アルツイバーセフなどの完全な飜譯が立派に證明してゐる。疑ふものは一日も早くエスペラントを學ぶべしである。

エスペラント語に對して持ちやすい誤解は、エスペラントの學習を、ドイツ語やフランス語の學習と同じ性質のものと思ふことである。エスペラントの學習は、決して學問的誇示や專賣的利己のためではなくて、寧ろ學問の解放を意味し、言語の共產を目標とするものであるから、この種の謬見は一日も早く失くして、全く新しい思想を持つて、この言語を學び、同時に人にもこれをすゝむべきものである。今日の外國語の學習は、それによつて直接の利益を得るためであるが、エスペラントの學習は人類に新らしい種子を蒔くことである。もし今日のエスペラントテストに喜びがあるとすれば、實にこの種子を蒔く百姓の喜びに類したものである。

最後に、エスペラントが、何故最近に世界の人類の前に、その實在性を持つやうになつたかを記して見やう。一體世界大戰前まで自國語の國際性を信じ、且つ主張してゐた國は二つあつた。一つはフランスで、一つは英國であつた。ところがその二

つの國語が、歐洲大戰で全くその鼻柱を折られてしまつた、『國語が國際語たり得ない』といふことは、歐洲の大戰で完全に證明された。尙ほ一つは歐洲に於ける二つの國際運動の勃興である。二つの國際運動の一つは國際聯盟の運動で、他の一つはロシア革命の成功に依つて刺激された勞働世界主義の運動である。然もこの二つの運動は利害相反する性質のものでありながら、殆んど同時にエスペラント採用を重要な議題の一つとしてゐることは面白い現象だと言はなければならない。

嘲笑と迫害の中から生れたエスペラントは今初めて日光を見やうとしてゐる。

私はこの短い文章を終るに當つて、中村黑板二博士、故長谷川二葉亭、小坂狷二、ワシリー・エロシエンコの諸君に敬意を表する。エロシエンコ君は今現に東洋の唯一の自由大學である北京大學で、この『若い言語』のため働いてゐる。エロシエンコ君の來ない前には、エスペラントは學者の理論的玩具に過ぎなかつた。その意味で、日本のエスペラント史からエロシエンコを除くことが出來ない。(La 28an de Junis, 22.)

エスペラントに對する感想

黑板勝美

今を距る凡そ二十年ばかり以前、たしか明治三十六年のころであつたらう、長崎に居た天主教の外國教師某氏がフランスから宣傳を依賴されたといつて、同地の新聞に揭載した一欄の記事を讀んだのが、余のはじめてエスペラントについて知つた時であつた、余は早速その新聞の主筆に一書を送り、その手を經てエスペラント語の書籍を得たが、實にザメンホフ博士のはじめて世に公にしたエクゼルツアーロであつたのである。

余は元來言語學者でもなく、また外國語に對して特別の執心を有つて居たものでもない、しかしエスペラントについてはエクゼルツアーロを練習しつゝ、可なりいろ／＼の點から考へて

見た、そして遂に我が國に於ける外國語難を除くものがエスペラントであるといふ結論に達せざるを得なかつた。またそれが我が國民精神の改造上に至大の關係を有することに想ひ到らざるを得なかつた。殊に專門として余が研究しつゝある日本歴史の教訓からも心窃にその信念を强めて、いつかはこれが宣傳の時機が來るであらうと、樂みながらエクゼルツアーロを獨習して居た。

第一に我が國に於ける外國語教育ほど、今日まで割合に効果の擧らないものはない、中學で五年間の學習、そして外字新聞がすら〱と讀めるではなし、外國人と會話が出來るではなしヤット高等學校に入學し、大學に進んでも、特に語學に堪能な天才の外は外國教師の講述すら理解するものが少いやうな有樣、西洋人が日本にやつて來て、中學の學生が英語を話すと思つて、さて實際何等話が出來ないのに驚く始末、そればかりでなく店頭といふ店頭に掲げた看板は間違ひだらけであり、繪葉書といふ繪葉書に書いてある説明もよい加減のものばかり、それで滿足して居る現狀では、國際關係の公にも私にもます〱密接を加ふる今日我が國民の蒙つて居る不利はどれだけ多いか分明せぬのである。帝國大學の英文一覽でも、大阪毎日の英字新聞でも、その校正は外國人であると聞いて居るほど、專門の英學者すら日本人では安心出來ぬといふ次第、それで國際會議などで威張ることが六ケしいのは當然の事といはねばならぬ。

これには何といつても中立語でなければならぬ、外國人にも日本人にも同様の困難さを持つて居る事業でなければならぬ、之よりエスペラントも歐洲の現在語から出來たものであるから、多少は日本人の方が損であるかも知れぬが、その損はこのエスペラントの學習の容易と教育の樂なのとによつて十分償はるゝのである。しかも歐洲に於ける各國語の不規則なのと、學習に困難なのに比較して天地の差があるに至つてはエスペラントを學ばぬものが到底夢想だも出きぬことである。

要するに現世紀に於ける大發明は飛行器とエスペラントであるが、この二者によつて一方に國境を撤廢するやうな大改革と共に一方に於てその民族そのものを最もよく守るのであるといつてよいのである。

中等教科の學生で、一週四五時間づゝ數へたら、一年か一年半でエスペラントは話も出來れば文章も書けるやうになるそしてこのエスペラントを一ト通り學習してからでも英語なり獨佛語なりに移つても今日中學卒業の程度ぐらゐに成功し得ることはいふまでもないことである。歐洲や米國で實驗された報告によつても之を證明し得るが、我が國のエスペランティストでこ

の經驗を有つて居る人も二三知つて居る。

この外國語雜を除くと同時に、余が殊にエスペラントを推賞するのは、エスペラントが世界語でなくて國際語として創造されたとで、そこらにザメンホーフ博士の卓拔ある意見がある。委しくいへば國際中立語で、異つた言葉を有する二外國人の間に、どちらにも公平な宣傳として、用ゐらるべきものとして發明され、同時にそれは自國語尊重を意味することである、自分の國語をどうでもよいと思ふやうな國民ではその發展は到底期せられぬ、何だか頑固のやうであるが、我が國民が昔から言靈のさきはふ國と稱して居るところに國民情神が窺はれる。

こんなことを思ひながら獨習して居たのが、それも同志がないので、いつか半ば忘れたやうで二三年ばかり經過して居ると明治三十九年に入つてガントレツト氏が講習をはじむる、外國語學校の英語專門の淺田教授が卒業式にエスペラントで外人を驚かすやうなことゝなつて來たのと、西比利亞に滯在して居られた長谷川二葉亭氏が世界語といふ本を出して盛に賣れ行くといふ有樣、當時讀賣新聞社にあつた薄井秀一氏が是非雜誌を出さう、協會を作らうと斡旋されて、東京パツクで賣り出した有樂社同人諸氏が應援されるし、それで生れたのが日本エスペラント協會であつた。

それからこゝに凡そ十七年ばかりとなつた、が其の間この宣傳に最も力められた人々は、前に擧げた淺田教授有樂社の安孫子氏それから永い間日本エスペラント雜誌の編輯で苦心され、且つエスペラント全程の著者である千布利雄氏、それに中途から馳せ參じて今も我國エスペラント界の中堅たる小阪工學士、當時まだ一學生に過ぎなかつた同氏の熱心には多大の感動を受けたのである、それから初め日本エスペラント協會の會頭であつた故伯爵林董氏、ついで會頭となられた理學博士中村氣象臺長をはじめ、陰に陽にいろ〱篤志者の同情によつて兎に角歐洲大戰爭までを經過して來たのであつた。

ところがこの大戰爭が止んでエスペラントの形勢は遽に國際聯盟といふヴエルサイユ會議の結果によつて一大刺激を受けて非常な勢を以て進むことゝなつた。最もこれには少し時代精神やこの大戰爭によつて得たる教訓をこゝに述べねばならぬ。いはどこゝに改造された世界にはその國際關係の言葉に於ても改造されねばならぬのである。余は多少繰返してこれについて述べて見たいと思ふ。

我々はこの度の大戰によつて、新たに改造されたる世界を見るに就いて歐羅巴の大戰爭が如何なる性質によつて起つたかを考へなければならぬ。歐羅巴大戰爭の起るに就いては既に其改

造の世界を造り出すべき大きな運動、大きな思想が起つてゐるのであり、この新しき世界は、大戰爭によつて卒然として生れたのではない。大戰爭の以前に於て、世界の大勢からいへば、歐羅巴全能の世界にあつて、東洋の國をなせる我が日本が新たに頭を持ち上げ、日清戰爭に引續き團匪事件、日露戰爭によつて、歐羅巴全能の思想が破壞されて來た。彼等が疑問とした支那もその無力を暴露した。また同じく疑問とした露西亞も半ばその實力を知られて、日露戰役後露西亞は歐洲の外交界で最早その勢力を回復することが出來なくなつた。少くとも獨逸のカイザアの如き、露西亞の陸軍、露西亞の財力が恐るゝものでないといふ考へになつて、露西亞に對して思ひ切つて軍事的準備をした。いはゞ露西亞は日本といふ東洋の一國から慘々な目に遭はされて鼎の輕重を問はるゝやうになつたのである。そこで歐洲の國を成してゐる大きな露西亞が、渺たる一小國の日本しかも東洋人から敗けたといふ一大史實は、歐羅巴各國が露西亞の鼎の輕重を問はんとする間に、歐羅巴以外の民族をして覺醒せしめたことは、更に大きな歷史上の出來事であらねばならぬ。フインランドに革命の起つたこともその一である。埃及や印度に反英思想が加はつて獨立運動の澎湃として、起つたのもまたその結果である。

これと同時に世界の思潮は從來の物質文明が既に行き詰つたといふに一致して、二十世紀の新文化運動が起つて來た。そして、こゝに新しい理想的の世界を造らなければならぬと云ふ理想に進みつゝあつたのである。のみならず物質界からいつても國々が割據するといふやうな情勢を打ち破るべき新しい發明が出來て來た。第一に無線電信はいよ〳〵進步した。第二に飛行機や飛行船が完成した。從來各國は山とか海とかによつて隔てられて居て、多大の困難を忍びに忍んで居たのであつたが、今や無線電信や飛行機などによつて、その障壁を滅茶苦茶にしようとする時代が到來した。また潛水艇の發明で、海上の境で、防備が困難となつて來た。二十世紀に入つて以來、これらの發明は、各國に對する一脅威として見らるゝものである。しかも、この度の大戰爭で、それらが盛に利用されて、一大發展をした。

殊に戰爭の慘虐を經過した世界の人類は、その戰爭の高價なることを痛切に感受したのみならず、國際的觀念や國家的觀念に一大變化を生じ、こゝに改造の世界とはなつたのである。

この道程の間に、我々人類が數千年來非常に不便を感じてをる國際的言語の問題が、また二十世紀の大發明としてこゝに現はれたことはこゝに言ふに及ばぬ。實際のところ世界の各國民

が各特有の言葉を持ち、その中、勢力ある國、或は佛蘭西とか英吉利とかゞ、その國の言語を他國の上に及ぼすことが出來なかつたのではない。それも一時の夢と成つた經驗を嘗むるやうになれば、必ずしも有り難いといふことではない。殊に勢力なき國民が他の國語を國際的に用ひるといふのは、理論的に不公平で實際的に大なる苦痛であつた。どうしてゝ之に對する革命が起らなければならぬ思潮が張つて來たところに、しば／＼失敗した世界語に於ける新發明がザメンホフ博士によつて完成せられたのであつた。恰度飛行機や無線電信が物質的に國境を撤廢したと同樣に、エスペラントは各國民に言語的障壁を破るものとして現はれた。そして國際補助語として、自國語を尊重するといふところに民族主義が宣明せられた。從つて、あの大戰爭で歐羅巴の軍國主義、帝國主義が破れて、卒かに民族主義が出たと思ふのは間違である。あの大戰爭は、これらの思想を現實にするために、從來の歐羅巴全能思想に對する世界的外科療法であつたといつてもよいのである。

それで戰爭の最初の間は、形の上では聯合軍と同盟軍との戰であつたが、實はパンスラーヴとパンゲルマンといふ大民族の勝敗を決せんが爲めに起つたことで、それが後には、パンラチン・パンアングロサクソンと、パンゲルマンとの爭ひになつたので、パンスラーヴとパンゲルマンとが打ち破られ、殘るところのパンラチンもパンアングロサクソンも、舊來の形勢を一變して、民族的自覺の上に新しい世界が造り上げられんとするやうに至つたことは、二千年若しくは四千年以前の民族の歌、民族の思想そのものが、芬蘭人に復活して、露西亞の國を離れ、露西亞人を離れて、新しく民族の國を造ることになつたといふことである。必ずしも芬蘭人のみではない。波蘭でもチエックでも皆民族主義の上に大戰爭の結末をつけることになつたのである。今までパンゲルマンやパンスラーヴといふ思想や運動に壓へつけられたものが、波蘭なり芬蘭なり、すべて民族的の思想の上に新しい改造思想が現はれてをる。又歐羅巴以外に於ても既に日本によつて教へられた民族的自覺は、ます／＼盛になつて來た。埃及は最近に於て獨立するやうになつた。既に民族的の思想の上に新らしき世界が出來上り、また出來上らうとしつゝありとすれば、こゝに民族といふものが如何なる要素、如何なる力の上に結びつけられて居るかを考へなければならぬ。

先づ一の民族といふのは祖先以來血液的の關係を有することによつて成立つものである、同じ血液が濃厚であればあるほどその民族の强みがある。他民族の血液があつてもこれを同化してしまつたといふところに民族思想が基礎を有する。同時に又

我々は我々の祖先以來有つて來た信仰が民族的自覺を强める所以である。若し持ち續けて來なかつたとしたら、これを復活するところに民族的思想が復活する。併しながら、この血液と信仰といふものだけで、決して民族が强く結びつけらるゝものではない。今一つ、こゝに言語といふものがある。その民族の特有なる國語がなければならぬ。同じ言語を持つて居つても、同じ言語を話し合ひ、同じ文字に書き表はして、はじめて、その間に國民的了解が徹底するのである。余はこの三つの條件に最もよく合つて居る民族は我が日本民族であると信じて居る。故に民族主義といひ、民族思想といふことが、改造された世界に於て、最も中心となつてゐるとすれば、日本民族は理想的に活動せねばならぬのである。卽ち我々は今日日本民族といふ立場から、如何に我が民族を盛にすべきかといふことを考へれば、國語の問題は今日の如く輕々に看過すべきものでないといふことを痛切に感ずる。しかしこの民族主義と共に國際聯盟があるとなればそれは血液でもなく信仰でもなく、たゞ言語、國際的言語によつてのみ結びつけらるゝものである。

我々日本國民は現在の問題にのみ沒頭せずして、將來に民族として立つべき要素を今日から出來るだけ準備して行かねばならぬ。例へば日本の標準語に就いても、幾度問題になりながらしかも今日どれだけの人が深く考へて居るであらうか、毎日の新聞の上にも、極めてむづかしい新しい言葉が、極めて無雜作に造り出されて居るではないか。現在の日本國民ほど言葉の上で不幸な國民はない。余は日本民族の言葉の如何に尊重しなければならぬかといふことを自覺することが今日に於て最も緊要なることであると深く信じて居る。併しながら、日本民族なる者は單獨の世界に在るものではない。日本は鎖國的の國たるものではない。日本國のみならず、すべての民族は段々進步して來た飛行機によつて、殆どその國境を破られつゝあるのである。無線電信や無線電話はいよ〳〵盛に行はれて居る今日各國の民族がその自國の言葉を尊重すると同時に、この世界的交際をする上に最もハツキリと發音さるゝエスペラントの外、他に用ゐるべき國際語はないのであるまいか。

各民族が從來外國語によつて苦しめられた負擔を輕くするために出來た、そして各民族に、最も公平に、最も平等に、國際的に使用せらるべき新しい、しかも各國語の長所を取つた理想的の國際語で、どんな民族でも極めて自由に話し得べき發音と文法とを有し、且つ語彙を包含して居るエスペラントの使命はどこにあるであらうか。あの大戰爭の後民族自覺と共に國際聯盟を造り出すことになつた。その眞の國際聯盟はたゞエスペラ

ントにのみよつて現實にせらるゝといへぬであらうか。若し改造されたる世界に於て、エスペラントの運動を怠るならば、世界の要求たる國際聯盟は空氣に終ることになるかも知れぬ。思想の上からいつても、精神的國際聯盟は血液や信仰のみによつて出來ぬとすれば、國際語による外はないのである。そして、はじめて民族としての活動と共に世界の人類としての活動が出來るのである。

我々日本國民として考へて見ても、其の民族的たると同時に他方に於て世界的でなければ改造されたる世界に活動が出來ないばかりでなく、この改造の世界を造り出すに與つて最も力があり、歐羅巴全能思想を打破するに最初の努力をなした日本人として、その名譽を全うする所以ではない。余はこの意味に於てエスペラントの宣傳が最も今日に於て必要であり、また最もよい時機であると信じ、こゝにエスペラントが世界的一大勢力であつて且つ日本國民としても、その研究が改造された世界の一員として急務なる所以を述べたいのである。

エスペラントの我が國に輸入せられた以來の過去と現在とによつて考ふれば我等は如何にこの運動を進むべきか、余は先づエスペラントそのものがよく國民の諒解を得るの必要があらうと思ふのである、例へば社會主義者がエスペラントを話すものがあるので、エスペラントを話すものは社會主義者であると誤解する官憲がないでもない、といふ噂を聞くが如きは寧ろ我が國の耻辱であるまいか。この意味に於て『改造』がこゝにエスペラント號を公にせらるゝを非常に喜ぶものである。

エスペラント語の旅

ラムステツド

私が初めてエスペラント語を實用に供したのは二十八年前からのことである。當時キエフ滯在のジノヴエフ氏（第三インタナショナル執行委員長）とポルタワ居住のザクレヴスキー博士の二人のエスペランティスが私に書を寄せて、暫くの間芬蘭を出

來るだけ費用を切り詰めて遊歴したいと云つて來た。その時私は未だ年少の學生であつたが、一輛の自轉車を持つて居た。そこで私は芬蘭の首府ヘルシンガフォルスに來て、町を見物して打ち連れて自轉車旅行をやらうぢやないかと相談をもちかけた。——自轉車は大變安く賃借り出來たから、——露西亞からのこの二人のエスペランティストの到着した時は教員である、一エストニア人を加へて、三人連れであつた。我等四人は一週間以上芬蘭の西南地方を遊歴し、最も好季節なる北歐の夏を思ふまゝに享樂した。異國人にも我が芬蘭に興を唆るものあるを知る絶好の機會あつた。農民の生活往來住家等を、私の目に映じたまゝを云ふと、各國によつて夫々趣を異にして居た。私は芬蘭の事物を、私の伴侶に教示したが、同時に、私は此等の旅客の來た國に於ける思想、文化、風習等を學んだのである。我等は、エスペラント語のみで話した經驗上エスペラント語はある特殊國に屬せぬ萬國共通の國語であるから一番よい國語たることを了解した。私はエスペラント語の未熟であることを少しも恥づかしいとも思はなかつた。若し我等が露西亞語か獨逸語か又は他の國語を語らねばならなかつたなら、お互の氣持や感情はすつかり破れて了つたことであらう。エスペラント語で會話した故に、我々はその出來ばえに大した軒輊なく、眺望を飽かす享樂しただけではなく、又、民族的精神、及び文化の差違を超越したある尊きものがあることを實驗し得た。その時以來、エスペラント語の價値について確固たる確信を持つやうになり、否や民族で差違を生ずる國語は國際的文物研究のためには消え失せる運命にあると信ずるに至つた。

年毎に多くの旅人が數千の湖水と小嶋の點在する芬蘭を訪れるが、獨逸人にしろ、英人にしろ、瑞典人にしろ、又他の何處の國人にしろ、自國語を操る人を探し、求めるとも、彼は見知らぬ異國では自分はエトランゼであると云ふ感を起さしめることは保險付である。若し彼が案内者を求め得るためには先だつものは金である。しかもこの案内者は最も好都合に得られた時ですら、旅客との間に可成りの隔りがあるとの心理的感情を捨て去る譯にゆかない。そして浮調子でさも與なささうに答へ勝となる。又案内者にとつて彼がぺちやくちや饒舌つてゐる間に多くの過失、文法上の過失や誤解を犯し、自分で自身を燻つたい氣持になるのである。——この過失が後になつて、自國に關する何かの書籍に現はれて、外人の笑草の種となるに過ぎないだらう。各國民にとつて、等しく外來的であり、同じく容易な一國語の使用は主人側にも來賓側にもハンヂキアツプを與へない。そしてこの感じは、すぐ心底からの友情を促進せしめる手

要となるのだ。

エスペラント語は容易に理解し得るか？一千九百十九年十二月の日本への途上、私は巴里發マルセーユ行の急行列車で旅行した時に一人の伊太利人の伴侶となつたことがある。彼は伊太利語で話しかけたが、私はエスペラント語で答へた。すると彼は私の云つたことが了解し得たのに吃驚し、私が語つた伊太利語は何處の方言かと訊ねた。私は彼には初めて出會したエスペランテイストであつたのであつた。彼は前にはエスペラント語について何等聞く所なかつたのであつたらう。それでも我等二人は長時間口角泡を飛し、種々の問題を次から次へと持ち出し時の移るのを忘れて了つた。彼は自分もエスペラント語を學びたいと豫期せぬ知已と經驗を得たのを、いとも滿足らしい風に見えた。

何れの國に於ても數百數千と數へる若き青年婦女等は海外に旅立ち、遙か遠き異國の珍らしい事物に接觸せんと夢想してゐるが、彼等の大部分は已が生地を去る機會を持たなかつた。なぜなら旅行は旅費が嵩まり、倘氣掛りの一事がある。そはランゲーヂである。何處かの國に自分が行きたいとすると、その國の國語を習得するに多年の準備をせねばならない。そして愈々海外へ出る機會を得ると、その國の國語は、最近數年習得した國語と違つて居るに相違ない。併しながら現今ではエスペラント語を知つて居れば、諸君は各國に旅行出來るのである。エスペランテイスト、エスペラント倶樂部、エスペラント協會のない國は殆んどないと云つてもよい。此等のエスペランテイストは萬國到る所に散在して居る。日本、芬蘭、土耳古、南米の諸國にも見出し得る彼等は諸君と逢ふことを唯一の幸福として居るのである。と云ふのは、彼等は諸君の國及びその民衆に逢はんと夢想して居たからだ。彼等は旅人が金を出して雇ふ案内者以上に役立つものである。エスペランテイストにとつては、海外のエスペランテイストは自國で、又自分の家庭での團欒を分ち得る個人的友人なのだ、そは書籍を通してのみではなく、個人的交際で利得の觀念を超越して、更に世界そのもゝ實情を知悉し得るための純人間的利益と云ふ根本の接觸を意味するものではなからうか？

私は私の母國芬蘭の當局者がエスペラント語の普及に勞を惜しまぬことを陳述し得るは欣快に堪えない。國有鐵道は、芬蘭の停車場の總ての待合室に無料で廣告するの權利をエスペラント語同盟に附與した。この廣告ビラはヘルシングフォルス(芬蘭の首府)のエスペラント事務所の所在地、地方委員の名宛、及び最近のエスペラント語案内者の住所が記載されてある。この

やうなエスペラント語のビラは、芬蘭の郵便局でも貼り附けられて居り芬蘭のエスペランティストは芬蘭に到着する各エスペラント客に無料でその用務を申し込み、彼等は一人殘らず鄭重な歡迎を受ける。尚此の外に本年八月八日から十六日までヘルシングフオルスで開催さるゝエスペラント語會議に政府から莫大な援助を受け芬蘭共和國大統領が會議の名譽總裁となり內閣は五萬馬克、ヘルシングフオルス市が一萬馬克そして鐵道は乘車賃半減の特典を與へた。

私が日本に於てエスペラント語のお蔭で得た便宜を話すことを忘れたら、大なる怠慢の譏を免れない。一昨年日本に到着するや否や、私は東京否東京のみならず、日本の各地方のエスペラトンテイストから如何にも懇ろな面接を受けることを得た。近頃になつて、私は大阪、京都、金澤、仙臺、その他諸所を巡遊したが、そこでもエスペラント語なる萬國共通の國語で密接に結びつけられて、友情の罩つた感情と海外のエスペラントを援助案內せんとする熱心に接した。

海外へ旅立つ總ての旅客は此の問題、エスペラント語の價値について思をいたさなければならない。若しエスペラント語を習得するに比較的少しく困難を感じても、此の人造語を創造した思想の重大さを承認し、又國際間の接近の最良の方法たることを認めるべきであらう。そして又何處へ旅立つても、エスペラント語の知られて居る總ゆる場所で歡待され、心からの歡迎に接し得るであらう。自國の國風を少しも傷つけずして、又強國の國語を用つて、その國語の未熟のため物笑となる憂なくして、異國に行き、友の間に侍して、自國の生きた代表者として立ち振舞ひ得るのである。そして共通の利益は萬國に相通ずるものである。即ちそは互に理解し互に切磋琢磨せんとする希願である。

私は互に接觸せんとするこの萬國共通の眞の國際的希望への時が想像以上接近して居り、且つエスペラント語はこの目的のための言語であることを斷言して疑はぬのである。

三板
新垣
新鷹

新カント派の歴史哲學

賀川豊彦著

氏の體驗から泌み出た
鋭き人生観であります

バートランド・ラッセル原著　宮本鐵之助譯

數理哲學概論

本書は著者が獄中に於て草した勁烈な思索と論究の所産である。努めて數學專門語を避け明快通俗に記述し、何人にも理解し易からしめたものである。文化科學と自然科學の理念と其成果を完全に認識せんとせば、先づ數理哲學の門を叩くの外はない。然るに日本では未だ此種の著書の刊行されたもの獨り本書あるのみである。

＝内容＝

（第一章）自然數の系列（第二章）數の定義（第三章）有限性及び數理的歸納（第四章）順序の定義（第五章）關係の種類（第六章）關係の相似性（第七章）全理數、實數、及び複素數（第八章）無限基數（第九章）無限系列及び序數（第十章）極限及び連續性（第十一章）函數の極限及び連續性（第十二章）選擇及び乘法の公理（第十三章）無限性の公理及び論理的諸定型

定價貳圓八拾錢

◇四六版布製函入◇
◇書留送料十九錢◇

美に關する一考察

石原純

私は最近の本誌に於て引き續いて岸田劉生氏の「寫實の缺除の考察」及び「如實感、」有島武郎氏の「描かれた花」を讀み得たことをうれしく思ひました。そしてそれらのなかの言葉が多くの深い體驗的思索を含んでゐるものであることに多くの尊敬をも感じます。けれども自然と美との本質に關する問題は私達に取りて容易に解釋し了ることをゆるされない深い問題であると共に、又一方に藝術創作若くは批判に際して或る程度まではその眞髓に接觸してゐなければならないものでありますから、之に對する考察を幾分かでも進めることは極めて大切であると思はれます。この意味で私は自分の恐らくは未熟に屬する言葉をも茲に挾んでその考究に資したいと思ひます。

岸田氏の文のなかには「美」に對していろ〳〵な言葉があらはれてゐます「寫實的要素の美、」「如實の美」と云ふやうな一方に、「寫實の缺除の美、」「超現實」の美と云ふことが高調されてゐます。「要するに寫實は道であつて目的ではない。目的は寫實以上の處にある。言ふ迄もなく深き美にある。」「その究極に於て寫實が最も深い美をもたらす邪魔になる。」「再現と云ふことはそれだけでは藝術的な事ではない。しかしもしそれが深い美によつて生かされ」云々。之等の「深い美」と云ふものが「如實感と云ふ美」の外に存在すべきことが假定されてゐるのが判りませう。

美に關する斯樣な二元的の見方は私達の心のなかにいつも存在して、いろ〳〵な疑惑を捲き起す素因となり、又ディレンマに苦しまされるやうになるのだと思ひます。有島氏の文中に引かれてゐる通りに、「巧妙な花の畫を見せられたものは大抵自然の花の如く美しいと嘆美する。同時に新鮮な自然の花を見せられたものは、思はず畫の花の如く美しいと

嘆美する」と云ふことは、岸田氏の說明されたよりも遙かに輕い云ひ方で表はされたものではありますが、私達が通俗的によく出逢ふ處の懐疑に相違ないので、そしてやはり本質的にこの問題に觸れてゐる言葉であります。

この二元的な美は果して究極に於て矛盾を含むものであるか、又は互に相調和し得るものであるかと云ふことは、問題の最も大切な中核であると思ひます。岸田氏の文はこの二元的美の存在を說明し、その一方をより深い藝術的の美であると解せられるだけで、それらの相互の關係には多く立ち入つてゐません。有島氏は兩者の强要的調和を說いて「一つの强い繩となる爲めには少くとも二つの小索の合力が必要だ。自然と接觸する處には人間特有の誇大性を。人間特有の誇大性と接觸する處には冷嚴無比な科學的精神を。これが人間の保持すべき唯一無二の道德である、」とせられてゐます。私達は更に何が故に然うしなければならないかを自省せずにはゐられません。そして之が適切なる解答を待つて始めて安易の境地に立つて自からの道を進むことが出來るのです。

「藝術家は創造すると云はれてゐる。全くの創造は藝術家にも許されてはゐない。藝術家は自然の或る斷面を誇大するに過ぎない。僞りの藝術家は意識的にそれをする。本當の藝術家は知らずしてそれを爲し遂げる。而してそれを彼れに個有な力と樣式とをもつて爲し遂げる。彼れは他の人が見なかつたやうに自然を見る。而してその見方を以て他の人々を義眼する。かくて自然は曾てありしところの相を變へる。創造とはそれをいふのだ。自然が創造されたのではない。謂はゞ自然の幻覺が創造されたのだ。」

これは有島氏の言葉です。私は之に對比して岸田氏の次の言葉を興味おほく感じます。「畫事は要するに人間の手でやる仕事である。神來ではない。單純なる理想的な考へ通りに行かない。寫實をどこ迄もやり拔いてしかも氣韻べうばうたる神品が生れゝば又面白いかもしれない。しかし限りある物質によりて造形は營まれるのだ。氣韻を出すためには氣韻を出す樣な法をとらなければならない。」「事實、寫實の道が只それに終止するといふ事は最も深いものに至る道ではない。」

そして寫實の缺除を意識的なものと無意識的なものとに分け、更に後者を必然的と偶然的とに區別して、之を次のやうに說明してあります。

「意識的な寫實の缺除とは寫實を拒否する場合を意識して拒否する場合で、或る深い美を描くために畫家はこれを必要として行つていゝのである。」「無意識的な寫實の缺除とは作者が知らず匠まずしておのづと加はつた寫實の缺除の味であつて、云々」「偶然の寫實の缺除はその美的價値は只單に面白いといふ程度のものに止まり、それ以上に藝術的な深い味などはない。つまり其處には個性の深い觀照が示されないから、從つてその感銘は美に迄到らないものである。これに反して必然的な寫實の缺除と名づけた方は、その作家の氣稟なり主觀なりの深さからおのづと滲み出した超現實の感銘であるから、其處には深い美の餘韻が生じ深い藝術的感銘に人を誘ふ力がある。」

私は兩氏の以上の言葉が表面的にあらはれてゐる程、然う異なつた意味に解さるべきものではないと思ひます。「必然に出る無意識の超現實感と、意識して生み出した超現實觀とはどつちが尊まれる可きか。深さから云と意識しないで出た方の感じが一段と含蓄と餘韻に富んでゐて尊い樣ではあるが、又一面、かう云ふ深さ即ちその作家がさう云ふ超現實を意識して其處に心がかたむくが故に滲み出て來る味なのだから、そしてさういふ人の作には必ずこの無意識の味が深い味で加はるものなのだから、要するにこの二つは相離して價値を問ふ必要もないことであらう。しかし作を見た上で最も深い餘韻を感じさすものは何と云つてもその作の無意識の一境であると云ひ得る。」岸田氏は斯うも述べてゐます。

扨て私の先づ玆に考察したいのは岸田氏の謂はゆる「寫實缺除の美」若くは「超現實感」と、有島氏の說く「自然の或る斷面の誇大」による美意識の本質に就てゞあります。

私の本來信ずる處によれば、自然ほど靈妙完美なものはありません。若し私たちが創造者としての神を想像するならば、神の唯一のあらはれはこの自然であります。そこには一絲亂れることのない法則が嚴然として行はれて、あらゆる美を現前してゐます。私たちはこの自然そのものに美を認めないで、果してどこにそれを求めることが出來るでせう。謂はゆる超自然、超現實は人間の想像的所產であつて、必ずしも神の創造世界ではありません。自然そのものゝ創造者

としての神を認めると云ふことゝ、超自然を神の世界とすることゝは必ずしも一致するものではないことを悟らなくてはなりますまい。人間の恣まゝに想像せる謂はゆる超自然が、實は一つの反自然に陷することなしに、本當に自然以上のものであると云ふことは、何に依りて肯定し、何に基づいて證明することが出來るでせうか。萬有の創造者としての神の創つた自然よりも尙ほ價値おほい本當の超自然を、私たち人間が創造しやうと企てることは、主觀的に云へば神への冒瀆であり、客觀的に云へば在り得べからざる不可能事であり矛盾であります。それですから私の考へでは、私たちの美意識の對象たり得るものは斯やうな意味での超自然であつてはならないと思ひます。

藝術的創作に關する一大誤解が古くからこの超自然なるものに巢くつてゐます。さうして私たちは自然以上のものを創造する天才藝術家たらうとする人々の氣焔に驚かされます。彼等はまさかに神のよしとして創つた自然や現實以上のものをつくる能力を自覺するのではありますまい、彼等の見て平凡とする藝術作家たちの水平を超えて、一歩を神の藝術に近づかしめやうとするに過ぎないのではありますまいか。若し然うならば彼等は自からの言葉を愼しんで神への冒瀆を敢てしないがいゝと思ひます。なぜなれば彼等がどんなに苦しまうとも自然以上のものは望み得られませんから、然うして彼等の不遜な願望はやゝもすれば、それを一つの反自然へ墮せしめずには置かないのですから。

かやうにして私は先づ自然があらゆる美の本源であることを確實に肯定しておきたいと思ひます。之に反する一語たりとも、云はれるなら、それは既に私たちの論據を破るものでなければなりません。美意識の對象はすべて自然のなかに包藏せられてゐます。自然に反する一切は醜であります。私たちの美醜の判斷は之を措いてどこに確固たる規矩を求めることが出來るでせう。もとより美醜の直接の感情は一つの心理的狀態には違ひありませんけれども、その美意識の具體的內容を自然の形容に一致せしめ得るときに、私たちの心理は恒常正當であると解しなければなるまいと思ひます。美が自然以外にあると速斷する人たちは能く心をしづめて之等の事情を省慮してごらんなさい。

自然が美の本源であるならば、私たちの藝術的美感は之を意識し且つ表現するより外には存在しない筈です。人間に

ゆるされた自由意志は唯之を見出し且つ適當に表現するためにはたらかされなければなりません。自分の我意の儘に自然を歪めて感受することは決して美の本質に合致する所以のものではありません。

然らば自然のなかに如何にしてかやうな美を意識し且つ之を表現し得るでありませうか。問題の要點はこゝに歸着して來ます。

私の信ずる處によれば、自然に於て私たちが廣き意味に於て美と感ずる樣式は概括して之を二樣に分けることが出來ます。

自然のありの儘の姿は極めて複雜多樣であります。それは私たちが通常直感し得るだけの數ではあらはしきれないたくさんの要素の錯綜重複から成つてゐるからです。而もそれは不規則な亂雜ではなくて、一定の調和の法則によりて綜合せられてゐます。私たちはこの綜合そのものに美を感ずることが出來ます。謂はゆる「寫實」の美はこの綜合その儘の美でなければなりません。岸田氏の云はれる「如實感といふ美の一境」「再現の藝術境」は之れであつて、寫實主義の人たちの目的とする處は恐らくは之が再現にあつたのでありませう。

實際この綜合的自然はその多樣さに於て、私たちの限りある想像によりては思ひ及ばない變化を含んでゐます。從つて私たちが常に精細にその奧深くを見つめるときは、私たちの嘗て經驗しない新らしい美の樣態を到る處に見出すことが出來ます。私たちの有限な機能は一たび得た知識を概念的固定へ導くことを常としてゐる間に、一方に藝術は概念化せられない個性的美意識を價値的に要求してゐるのです。しかも斯やうなものは到底私たちの概念的知識からは無限に生み出される筈のものではないので、只自然に對する敬虔謙虚な心をもつて之を精細に觀察することによりてのみ得られるのでありませう。たくさん新らしい美がそこに私たちを待つてゐるのです。

私は併しこゝに綜合的自然そのものに私たちの藝術的美意識の對象本源が存在することを説明してゐるのです。私は之からして直ぐに藝術の寫實主義へ趣かうとするのではありません。即ち自然そのものが美であるが故に、藝術は如實

に自然を寫せばいゝと結論することは出來ません。なぜなれば其處には藝術に取りて極めて大切な表現の問題が挾まつてゐるからです。之れを至當に解釋しなければ藝術の本質を究めて之を正しい道に導くことは出來ないと思ひます。

大概の人は私の今云つたことを閑却して自からを迷霧のなかに殘してゐます。私は遺憾ながら最初に述べた有島氏及び岸田氏の論のなかにも、これの妥當なる論理的解釋を少しも見出すことは出來ませんでした。有島氏は「自然をそのまゝに客觀するものは科學者である」とした後で、

「彼は常に藝術の誇大から自然を解放する。その所謂美しくない姿に於ての自然を露出せしめる。」「人間を裏切つて神に降伏するものは彼れだ。」「然らば科學者は畢竟人間的進軍の中に紛れこんだ敵の間諜に過ぎないのか。さうだ。而してさうではない。」

と云つてゐます。「藝術の誇大」とか「美しくない姿に於ての自然」とか云ふ見方は、私の前に述べた處と異つてゐるやうですけれど、私は之等の言葉のなかに藏された有島氏の眞意を別に諒解することは出來ます。併し今それと現在の私の議論との關係に言ひ及ぼすつもりはありません。只上に引いた有島氏の言葉の最後にある「さうだ。而してさうではない。」のディレンマを論理的に如何に解釋し得るかを問題にしたいと思ふのです。

岸田氏の論に到りては、私の論旨に甚だ近づいてゐます。「藝術として立派な道であるところの寫實、即ち現實の形に即して美を感じ、その美を追求するためにはその美の即したる形を追求し、形を追求すれば即ち美を追求する事となる底の藝術的な「境」を寫實又は如實となし、「無論、かう云ふ寫實の一域はそれだけで立派に藝術的な事なのであつて、或る寫實主義の人には、これが藝術上の最後のものである樣にも思はれてゐる」と説明されてゐます。併しその後で直ぐに言葉を續けて

「しかし寫實の道は本當はそれ丈で盡きるものではない。」「寫實の道は美術に於て樞要な大道であろけれど、又結局それは要するに最も深いものへの道であつて、根本のものはその道を通つた後に控へてゐる。」

となし、更に進んで

「作に美術上の最も深い域を出すためには、或る處で寫實を缺除させ、その缺を寫實以上の深い美によつて埋めればいいのである。こゝに美術上の最も深い超現實觀が生れる云々」と說いてゐます。この寫實の道とその缺除の域とはどうして相容れることが出來るでせうか。岸田氏は只經驗的事實として之を認めるだけで、私たちの思惟のなかに之を論理的に安住せしめやうとは試みてゐません。

私はこゝで藝術表現の問題に立ち入らなくてはならないことを感じます。

自然は私たちの美と感ずるすべてのものゝ本源であることを私はどこまでも肯定したいと思ひます。自然は一絲亂れざる不易の自然法則に從つて成立してゐると云ふ點に於てそれは神の科學的創造物であると共に、他面、そこに完全な調和が存在し、無限な綜合美を示すといふ點に於てそれは亦神の藝術的創造物と見られます。神に於ては科學と藝術とは唯一無二の形に融合してゐるのです。なぜなればその藝術表現の手段として、自然の事物と、絕對の法則との創造が行なはれ得るからです。そして藝術的創造は同時に科學的創造であり得るからです。

ところが私たち人間に於てはそれらのものゝ意味は遠く之とはかけ離れてゐます。私たちには科學的創造を行なふことはゆるされて居ません。私たちの科學とは既に與へられたものに存在する法則的調和を見出すことに過ぎないのです。之と同時に私たちには神と同じ意味に於ての藝術的創造もあり得ません。私たち人間に與へられた自由意志が偶々自然と異つたものを創造し得たとするならば、それは取りもなほさず反自然的な非藝術的なものでなければならないでせう。すべての藝術的なるものは自然に一致するものゝ價値の直覺的發見でなければなりません。私たちは之を假に私達人間の藝術的創造と呼ぶのです。さうしてこの發見を具體的に表現することは只私たちにゆるされた技巧手法の範圍に於て可能であるだけです。けれども私たちの技巧的方法はもとより有限な狹い範圍に於てしか望まれませんから、價値の直覺もおのづからにして之に相當する限りに於て選擇されなければなりません。之等の事情は私たちの藝術をして

全く神に於けるものと異ならしめ、又私たちの科學とその領域を別ならしめる所以であります。

かくして私たちはともかく限局せられた技巧表現をもつてその藝術をつくり上げてゆかなくてはならないのですから、たとへ自然そのものに美を意識しても之を完全に再現するわけにはゆきません。完全なる再現は只神の科學的且つ藝術的なる創造によりてのみ可能であるからです。從つて私たちが單に自然を模寫すると云ふことに重きをおき過ぎると、私たちの不完全な技巧を如何にしてより完全に近づかしめるかと云ふ問題に囚はれる恐れを生じます。そこに藝術がその技巧への墮落を經驗するに至ります。

私はこゝに岸田氏の次の言葉を借用しませう。

「事實人間には物事を再現し得たといふ事に對して一種の魅力を感じる本能があると思ふ。美術の上にもこの事はあるので、肖像畫などを描く場合、それが當人に似てゐなくても藝術的生命に關係がないものであるに係らず、作者にとつて似たりと云ふ自覺は似ずと云ふ自覺よりも嬉しいものであるのはこの事の一例だと思ふ。」

この再現に對する魅力は、いつも缺陷を自覺する私たち人間が一歩理想へ近づき得たゝめの滿足であります。併し、「再現」と云ふ事實それ自らを客觀すれば、それは私たちが自分の技巧的手法を勞しないでも、或る科學的方法、例へば寫眞のやうなもので、もつと完全に求め得るものでありまして、それだけで決して藝術的價値があらはれるものではありません。只斯樣な寫實的手法に於て藝術的に尊いものは、再現に到達する道程に於て自然に對する美意識が多く經驗且つ發見せられると云ふことであります。自然を細密に、見れば見る程、そこに新らしい價値のある美を多く感受することが出來るからです。そしてそれらが何等かの藝術的表現によりてそこにあらはれて來るからです。

「ともかくも肖像などの似る似ないを氣にするところには微妙な藝術家の、形に對する神經が動いて面白い味があると思ふ。」『事實、我々はそのモデルを知らない肖像畫をみても似て居さうだなといふ感じをうける事がたびたびある。さういふ畫はどこかリアルに對する觀照が鋭くいゝ意味で現實味が強い。ウイウイツドである。」

と岸田氏の云はれるのは、實際の經驗上から這般の消息をあらはしたものであると思ひます。

この自然の觀照が藝術的要素をつくるに欠くことの出來ないことを私はこれ以上繰返して述べる必要はありますまい。只自然そのものゝ完全なる再現が私たちに不可能である以上、自然に對する美意識の表現について尙ほ考慮をめぐらさなければなりません。

私はこゝで私の論述の一頂點に達したことを思ひます。既に言ひ及んだごとく私たちが自然に於て美と感ずる樣式は二た通りあると私は解します。その一つは今まで述べて來た自然の複雜な綜合への美意識でありますが、も一つのものは自然を分析した單純な要素への美意識です。

有形美術の問題としては、私たちは自然の綜合形體のなかに、その輪廓をつくり、境界をなし、若くは陰影となりてあらはれる一本の線を析出して考へるときに、或はその線の單純ななだらかさとか、或はその屈曲に於ける曲率の調和的變化とかに、美を感ずるものであります。幾何學的な直線の組合せ、又は簡單な曲線のつくる模樣に、私たちは幾たび美の幻覺をもち得たことでせう。原始的な裝飾は之に基づいてつくられたのです。更に自然の複雜な色彩のなかに、私たちは單純な原色を析出して、その簡單な配色に於て美を感ずることが出來ます。さうしてそこに亦大いなる裝飾的効果を求めました。自然の複雜な綜合に對する一方に、この單純さへの、より強く且つ直接な魅力を私たちは深く考慮しなければなりません。美術の眞の核心と、之が裝飾に對する密接な關係をこれによりて始めて本當に解することが出來ると私は思ひます。

この自然分析に於ける美意識は、丁度私たちが自然科學に於て自然現象を分析し、そのなかに單純な法則的關係を見出して、之に整齊完美の感をもつのと相當してゐます。自然の調和的法則そのものは實に一面から見れば神の藝術なのであつて、私たちが之に無限の美を感ずることは至當なわけであります。私たちが綜合せられたる自然よりも寧ろこの分析せられたる自然に、より直接に、且つより強く、自然の美妙を感受し得る所以も、諒解せられるでありませう。私たちの腦力の有限さは複雜を極むる綜合體に對するよりも、單純にせられたる分析要素に對して明瞭なる形像をつくる

ことが出來るからであります。

私たちの美術に於ても亦この事が深く考慮せられなければなりません。自然の綜合そのまゝを模することが既に不可能であり、且つ又之に對する直覺的美意識が有限な頭腦のなかに却つて間接に若くは程度少なくしかあらはれないものであることを悟つたならば、私たちは寧ろ他面に於て、自然の分析せられた形體と色彩とに對する美意識を表現することを適切であるとしなければなりますまい。さうして斯やうなものゝ表現は、限局せられた私たちの技巧的手段によりて充分に可能にせられ得べきことであり、且つより直接な強い魅力を生み得ることであるからです。數本の線や、單純な色彩のみを用ひて却つて最も藝術的な効果を得られる理由は、こゝに存するのであると思ひます。そこには分析せられた自然が活躍してゐるのです。私たちは直覺的に強い美意識を之によりて感ずることが出來ます。

かやうにして創られた美術に於ける美の要素を尙ほ詳しく考察して見ますと、私は次の三段に區別することが出來るやうに思ひます。

その第一は創られたものに於て、綜合的自然それ自からを彷彿し得ることに對して感ずる美です。私たちはたとへ限局せられた技巧的表現を用ゐるにしても、即ち例へば簡單な線や色彩で之を模するとしても、そこに自然に對する現實感を或る程度まで感受することが出來る場合に、私たちは美を意識します。そして之に關しては既に屢々述べたやうに自然に近づけば近づく程、複雜な綜合的自然の中に藏された調和の美を發見し得る處に本來の藝術的價値が存在します。

その第二は限局せられた表現そのものに於て見られる創作者の藝術的心境です。創作者はその美的對象をどんな線やどんな色彩によりてあらはしたならばいゝかを苦心します。そこには彼が對象的自然のなかに意識する客觀的美の外に、彼れ自からが之に對立する場合に有する感情が同時に表現せられなければなりません。この感情のあらはれを缺くときには、作品は徒らに科學的寫實となり、若くは形骸的な裝飾技巧に墮してしまひます。藝術を藝術として生かし、」それを個性的に色づけるものは、實にこの要素に外ならないのであつて、恐らくは私たちの最も重きをおくべき點であ

りませう。私は信じます、この感情のあらはれは私たちが自然を再現することに對して完全なる手段をもたないで、却つて單純な技巧によりて之をなさねばならない處に必然的に伴ひ生ずるものであつて、私たち人間の藝術に於ける意外な重要な副産物であり、そして又一面之が藝術創作に加はらねばならないと云ふことが、私たち人間の藝術をして、その科學と異ならしめ、同時に神のそれらと區別せしめる所以であると。(私はこゝで私の議論を充分に徹底せしめるためには私たちの合理的に思惟し得る神の人格的内容、特にその感情に就て說明しなければなるまいと思ひますが、これは他日に讓ります。)併しともかく私たちの藝術の價値はどこまでもこの感情のはたらきによりて成立するのです。岸田氏が「美術に於ける最深の唯心的一域」と云つて居られるのは之に外ならないのでせう。

　誤解を避けるために私はこゝに尙ほ少し言ひ足したいと思ひます。岸田氏はこの最深の唯心的領域をもたらすために「或る處で寫實を缺除させる」必要を說いてゐます。私はそれを深い體驗者の言葉として味ひたいと思ひますが、寫實を缺除させると云ふ意味は、必ずしも寫實の否定若しくは反寫實を意識的に行なふものではないと解したいと思ふのです。具體的に云つて見ますと、創作者の感情は或る場合には物象をそのあるが儘よりも大きく、又は暗く見ることもあり、そしてそれを感情の動くがまゝに大きく又は暗く描きあらはすことがあるでせう。この場合に彼はその描かれた物象に對して、科學的寫實に反するかどうかと云ふことへの反省を必要とはしないのです。科學的寫實に相當しないと云ふ意味で之れは確かに寫實の缺除です。(有島氏の云はれる「自然の誇大」もやはり之に外ならないと思ひます。)けれども一方から見れば、彼は彼自からの感情に映るが儘の物象を描いたと云ふ意味で、反寫實を意識的に行なうたのではありません。却つて彼れ自からは自分の現在見た儘を忠實に寫さうと努めてゐるのです。私は斯やうの場合を寫生と云ふ言葉であらはしたいと思ひます。寫生は科學的寫實ではなく、謂はゆる寫實の缺除を含むものでありますけれども、同時に素朴的な形體描寫です。私はこの意味で用ゐられた寫生主義を藝術創作の心理に於ける最も正しい道であると解します。(雜誌玄土大正十年八月及び九月號所載「藝術表現を論じて謂はゆる寫生に及ぶ」參照。)

　この寫生の領域を超えて、意識的に反寫實を行なふときに、藝術はその正當な道を外れて、恐ろしい墮落への第一歩

を踏み始めるのです。そこには自然に於ける無限の調和の破壞が先づあらはれます。私たちはこの調和を欠くものを、一美に反する醜として排斥しなければなりません。只どこまでが寫生の領域であり、どこからがその外への逸脱であるかを具體的に判斷することは極めて愼重なる用意を必要とします。寫生は既に寫實ではない以上、この判斷は審らかに創作者の藝術的心境に立ち入らなければならないからです。創作者自らは亦この點を深く考慮して、念々寫生に終始することに努めなければなるまいと思ひます。上の意味に於ての寫生は決して藝術に於ける天才的傾向を否定するものではありません。

　美の要素としての第三は技巧そのものに於ける美の感じです。繪畫に於ける線や色彩には、それだけを離して見て既に美しさを感じます。これらがたとへ對象としての自然をあらはさないとしても、單純なる幾何學的形體又は光學的原色、若くはその適當なる組み合せは私たちの美意識を滿足せしめ得るものであります。そして之が主として原始的に裝飾に用ゐられました。裝飾の目的としてはそれが單に美感をおこすと云ふばかりでなく、自然に於ける現實的形體及び色彩と相異なりてそのなかに交りて特に目立つと云ふことが必要であるからです。この點は藝術的美術に於て必ずしも要用なものではないので、そこに兩者の客觀的差別が既に存在してゐます。併しながら之等の美的要素は美術に於て常に第二の要素、即ち創作的感情を適切に表現するために利用せられなければならないので、從つて屡々之に作つてその裝飾的効果が純粹美術に入り込んで來ることになります。本當の藝術創作に際してはこの點に就て特に虛心になりて考へなくてはなりません。その表現に用ゐる線や色彩や明暗は、上の意味に於ける裝飾のためではなく、ひとへに藝術的感情に直接であるやうに取捨されなければならないのです。それによりて或は「氣韻べうぼう」たるものも生れるでせう。纖細穩和なるものも作られるでせう。そして藝術が眞の意味に於て生かされます。

　私たちのこゝで更に戒めねばならないことは、單純な線や色彩の美しさを私たちが一たび經驗した後に、やゝもすればその同一な表現を繰り返して、安易に美をつくり出さうとしてはならないことです。之は感情要素の反復と共に、概

念的固定を生じて、創作價値を失はしめるに至ります。之を救ふためには私たちは常に第一の寫實的要素を心に留めなくてはいけません。私たちの概念的思惟は存外簡單なものです。之等から自然以外の理想樣態を生み出さうとしても、それは型式的反復より外には忽ち涸渇に陷いつてしまひます。之に新らしさを供給するものは無限に複雜な自然を描いて他にはありません。等しく線描をもつてするにしても精細な自然の形體の觀照、しかし私たちを感情から裸にしない觀照が無限の變化を之に與へることが出來るのでせう。單純な線が自然の複雜な形體と一致する處に、裝飾の意味を離れた藝術的美感が存在するのでありませう。

單純な線や色彩が分析せられた自然に相當するときに、始めて藝術をつくると云ふことに關しては、從つて藝術とそれ以外の單なる裝飾的紋樣との關係に就ては、尙ほ多く考察すれば種々の興味を感じます。科學的に分析せられた自然法則が、簡單なる數學的關係でありながら。それがどこまでも實在的自然に相當する處に、自然科學と數學との大切な差別が存在します。數學の諸定理に私たちは精妙なる連鎖を認めるとは異つた意味で、亦私たちは自然法則に幽妙な機構を仰視し、自然の嚴肅崇高なる姿を見ることが出來ます。之と同樣に私たちは本當の藝術を常に感情的自然と一致させることに於て、その偉大なる且つ恒常なる價値を認容しなければなりますまい。この意味に於て私は藝術と裝飾的構圖との關係を、恰も自然科學と數學との關係に對比せしめたいと思ひます。

もつと細かく論じてゆけば私の云ひたいことはまだ多くあるやうですけれど、一と先づこれでこの一文を終ります。私たちが自然に於て藝術的の美の本源を認めながら、何故に私たちは藝術創作に當りて寫實を究極に進めることをしないかと云ふことを、私は或る程度までこゝに明らかにし得たと思ひます。謂はゆる超現實とは必ずしも自然以上のものではありません。藝術的感情を通じて見たる自然そのものでなければならないのです。若し超現實と云ふ言葉をゆるすならば、それはたゞ科學的現實を超えたもの、即ち藝術的感情を加へた世界として解すべきものであります。更にこの領域をも超えて、感情的自然以外に逸脫するとき、そこには徒らに怪奇卑醜なるものがあらはれるに過ぎないでありませう。之を夢想する天才こそは私たちの正しい藝術の柵圍の外に追放せらるべきものであります。

謙信と信玄との話

敵に鹽を送つた英雄美談の解釋

堺利彦

昔し上杉謙信は、多年の敵たる武田信玄に鹽を送つたといふ話がある。

（一）

信玄の領地たる甲州は山國で鹽がない。そこで謙信の領地たる越後から鹽を供給した。武士と武士の戰ひに於て、鹽を以て敵を困しめるには忍びないと云ふのである。誠に立派な武士の心掛として、日本歴史の英雄美談の一つになつてゐる。

然し、謙信と信玄とは一體、何の爲に戰つてゐたのか。武士と武士との戰ひの目的は何であつたか。お互に、自己の大を爲さうと云ふのであつた。大を爲すとは、即ち領土を廣める事であつた。領土は何の爲に廣めるか。其の領土から生ずる利益を獲得する爲である。モット分りやすく云へば、其の領土内の百姓の作つた米を取りあげる爲である。

信玄、謙信、あの二英雄が川中島を挾んで、あの花々しい戰爭をやつたのは、つまり米の奪ひあひであつた。甲州と越後との中間に在る信州で、そこの百姓が作つた米を、謙信が取りあげるか、信玄が取りあげるかといふ爭ひであつた。

鞭聲肅々夜渡河、曉見千兵擁大牙、などゝいふと、非常に詩的な、美しい、勇ましい、壯烈な光景を現出するが、實は只、米泥棒と米泥棒との喧嘩であつた。謙信、信玄、あの二大英雄は即ち二大米泥棒に過ぎなかつた。

（二）

然し、其の米泥棒と米泥棒との間に、鹽を以て敵を困しめるには忍びないと云ふ、そういふ英雄的寛大がどうして出て來たか。それには二つの解釋がある。第一は、斯うである。彼等はさすがに大泥棒である。米といふ大利益の奪ひ合ひをやつてゐる時、鹽といふ小利益は姑らく問題外に置いて、泥棒同志の同情を發揮したのだと解釋する事が出來る。

第二の解釋は、一層根本的である。同情とか寛大とかいふ美しい名目の外に、ノッピキならぬ經濟上の理由があつたと見る即ち、甲越の戰ひの爲、鹽を買ふ途の絶えた甲州の人民も困つたが、鹽を賣る途の絶えた越後の人民も困つた筈である。謙信が若し、鹽を甲州に送る事を禁じたなら、即ち甲州に對して經濟封鎖を行つたなら、それは甲州の人民を苦しめると同時に、又た越後の人民を苦しめる事である。そこで謙信は、自分の領内に於ける、人民の苦しみを少なくする爲に、鹽を甲州に送つて、即ち通商の自由を許して、そうして敵に對する寛大の美名を買つたのだと解釋する事が出來る。

英雄的米泥棒、或は農民の搾取者たる昔しの大名武士は、斯樣にして中々巧妙な外交政策をやつたものである。

それに比べると、今日の泥棒政治家、或は勞働の搾取者を代表する政治家は、存外智慧のない者である。ロイド・ジョージなどゝいふ大々的のブルジョア政治家が、ロシヤに經濟的封鎖を施して、敵を苦しめる積りで却つて自ら苦しんだ所などは、謙信の智慧に及ばざること、遙かに遠い。

然し廿世紀の大政治家ともあらうものゝ智慧が、いつまで中世紀の地方的小英雄に負けてゐる筈がない。そこで近來漸く、ゼノア會議が開かれたり、續いてヘーグ會議となつたりして、ロシヤとの通商貿易が始まりかけてゐる。そうして更に又、歐米各國とも、ロシヤの飢饉を救濟するといふ寛大な精神を發揮してゐる。此の飢饉救濟の美擧は、正に是れ、謙信が敵に鹽を送つたといふ英雄的美談の第一解釋に該當するものである。第一解釋に依れば米といふ大利益の前には、鹽といふ小利益を姑らく問題外にしたと云ふのであつた。それと同じく、今歐米列國は、石油とか、石炭とか、鐵とか材木とかいふ樣な、ロシヤの大利益を攫まうとする時、先づ以て少々の金品を寄贈するのである。そして之は、大搾取階級たるブルジョアとして、容易に示し得べき寛大の精神である。

(三)

然し、謙信と信玄との對抗と、ロシヤと歐米列國との對抗との間には、一つの大きな相違點がある。假りに甲州をロシヤとし、越後を歐米列國として喩へ話をして見る。甲州では百姓が一揆を起して信玄を殺してしまつた。信玄を殺したばかりでない武士階級の全部を亡ぼしてしまつた。そして百姓が申合せて、自分の政府を立て、自分の國を守つた。越後の謙信はそれを見て驚いた。近い將來に於ける自分の運命を目の前に見せつけられたのだから堪らない。謙信は躍起となつて兵を甲州境に出し、信玄の殘黨を助けて頻りに武士階級の支配を回復させよ

うと試みた。所が、甲州の百姓勢が中々强い。百姓の政府、百姓の支配、元の武士階級に對する百姓の獨裁政治が迚も仆れそうにない。それに今一つ困つた事には、越後の領内の百姓が又騒ぎだした。越後の百姓が甲州の百姓と提携した。越後の百姓も甲州の百姓に倣つて、謙信を倒さうとした。謙信を倒すばかりではない、自國の武士階級の全部を亡ぼさうとした。そして、其の目的の爲に、甲州の百姓政府を百姓階級全體の先鋒だと考へて、盛んに其の百姓政府を守り立てる事に努力した。

そこで謙信は大いに弱つた。謙信は、(此の喩へ話に於ける謙信は)、初め甲州の國境を封鎖して鹽を敵國に送る事を禁止した。然し其の爲に自國の百姓が大いに困つた。のみならず、自國の百姓は敵の百姓と通じて、戰爭の繼續に反對し、通商の開始を要求し、甲州の飢饉を救濟する運動をやりだした。謙信はとうとうヘコたれた。甲州境の出兵も撤退した。鹽も追々送り出す事にした。おまけに自分等も百姓と同じやうに飢饉救濟の寄附金まで募集して、大いに寛大の精神を示した。これが目下の形勢である。

然し、謙信も只の鼠ではない。初は泥棒同志の同情を以て、信玄の殘黨を助けたが、それに見込がないとなると、今度は甲州の百姓政府と妥協して、金を貸したり、品物を賣つけたり、或は甲州内地に産業經營の權利を取つたりして、矢張り甲州から利益を搾り取らうと企らんでゐる。そして、其の大利益を攫む前に寄附金の小利益を提供して寛大の精神を示してゐるのだといふ事は、前に話した通りである。

只だそれと違ふ所は、昔しの本物の謙信は泥棒同志の同情を信玄に寄せたが、此の喩へ話の謙信は、敵國に泥棒仲間が居なくなつたので、それに對する同情といふ事は無くなり、その代り敵國の人民に對して、鯛を釣る爲の餌として鰕を與へてゐるわけである。

(四)

斯ういふわけであるから、今日の、ロシヤに對する、通商開始、飢饉救濟には、二つの異なつた要素がある。(勿論、これは歐米の情勢に對する批評である。)一つはブルジョア階級の僞善的寛大。一つはプロレタリヤ階級の國際的團結の精神。但し其の二つの中間もある。それは單なる、人類としての同情だと云ふのである。或は純粋な正義人道の觀念に基づく平和思想だと云ふのである。謙信が甲州に鹽を送つたのは、泥棒同志の同情などゝいふ、そんな賤しいものでは決してない。又、實は自國の人民を苦しめない爲の一政策だと云ふような、そんな不純なものでは決してない。又、大利益を攫む前に小利益を提供する。

即ち餌で鯛を釣るなどゝいふ、そんな僞善なものでは決してない。只だ實に純粹な、甲州の人民に對する寛大な精神の發露だといふ解釋である。然し、此の中間の正義派、人道派、理想派は、その實、ブルジョアの僞善に欺かれてゐるお人よしか、或はプロレタリヤの團結の精神をまだ明白に攫み得ないでゐる善人かである。尤も、まだ其の外にも、一つの中間的立場がある。即ちブルジョアの僞善に欺かれてゐるやうな顏をしたり、或はプロレタリヤの團結の精神などゝいふ事には氣もつかないような顏をしたりして、實は可なりに善く要領を呑込んで巧みに現在の形勢を利用してゐる人々もあるだらう。

そこで要するに、此の運動は、或は意識的に、或は無意識的に、或は半意識的に、ブルジョアの爲にするか、プロレタリヤの爲にするか、その二つの意義を持つてゐる。そして其の二つの意義、二つの要求が相合して、現在の、階級無差別の全國的運動、及び國際的運動になつてゐるのである。

そこで此の運動の發展の結果、前者が勝つか、後者が勝つかブルジョアの僞善的精神が勝つかプロレタリヤの國際的團結の精神が勝つか。若し前者が勝てば、歐米列國の資本主義がロシヤの勞農國を犠牲にして、全世界は又暫らく搾り取り制度の興隆を見るわけであり、若し後者が勝てば、歐米の資本主義が：…どうかなつて、……極めて愉快な現象を生ずるわけである。

(五)

扨、以上は歐米のお話しである。然らば我が日本はどうか。日本は正義の國である。人道の國である。日本のブルジョアは僞善的精神など決して持つてゐない。ロシヤを犠牲にして、ロシヤを搾取するなどゝいふ、そんな陰險な、そんな横暴な、そんな野蠻な心持は、決して持つてゐない。又日本のプロレタリヤは、國際的團結の精神など決して持つてゐない。資本主義をどうしようのなどといふ、そんな大それた、そんな恐ろしい、そんな馬鹿々々しい考へは、決して持つてゐない。

そこで此ごろ盛んに起つてゐる對露非干渉同志會の運動なども實に只だ純粹な同情、純粹な援助、純粹な寛大な精神の發露であつて、××××××××××××××××××××××××××××××××××××××

文藝管見（七）

里見弴

第四章　內容と表現

第四節　內容　附錄　菊池寛氏の「文藝作品の內容的價値」を駁す。

內容と表現との關係に就て、恐らく私とは正反對の視角から、常に明快な筆を揮ふ人に菊池寛氏がある。前號にも書いたことだが、且て氏が「作家凡庸論」を稱ふるや、直に「作者素質論」を以てこれに應じ、いさゝか文壇の視聽を欹たしめたことがあるが、氏はそれ以來私の論敵のやうな觀を呈し、而も好敵手である。偶々この一篇の私議が「內容論」にさしかゝつた時、氏の「文藝作品の內容的價値」（新潮、七月號所載）が發表された。ついて讀むに、同氏近來の正面のきり振り、なか〳〵に凄まじいものがある。殊に、

　私は、藝術を說明して、「魂が何うしたの、心がどうしたの」なんて云ふ神祕說は嫌ひである。

の一句の如きは、明かに「文藝管見」に對するアッタックであり、隨つてそれの筆者に對する呼びかけと解して差支なからうと思ふ。「敵に聲をかけられて、なんの躊躇のあるべきや」で、本論にはいる約束の今月を先に繰り延べて、早速應戰することにした。もとより事、內容と表現に關するのだから、必ずしも道草ではないのみならず、私の論旨を明瞭にする一助ともなることを信ずるからだ。

尙、こんなことは餘計なことのやうだが、菊池氏と私とは、論敵でこそあれ、平常殆ど往き來はしないけれど、機會

あつて逢へば、心持よく語り合ふ友達であることを一言して置きたいのだ。何故かと云ふに、論爭と云ふものが、得てして肝心の論旨を離れ、甲對乙の個人的感情に支配されて了ふのを、近來屢々見かけるのだが、こゝには、いかに猛烈に火花を散らさうとも、その醜態だけは曝さないですむつもりだし、もう一つには、實生活の上での私が、いやに喧嘩ッ早い人間のやうに思はれがちなのを遺憾とするからだ。現在私は、二人の友達と絶交してゐるが、その一は、當時の私としてどうにも止むを得ない心境にゐたからで、もう一つのは、先方から唐突な宣言を下されたからで、決して私と云ふ人間が事を好む性分であるわけではない。寧、不和を恐れ忌むことに臆病すぎるほどで、その點われながら不滿に思つてゐるくらゐだ。そんなわけで、いま菊池氏の説を大にやつつけやうと構へてゐる私だが心中一點の憎怨などは藏してゐない。現にこの間も、私が近著「潮風」を贈つたのに對して、氏は、謝意と共に好意のある批評を寄せ、それに對してまた私は、喜びと、批評を讀んでの感想を述べて書いたが、さう云ふ私たちの間柄なのだ。そのために、「こんな風に書いてはゐるけれど、なアに菊池君だつて……」と云ふやうな、好意づくめの當推諒に心がゆるみ、結局文字の上の揚足とりに陷ることとこそは惧れられるけれど、私情のうツぷんを公開の文字に曝すやうなものにはなりつこはない。それどころか、いま將に駁論に移らうとして、私の氣持に大へんに愉快だ。樂みだ。「菲敵は憎さも憎しまた戀し」將棋ぢアかなはないが、なアに……、と云つたくらゐの氣持であることまで、序に白狀して置かう。

まづ最初に、菊池氏の用語から吟味してかゝらう。氏の所謂「文藝作品の內容的價値」とは、そこに盛られた「道德的（勿論コンヴェンシヨナルな意味でないことは斷つてある）價値」「思想的價値」「生活的價値」を指すのだ。その內容を示す言葉としては、「心を打たれる」「人を動かす」「淚ぐまずにはゐられない」の三者が用ゐられてゐる。またこれと相對するものは、「藝術的價値」と呼ばれ、「うまい」「ヴヰヴヰッドに書けてゐる」「よく描けてゐる」の三語で、その內容が說明されてゐるのだ。今これを、「文藝管見」の用語に飜譯すると、「內容的價値」は「內容」に、「藝術的價値」は「表現」にまづ一應は、それぞれ當塡るわけだが、それらの言葉が背負はされてゐる內容の廣さ深さの違ひに至つては、いかに彼

が僅々五六頁の偶感的記述であり、我は既に半歳に亘つて述べ來つた長篇論文であるとは云へ、殆ど日を同うして語るべからざるの慨あること、あながち私の自惚眼の謬りのみではあるまい。「文藝管見」は、「心を打つ」が「内容」で、「よく描けてる」が「表現」と、そんな風に簡單には述べて來なかつたつもりだ。而も、かう云ふ二元的な考察ほど、凡そ素人ツくさい、——謙虚な心持で藝術のうちに深く沈潜した覺のない、ほんの上ツ面だけ舐めてゐるやうな心境を、露骨に物語るものはないのだ。藝術の眞諦は、一にそれが一元に歸するところにあると云つていゝ。つまりはその點を明らめたいばかりに、本篇の著述が成れつゝあるわけだが、結局この眞諦も、基督教の「見神」佛教の「大悟徹底」と一般で、身みづからその境地へ臻らない限り、はたからの言葉では、理屈として承認は出來ても、無實感、無自覺では、いざと云ふ場合にものゝ用をなさないのだ。けれどもこんなことは、既に第四章第二節「内容即表現」や、更にその根本を人性の奥底に求めては、第一章第二節「人」の條下に、少しく婉すぎるほど述べて了つたのだから、こゝには重說の煩を避けよう。尤も私自身も、この元來一にして二ならざるものを、いかに說明の便利のためとは云へ、現に二元的に論じ進めてゐる最中だ。「いまどき藝術を二元的に考へてるなんて、時代おくれにもほどがある、それからして、テンデお話になりやアしない」とは、決して云ひはしない。そつちが兩刀で來るから、こつちも兩刀でお相手つかまつる意氣だ。

　さて菊池氏は、謂ふところの「内容的」と「藝術的」との二つの價値について、まづかう說き起してゐる。

> ある作品を讀んで、うまい〱と思ひながら、心を打たれない。他の作品を讀んで、まづい〱と思ひながら心を打たれる。ある作品を讀んで、よく描けてゐると思ひながら、心を打たれない。他の作品を讀んで、ちつとも描けてゐないと思ひながら心を打たれる。
> この二つの場合を、誰でも經驗してゐると思ふ。

一應もつともである。少くも「新潮」の讀者の大部分が、甚だ我が意を得たやうに、頷きほゝ笑むだらうと思はれる斷定である。ところが、私は「誰でも」とは云はせないのだ。それは、菊池氏自身としては、云ふまでもなく實感であらうし、文學愛好の、正しい誤つてゐるは問はず、多少とも批評的精神をもつて作品に臨むくらゐの讀者にとつても亦、事

賓であらう。が、それだけが讀者だと思つてはいけない。「眞珠夫人」の讀者の大部分と云ふものは、それがうまからうとまづからうと、よく描けてゐようと描けてゐまいと、大に「心を打たれ」てゐたものであることを忘れて了つてはいけない。初て琵琶唄を聞く者は、「吉野落」や「壺灣入」で、やたらに「涙ぐまずにはゐられなく」なつたり、「心を打たれたり」するだらうが、「もう甲某を聞いた耳ぢア、乙某なんぞのは聞いてゐられないね」などゝ語り合ふやうな連中になれば、同じ「壺灣入」でも、泣く時と泣かない場合とが出來て來るわけで、批評鑑賞の上では如何ともあれ、琵琶唄に對する處女性は既に失はれたところの、謂はゞ不純な聽手になつてゐるのだ。第一小説が、いつも必ず「うまい〳〵」と思つたり、「まづい〳〵」と思つたりしながら讀まれるにきまつたものと信じてゐたのなら、菊池氏はとうに小説家をよすべきだつた、と、ちよつと揶揄つてもみたくなる。——これらは、然しほんの揚足とり、かすり傷だ。一本打ち込んだつもりではない。で、

芥川氏の「蜜柑」と云ふ小品がある。私は、あの題材を芥川氏から、口頭で聽いたとき、既にある感動に打たれた。又、私の「恩讐の彼方」と云ふ小説、あの筋書は、ちやんと耶馬溪案内記に載つて居るのであるが、案内記で讀んでも、既にある感動に打たれるだらうと思ふ。文藝作品の題材中には、作家がその藝術的表現の魔杖を觸れない裡から、燦として輝く人生の寶石が澤山あると思ふ。

と云ふのだが、何も「文藝作品の題材の中」に限つたことではなく、「燦として輝く人生の寶石」は、行きずりの見聞にも日々の新聞紙上にも、いくらも見出すことが出來るのは知れきつた話である。ところで、「蜜柑」や「恩讐の彼方」が、全然作者の空想に成つたものだとすると、どう云ふことになるだらう。その際は、「藝術的表現の魔杖」と云ふやつを、どこへ持つて行つて「觸れ」させるつもりだらう。また、小説家が大勢ふえて、片ッぱしから「人生の寶石」を拾ひ廻つてゐるうちにひよつと種ぎれにでもなつて了つたとしても大騷動だ。

續いて藤森氏の舊先生については、

が、「舊先生」の性質は、藤森氏の藝術とは、別個の存在である。あの性格が我々を動かす力は、藤森氏の功績ではない。あの性格そのもの

に存在してゐる力である。藤森氏が、他のA先生なりB先生なりを、「舊先生」以上に、ヴヰヴヰツドに書いても、我々は、「舊先生」から受ける程の感銘は受けなかつたゞらうと思ふ。

事こゝに至つては、小説家の存在も「無」である。藤森氏は「舊先生」なる人が、この世に生を享けてゐたことに對して、一生涯感謝の念を捧げなければならない。今にして思へば、「恩讐の彼方」のなかに出て來るなんと云ふ坊さんの性格は、菊池氏の藝術とは全く別個の存在であり、あれほど人々を動かした力も、氏の「功績」ではなかつたのだが、嗚呼、あの作に感動して、氏をして九鼎の重きをなさしめた批評家よ、とんでもない早まつたことをして了つたものだ。

扨突如として、

私はかうした意味から、文藝の作品には、藝術的價値以外の價値が、嚴存することを信ずるのである。その價値の性質は、何であるか。我々を感動させる力、それにはいろ〳〵あるだらうが、私はそれを假に内容的價値と云つて置きたいと思ふ。

劈壁一下、から斷案を下したものである。前出の論法によれば、この場合の、「藝術的價値」とは、耶馬溪案内記の記事を、小説らしく書き直したり、昔教はつた先生の話を、文字に綴つたりすることに當る。隨つてこれは、「文筆的勞働」とでも云ひ換えた方が、更に意味が明瞭になるだらう。で、それ「以外の價値」とは、謂ふところの「材量」とか「モデル」とか、兎に角世に存在し、存在したものを指すことになる。よつてこれを翻譯すると、

「私はかうした意味から、文藝の作品には文筆的勞働以外の、材量やモデルの價値が嚴存することを信ずるのである。(以下原文のまゝにてよく解る。)」

と云ふことになる。こんなことなら、「内容的價値」は、寧「外在的價値」と云ひ換えた方がいゝくらゐのものだ。

然し、こゝまではまだ揚足とりの部だ。眞直に云へば、菊池氏は少し足をあげすぎると思ふが、こゝらも旋毛を曲げて一々辭句の末にこだはつてゐても仕方がない話だから、以下は氏の云はんとするところの意を汲み取つて、私自身の言葉で云つてみよう。――藝術には、讀んで感動するやうな、實人生に密接した思想、感情なり、事件なりが描かれなければならない。平凡些細の茶日常茶飯事などを、いかに目前見るが如くに描いたところで、――それはそれで存在してゐ

て悪いとは云はないけれど、そんなものはつまらない。だから、繪畫彫刻のやうな、實人生との交渉を密接に現し惜いものは、それだけ價値も少く、つまらないと思ふ。藝術の人生に對してもつ價値は、立派な思想、感情、立派な行爲、さう云ふものを描き出すところに始るのであるが、さうかと云つてあんまりまづくつても困るから、せいぐヴヰウヰッドに描くがいゝ。

簡單に云へば、こんなことになると思ふが、一々尤もくさい意見だ。若しこれを、政治家とか、教育家とかの言葉として聞く場合ならば、私は双手を擧げて贊意を表し、珍しく心がけのいゝ人だ、くらゐの尊敬も惜まないだらう。けれどもこれが、藝術家、——かどうか知らないが、兎に角小說や戯曲を書いて、而も夙に一家の風を成してゐる菊池寛氏から聞かなければならない言葉だとすると、甚だ遺憾な、迷惑な感じがする。

氏が最後に云つてゐる如く、「文藝は綸國の大事だ」否、それ以上、「弘誓の大事」だ。さるが故に、私は、氏の如く、淺い考察に止つてはゐられないのである。何故氏の考察を淺いと云ふか。まづ第一に氏は、「藝術」と云ふ言葉を、風流韻事と云ふやうな聯想から引き離すことの出來ない、普通一般の世間人よりも、大して進んではゐないのだ。「藝術的」と云ふ言葉を、「うまく描けてる」と同義に用ゐ、繪畫彫刻が「純藝術」であるの故を以て、人生と沒交渉なものゝやうに考へ、イプセン、トルストイを、「内容的價値」に於てのみ認めやうとするなどは、殆ど私には、うちの亡くなつた親爺さんとでも藝術論を戰はしてゐるやな氣がされるくらいのものだ。これでは馬琴を擧げ、西鶴をおとしめた我々父親の代の考察と、なんの撰ぶところがあらう。そのくせ、

凡ての他の物に幻覺（イリユージヨン）を持つてゐない大人通士にして、尙藝術に對して、初心な神祕說を唱へてゐるものが、頗る多い。

とか、

藝術のみにかくれて、人生に呼びかけない作家は、象牙の塔にかくれて、銀の笛を吹いてゐるやうなものだ。それは十九世紀頃の藝術家風俗だが、まだそんな風なポースを欣んでゐる人が多い。

とか云つて、自ら時代の急先鋒を以て任じてゐるところ、ちよつと愛嬌である。尤も、多分いま生きてゐる西洋人ら

しい、クローツエとかスピンガーンとか云ふ男の言葉をたよりにしてゐる點から觀ても、大に新しいやうな氣がしてゐるのだらうが、そのク氏ス氏が唱へたとやらの「藝術は表現なり」と云ふ說を信じれば、どうしてあゝ云ふ結論に達しられるものか、見當もつかない。もとより私は右兩名の異人に就て少しも知るところがないが、「藝術は表現なり」と云ふからには、根本に於て、勿論一元論で、その點だけでも、氏の說に何等加擔してゐさうには思はれないのだ。而も、「藝術は內容なり」と結論したくつてたまらなさうに見える大體の論勢に、なんと思つてまたク氏ス氏なんぞを持ち出したものかそれはちよつとした手違ひだらうが、兎に角氏の新しさが、「實は久振り」の珍らしさの變裝してゐるものであるくらゐは、名探偵ならずとも一見明かである。

一體、藝術とはなんぞや、そんな大問題を、文學靑年かなんぞなら兎も角も、堂々たる大家が、他人の書いた本のなかゝら探して來るなぞは、褻瀆至極であり、恥辱である。だから、私の「文藝管見」を讀んで御覽なさい、などゝ、そんな失禮なことは決して云はない。一箇の藝術家として藝術を論じる氣ならば、まづもつてその眞諦を、藝術それ自身のなかに、自ら深く沈潛して間違ひなくギユツと握つて來てからにして貰ひたいものだ。いま云つた敬意を表する意味から、私はたゞ、氏の藝術觀の珍らしさを指摘するに止めて、自分のそれに對する考には、一言も觸れないことにするが……。

次には、氏の「內容」の理解であるが、それも淺膚の譏を逭れない。「道德的價値」「實生活的價値」を高唱して、介田百三氏、賀川豐彥氏の作品の行はれるのに、「思ひ半に過ぎ」たりして、いかにも羨しげな口吻を洩すなどは、暴言のやうであるが、倶に藝術に與るものゝ面汚しである。氏の說くやうな內容ならば、速に文藝を去つて、思想を「哲學」に、事件を「街」(ちまた)に、或は「歷史稗史」に求むるの捷徑に如くはないのだ。早い話が、氏の擧げたトルストイの場合でも、小說戲曲はそつちのけにして置ひて、論文集を繙けば、每行必す氏の云ふやうな「內容的價値」に出遇ふ筈だ。何を好んで、小說戲曲に、餘計な「藝術的價値」を篩(ふる)ひ分け〳〵しながら、十行に一つか、二十頁に一つか、或はまた皆無か、あてもない「內容的價値」を、落物でもしたやうに、一生懸命探し廻る愚を敢てする必要があるものか。そんな考を

もちながら、哲學者にもならず、小說や戲曲を書いてゐられるとすれば、菊池氏は誠に辛抱人だ。さう云ふ考を以つて哲學書や新聞を耽讀することをしずに、文藝の書に親しんでゐられるとすれば、これも根氣のいゝ人間だ、と序に讀者の方へもとばッちりをかけよう。「それぢアお前の云ふ内容とはどんなものか。」かう云ふ問に對しては、今のところ「文藝管見」のこれまで發表した部分、及び來月號以後にこれを知つて頂くよりほかはない。但、この言葉は、藝術に與つてゐる、謂はゞ同業の菊池氏に對して云はれたものではない。その理由は、前に述べて置いた通りだ。

最後に、最も惡いことは氏の「評價」辭である。かう云つてゐる。

私の理想の作品と云へば、内容的價値と藝術的價値とを共有した作品である。語を換へて云へば、われ〳〵の藝術的評價に及第するとともに、われ〳〵の内容的評價に及第する作品である。

藝術を前にして、「評價」よりほかにたち對ふ心境をもち合せないと云ふならば、その不幸は全く致命的である。藝術が評價されるためにこの世に生れて來るものかどうか、私はそれについて、自分の考へらしいものを述べようとする勇氣さへない。說くが如くんば、菊池氏は、自分を「藝術内容店」の主人と觀じ、讀者たちは、めい〳〵の好みをもつて店頭の「内容」を勝手に「評價」し、氣に入れば買い、惡ければ突ッ返して行く需要者とも觀てゐなければならない筈だ。「道德」とも「實人生」とも、（心は通はすことは出來ても、）口を利くことの出來ない「音樂」などは、なんとしても店さきへ客を呼ぶ術はない筈だけれど……。（心は通はすことは出來ても、の一句を括弧のなかに入れたのは、菊池氏には要らない文句、ぬかして讀んで貰ひたい箇所と云ふ意味である。）

自分の意見を述べることなしに、而も菊池氏の所說の弱點を、暴慢と云はれても仕方がないほどに、滅茶苦茶にやッつけたと思ふ。實際私は、藝術の論客としては、菊池氏のえらさを、少しでも認めることは出來ないのだ。

矛盾のやうでもあり、或は、最後に御機嫌直しの御世辭でも使ふやうに、邪推する人もあるかも知れないが、然し私は人として、また創作家としての氏を、可なりに高く買つてゐるものである。云ひ換えれば、えらいと思ひ、うまいと思つてゐるのだ。また氏自身が、「藝術」と云ふ言葉を、やたらに安ッぽく扱ひ、反藝術至上主義を標榜し、文學青年や世

間人の氣うけのよささうな說ばかり述べたりしてゐるが、その實は、決して藝術の眞諦に無緣だとは、自分でゝ思つてゐないと信じる。その簡單明瞭な證據は、氏などは、いつ何時小說家をよして、ほかの何になつても、──少しの皮肉を許して貰へば、その方が、と云つてもいゝ、──立派にやつて退け、忽ち出世するだらうのに、今だにコツ〳〵ものを書いてゐるのでも知れる。「經國の大事」などゝ、さも大切さうに云つてもみるけども、氏の考へてゐる意味に於てならば、學者、宗教家、政治家、實業家、勞働者、何一つとして、日々「經國の大事」に與つてゐない業務はない筈だ。「道德的」「生活的」「思想的」の價値を、人生のために要望してゐる氣持が、云ふが如くに熱烈になつて來てゐるのに、今日の位置に戀々として、小說を書いてゐるのなら、怯懦の譏をまぬかれまい。二葉亭四迷を見ろ、と云ひたくなる。

然し、誰がなんと云はふとも、氏の心熱が、藝術の眞諦に吹きつけてゐるとは、私には疑ひの餘地がないのだ。この根本に來て了へば、私のこの一文は、結局長々しい揚足とり、ほんの口舌の勇を揮つたに過ぎないわけになつて了ふのだが：

最後に氏のことを、私が「うまいと思つてゐる。」と云つた、その「うまい」の字義を一言說明して置かなければならない。

私に云はせれば、──たうとう自分の意見を持ち出すことになつて了つたが、藝術には表現とか內容とかの區別はない、とも云へるし、表現がすなはち內容で、內容が直に表現だ、と、そんな風にも云へるのだが、兎も角私にとつては、「うまい」と云ふ言葉は、もうその一元の境地を葢ふ贊辭となつてゐるのだ。「うまい〳〵と思ひながら、心を打たれない」と云ふやうな半面づゝの感銘は、うけようとしてもうけられないのだ。「うまい！」と思ふところ、即「心を打たれ」るので、「心を打たれ」るところ、即「うまい！」と呼ぶところなのだ。その二つの間に、「ながら」や「けれど」の辷り込む隙はなくなつて了つたのだ。作品の上で、私が菊池氏を凌駕してゐる、などゝとは云はないが、この、藝術の眞諦に觸れてゐる點では、迥に私の考察が深まつてゐるとの信念だけは、この際恥しがらずに、公表して置かう。──から書いてゐるうちに「感銘」と云ふ言葉が出て來た。これについても、同じく字義を述べ、藝術と人との交涉が、「評價」ではなくて、この「感銘」である。と云ふやうなことが說きたいのであるが、さうしてゐてはきりがないから、これで菊池氏の「文藝作品の內容的價値」に對する駁論は、さつぱりと打ち切り、來月こそは內容論にはいることにしやう。

蟬の話

―ファブルの『昆虫記』から―

大杉栄

一、蟬の穴

夏至頃になると最初の蟬が現はれて來る。踏みならされて堅くなつた、そしてよく日に焼けた、人通りの多い小徑に、地と平らに、親指のはいる位な圓い穴があいてゐる。それは、地の上へ變態をしに地の底から昇つて來た、蟬の幼虫の出口なのだ耕作のために鋤き返された地でなければ、大がいのところに此の穴がある。が、其の普通にある場所は、殊に道ばたの日の、一番よく照るそして一番よく乾いたところだ。必要とあれば砂岩でも焼けた粘土でも突きぬけて行く丈夫な道具を持つた其の幼虫は、地から出るのにも、一番堅い場所が好きなのだ。

南向きの壁の反射で熱地獄のやうになつてゐる庭の小徑なぞには、此の穴が澤山ある。六月の下旬になると、私は蟬が出たばかりの此の穴を調べて見る。其の地は鶴嘴で毀さなければならない程に堅い。

穴は圓くて、二サンチメエトル半（八分餘）程の直徑だ。此の穴のまはりに、のけ土と云ふものが絶對にない。そとに掻き出された土くれがちつともない。これはいつでもさうだ。蟬の穴は、やはり勇敢な穴掘虫であるせんちこがねの巣のやうには決して塚になつてゐない。其の仕事のやり方が此の差違を生じさせる。せんちこがねは外から内へ掘つて行く。井戸の口から掘つて行く。で、上へ昇つて來ては、其の掘り出した土を地面へ積みあげる。蟬の幼虫は、それと反對に、内から外へ掘つて行く。そして最後に出口の戸をあけるので、それは土を掻き出す用には立たない。せんちこがねははいつて行くのだ。で、其の入口の敷居に塚をつくる。が、蟬の幼虫は出て行くので、それまではなかつた敷居のところへ何にも積み重ねる事は出來ない。

蟬の穴は四デシメエトル（一尺三寸餘）程降つて行く。四杜

形で、地の性質によつて多少曲りくねつてはゐるが、必ず一番近道の垂直に近い。其の間は全くの開けつはなしだ。こんな穴を掘れば必ず出るだらうと思はれるのけ土なぞはいくら探してもない。どこにも何んにもない。そして此の穴は、それよりも少し廣い、壁の滑かな室で行きどまりになつてゐる。そこにはほかの井戸の延長であるどの穴とも、少しも交通したあとかたがない。

此の穴は、其の長さと直徑とからすると、ほゞ三十サンチメエトル（九寸九分）立方の大きさになる。其の掘つた土、はどうなつたのだらうか。ごく乾いたそしてごく碎け易い地に掘られた其の岩の壁は、若したゞ穴を掘つたのであれば、粉つぽくて、ごく崩れ易い筈だ。然るに私は、其の表面が粘土の糊で塗られてあるのを見て、少なからず驚いた。ちやんと滑らかに塗つてある。と云ふ程ではない。しかし少なくとも其のでこぼこは此の粗塗りの層の下に隱されてゐる。其の崩れ易い土は、粘り氣を帶びて、ちやんと引つついてゐる。

かくして蟬の幼虫は其の穴から出たりはいつたりして、地面に昇つて來たり又庭の隠れ家に降りて行つたりしても、其の足の爪で土崩降れを起さして、穴を塞いで、又昇つて來たり降りたりするのを出來ないようにする事はない。坑夫は其の坑道の壁を棒杭や横木で支へる。地下鐵道の建築者は其のトンネルを煉瓦の圍ひで固める。それらのものと同様に拔目のない技師である此の蟬の幼虫は、いつまでも塞がらないように其の穴の壁をセメントする。

幼虫が地から出て、近所の小枝の上に昇つて、そこで變態をしようとしてゐるところを襲ふと、直ぐにそれは逃げだして、何んの邪魔ものもなしに其の穴の奥へ降りて行く。これは、もう永久に其の穴を見棄てる時になつても、まだ其の家がのけ土で埋められてゐない證據だ。

此の穴は、太陽の光線にあたりたくて堪らなくなつて、大急ぎで掘つたものではない。幼虫が長い間そこに住むつもりで造つた住居である。粗塗りをした壁がさう云ふのだ。掘つたら直ぐに棄てゝ了ふたゞの出口であれば、そんな用心はいらないものだ。又、これは本當の事だが、そこには、そとの天氣がどうかを見る氣象臺のやうなものがある。一尺あまりもの深い地下にゐる幼虫は、もうそとへ出てもいゝように成熟しても、天候がいゝかどうかをよく知る事が出來ない。地下の天候は其の變りかたが餘りに遲すぎるので、其の生涯の一番重大な事、即ち變態をしに日向へ出て來るのに必要な正確な知らせをしてくれない。

そこで辛棒強く、幾週間も、又恐らくも、幾ケ月もかゝつて眞直ぐな煙突を掘つて、それを掃除し堅固にして、そして自分は其の中に閉ぢ籠つてゐるやうに、地面へは突きぬかずに指の厚さ程の層を殘して置く。そして其の底には、ほかのところよりも餘程念入りに掘つた住居をこしらへる。これが其の隱れ家であり、又待合室であつて、地面へ出るのは延ばすがいゝと云ふ情報のある間はそこに休んでゐるのだ。いゝ天候だと云ふちよつとした豫感でもあると、すぐ上へ昇つて行つて、蓋のやうになつてゐる薄い地の層をすかしてそこを窺つてゐて、溫度や濕度をさぐる。

夕立がありさうだとか、風が吹きさうだとか、其他何にか面白くない事があれば、か弱い蟬にすり傷でも出來れば致命の大事件になるのだ、用心深い幼虫は煙突の底の方へ降りて行つて又待つてゐる。が、若し天候がいゝとなると、天井は直ぐに毀されて、幼虫は井戸から出て來る。

蟬の穴は幼虫が長い間そこに住んでゐる待合室であり、氣象臺であると云ふ事は、有らゆる事が證據立てる。幼虫はそこで地面に近くまで昇つて來てそとの天候を探つたり、又は底深く降りてゆつくり待つてゐたりするのだ。これで、底の方へ休體場のある便宜や、又絕えず昇つたり降りたりしても土崩れのしないやうに壁を塗つて置く必要は分る。

が、ちよつと分らないのは、其の穴を掘つたのけ土がまるでなくなつてゐる事だ。一つの井戸から出た平均三十サンチメエトル立方の土はどうなつたのだらうか。それをと思はれるものは、そとには何んにもない。うちにもやはり何んにもない。それから又、灰のやうに乾いた土の中で、どうして其の壁を塗つてある煉物を造つたのだらうか。

たとへば、かみきり虫や玉虫の幼虫のやうに、木をかじる幼虫は、此の第一に問ひに答へる事が出來るやうだ。彼等は木の幹の中を歩いて行く。其の造つた道の原料を食ひながら、そこに坑道を掘つて行く。此の原料は口で一片一片嚙みとられて飲みこまれる。そして幼虫のからだの一方のはしから他の一方のはしまで通過して、其間に其の僅かばかりの滋養分を吸ひ取られて、其のうしろの方にたまつて、幼虫がもう再び通る事のない其の道を塞いで了ふ。口と耳とのある此の極端な勞働の分業はかうして消化された木を、またどうもされない木よりもよく收縮させる。そこで其の結果は、坑道の前の方に、空なところ、即ち幼虫が働いてゐる住居、漸く其の手足を動かす事が出來る位のごく狹い住居が出來る事になる。

蟬の幼虫が其の穴を掘るのも、やはりこれと同じやうなやり方ではあるまいか。勿論、其の掘つたのけ土はからだの中を通過はしない。どんな柔い變蝕土でも、とにかく土は其の榮養の中には絶對にはいつてゐない。が、要するに其のけ土は仕事が進行するに從つて、たゞあとの方へ押しやられるのであるまいか。

蟬は四年間地中にはいつてゐる。が、勿論此の長い生活は今まで話して來てゐる井戸の中の底で過されたのではない。あれは地面へ出る準備のための家だ。幼虫はそこへ、勿論可なり遠くの、どこかほかから來たのだ。彼れは木の根から根に其の吸盤を移して行く流浪人なのだ。冬になつてあまりに寒い地面近くから逃げようとして、又はもつとい丶飲み場へ移らうとしてひつこして行く時には、其の鶴嘴の鈎で引掻いたものをあとの方へ押しのけながら道を開いて行く。蟬はたしかに此の方法による。

かみきり虫や玉虫の幼虫と同じやうに、此の蟬の幼虫にも、自分のからだのまはりに其の運動に必要なだけの僅かばかりの空間があればい丶のだ。濕つた、柔かい、そして世話なく壓搾される土は、彼れにとつてはちようどかみきり虫や玉虫の幼虫にとつての、一旦消化した木のやうなものだ。世話なく壓搾され收縮して、そこに空間を造つてくれる。

が、乾いてゐる間は容易に壓搾される事のない、ごく乾燥した土の中の出口では、そんな事は出來ない。尤も此の幼虫は、其の坑道を掘りはじめる時に、其の掘つた土の一部分を今はなくなつた以前の坑道の中へ押しやつたのかも知れない。其の證據はちつともないが、さもありさうな事ではある。が、其の井戸の廣さを考へ、又そんなに多くののけ土を始末する事の非常な困難を考へると、それも疑はれて來て、かう云ひたくなる。

『此ののけ土を始末するには、餘程廣い空間が要る。そして其の空間と云ふのも、やはりもう住む事が出來なくなつたほかの空間を埋めて出來たものでなければならない。即ち其の空間と云ふのは、更にそこへのけ土を押しやらなければならないほかの空間を假定する事になる。』

かくして、後ろの方へ投つてやつた粉のやうに乾いた土の壓搾と云ふ事だけでは、こんなに大きな空間を説明する事が出來ないところから、循環論法の堂々めぐりをする事になる。すると蟬は其の邪魔な土を片づけるのに何にかの特殊の方法を持つてゐなければならない。蟬の此の秘密を發いて見てやらう。

二、蟬の小便

先づ蟬の幼虫が地の中から出て來る時を見て見よう。それは

殆んど必ず、或は生の或は乾いた泥で、多少汚れてゐる。其の土掘り道具である前足は、其の鉤のさきを泥の玉の中に埋めてゐる。ほかの足も足泥の袋をはいてゐる。背中も土で汚れてゐる。まるで泥の中を掻き廻して來た掃除屋のやうだ。そしてそれがごく乾いた土の中から出て來るのだから、其の汚れてゐるのは愈々妙だ。土の粉だらけだらうと思つてゐると、泥だらけになつて出て來るのだ。

もう一歩此の方向へ進んで行くと、此の井戸の問題が解決される。私は幼虫が坑道の中で働いてゐる時に、それを掘り出して見た。偶然蟬の穴を掘つて見ては、時々私は此の好運に出合つた。蟬が中にはいつてゐるかどうかは、そとからは何んにも分らんのだから、それを探さうとしても無駄だ。私が幸いに見つけたのはまだ其の穴を掘りはじめたところだつた。土くれなぞのちつともない一寸ばかりの穴と、其の底の方の休憩室と、これだけが其の時の出來あがつた仕事であつた。幼虫は其時どんな風でゐたらうか。

其時の幼虫は、そとへ出て來たのを捕へた幼虫よりも、餘程蒼白い色だつた。其の大きな目は、特に白味を帶びて、曇つてゐて、はつきりとものを見る事が出來なかつた。地下で目なんぞが何んにならう。が、地から出た幼虫の目は、黒くて、光つてゐて、ものを見る事の出來る力を現はしてゐる。日向に出ると、此の將來の蟬は、其の出て來た穴から可なり遠くのところまで、其の變態をする小枝を探しに行く。さうなると、ものを見る力は確かに必要になる。が其の目の力が穴から出る準備をする間に成熟したと云ふ事は、幼虫が大急ぎで大穴を造つたのではなく長い間其のために働いたのだと云ふ事を十分に説明する。

それに、蒼白い盲の幼虫は成熟した幼虫よりも餘程大きい。水腫病にでも罹つたやうに水ぶくれしてゐる。指でつかむと、透明な汁をうしろの方へ泄らして全身をぬらす。腸から排泄する此の汁は、小便だらうか、それを汁氣でだけ養はれてゐる其の胃のたゞの滓だらうか。私は言葉の便宜上それを小便と名づけては置くだけで、其のいづれともきめないで置く。

さて、此の小便の泉、これが謎の鍵なのだ。幼虫は益々掘り益々進んで行くに從つて、粉々になつて土に水を注いで、それを煉土にして、腹でもつてそれを壁に押しつける。最初の乾いて粉々になつてゐたのが、こんどは粘々して伸縮自由のものとなつた。かうして出來た泥が目の荒い土のすき間にはいり、一番よく溶けた部分は中の方へ浸みこんで行つて、其の餘の部分は壓搾され收縮されてすき間の空間を充たす。かうして、粉

々の土は其の場でもつと目の細かいよく詰まつた漆喰にされて、のけ土のちつともない坑道が出來る。

幼虫は此の粘土の泥の中で動いてゐるのだ。そしてこれが、ごく乾いた土の中から泥まみれになつて出て來る原因なのだ。蟬の成虫は、もう穴掘りの苦役なぞはしないで濟むのだが、それでもまだ此の小便袋は棄て切らずにゐる。そして其の遺物は身を防ぐ一方法として保存されてゐる。あんまりそばへ行くと小便を發射して、あはてて逃げて行く。蟬は、其の幼虫も成虫も、殊に其の成虫のからだは干からびてゐる。が、老練な撒水器だ。

幼虫は、いかに水腫れになつてゐるとは云へ、其の穴になつて行く土の長い丸柱をすつかり濕して、それを容易に壓搾の出來る泥にして了ふだけの水は持たない。貯水池は枯れる。そこで更に新しく水を汲みこまなければならない。が、どこから其の水を持つて來て、どうしてそれを汲みこむか。私はそれが分つたつもりだ。

私は非常に細心な注意をして、蟬の井戸を其の出口から底まで掘つて見た。すると、其の底の方に、即ちどんづまりの室の壁に、鉛筆程の大きさか或は藁程の大きさの生きた木の根がはつてゐた。此の根の見える部分はごく僅かで、漸く貳ミリメエトル(七八分)かに過ぎない。が、其の根は其のままいの土の中にはいりこんでゐる。此の泉源は偶然そこで出會つたのだらうか。それでも幼虫が特にそれを探したのだらうか。私は、よく注意して穴を掘りさへすれば、大抵此の根が出て來るところから多分此者の方だらうと思つてゐる。

さうだ。蟬の幼虫は其の將來の煙突のはじまりである其の住居を掘るのに、先づ新しい木の根の直ぐそばを探すのだ。そして其の根の一部分を裸にして、それを突き出ないやうに壁と平らに運はして置くのだ。壁の中の此の生きた部分、これが、私の思ふには、小便袋の貯へを必要に應じて新しくして行く泉源なのだ。其の小便袋が乾いた粉々の土を泥にするので盡きると幼虫は其の住居まで降りて來て、壁に嵌めこんであるタンクに其の吸盤をあてうんと飲みこむ。水筒が一ぱいになると、又昇つて行く。そして又其の仕事を始める。堅い土を引搔きいゝやうに濕して、其の土を泥にして、それを壁に壓搾しては洞の通路を造つて行く。ざつとこんな具合で進んで行くのだ。直接觀察は出來ないから仕方がないが、ものゝ理屈と事情とはどうしてもさうでなければならない。

三　蟬の變態

出口の戸があけられて、大きな錐であけられた穴のやうに、口あんぐりとあいたまゝ見棄てられる。暫く幼虫はあたりを迷つて、何れかのちよつとした草葉が、たちぢやから草の繁みが、何にかの草の莖か、灌木の小枝かの、空中の支柱を探して歩く。それが見つかる。すると、そこへ昇つて、頭を上の方にして、前足の鉤でしつかりとそこへしがみつく。此の鉤は閉ぢたまゝもう放す事はない。ほかの足は、若し其の小枝の格構が許せばやはり同じやうにしてしがみついてゐる。が、若しそれが出來なければ、二本の鉤だけでつかまつてゐる。それが濟むと、暫く休んで、其の間に其のつかまつてゐる手足が動かないつつかい棒のやうに硬直する。

先づ中胸か背中の眞中の線から裂ける。其の裂れ目の緣がゆつくりと離れて行つて、中の虫の淺青い色が見えて來る。すると直ぐに前胸も裂ける。此の縦の裂目は、上の方は頭の後方に到り、下の方は後胸に及んで、それ以上には伸びない。頭の被ひが目のところで十文字に裂けて、赤い單眼が出て來る。からして見えて來た青い部分は脹れあがつてゐて、殊に中胸には瘤が出來てゐる。そこには緩い動悸がある。血液の干滿によつて代る代りに脹れたりへこんだりする。此の瘤は最初は目に見えないやうに働いてゐるが、それが、ちよつとした抵抗に合ふと其の十字の線に滑ふて鎧を飛び出させる楔なのだ。

脫皮は直ぐに濟む。もう頭が自由になつた。吹嘴と前足とがだん／＼に其の鞘から出て來る。からだ全體が、腹面を上にして水平になる。大きな口をあいた脫殼の中に、最後に出て來る後足が見えて來る。羽は汁で脹れてゐる。まだ皺くちやになつてゐて、弓なりに曲つた發育不完全の手足のやうだ。變態の此の第一相が終るには十分間で足りる。

次ぎには、もつと長い時間の、其の第二相が來る。蟬はもう其の膜のさきが相變らず鞘の中にはいつてゐるほかは、全く自由になつてゐる。脫殼はまだしつかりと小枝にしがみついてゐる。乾いて堅くなつたまゝ、最初の態度を其儘保存してゐる。そしてこれが其の次ぎに起つて來る事の支柱になるのだ。

まだ脫けてゐない腹のさきで脫殼に支へられたまゝ、蟬は頭を下にして垂直にぶら下る。黃味を帶びた薄白い青い色をしてゐる。今までは曲つた手足のやうに縮まつてあた羽が、そこへ溢れて來る液體の力で眞直ぐになつて伸びる。此の緩かなそして微妙な作用が濟むと、蟬は殆んど目に見えないやうな運動でもつて、腰の力で起きあがつて、頭を上にして普通の姿勢に歸る。前足は空になつた脫殼につかまつてゐる。そして遂に脚のさきが其の鞘から脫ける。これで脫皮は濟んだのだ。すつかり

で其の仕事が半時間かゝつた。

蟬はこれですつから其の殼の中から出たのだ。が、それが今直ぐになる本當の蟬とはどんなに違つてゐる事か。其の羽は重くて、濕つてゐて、透明で、薄青い脈が通つてゐる。前胸と中胸とが僅に黴く栗色がゝつてゐるのみで、其他はところ〴〵白味がちの薄青い色をしてゐる。此の弱い虫を丈夫にして色をつけるのには、暫く空氣と日光とに浴びさせなければならない。二時間と云ふものは殆んど目に見える程の變化して過ごす。前足の爪だけで脫殼につかまつて、其の弱い青いからだをしたまゝ、ちよつとした風にでもぶらぶらと搖れてゐる。遂に其の栗色化が始まり、益々それが強くなつて行つて、忽ちの間にそれが濟む。それが半時間だ。朝の九時に小枝の上に昇つたのが、正午半頃には、蟬はもう私の目の前を飛んで行く。

脫殼は其の裂目のほかはもとの儘殘つて、秋の暮れの雨風もそれを落す事が出來ない程しつかりとしがみついてゐる。そして猶幾月もの間、冬の間までも、往々此の舊い脫殼が幼虫の變態をした時の姿勢其儘で小枝に引つかゝつてゐる。乾いた羊皮紙のやうな其の堅い質が、こんなに長い間其の遺骸を保存させるのだ。

四　蟬の樂器

私の近所に私は五種の蟬を集める事が出來る。それは Cicada plebeia, Lin. と C. orni, Lin. と C. Rematodes, Lin. と C. atra, Oliv. と C. pygmaea. とだ。最初の二つはごく普通で、あとの三つは田舍の人も殆んど知らない位にめつたにゐない。第一の普通の蟬は五種の中で一番大きく、一番よく知れ渡り、そして蟬の發聲器官と云へば普通に此の蟬のそれが書かれてゐる。

雄の胸の下に、後足のすぐ後ろに、二つの半圓形の幅廣い板があつて、其の右の方がちつと左の方の上に重り合つてゐる。これがあの喧しい器官の蓋だ。それを起して見よう。すると、一方は右に、もう一方は左に開いて、此のプロヴァンス地方では『本堂』と云ふ名で知られてゐる二つの廣い洞が出來る。そして其の全體を『お寺』と云つてゐる。此の洞は、前の方はクリイム色の薄い柔い膜で終り、後の方はシャボン玉のやうな光彩のそしてそこから『鏡』と云ふ名のついた堅い薄皮で終つてゐる。

此のお寺と鏡と蓋と、普通には、これが音を出す器官だと云ふ事になつてゐる。そして、此のプロヴァンス語で、あの男は破れ鏡を持つてゐると云へば、へたな歌ひ手の事であり、又へぼ詩人の事にもなる。が、其の音響は此の衆俗の信仰を裏切つてゐる。此の鏡を毀しても、鋏で蓋を切つても、又前の方の黃色

な膜を破つても、さうした傷のために蟬の歌はやまない。それはたゞ其の聲を變へて、ちよつとそれを弱くするだけの事だ。本堂は反響の器官だ、聲は出さない。たゞそれを其の前後の膜の顫動で强めるのだ、そして又其の多少開いた其の蓋で聲を變へるのだ。

本當の發聲器官は別にある。そしてそれは素人にはちよつと見つけにくい。本堂の二つの室のそと側に、腹と背中とが一緒になる角のところに、角質の壁で限られてそして凸んだ蓋で蔽はれてゐる切口がある。それを「窓」と呼んで置かう。此の窓は、隣りの本堂よりも餘程狹くはあるがしかし深い一つの洞、即ち發音室（サウンド・チヤンバア）に續いてゐる。後翅の根もとの直ぐ後ろに、ちよつと卵なりの輕い突起がある。それは、どす黑い色をしてゐて、其のまはりの白い毛の生えた外被の間に際立つて見える。此の突起は發音室の外壁なのだ。

そこを大きく切り開いて見よう。すると、發音器即ちシンバルが現はれて來る。それは、白い卵なりの小さな乾いた膜で、そと側へ中だかになつて、此の大きな直徑の一方から一方に三四本の栗色の脈の一束になつたのが辿り、此の脈のために彈力を與へられて、そして其のまはりは堅い緣にくつついてゐる。今、此の中だかの鱗のやうなものが、中の方から引つぱられて少し凹んでいびつになつて、そしてその彈力性の緊のために忽に最初の中だかに歸るものと想像して見よう。其の結果は此の凹んだのが脹れた事からパチンと云ふ音が出るだらう。

が、どうして此のシンバルの中だかが凹むのか。それには、お寺に歸つて、本堂の前にある黃色い膜を破つて見よう。するとそこに、薄オレンヂ色の二つの大きな筋肉の柱が、腹の眞ん中の線の上にＶ字形に組んで立つてゐるのが現はれて來る。此の二本の肉柱は上の方が斷ち切つたやうに急になくなつて、そして其の斷面から短い細い紐が出て、それが各々其のシンバルと結びつきに行つてゐる、

これが其のごく簡單な器械の全部なのだ。二本の肉柱が引つついたり、離れたり縮まつたり伸びたりする。すると、其のさきから出てゐる紐で、各々其のシンバルを引つぱつて、ちよつとそれを凹ませては直ぐに又それ自身の彈力性でもとに歸らす。かくして二つの發音膜が振動する。

果して此の器械が有効なものか、即ち死んだしかしまだ新しい蟬でも鳴かす事が出來るかどうか。それを知りたいとあればごく簡單な事だ。ピンセットで此の肉柱の一本をつかまへて、それをそつと引つぱつて見るがいゝ。死んだ蟬はよみ返つて來る。引つぱるたびにシンバルの鳴る音がする。だがそれは、生

きた蟬が其の反響で響かすやうな聲量はない、ごく貧弱なものではある。しかし其の音の根本的要素は解剖學者の此の人工によつてゞも得られるのだ。

こんどは、それと反對に、此の音樂狂ひの生きた蟬を捕まへて、それを指でいぢり廻はして、今までそれが木の上で生の歡びを歌つてゐたのと同じやうに喧しく其の不幸を歎くのを急にとめようとする。其の本堂を毀したり鏡を破つたりしても無駄だ。が、前に窓と名づけて置いた横の方の穴から、針をさしこんで、發音室の奥のシンバルを突いて見るといゝ。何んでもないやうなほんのちよつとした穴をあけただけでも、其のシンバルは默つてしまふ。かうして一方のシンバルにも同じ手術をすると、目に見える傷もなしに前と同じやうに丈夫な蟬が、忽に啞になつて了ふ。

しつかりと嵌めこまれた堅い一板の蓋は動かない。お寺を閉けたり閉ぢたりするのは、腹其者が高くなつたり低くなつたりしてするのだ。腹が低くなると、蓋は本堂と發音室の窓をきちんと閉ぢる。そして音は弱くなり、鈍くなつて、抑へられて了ふ。腹が高くなると、本堂は開き、窓は自由になつて、音は其の全力をあげて出る事になる。かくして、シンバルを動かす筋の收縮と同時に起るすばしこい腹の起伏が、弓のいそがしい摩擦からでも來るやうに思はれる音のいろ〳〵と變る廣さを決定するのだ。

天氣がよくて暑いと、正午頃に、蟬の歌は短いボオズを間に置いた數分間續く節々に分れる。其の節はふいと始まる。早いクレシエンド（聲音漸加）でもつて、腹がだんだん早く振動して行つて、一番高い音まで行く。そして數分間其の同じ力を維持して、こんどはだん〳〵弱くなつて、腹がもと通り靜かになるに從つて低くなつて行く顫音に變はる。腹の最後の動悸と共にボオズが來る。其の時間は氣壓の具合に變はる。そして急に又新しい節が始まる。最初の單調な繰返しが始まる。かうしていつまでも續いて行くのだ。

時としては又、殊に蒸暑い夕方になると、蟬はもう太陽に醉つて其のボオズを短くし又全然それをなくしたりする。其時には、其の歌はたゞクレシエンドとデクレシエンドとも交互にして續いて行く。其の歌の始まるのは朝の七時か八時頃で、其のオオケストラがやむのはもう暗くならうとする晩の八時頃だ。一日鳴いてゐるわけだ。が、室がくもつてゐるとか、あんまり涼しく風が吹いたりすると、蟬は鳴かない。

五　生の喜び

蟬の樂器の構造はそれで分つた。が、一體此の歌の目的は何

んだらうか。何んであんなに喧しく鳴き叫ぶのだらうか。すると、必ず、次ぎのやうな答が來る。それは雄が雌を呼ぶのだ、戀の歌なのだ、と。

毎年の夏、二ケ月の間、私は蟬を見、其の聲を聞いた。喜んで聞きはしないが、しかし多少の熱心を以てそれを觀察した。私は此の蟬がプラタアヌの滑つこい皮の上に列をなして、皆んな頭を上の方にして、雄も雌も二三寸離れてごちやまぜになつてゐるのを見た。

彼等はそこへ吸盤を植えつけたまゝ、ぢつとして飲んでゐる。日が廻つて其の影が移るに從つて、彼等も又ゆつくりと横歩きに枝のまわりを廻つて、一番よく照らされてゐる一番暑いところにゐる。其の吸盤が働いてゐる間、即ちかうしてひつ越しが續いてゐる間は、其の歌はやまない。

雄が雌を呼ぶのにこんな長い歌を歌ふ必要があるだらうか。どうも私にはさう思へない。今そこに、雄と雌とは直ぐそばにゐるのだ。肱つき合はしてゐるものを二ケ月もの間呼び續ける事はない。又私は一番喧しいオオケストラの中へ雌が飛びこんで行くのを見た事がない。然らば、無感覺な雌を魅惑し感動させる方法かと云ふに、それも疑はしい。私は雌が雄の歌を聞いて嬉しさうにしてゐる何んしのるしをも見た事がない。

小徑の小石の上で、青い羽のばつたがいゝ氣持に太陽に醉つて、其のあと足の太つた腿で翅鞘の凹凸になつた緣をこする時。雨蛙があらしの近づいて來る時に、灌木の葉の上で咽喉を脹らして、其の浮囊を鳴らす時。彼等はそこにない其の戀人を呼ぶのだらうか。決してさうではない、ばつたの鳴くのは殆んど聞えるか聞えないかの聲だ。そして雨蛙の大きな聲も何んの役にも立たない。戀人がそれを聞いて走つて來ると云ふ事はない。

昆虫は其の情熱を示すのに、かうした喧しい表現の必要があるのだらうか。大多數の昆虫を見るに、其の戀人同士は默つて相近づく。私は、ばつたのヴイオリンをも、雨蛙の笛をも、又蟬のシンバルをも、たゞ生の喜びを示す方法としか見ないものである。

蟬は其の穴から出て二三週間すると、即ち七月の半ば頃になると、その卵を産む。木質の層が淺くて、髓の多い、藁位の太さから鉛筆程の太さの、細い枝に卵を産みつける。

その卵は象牙のやうなぴか〳〵する白い色をしてゐる。兩方のはしが圓椎形になつてゐて、細長く、長さ二ミリメエトル半（八厘餘）幅半ミリメエトル程の大きさだ。これが幾つも重なり合ふやうにして、列になつて木の枝の中に産みつけられる。

九月になると、其の象牙のやうなぴか〳〵する白い色が小麥のやうなブロンド色になる。そして十月の上旬には、前の方に、はつきりした丸い栗色の點が二つ出て來る。これは此の虫の目なのだ。此の二つの光つた目と、後の方のはしの圓椎形とが、此の卵を鰭のない魚と云つた風に見せる。

十月の末に、此の卵の中から、やはり小さな魚と云つた方がいゝやうな小さな虫が孵る。そしてこんどは、腹鰭のやうなものがあるので、猶更魚によく似てゐる。其の鰭のやうなものは鞘の中にはいつてゐる前足だ。此の鰭で、虫は卵の中から出、又木の中の穴から匐ひ出すのだ。ほかの四本の足も、又觸角も、やはり鞘の中にはいつてゐる。環節ははつきりと見える。殊に腹の環節はさうだ。そして全體が毛一本ない、すべ〳〵したもんだ。私は此の樣な虫を第一幼虫と呼んで置かう。

此の第一幼虫が穴の中を滑り滑り出て來る。そして其の穴から全く出て了ふと、其のかぶつてゐる鞘が裂けて、普通の幼虫、即ち小さな蚤のやうなのが出て來る。此の小さな蚤は最初は白いが、やがて琥珀色になる。かくして此の小さな蚤は、其の腹のさきだけをまだ鞘の中へ入れて、頭を下にひつくり返して、ぶらん〳〵と風のまに〳〵動いてゐる。そして早いのは半時間か、或は二三時間か、或は又どうかすると翌日までも、かうしてぶら下つてゐて、遂に地に落ちる。そして此の幼虫は地にもぐつて、それから四年の間、其の蚤のやうな形のまゝだん〳〵と生長しながら、暗い地の下をさ迷つて歩くのだ。

蟬の空中の生活は、ごく短い。私は先きに最初の蟬が夏至頃に現はれると云つた。それから一ケ月も過ぎると、其のオオケストラは最高調に達するのだ。遲い奴になると、尤もそんなのはめつたにないが、九月の半ば頃までも其の貧弱な獨唱をやつてゐる。それが蟬の音樂會のお了ひだ。でも、蟬が穴を出るのは皆んなが同じ時にではないのだから、九月の歌手が夏至頃の歌手と同時代のものでない事は明らだ。で、其の中間をとつて蟬の空中ので生涯を五週間としよう。

地中の五ケ年の苦役と、明い太陽の下での一ケ月の饗宴とこれが蟬の生涯なのだ。其の一ケ月を、蟬は氣違ひのやうになつて生を喜び呼ぶのだ。そんなに喧しく鳴き叫んだところで、それで其の喜びを歌ひきれる筈のものぢやない。

美しき姉を求めて

（ロシア旅行奇談）

富永カンデンスキー

（一）ザバイカル州へ、

〇

カン、ゼエンスキー（貫・善助）には、腹ちがひではあるけれど、二つ上の美しい姉があつた、そして、その頃、極東共和國の首府、チタに居た、そこから、カンに來るやうにと手紙と金が來てゐた。

カンはまだ、その姉を見た事がなかつた、只、數年前、カンがまだ京都の中學に居つた頃、モスコウから、わざ〳〵とカンに送つて來た寫眞を見ると、姉のマリアは、ウエリカースの代表的タイプの婦人と見へるカンの繼母に似た、美しいロシア生粋の娘であつた、長い頭髮を振り分けに双の肩から兩乳のあたり迄、たらせて、白い草花を手にした姿が、又、油畫の西洋の女の兒、そのまゝに可愛いゝのだつた。

然し、其後、ロシアは恐ろしい革命の大さわぎが起りモスコウの繼母から、日本のカンへの仕送りは勿論の事、一切の消息はとだへてしまつて、カンは仕方なしにベースボールの渡り鳥みたやうな事迄して、暮してゐたのだが、今度、突然、チタからカンに來た日露兩文の手紙によると、カンの繼母は革命の騷ぎの中に倒れてしまつて、今年、丁度二十歳になつたカンの姉は、今チタに來て居る、何をしてゐるんだか分らないけれど、とにかくカンにこうした相當の旅費を送つてよこす位だから、相當に何かやつて居るに相違ない、その手紙には「日本でゴロ〳〵して居るよりも、ロシアに來て、ロシアの新學校制度の教育をうけた方がよくはないか、――たとへ、カンは日本人として生涯を送るにしても、又はロシア人として今後働くにしても……」と書いてあつた。

一體、カンは日本人なんだか、ロシア人なのだか、どちらなのかそれがカン自身にもハツキリして居ないのだ。

カンの母さんだけは確に分つてゐる。母さんは、中央亞細亞ギルギース、土人の酋長で、汗の敬稱をもつて居たカン・ゼエニンの娘である。ゲオクテペの激戰に、カン・ゼエニンは、ロシアの總帥スコベレフ將軍の馬を射倒して、驍名を天下に轟かした勇士であつたが、大敵に包圍されて行衞を失ひ、此世に只一人の娘、キシカを殘した、キシカ即ち、カンゼエンスキーの母さんは、其後、落魄して、無理にサマラカンドのロシアの警察署長の「かこひもの」にされて居た、ある時、何かその署長、レペデワ將軍の御機嫌をヒドク損じてしまつて、カンの母さんは、生れたばかしのカンをつれて、遠い西伯利をさすらひ日本の神戸に渡つて來た。やがて、母さんは死んでカンは憐れな異境の孤兒になつてしまつたが、近所に暮して居た日本の「おぢさん」達が、この事をロシアに知らせたものと見へ、ロシアからは、レペデワ將軍の本妻、即ちカンには繼母にあたる人から、御金が來るやうになりカンはそれで大きくなつた。「貫善助と云ふ立派な日本名前も持つて居るし。日本の國籍簿にものつて居るし、頭髮も眼玉も黑々してゐるし、どこから見ても、立派な日本人のタイプで、一寸もロシア人くさくない。勿論、日本にも、今現に、大泉コクセキ君と云ふ、あまりロシア人くさくもない自稱混血兒が、威張つて居るのであるから　カンも一寸も遠慮する事はないのであるが、カンが神戸の小學校に上つた時ある日、自分はロシア人だよと、友達に口走つてから、「ロシア坊、どうしや坊、どうした坊」と散々にからかわれて以來はコリ〳〵してしまつて、自分がロシア人の子だ等と、決して他人に告げた事もなかつた、で、どこへでも日本人で通るがまゝに、今日まで、通つても來た、只、カン自身にも、サマラカンドの警察署長の「かこひもの」が、どうして、日本人にソツクリの兒を生んだのだか分らない、如何に母さんは元來人種學上日本人に近く又實際日本人によく似て居るキルギース族だと云つても、父さんはロスケなんだから、眼の色位、變つて居さうなものだと、カン自身も、幾度も、鏡をのぞいて見たけれどトント、合點がゆかない、只、今度カンに取つては生れて始めてのロシア歸りのこの旅によつて、何か、自分の身の上の秘密が明白になるやうな氣がして、又、それをあからさまに知る事が、恐ろしいやうな心地がするのであつた。

○

然し、とにかく、カンは、何人かの「混血兒」には相違ないと見へ、多くの混血兒の場合に見られもするやうに、大分、馬鹿で突飛である、從つて色々の珍な逸話をもつて居る。カンが今度の長旅に、計らずつれ合ひとなつた嵯峨根先生と始めて川合

つた時の出來事なんかも、中々に振つて居る。

その頃、カンは實際、姉の手紙にもある通り、京都の中學にゴロ〱してゐた。ある年の春、カンはそのクラスのボートの選手に推された、そして畫のやうな琵琶湖の水面でレースをやつて、見事に負けた。負けぎらいのカンはカン〱に怒つて、味方のクリューの不甲斐なさを罵り乍ら、その場から京都の寄宿舍迄、馳けてかへろうとした。小關峠をこへ、山科の禪町をすぎて、蹴上げあたり迄かけつけた時、もう暗くなつて、ソロ〱腹がすいて來た、自暴のヤン八に成つた時には、日本人はヤケ酒と云ふものを飲むときいて居た彼は、とある道ばたの居酒屋の縄暖簾をくゞつてメチヤにのんだ、何しろ空腹の所へ、生れて始めて大量のアルコールをつぎこんだので、カンは見る〱ベレ〱に酔つ拂つて、三條通りの電車道にブツ倒れた。すると、柔い手が、カンの頸を抱き起し、やさしい聲が、カンの耳ばたで、聞へた。

「マア、可愛いらしい書生はんやこと、あんた、こんなとこで寝んねすると、風邪を引きますさかいに、内へおいでやす」

カンは、夢心に辨天様に抱擁されたやうに、又久しぶりで死んだ母さんの、胸に抱かれたやうに感じた、そうして「花の家」と染出した紺の短い暖簾をくゞつた事も、赤い絹夜具の上にフウワリとねかしつけられた事も、カンは何も知らなかつた、が今度、彼がフト氣がついて、我にかへつた時には、それは大變な事になつて居た、カンの童貞が犯されて居たのみならず、大聲で怒鳴りこまれて居た。

「こんなとこに、かくれて居くさつたのや、」

「ナーンだ、なんだか、變だと思つたら、どこかの青二才をくわへこんで散々ふざけて居やがつたんだナ」

六枚屏風のかげから、その夜、その遊女にふられた御客と、御客の小言をうけて、ひろい屋方中をさがし廻つて居た「ヤリ手の婆」の、そろいもそろうた白髪頭が、並んで見へた、可愛そうに、眼に見へないが、黄金の鎖でその美しい肉體も、女の魂である戀愛をも悉く縛られて居るカンの辨天様は、むごい〱鬼の「ヤリ手婆」に、白魚のやうなその腕を引きずり起され、艶やかな寝みだれ姿もなよ〱とカンには別れを惜しみつゝ

「又、明晩、キツト來ておくれやすや、まつて居ますエ」

とさゝやいたが、若い若いカンは、それ所のさわぎでなかつた、キマリの悪さと、恥かしさと一パイで、狼狽てゝ、紺がすりの袷を、着こんで、そこにあつた、袴とサルマタを一束に、抱へて逃出すハズミに、その御客の白髪頭にイヤと云ふ程、打つかつた。御客はふられヤケ酒くさい息をふいて、カンの胸倉に喰

つてかゝり、
「この無禮者め天に代つて筆誅を加へるぞ」
とキビしくも怒鳴りつけた、カンは只々閉口頓首して、
「私は、全く、何も、何も知らなかつたのです、今、一寸强チンされた計りです」
と答へた、スルト、白髮の御客はこの强チンの一句に大に興を催したと見へ、急に手を打つて大聲に笑ひ出した、
「イヤ、その强チンが振つて居る。その强チンを酒の肴に君とあらため、仲直りに一パイ呑もうじやないか」
と云て、きかない、カンはしばらく、恐縮して相手になつて居たが、やがて醉漢のスキを見て、ドン／＼逃げて歸つてしまつた。
其後、カンはもう／＼コリ／＼して二度と、危險な辨天様に打つかるやうな地帶へ近よる事もさけて居たが、全く意外な所で相手の白髮の御客に邂逅した、それはカンが、京都の中學を途中でよして東京に來て、麻布の獸醫學校に腰をかけて居た時かしま廣告か何かの事で、日比谷の××新聞社に出かけ、一寸した行違ひから、馬鹿で短氣なカンは、忽ち受付係と喧嘩をオツ始めた、スルト、其時、丁度出動して來たその社の主筆が、仲裁かた／＼、窓口によつて來たが、カンを見ると忽ち、「ヤア、君、君」と笑ひ出した、カンも主筆の顏を見るなり、ブツと吹き出してしまつた、成る程、「花の家」で、辨天様に浮氣されて相手の無禮者のカンにきびしくも筆誅を加へようとしたゞけあつて、これは又、名だゝるロシア通の嵯根先生であつた。
それからカンはその新聞の配達もやつたし、嵯根先生の家へ遊びに行つた事もあつた、で、今度、カンはいよ／＼チタへ立つ事となつたので、嵯根先生ところへ御別れに行つた、嵯根先生も又しばらくぶりで、革命後のロシアを見物に出かけるやも知れぬと云つて居た。
「私は一寸知り合ひのものがチタに居るので」とのみでカンは自分の身上の事を話さなかつた、嵯根先生も立ち入つて尋ねようとも、しなかつた、たゞ「あの時は、京都の支局へ一寸、編輯の打合せに行つたのだ、今度は又ハルビンかマンチユリあたりでゞも、君と出合すかも知れんネ」
そう云つて、「花の家」の昔を忍びながら例の調子で大聲に笑つた。

○

その頃はもう、西伯利のどの地方でゞも、反過激派軍が悉く駄目に終つて、チタを中心としたプラゴヴエスチエンスク、ウラジオストツクの三赤色政府の鼎立連絡が成立してゐた、只、外蒙古に入つたウンゲル將軍の白色反過激派の一派が、活佛を

かついで、何かたくらんで居るに過ぎなかつた、之等の三赤色政府は日本と通商もし、又正式の承認を得たいために、極力日本人に好意を示し、又極東ロシアのどの地方の利權でも、その條件如何によつては、日本に讓らふともして居た、現にカンの姉からカンへの手紙と金が、チタから一度京都へ來て。それから東京のカンへ又轉送された程、西伯利の秩序は回復し日本内地とも、自由平和に交通往來が出來る安定さがあつたのだ、只殘す所はウラジオの日本軍撤兵實行によつて、極東ロシアに於ける「赤色の春」が正に來ようとして居た。

それは白楊、菩提樹等の木々が、北滿洲の晩い春に目ざめて鮮かな綠の若芽を吹き出した五月の中旬であつた、ハルビンのプリスタン小公園の一隅に木柵をめぐらして、子供のための運動器械なんかが設へてある、そこにロスケの可愛ゆい子供たちは大きな花傘のやうな飾り帽子を冠つた母さんや、もう早や夏のうす絹の下から、白い膚をすき通らせた、小さい女靴の足どりも溌溂な姉さん達につれられて、又は、みじかいズボンの下から可愛ゆい膝坊子小僧を現した腕白なお友達とつれ立つて、その運動場に群れて遊んで居た、あるものは一隅にある急角度のすべり臺を下から上へと逆に走り上らうと競ふて居た、ロスケの子供のみならず、長服の裾をブラ〱させた支那人の子供も交つて、ズーツと遠い所から、バタ〱とかけて來たその勢でうまく、急角度のすべり臺を走り上つて、頂上の板の上に到達したり、時にはしくじつて、臺の上をすべりころび、キヤツ〱と騷いで居た。

そこへ、いたづらものゝカンゼエンスキーもやつて來た。カンはハルビン迄來て計らず神戸時代のベースボールの友人に會ひロシアへ入るには、日本のパスポートが入用だときかされた、で、新市街の領事館へ行くと、カンの寫眞と、戸籍謄本が入用である上に、カンの身元をよく調べた上でなきや、パスポートは中々渡せないと、館員が云ふた、カンはもう姉からの金をつかいはたして、殘りすくなになつて居るので心細くもありガツカリして、氣をくさらせた、その氣はらしに公園へやつて來たのである。

所が、馬鹿で、突飛なカンの事だから。小供のさわいで居るのが、面白くてたまらなくなつた。そして、よい年をし乍ら、又、大きな身體をし乍ら、カンも小供に交つて、同じやうに走つたり、スベツたりし始めたが、カンはいつの間にか、自分はロシア人だと云ふ事を忘れてゐた、あんなにして、ロスケの小供も、支那人の小供も。うまく、臺の上へ走りつくのに、オレが彼等にまけると、日本の恥になる等と、日本人の小供を代

表したやうな氣もちになつてしまつた、のみならず、そこには又、美しい支那の娘達が、一文字に拔きそろへた、ひろい白い額に、芙蓉の花片のやうな紅をさした頬をならべて見物してゐた、小供のすべつたり、上りついたりする毎に、彼女達は、その繻の色衣をひるがへして、喝采したり、笑つたりした。すでに性に目醒居つたカンは、雌の動物の前で、雄がよくやる示威(デモンストレーション)運動のその心地になつた、そして、一生懸命走つたり、すべつたりしたが、だん／＼、やり方が、激しくなつて來た、その頃にはもう、ロスケの小供も、支那人の小供も、飛入りの選手に氣をのまれて、中止して居たが、それが反つて、カンには得意の獨占場のやうに思はれた、調子にのつたカンは、とう／＼すべり臺のスグ下から、身を跳ね躍らせて、只一息にその急角度のすべり臺の上に、かけ上ろうとした、三回目に彼がもう最後のワンステップを、頂上の臺の上にかけようとした瞬間に、ドンと右足の踵の上を、電氣でショックされたやうに感じた、實際、彼は頂上の板の上に立つた時、あたりの笑つて見て居る小供の中のだれかゞ、彼のうしろから棒でゞも打つたのでないか、それとも、硬いベースボールの球でも、打ちつけたのではないかと、キヨロ／＼あたりを見廻したほど、異樣の激衝を感じた、然し、カンは全く、無理な急速な脚の伸縮運動をしたゝめに、アヒレス腱が、踵骨の上の一番せまい所で、部分的に斷裂したのだと云ふ事を、カンの僅少な、獸醫的智識でゞも知る事が出來た、それがために足首をシツカリと前にのばす事も、うしろへ力を入れて踏張る事も出來なくなつた右足を引きずり乍ら、カンはそれから後は、ブラ／＼の醜い跛行をひいて、旅をしなければならぬ事となつた、この一寸した出來事が、長い旅行中、カンを苦しめたり、又、時にはカンを助けた事が後に分つた、例の峰根先生は、その時、すでに日本を出發して、朝鮮で、朝鮮人參のピン詰を仕入れてゐた。

○

右足をこわしてしまつたカンは、ハルピンに出張所があり、北工場がハルピンから汽車で七時間ほど東方の「海林」驛にあるパルプ製造の材木會社の構内の友人の家で休養する事にした、そこはもうロシア領の沿海州に近い北滿州のはずれで、小さい美しい水のながれ一つを渡ると舊い歷史付の支那町、寧古塔(ニングタ)に近くあつた、朝鮮人の作つて居る水田が、ひろ／＼と打ちつゞき遠方の巨木が人のやうに、又、放たれた羊が雲のやうに見へた會社のトロツコに乘つて山の方へ三時間ばかりも進むとそこには千古斧鋸を知らぬ密林が、蒼々と打ちつらなり、その奥ぶかい嶺、谷を縫ふて、馬賊の大集團がウロ／＼して居た、ある日

は鐵道線のつい向ふの榕樹の見へる村に、某頭目の一團が現れて、人質を幾人とかさらへて行つたと云ひ、時には討伐隊に切られた馬賊の首の二ツ三ツを、耳に繩を通して停車場前の電柱につるしてあつた。

カンは、そのたび毎に、馬賊の首を見物に、ビツコ引きずり〱出かけて行つた、首は大抵泥まみれになつて居たが、よく見ると死色に青くどよんで居ても、生地は若い素朴な顔であつた、髯が奇麗に剃つてあつて、いつも山にくらして居る人間とは思はれない、切り口が丁度、掌位の大きさで、眞赤な肉が柘榴の破れたやうに見えた。

カンの友人は、こう云ふ物騒な土地にある、材木會社の支那語の通譯に雇はれて居た、二年前からの不景氣で多くの雇人が誠られ、會社は殆んど仕事を中止して居た、會社の重役は、始めカンが、雇はれたぬて、見物かたがた、たのみに來たのだらうと思つて頗る横柄にかまへてゐた、然し一向カンの友人も、カンもたのみに來ないので、少し調子の外れたやうな顔をした、そして、どうかして自分の威勢を風來人のカンにも示そうと、ある日、カンを重役室に入れて、大きなテーブルや、うしろにある金庫の前でうそぶいて居る自分を示した。

「この會社があればこそ、この田舎の[illegible]に、日本陸軍は通信隊を駐屯させ、憲兵が十人も居るのだ」

重役は赤い肥つた顔を、重役室一パイの大きさにして大きな机の抽出しから、一封の書類をとり出し、さも誇りやかにカンの眼の前にひろげた、それは、陸軍省と赤く印刷してある罫紙に「この會社の事業は軍事上必要ものと認めるに付、特別の保護を云々」と邦文タイプライターでたゝいたもので、陸軍大臣何々云々と奥書がついて居た、重役は、やがて、それを卷き納め乍ら、又この會社の資本は四百萬圓で、日本の富豪安田家がそんなわずかの金で國家の御役に立つ事なれば結構ですから、と云つて、メチヤメチヤになりかゝつて居るのを引きうけたのだと語つた。

カンは全く感心して聞いて居た、日本の富豪安田と云ふ人に取つては、四百萬圓は、僅かの金であるそうな、その僅かの金で國家の御役に立つならばと云ふ位だから、モツト、大した金を國家のためとかに、ドシ〱投げ出して居るに相違あるまい、日本國中のものはすべて、安田氏を慕うて神の如くに崇拜して居るだらう、と、

重役はカンが大分感心してゐるらしいのに、いよ〱元氣づいて、しまいに、こんな事を云つた

「金は大切である、特にこの頃は人よりも金の方がウント大切であると自分は感じてゐる、ハガキを一本出せば、この頃の若いも

のは、ザラ一面に遊んで居るから、皆よろこんで飛んで來る。然し、金は中々、そうは易々と集つて來ない……で、金の方の都合で、カンの友人のやうな、あつても、なくても、よいやうな人間は、何時でも馘つてしまふまでだ」

○

カンは此言葉をきいてから、妙に自分達、日本にありあまるほどゴロ〱して居る若者は、黄金よりも尙、安つぽい、芥塵にまで、卑下されたやうな氣もちになつて、口惜しいやうな感情がこみ上げて來た。又、こんな所迄海外發展とかに來てゐる友人が、會社の資本金の都合で、何時でも、依願免職で御拂箱となるのが、ホト〱氣の毒になつてしまつた、こんな所へ、厄介になりに來るのでなかつた、チタ行の旅費をかりに來るのではなかつたと思ひ乍ら、その友人の小さい社宅へかへつて行つた、そして丁度おひるの食事にかへつて來たその友人に、重役からきいたまんまを、馬鹿正直にも、カンは話してきかせた。

友人は、へりのない四疊半の、冬はさぞ寒からうと思はれる、しみつたれた室內に坐つて、カンの言葉を笑ひ乍らきいて居た、あぐらをかいた片一方の靴下から親指が頭を出してゐた。

「そう云ふ世の中へ、御互は生れて來たのだから、仕方がないじやないか、自分は、たとへ馬賊の出沒するやうな物騒な北滿洲のはての會社にしろ、とにかく、本當に日本國家のための事業であるならば、死んでもよいと覺悟をしてやつて來たのさ、自分ばかりでない、この會社なんかに居る日本人は皆その意氣込さ、そして、日々、各々その力の限りをつくして働いて居るのだがね、何しろ、黄金萬能、資本萬歲の世の中では、富を作る人間よりも富の方が大切なのだから、景氣が惡くなれば當人は何も景氣を惡くしたわけでもないのに、ドシ〱免職にされる、まア、自分のやうな獨身者はどうにかするが、然し、家族があつて、老人や子供の二三人をも、かゝへて居るものは全くみじめでね……

○

こう語りつゞけて來た時、カンの友人は、妙に昂奮したやうな顏を上げて、更に云ひ出した。

「それにネ、君、僕は妙な事を發見したよ、この北滿の沿線でも、どこでも、守備をして居る日本の兵隊と云ふものは、吾々日本人を守つて居るのでは、ないのだぜ、まア、あそこを見給へあそこに見へる水田を作つてゐる朝鮮人ネ、あれも矢張り日本人なのだが、奴さん達は、いつも、馬賊にやられづめさ、それと、同じやうに、この會社內の日本人はいつ何時資本主側から馘られるかも知れない恐れにあるのだが、一旦、會社から出て

村の宿屋にでも入つたら最後、その馘られた日本人はこの會社へ仇でもしやしないかと、憲兵に睨らまれるし、人數の多い時は、兵隊が、會社の入口あたりに銃をかまへて、用心して居るのだぜ、だから日本人の兵隊は、日本人の××を守つて居るのでないのさ」

「ぢや、何のために日本兵が居るのだイ？」

カンは不審そうに尋ねた、

「それは、會社と云ふ××××を守つて居るのだ、×××××か守つて居ないのだ、只、××大切に守るために、兵隊が居るのさ……××××××××××立つ材料を作る金だネ、一般の日本國民の生活には、關係があつても、なくてもよいのさ」

こう云つて、カンの友人は窓の外に眼をそらした、つよい大陸の陽光をあびて、夏らしい碧空に、大きな五色の幟が、ひるがへつて居た、こうした異郷にあつて鯉幟なんぞは一寸、手に入り難いので、下級社員共は集つて、色メリンスをハルピンからとりよせ、重役の坊ちやんの菖蒲の節句を祝ふために三間余の大吹幟を作つたのであつた、それが、舊暦の五月五日が來たからとて、今日又高い竿の上に引上げられたのであつた。

「あの幟を作る時に、オレは、金も出さなければ、手傳もしなかつた、そんなにして迄、重役の御きげんをとらなくとも、馘りたけりや、いつでも馘れと思つてネ……全く、考へて見ると可笑しいネ、日本人のやる事は、一體、ロシア人なんかでは、どうして居るのかしら、矢張り、革命後でも、温情がらみの、金錢萬能の世の中なのかしら」

カンが友人とこんな話をしてゐた丁度、その日頃、五月の末に、この海林から、あまり遠くはないウラジオに於て妙な事變が突發した、卽ち舊ツアール黨のメルクロフ一派のものが、急に蜂起して、ウラジオの赤色政廳をオツ倒し、久しぶりでロマノフ家の三色旗を、金角灣にひるがへした、海林の驛あたりに殘つてゐる反革命派のロシア人に聞いて見ても、始めメルクロフ等が、機關銃を大通りに引きすへて、ボン／＼やり出した時には、日本の駐屯軍は、知つて知らぬ振りをして見ては居つたが、不意を打たれて、一時、退散した赤色側が、よう／＼に盛りかへして來て、どうやら七分通りも、メルクロフ軍を逆撃しそのまゝであれば、再び赤色政廳のものになると見へた時、日本軍は、急に武力干渉の手をおろし、赤白双方に武裝を解除させ、結局メルクロフの勝利の形で、ウラジオは其手に歸したのだと云ふ風評が、つたへられた、實際、それから二三日して日章旗をさかした機關車が褐色の二等客車、只、一臺を引きずつて浦鹽からハルピンを通つて、チタに入るべく、海林驛を西にす

ぎて行つた、それは、浦鹽で一旦メルクロフのために、捕虜となつた赤色政府の首班アントノフや外務部のポリワノフ等十數名のものを、溫情主義ずきの日本軍が助け出して、日章旗の下に保護を加へ、チタ迄、送りかへしたのであつた、勿論その時は、カンはまだ、友人の社宅に朝寝坊をして居つて、その列車も見なかつた、カンは只、こうした政變のために、又、何か間違が日露の間に起りはすまいかと心配してゐた、のみならず、新聞を見ると、カンのハルビンに居ない間に、かねてカンと、ハルビンか、マンチユリアあたりで、會へるだろうと云つて居た瑳根先生が、この政變のドサクサをかまわずに、ハルビンを通過してもうチタに行つてしまつた、日本で有名のロシア通の事ではあるし、日本の社會團體とも關係のある人だから、ワケなく、モスコウに入つてしまふだろうと書いてあつた、カンは自分ひとりが何だか、とりのこされたやうな氣がした、これはグズ〱しては居られまいと考へたので、跛行のどうも、急によくなりそうにもないもかまつて居られないまゝよ。とにかく、多少の旅費を友人からかりて、ハルビンへかへる事とした。

○

ハルビンに戻つて來たカンははたしてウラジオの政變のために、折角、北滿の野に輝いてゐた平和の春の光陽が、掻き亂され、六月中旬にはもうこの大陸の上に暴威を振ひはじめる堪へがたい夏のあつさにも似た腹立たしい不快と反目が、日露兩國の間に欝々とかぶさつて來たのを知つた、ハルビンにある少さい御用新聞共は、我勝ちにと惡口をたゝき始めた、チタ政府はウラジオ事件の裏面に日本駐屯軍の手があつたとして、日本に對して抗議的文書をよこした、チタへ商賣に行つて居る日本人が皆、捕虜同様に監視されてゐると風評がかいてあつた、日露兩國にふかい緣故のあるカンは、可愛相にハラ〱して居た、どちらも仲よくしてくれゝばよいとこの若いコスモポリタンは、いつもオド〱して新聞を見乍ら、平和を心に念じた、そして、これ以上の面倒の起らぬ中に、又金のなくならぬ中に早く自分もチタへ行こうと考へて、又、新市街の領事館に出かけた。

カンはその時、漸く、神戸の市役所から、ハルビン居留民會氣付で、カンに送つて來た戸籍謄本を受取つてゐた。カンは生れて始めて自分の戸籍謄本と云ふものを見たが、そこにはカンの頭をいよ〱暗くするやうな妙な文句が現はれてゐた、それを見ると、先づ、カンは歸化日本人で、貫氏と云ふ立派な日本の一戸の主人である、それはいゝとして、カンの母さんのキルギース名はキシカと云つたのを、日本に來てから、きし子と日本流に呼んで居たのも、カンはうす〱おぼへて居る、それもそ

の通りよいとして、その母きし子にならんで、父の名を現す所には「不詳」の二字が出てゐる、それによつて見るとカンは即ち「私生兒」である、少くとも、カンの母さんを「かこいもの」扱にして居たサマラカンドの警察署長レベデワ將軍の子ではないらしい。

何人が自分の本當の父さんなのか、カンは何時も心の底に收めて居る不審をいよ／＼ふかくした、もしレベデワ將軍がカンの父さんでないと確にきまると、カンの姉と云ふのは、腹ちがいでも何でもない、全くのアカの他人になつてしまふ、然し、その他人のカンに、久し間、姉の母さんをはじめ、又、今度は姉迄が、こうして金を送つてくれたわけが分らない、これは何か非常に複雜な行き違ひがその間にあるに相違ない、カンは不審の雲にとりまかれ乍ら、プリスタン區のアルテリスカヤ、ウーリツツアのひどい芥塵をあび、走せ交ふ馬車の間を、からくもビツコを引き引き、新市街へと「陸橋（モースト）」を渡つて行つた。領事館前の大通りには、もう夏らしいレストーランの張出しが見えて、青草の床の上にまきちらされたのが、しみ／＼と眼にしゆみ入つた。白ずくめの裝をこらした妖艶なロシア美人が、クリームを置いた小卓を前にして、さも誇りやかに、行人を見下してゐた。

領事館の前には相變らず一人の支那兵が、ゲートルの下に支那靴をはいて、番してゐた、汗が日やけした頸筋に光つてゐた。

それから長い間、カンを待せたあとで、「ザバイカル州へ赴くに付、途中故障なく旅行せしめ、且つ必要の保護を與へられん事を、云々」と書たトリノコの二枚折りがよう／＼に貰へた。

考へて見ると、カンは、このトリノコの二枚折り、只一枚もらうために、隨分と、長い時日を空費したのであつた、ハルビンの日本旅館は、只一夜の泊りだけに三圓以下の所は無かつた。プロレタリアのカンにとつては、この長い間、そうした高價な旅館に居られたものでなかつた、プリスタンの散髮屋と時計屋の合住居して居るせまい家のデツキの上に、ゴロ寢して、まつて居た、時計屋の婆さんは、しなびた茄子のやうな顔で、カンに一日も早く出て行くやうにと、つらくあたつた、散髮屋のオカミは、遊女上りで、いつも、まばゆげに「らんちゆう」のやうな眼をまたゝいて居た、カンが朝寢坊でもしやうものなら、朝一番の御客を逃す恐れがあると、怒鳴りつけた、こうした窮地に居るカンの事なんか、領事館では、一寸も、おかまいなしに、事務を澁滯させて居た。

よう／＼の事で、旅券をもらつたカンは、次に、ロシア側の裏書を、どこでもらいますかと、そのもつたい振つた館員にた

ずねた、スルト、

「浦鹽へ行つて、あそこの日本居留民會から手續をしてもらつて」と云ひ乍ら、フト氣が、ついたらしい其館員は、

「浦鹽へ行くために沿海州の三字を書き入れる必要がある」と云つて、又、カンをまたせた、前ほど長くは、またせなかつたけれど、その三字のために一週間かゝつた、いくら馬鹿のカンでも、西北方のチタへ行くのに、ワザ〳〵東南にあるウラジオへ、ましてチタは全く反對の白色政府を樹立したばかりの所へ、裏書をとりに行く馬鹿が、どこの世界にあるものかと、舌を吐いてあざ笑ふた、そして、つい日本領事館のうら町にあるチタ政府の代表者、アゾールニンのオフイスへ入つて、裏書を求めた、アゾールニンの秘書は、明日來いと云ふた。

○

アゾールニンの方ではチタ政府をまだ承認しない日本政府の旅券を、かつて裏書した事がなかつた、それでカンが今度、始めて旅券をもち込んだので一寸取扱に迷ふた、或はこれが、日本のチタ政府承認の前兆かも知れぬと思つて、とにかく裏書を與へた。

然るに、カンはそれで尙滿足せずに、グズ〳〵云ひ出した、中學で會話の時に習つた怪しい英語と、ハルピンに來てから俄かばかし聞き知つたロシア語の交りこで、カンは云ふた、この頃は、西伯利に入つたばかしの小さい驛で、チタ行の日本人を下車させて、黒パンと水との御仕置を喰せる事が始まつたさうだが、カンはロシア人なのだから、日本人と間違へてそう云ふ事をしないやうに、特別の保證をしてくれろと云ふた、アゾールニンの秘書の雲助みたいな大男は、カンをもてあましてアゾールニンの執務室へ引き入れた、大きなデスクの向ふにはアゾールニンのユダヤタイプの亂髮が、見へたりかくれたりしたカンは、チタ迄行けば、姉が居るんだから萬事分る、とにかくチタ迄、安全に旅をさせろと云ひ張つた、アゾールニンは、どこから見てもロシア人くさくもないカンが、ロシア人だと頑固張るのに驚ろいた、日本はスパイを送るに事を欠いて、こんな微行の靑二才をしら〳〵しくも、ロシア人等とよくも云ひ張らせるものだとアキれてゐた。

馬鹿ものゝカンはこの失敗に尙こりずに、今度は又、その引ハルピン驛の一隅の引込み線に、その乘用車を引き込んで、ウラジオの形勢を見てゐたチタ外務次官コゼニコフに、談判に行つた、今度は列車の中のテーブルの上に、姉から來た手紙をひろげて、ひどくダヾをこねた、コゼニコフの秘書役の白髮の老人も、この一徹な日本の若者の無理を云ひ張るのにもてあまし

た、とにかく、電報を打つて置くから、大丈夫だ行け、途中何か間違が起つたら、皆出て助けるからと云ふた、カンは心の中で、何も間違は起さしないから、だれも出てくれない方がよい心のまゝに旅をさへさせてくれゝばよいのだと思ひ乍ら、その列車PC◆CPと銘打つた青色のボーギーに、所々彈痕が、ペンキでぬりかくされてある大きな車から出た、若いロスケの女書記か、タイピストらしいのが、忙しく働いてゐるのをチラと見た時、カンはもしそれが自分の姉ではないかと思つたりした、

以上二回の試みで、カンはどうやら、自分はどこ迄も日本人に見えて、いくら説明しても、どうしてもロシア人とは取扱てくれないのを知つた。これではチタへ行つても、姉もこまるだらうと心細くなつて來た、同時に自分はレベデワ將軍の血をうけて居ないで、だれか日本人の種らしいと、思つて見たりする事があつた、スルト急に住みなれた日本が一層こひしくなるのであつた。

○

大陸の夏のあくどいあつさが、この旅を一層くるしいものとした、赤い陽光がギラ〳〵と北滿の黃砂の上に炎へ、列車の中は釜の底のやうに息ぐるしく、人々は皆、油汗をうかせて、籠の中の魚のやうに、窓の下に横はつてあへいでゐた、ロシア人の羚皮の匂と支那人のニラの香が、ムツと鼻に蔽さるハルビンマンチュリア間、大約二十四時間の列車旅行のしまいに、灰色服の間抜け面をした支那巡警が入つて來て手まね半分で、カンにも姓名を問うた、カンはこの時は、もうハルビンの泥棒市場で買ふたルバシーカに、アムール通ひの水夫が冠つて居さうなロスキー帽を冠つてスッカリ、ロスケ姿になつて居たので、「オレはロシア人で、中亞はキルギース縣の人、酋長カン、デエニンの孫、カンゼエンスキーだ」とさも得意氣に答へた、巡警はサッパリ、何が何だか分らないと云つた調子で、穴のあく程、カンの日本人づらをながめて居たが、やがて、ケゲンそうに「これか」と一枚の名刺をつき出した、それには、神戸市「岩田商會」とかいてあつた、カンは面倒くさい氣もちになつて、ウン、そうだと、云つてしまふかとも思つたが、然しこんな日本のブルジヨア商人の小僧、手代とゴッチヤにされるのも癪なこつたと思ひなほして、「ウンニヤ」「ウンニヤ」と無暗に手を振つて、列車を出た、カンがもし此時、ウッカリでも、ウンそうだと云ひでもしやふものなれば、即坐にこの巡警に捕まつて、地獄のやうな支那監獄へ打ちこまれるのであつた。何となれば、この名刺の商人は、マンチュリアから西方、外蒙古へとひろい草原をふみこんで、ウンゲル將軍の一味に武器彈藥を賣りつけ、マンマと一

もうけしやふとしたのだが、途中で、きびしく見張つて居る支那巡警にマンマと捕まつて、身も品物も沒收御預りとなつてから、二日目であつたから。

サウエート、ロシアが、ツアール時代の北滿侵略の野望を思ひ切りよくも、一擲して、このマンチユリアを起點として、東に南にのびて居た「東淸鐵道」の一切の利權をば、地主の支那に、かへして、くれてからもう、早や、二年を經過してゐた。

然し、この太つ腹なサウエート、ロシアは、この大した有形物を、一朝にして失つた代りに、又、一層大した無形のあるものを、一夕にして、支那、否、東洋全土の上につかんだ、

勿論、まだ〳〵、その無形のあるものは、形の上に現はれてはゐ來て居ないけれど、こうしたマンチユリア驛のあたりでは、來るべき何ものかの、面影が、すでに、茫漠、朦朧と敏感な人々の心臓の上を、通つて行つた、そのマンチユリア驛の引込線の上に又、日章旗を鮮明に綸き出した綠色の客車が立つて居るのが、一種の奇妙なコントラストをなしてゐた、これは、カンが、ハルビンで聞いてゐた、日本の特務機關の軍用列車であつた。

プラツトホームの上になげ出されたカンの小さい二つの荷物は、カンが跋行を引いて居る中に、稅關の木製の机の上にはこばれてゐた、日本兵の古靴をはいた大きなロスケ、然しまだ若々しくつて、いかにも、トルストイの「イワンの馬鹿」みたやうな、うぶ〳〵しい男が、カンの手荷物に赤い毛のまばらに生へた大きな手をかけて、自分のホテルに泊れ、一泊二圓だと云ふ、カンは口を指して「食ふ方（クーシヤル）」はどうかイ？と問うと、それは別だと答へる、他のロスケの客引きをひやかしてみても矢張り二圓だ、結局、イワンのうしろから、カンはビツコを引き〳〵ついて行つた、

○

小供すきのカンは、スグ、その宿の息子と仲よくなつてしまつた、毛ぶかい其父さんに似た、このロスケの息子は、まだやつと十三ばかりなのに、もう鼻の下には、ウブ毛のやうなものがホノ見へて居るのが可笑しかつた、彼は少しばかり英語を話した、カンを「ヤポンスキー、ヤポンスキー」とよんで、いくら、カンが自分のロスケである事を主張してもきかない、そして、カンが本當に獸醫であるのならば、家の赤犬が耳をいためて居るから、診てくれろと云ふた。

赤犬は宿の中庭（ヤード）に、横になつて居た、ヒドイ、中耳炎で、耳下淋巴線の所に、大きな浮腫さへもが、出來てゐた、ヨード交りのワセリンが、塗りこんであつた、カンは結局、御馳走をウンと喰はせて健康療法に出るより仕方がなかろうと、御茶を濁

して逃げた。

カンはその息子とつれ立つて、マンチュリアの町を見あるいた、この國境の半支那的、半ロシア的の田舍町は、折角復活しかけた西伯利と滿洲との交通貿易が、浦鹽事變のために又妙にコジレたので、あつい夏のひるねの床から、そのまゝ永久に起き上り得ない半身不隨のやうに、活氣が失はれてゐた、支那米の袋に些かばかりの商品をつめた、露支兩國の小商人の姿が、この驛を往復するに過ぎぬのでは、町中は萎びるより他はないと見へた、

とある通りのロスケ式の木造の家の前に「日本軍事委員駐剳所」と、「郡田公館」との二つの看板がならんで居た、あそこに、日本兵が居ると、ロスケの小供は指した、馬鹿のカンには、それが郡田公使の館邸なのか、それとも、郡田公子夫人の商館なのだか、判斷がつきかねた、

そこからしばらく、行つた所の支那家屋の土壁にかこまれて格子障子の見へる戸口に、年増や若いのや、とりどの「日本娘子軍」五六人が、流行も年輩をも超越したユカタの伊達卷姿で鬼ごつこをし乍ら、キヤツキヤツとさわいで居た、カンは、さては、「强チン」の危險地帶が此所にもあるぞと驚き、且つ恐れ乍ら迅速に退却しやうとしたが、足がこわれて居るので、思ふやうに急ぎ得ない、とりあへず、危險豫防法として、「兵隊さんの格好をする事を思ひついた、そして痛いのを我慢して、學校で習つたやうな「廻れ右」、の足どりを見せて、咫尺の間に、とび出して來た娘子軍の手からのがれた、ロスケの息子は、腹をかゝへるやうにして笑ふのであつた、そしてカンは「キツト、日本の兵士に相違ない」と云うた、そこで、カンは又、二十分ばかり、自分はロスケのカンゼエンスキーだと說明したけれど、息子は釋明してはくれなかつた、

よう〳〵の事で、カンは日本の「日の出藥房」をみつけた、そしてそこでホーム石鹼と、下痢止の藥なんか買ふた、

藥房の主人が云ふた、「この春の雪とけに、チタ行の列車が始めてマンチュリアから出た時、この主人は、重油の一車と、藥品の二貨車をつないで、他の日本商人達と一所にチタに出かけた、途中で、汽車の石炭を積込む時に、乘客も、誰、彼の用捨なく、眞黑になつて手傳はせられたのは、全く迷惑至極なことで、白いシャツは眞黑になるし、支那苦力のまねをされては、日本人の威嚴にもかゝわる事であつた」

「さて、こうして折角、もち込んだ藥品を、外國貿易は一切政府のモノポリーとなつて居るので、チタ政府の內務大臣へ賣渡しの交渉中に、例の浦鹽政變の突發のために、先方の日本人に對する態度が一變し、藥品全部を、無法にも、先方の云ひなり

放題に賣らねばならぬ破目となつた、」

藥屋の主人は、こう云つて大息し乍ら、

「自分は、とても、此調子では、今後チタ政府との取引なんか御免だと思つたので、重油車の方は、日本特務機關の將校にたのみ、やう〳〵の事で、身柄だけ、マンチエリアに引きかへした、あとに殘つて居た日本商人共は、今頃、きびしい監視の下におかれて居るであらう、チタの驛に列車生活をして居る日本の特務機關の人々さへ、自由にマンチユリア迄往來し、入用品等をとりよせる事が出來ないので、此頃は、自分の殘して行つた油を賣つて、毎日のパンに代へて居るやうだ、こうなつてしまつては、日本人のチタ行はとても危險だから、カンかんなも、よした方がよかろう」と云ふた。

カンは、宿にかへつて、この事を、そのロスケの宿屋の亭主にはなした、ヒゲだらけの亭主は、イワンと息子と三人で、笑ひ乍ら、カンのあやしい手まね半分のロシア語を聞き分けようとしてゐたが、やがて、こんなに答へた、

「チタの鐵道組合の勞働者には、中々いたずらものが、多いから、日本のブルジョア商人共が、うまい事をしやうと思つて、澤山のりこんで來たのを見て途中で列車をとめて、石炭つみ込みを手傳はせ、ブルジョアにも、勞働のいかにつらいものであるかを知らせる「勞働教育」を加へたのであろふ、然し此頃は、もうチタ迄の間にそんな事をさせたのを聞かないから跋行の、カンは安心してよかろふ……一體、この邊の日本の藥屋は皆、阿片密賣で、身代をこしらへて居る、あの日本藥屋も、チタへ阿片をもちこんで、押へられたのじやないか、その腹立ちまぎれに無法な値段で、とられた等と云つて居るのではないか……チタの日本特務機關は、しきりに、支那人等を買收して、チタ政府の内情をさぐらせたり、マンチユリア迄、報告書をはこばせたり、手先につかつて居るとの事である、カンが、もし、途中でゞも、チタでも、そうした機關の人々に接近しやうものなれば、ロシア側から、非常に疑はれてこまつた事になるであろふ」と答へた、そして、もしカンがチタへ行くならば、チタでは今日支兩國の紙幣も通用するし、ことに舊ロマノフの金銀貨なれば何でも、買へるから、何時でも、入用だけ、兩がへしてやりませうと云ふた。

○

カンは其夜、宿屋のベッドの上に轉々反側して、ねつかれぬまゝに考へた、藥屋の主人の注告に從ふてチタ行を中止しこのまゝなつかしい日本へ引きかへしたものか、それとも、成るたけ日本の特務機關なんかと、ゴッチヤにされないやうに、注意

しながら、姉の所まで、驅け込んだものであろふか、何分、滿蒙政變以來は、その途中が、日本人ツックリのカンに取つては、昔話の大江山の魔街道ほどにも、物騷なやうに思はれてならない、何しろ物心ついてからは、日本以外に長旅をした事のないまだ若いカンに取つては、何だか、こうした風土のかわつた土地にひとり悄然と跛行を引き乍ら立つて居る自分を省る毎に、物悲しいさびしさに襲はれるのであつた、カンは早や、幾分か日本流のホームシックにかゝつてゐた、そして、こうした夜は、神戸で死んだ母さんの事を思ひ出したり、又、京都の中學時代や、東京での新聞配達生活を忍んだりした。

　カンのその夜、幻のやうに思ひ出をたどつた時に、神戸の粗末なホテルの壁に向つて、シク／＼泣て居る母さんが見えた、丁度、カンが今、ベッドの上からながめやる、この國境驛の粗末なホテルの壁のやうに、所々、白堊がはげてをちて居た、母さんが、何故、そんなに泣いてばかり居つたかは、ハッキリ、分らないけれど、何者かをさがして居たらしくある、日本の「おじいさん達」が時々入つて來て、ヒドク困つたやうな顔で、カンの母さんに何か、告げる度毎に、母さんは火のついたやうに泣き出し、一層「おじさん達」を困らせたり、怒らせたやうだ、カンはハルピンで散髪屋のデッキで寢て、一日も早く出て行くやうに、せまられた時、神戸で母さんも、こうした事をせまられて居たのだと思ひあたつた、カンが五ツになつた時、母さんは泣いて、泣いて、泣きつゞけたまゝ死んでしまつた、死ぬ頃には、西伯利から、もつて來たものは皆、賣り拂つてしまつて、殆んど、裸體同樣だつた、しまいには、何でも、せまい、きたない家根裏のやうなところで母さんは、靑白くなつて、動かなくなつた事をカンは、今、あり／＼と思ひうかべた。

　カンの今日の境遇も、死んだ母さんと同樣ブーワなもので、ハルピンで時日を空費したために、海林の友人から借りた小金も、多くは殘つて居ない、このわずかの金で、チタ行の切符を買つたものか、ハルピンに引きかへしたものか、今夜中に決心せねばならぬのであつた、今更、ハルピンに引きかへした所で、又友人か、他人に迷惑をかけねば内地へはかへれない、内地へかへつた所で、又元の苦學生活より他にない、如何に内地を戀しく思つても、金錢萬能の生活社會は、カンのやうな貧黨（プロレタリヤ）に取つては、全く灰色の世界である、どうしてもチタへ漕ぎつけるより他にカンには他に取るべき路がなかつた、此際、未見の姉がカンにとりての唯一のたよりであつた、思ひつかれて、ウト／＼する中に、カンは、まだ見ぬ姉の面影に會ふた、始めは、カンの母さんの靑白い姿が現はれ、それが、カンを奪ひ取

らうとする大きな…と、はげしく爭ふてゐたが、とう〳〵カンの母さんは押し倒されて、カンは、その大きな手の中にをちた、それは裾の寛裕な衣をまとうた大きなカンの繼母のやうに思はれたが、いつの間にか、それが、いつぞやら、カンを抱いてねた京都の辨天樣のやうに變つてしまつた。が、カンの口唇に溺愛的なキスをあびせかけた美しい顏を見るとそれはフサ〳〵した髪を二つに分けて、肩のあたりから、兩乳のフックリした丘のほとりに迄たらした、カンの美しい姉であつた、若いカンはこの抱擁のために、異樣の性慾を感じて、力のかぎりに、姉の身體をだきしめやうとした、スルト、恐ろしく苦しくなつて、カンは寢なれぬ西洋式のベットの上から、ころびをちて、目がさめた、

あくる朝、まだあつい太陽の高く上らない先に、カンは敎へられたまゝに、チタ政府のマンチュリア代官、アレキサンドロフのオフイスへ、國境通過の許可をもらいに、出かけた、アレキのオフイスは、前に小頃の荒地をもつた粗末な二階家であつた、梯子を上ると、カンと同じい目的の男女が、もう、つめかけて居た、正面の室にはピストルの皮袋を腰にしたアレキサンドロフの秘書が、陣取つて居て、カンには、日本のパスポートに貼つてあると同じ、寫眞を自分によこせ、そして、又、明日來いと云ふた、チタ行の列車は、明日、あさ、出るのでないか、とカンが尋ねたらば、イヤあすの午後になつてから大丈夫、間にあふと答へた、

カンは始めて、そこでロシアの勞農兵と云ふものを見た、肩章も、又、腕章も、勿論、勳章等云ふ小供のすきな玩具のやうなものもない、只のルバーシカの上に、彈藥帶をしめた男が、ゲートルや又、百姓長靴をはいて銃をかゝへ乍ら、煙草をふかしてゐた、それぢや、カンがハルビンで、コゼニコフの列車の入口あたりで見た男達も、あれで、勞農兵であつたのだと思ひあたつた、

○

裏書の出來上つたカンの旅券は、手を差し出したカンには渡されずに、秘書役の右手に立つて居た折襟の日本人につきつけられた、アレキの秘書からカンの旅券を受取つた其若い日本人はビックリした顏付きで、ルバーシカ姿のカンを見た、

「あなたは日本人ですか？」

「エ、」

カンはこれ迄、毎度、自分がロシア人だと說明しても、皆で認めてはくれなかつたし、現在、日本に籍ある者として旅券を眼の前につきつけられて居る際、こう返事するより外はなかつ

た、スルト、その若い日本人は、嫌疑な顏をし乍ら、半分命令口調で云ふた。

「私はチタに居る日本の特務機關のもので、今日の汽車で私もチタに歸るつもりなのですが、途中が危險（一寸、聲をおとして）とにかく、一應、こゝの特務機關へおいでなさい」

「どこですか、日本の特務機關は？」

「向ふの郡田中佐の公館です」、

「ハヽア、あの郡田公館、あれですか、承知しました」

すると若い日本人は出て行つた、チタの日本特務機關の通譯が、往復切符をもつて、チタからマンチユリー迄、出て來たのを、ロシア側では、チタへかへる事を喜ばないで、少しゴタ〳〵してゐると云ふ事は、カンのハルビンを出る日の新聞にも出て居た、ソレじや、あの男の事なのだナとカンは、見送り乍ら思ひあたつた。

通譯の姿が、見へなくなると、カンはウロおぼへのロシア語を、昂奮のために一層、まづく、口ごもりながら、アレキの秘書役になげつけた。

「私は、日本の軍隊と何の關係もない、全くロシア人なのです、チタに居る姉、マリア、レペデワをたよつて行くもので、見て下さい、此所に、こうして、姉からの手紙もある……特務機關なんかと一所にしてはこまる、何故、あの日本人に私の旅券を見せたりしたのですか」

秘書役は、あつけにとられたやうな顏をして、カンを見つめて居た。

「御前、本當にロシア人なのか」

日本人からは、日本人かと問はれ、ロシア人からは、ロシア人かと尋ねられるカンは、身の置所にこまつたやうな顏をして、不平らしく、うなづいた、「勿論（カネチノ）」

「御前の事なれば、ハルビンからの電報で知つて居る」

秘書役は、こう云つて席をタイプライターの前にうつした、このピストルを腰にした荒くれ男が、女のタイピストよりも尙小器用な手つきで、ハタ〳〵と、紙片に何か打ち出したのは、全く見ものであつた。

「列車中で、身體檢査に兵隊が來たやうな塲合に」

秘書役は、カンのポケットに手をつき入れるマネをして

「そう云ふ時には、これを見せればよい」

とその紙片をよこした、

○

「タワリシチよ」

可愛そうにも、ロスケの兒であり乍ら、ロシア語を知らぬカ

ンは、よう〳〵、一番はじめの、この一語、切りよめないのであつた、が、然し、跛行を引き〳〵、郡円公館の前通りをさけて、ホテルにかへりつくと、宿の息子がすぐによんでくれた。

「この男は、チタに居る我等のタワリシチ、マリア、レベデワの手紙をもつて居る。はたして、マリアの弟なのか、どうか、疑はしいが、とにかく、チタで下車するまで監視するがよかろう云々、ザバイカル鐵道夜間巡視、特別警察委員宛」

然し、馬鹿のカンには、こんなアイマイな紙切れでも、うれしかつた。チタへさへ行けば、腹ちがいではあるけれど、とにかく、自分の姉が居るのだから、萬事解決がつくと勇み立つて居た。

その日のあつい午後に、カンは例のイワンと、息子に荷物を運んでもらつて、税關の検査をも、無事にパツスして、チタ行列車の三等にのりこんだ、車室内は可成りこんで居た、プラツトホームの反對側には、日本人らしい小男が五六人立つて、一番うしろの箱にのつたらしい若い例の通譯を見送つてゐるやうであつた、今日迄、十八年の間、日本人として暮らし、日本を全く母國と心得て居たカンに取つては、今、日本とは睨み合ひになつて居るロシアに入るために、だん〳〵、一歩一歩と、なつかしい日本味からへだゝり、このシベリアの旅路となつてからは、特に日本人とはなれて居なければならぬ境遇に入つて行くのが、何とはなしに、物悲しく、うらさみしく思はれて、感傷的なカンには、たへられない程であつた、御互に、戦爭さへしてくれなければ、兩方で仲よくして居てくれさへすれば自分も、あゝして日本人と交つて、日本人にも見送つてもらつて、日本流の別れの情緒をしみ〴〵味へるのだのに、兩國の反目のために、こうして、自分だけはなれて。車のすみに小さくなつて居なければ、ならぬのだと、カンは、恨めしげに、うごき出した窓の外を見廻し乍ら、眼のあたりを少し濕して居た。

○

そのあたりは全く、眼のとゞく限りの大平野であつた、あかい、大陸の日は、よう〳〵青草原の野のはてに沈んで、のこんの赫熱が、まだ、草いきれと土くさい匂を車の窓に打ちつけて居た、別にそこには露支の國境であると地圖の上に現はれて居るやうな赤い太いラインが、引かれて居るでもなければ、柵がつらねられて居るのでもなかつた、正しく國境とおぼしき地點に、五町ばかりをへだてゝ、露支兩國の列車が待避線上に立つて、怪獸のやうな形で、睨み合つて居た、支那側の列車からは灰色服に赤襟の苦力(クーリー)兵が、卷ゲートルをだらうとゆるまし乍ら、列車の側の草原で、各個分隊の教練をやつゝ居た、

その號令のかけ聲が、日本兵を見なれ、日本の兵式體操を習つて來たカンの耳に、一寸異様にひゞくだけで、銃の操法から土けむりを立てゝ、地上に脛を下すあたり迄、カンが、深草練兵場や、代々木の原頭で、見たその通りであつた。

ロシア側では、貨車の中央の大扉――それにＤＢＰの三字が現れ、斧と錠をつかんだ双頭鷲のマークが白ペンキでかゝれてゐた――を、オツ開いて、例の軍服の勞農兵が立つて居た、あるものは、小さい空罐をコツプに代用して、何かのんで居た、壁につるした軍用サツクの中から、煙草を引き出して、小さい紙片の中にまきこみ乍ら、口唇でしめしてゐる男もあつた、彼等の笑聲は貨車の内外にひゞき亘り、ロスケ一流の鞣皮の臭氣があたりに漂ふて居た。

この人形のやうに、訓練を加へられて、進退左右する苦力兵と荒木のそのまゝ、自然、そのものゝやうな勞農兵とどちらが、強いだらうか、等と日本の小供の考へそうな事を、頭に浮べ乍ら、カンは列車の入口に立つて、ジツとその教練をながめて居た。

スルト、カンのうしろから一人の男が、カンに「旅券を見せろ」とカンの肩にさわつた、

カンはその男の粗末な服裝に何だか物足らぬ思ひをし乍ら、旅券を出して見せた、カンが今日迄の旅行に、切符等を調べに來た人間は、皆、官僚くさい服裝に包まれてゐた、荷物をしらべたりする男は特に金スジなんかを光らせて、旅なれぬカンの胸をドキ〳〵させた。

それに此男は、まア何と云ふ質素な服裝なのかしら、この男が自分の旅券をしらべる權利があるのか知ら、カンはもう自分がプロレタリアの國土に一歩をふみ込んで居る事をまだ十分意識して居なかつたので一寸疑ひさへもした、

然しその粗服の勞働者の勞働者上りらしい檢査役は、カンの差出した小さい紙切れを見るなり、「フム、フム」と二つうなずいて、カンにそれをかへして立ち去つた、一寸も威張らないのが、カンの氣に入つてしまつた、

やがて列車は又ゴト〳〵とうごき出した、

カンは自分のスグ向ふの坐席に、何となく體度のキビ〳〵した小形の毛唐人が、しきりにカンの方を見て居るのに近よつて行つた、だれでも列車や、汽船で長旅したもの〻は、大勢の中に一人か二人は、キツと何だか自分に話かけたさうにして居る相手自分も又その相手に話かけたいやうな人間を見出すものである、カンの此場合もそうであつた、カンはマズイ英語で話しかけて相手の男が獨逸人だと云ふ事を知つた、モトは獨逸の捕虜

なのだが、今は開放されて、自由にチタで商賣してゐるのだ。「チタに日本人でオンダと云ふ男が居る」とその獨逸人が云ふた「誰れも日本人で拘禁なんかされて居ない、もしチタ迄の途中あたりで、下車さゝれたり拘禁されたものがあれば、それは日本のスパイだろう．スパイが見つかつたのだろう」とカンは「自分は獨逸語の歌を知つて居る．然しこれは獨逸人が作つたのでない、日本の第三高等學校の生徒伊丹順造の作つた獨逸語の歌だ」と云つて、多くの乘客の面白さうにカンを見て笑つてゐるのをかまわずに、歌ひ出した。

「バツサバサ、シンゲン、ポリツアイ、アングリ、アングリ、ポリツアイ、キンデル、ジンゲン、バツサバサ、」

獨逸人はソリヤ、何んだい、日本の歌だろうと笑ふた、カンは、そこで、其正體の知れぬ獨逸歌を、英語になほして說明せねばならんかつた。

「バツサバサ、歌へば、巡査が怒る、怒る巡査の、兒がうたうバツサバサ」

獨逸人はよう／＼のみこめたと云ふた、そして、そのバツサバサは多分、日本で、今日の社會組織を危くする物騷な言葉であらふけれど日本で、その傾向を八ケ間敷しく云つて取締つても取締つて居る官衙の若手の間から、又官衙をして取締らせてゐる日本のブルジョアの子弟の中から、次々に、その傾向の者が生れる事を暗示した歌だろふと批評した。

カンは其後コリ／＼して、もう二度と獨乙人にきかせても分らぬこの獨乙語の歌をうたふた事がなかつた。

○

國境を越へたロシア側の第一驛、マチエフスカヤに入ると、線路の兩側に小さい小屋のやうな事務所があつて、人々は先を爭ふてそこへ、旅券への國境通過のスタンプを貰ひに行つた、カンも獨乙人に注意されて行列の一番うしろからピツコを引き／＼ついて行つた、カンの尙もうしろから來た一人の大男が、カンを見て笑ふた、それはハルピンでカンが散々ダダをこねてこまらせたアゾールニンの秘書であつた、スグあとで、カンはその男が、獨乙人のあまり遠くない席に居つた事を知つた、こうした役人ならばどこの國でも、モツト威張つて、たとへそれが自分一箇の勝手の私用であつても、必ず一等か二等かに乘るのであるのに、この秘書役がこうした雜魚箱のやうな三等車に入つて居るのに一寸意外の感があつた、

もうその頃からあたりが眞暗になつてしまつた、西伯利鐵道には例によつてランプも何もなかつた。

やがてその眞暗の中を、角燈をさげた數人の兵士と　コンミ

サールとが荷物の檢査にやつて來た。

　コンミサールの腰につるした拳銃の皮袋が、角燈の光をあびて鈍く光り、赤兵が銃の臺をガチヤン〳〵と列車のベンチの角に打ちあて乍ら、だん〳〵とこちらへ進んで來るのは、あまり心地のよいものでなかつた、獨乙人の大きなトランク等は底の底まで檢査されてゐた。支那人も嚴重に問ひ正されてゐた。支那人を裝ふた日本人を見出し、又、支那人で日本のスパイである者に注意して居るやうに思はれた。チタでは砂糖が高價だと見へてマンチユリアで仕入れて來たらしい大きな砂糖入りの支那米の袋にも、コンミサールは手を袋にあてゝウン〳〵と押し乍ら、內部に反革命運動用の何物がかくされて居ないか、檢めて居た。

　然しカンの場合は幸にし[illegible]カンの小さい布のカバンに一寸手をふれた切りですんだ。そ[illegible]りに、カンの棚のやうなベツトの下に居たロスケのおかみの、慾ふかくもち込んだ荷物は嚴重にしらべられて居た。

　だから檢査が終ると人々はマア安心したやうに、長くなつてねむつた、棚の上に這ひ上つた大きなロスケが、うつむけになつて、スグも大蛇のやうな鼾を立て始めた。カンの向ふの棚に居た大きな歸休兵士は鐵砲を抱いたまゝ横になつて、カンに「煙草をくれ」と手を出した。カンはいつも煙草をもつて居ないので、角砂糖を五つばかり出して、その兵士の大きな掌の中に置いた、兵士は白い齒を出して、笑つて居たがそれもやがて寢入つてしまつた。

○

　カンはわけなく大江山の襲街道をパスしたので、嬉しくて一寸ねつく事が出來なかつた、カンはチタに居る姉の風貌を又くりかへし想像した、そして、姉に會つたならば——カンのマチユリア以來の考へでは姉も矢張りボルセブエキになつて、チタ政府につとめて居るらし[illegible]——先づ、カンの本當の父さんがレベデワに相違ないのか、どうか、もしその事について確實な文書でもあるならば、見せろと云はう等と思ひめぐらしてゐた。もし、自分がレベデワ將軍の兒でなかつたら——こう考へるとカンの胸はあやしく躍るのであつた——自分は何人の子であろうか？

　すると、又、再び檢査の始まつたやうな氣配があつた。しかも今度は、兵士のすべてがカンのためにワザ〳〵再調べに來たやうに思はれた、カンが例の小さい「紙切れ」を出して示して居るにもかゝわらず、とにかく一寸來いと兵士は云ふた。カン

棚から下りて靴をはいた、荷物も一所にだと聞いた時。カン

は、それじや、本當に日本人は皆、途中で引き下してしまふのだなと思つた、そして自分も黒パンと水との御仕置を喰はされるのだなと覺悟した。

カンは荷物を引きずつて、歩を出した、この際、アゾール＝ンの例の秘書役が、何とか挨拶でもしてくれないかとカンは其方を見やつたけれど、それは全く空頼みであつた。その大きなロスケは、うしろにより掛つたまゝジーツとして居た、二つの荷物をかゝへて、カンがよう〳〵出口迄ビツコを引いて行くと一人の兵士が片方の荷物を助けてくれた、そうしたまゝ、二つ三つ箱を通つて、カンは二等車の一隅に來た、そこには小さい仕切があつて、上下二つのブク〳〵したよい床があり、仕切を押すと同じつくりの隣室に通ずるやうになつて居た、その仕切をあけて隣室から、亂髪の鋭い眼を光らせたロスケの顔が現はれた、角燈の光にてらされたその顔が、もうピク〳〵してゐるカンには地獄の青鬼のやうに見へた、カンは問はるゝまゝにマズイロシア語に手眞似を交ぜて、チタに行く目的をのべた、するとその青鬼は兵士を省みて

「コレはオレ等の仲間である」と云ふた、カンがロスケから仲間扱にされたのは、これが始めてであつた。

兵士は上のブク〳〵した床をカンのために整へて、そこに上つてねむつてよいと云ふた、黒パンと水との御仕置の代りに三等車から二等車にうつされて、カンは大得意でニコ〳〵して居たが、やがてグー〳〵ね入つてしまつた。

○

窓の外には眼もさめるやうな緑の峻岳がつき立つてゐた、その半腹には山の骨格である岩角が、痛々しく現れて、怒濤の腹のやうな傾斜は、直ちに眼下の平野にのぞんで居た、

平地には掘立小屋がポツ〳〵と點在して、長い着物のスソを引いたプリヤートの小供が、白い五六の家鴨を、青草をひたした水たまりの方へ長い枝で追ふてゐた、夏の日は天地一パイにかゞやいて、日中のあつさが、だん〳〵に迫つて來た、家鴨が水たまりの中で快く泳ぎ始めるのを羨しげに見て居た小供も、やがてクル〳〵と衣物をぬいで、ボチヤ〳〵と水たまりへ入つて行つた、

カンは床の上からこの自然の大景物をウツトリと見とれてゐた、カンの下の床には、昨夜、青鬼のやうに見へたコンミサールが、腰にピストルの皮袋だけをつるしたまゝ、長くなつてまだよく寝入つて居た、スツカリ頭の毛を手入れした所では、まだ若い男らしいロスケであつた、昨夜は何故あんなに、青鬼のやうに見へたのだか、不思議なやうに思はれた。

カンは空腹を感じた、コンミサールは快く下車して、勝手にほしいものを買つてよいと云ふた、とある驛で「物賣場」を見つけたカンは大威張で二等車からをりた、昨夜、カンがテツキり、ボルチヤあたりで引きずりをろされたと思つたらう、奴共に、これ見よがしに、ピツコを引きずつてあるいた。

「物賣場」には牛乳だの、パンだの、木瓜の鹽漬だの燻製の魚だのがならべられてゐた、賣子はロスケの田舍子供で、そばによると牛くさく、土くさかつた、カンはそこで、パンと牛乳を日本紙幣で五十錢ばかり買つて、腹の中に流しこみ、あまりを小腋にかゝへこんだ、スルト一人の支那人が、カンの耳ばたに來て、そして「御前は日本人だらふ、エ？そらだらう」、ロシア語で問ふた。

カンは早くもその支那人が一番うしろの車にのつてゐる筈の日本通譯に買はれて來たのだナと推察した、しかも、こうして耳ばたで耳打ちするやうなやり方は、ともすればカンをして日本通譯と連絡のある者――日本陸軍の關係者だ――だとロシア側に思はせるタクチクだと知つた、そこでカンはプリ〳〵して支那人に答へた、日本語と英語とロシア語の交り交りに、尙ハルピンでおぼへた支那語の罵詈を加へ乍ら「オレはロスケのカンゼエンスキーだ、入らぬ御世話をやかずに引込んで居ろ、このワンパのスパイめ」―

そして振りむきもせずに、自分の車にかへつて行つた、これでも、もうロシア側では入口に立つて居た赤兵が、イヤな顏をしてカンを見た。

列車がチタについたのは午後二時頃であつた、

チタ驛の東端にはその頃、日本の特務機關の列車が停つてゐるが、よく人の目をそば立てた、靑綠色のボーギー二臺に、日章旗があざやかに畫かれてあつた、入口の鐵柱に一本の木の枝のやうなものが結びつけられて、その先から一條の長い線が遠方の電柱に引張られてあつた、その使用を許したか許さぬとか一時問題になつて居た無線電信であつた、一つの窓から若いロスケの女の横顏が見へてゐた、チタ政府から、その女を捕へに來たけれど、特務機關の方でこれを拒絶する權利がなかつたとか云ふ御屆の女タイピストであつた、うわさの重油車の黑い姿も、スグうしろに見えてゐた。

（未完）

名人「入神」の感想

悦樂安靖の道程

久野久子

私の音樂に於ける感興は、私がこれまでピアノを奏でて來た中から自然に湧いて來たものです。私がピアノに對してゐる時は、それは絶對無意識の境で、私は只、自分のならしつゝあるピアノの音の中に恍惚の世界を築くことが出來るのです。それは世の中にはいろ〳〵いゝものがあります。私は、人の愛も好きです。宮殿もすきです。併しそれは、好きではあるけれど、決して欲しいとは思ひません。私にとつて、無くてはならぬもの、それは只一つ、ピアノがあるのみです。私はピアノさへあつたら、此の世の中から、ありとあらゆるものを取除いて了つてもいゝ位に思つてをります。決して淋しいこともなければ、徹底の焦燥も感じは致しません。私にとつてピアノは、絶對自由の美しい世界を造つて與れるのです。私はその世界で思ふさま、自分の生命を研ぎ進めて行くことが出來るのです。そしてそれは、ピアノから離れてゐる時でも私は同じです。只、自分にはピアノがあるといふこと丈けで、私のあらゆる心は滿足しそして幸福なのです。ピアノに努力するお蔭によつて人世の悟りが開ける――何だか左うした境地に達したといふ氣さへするのです。

併し、私の今の藝術上の實力は、只思ふさへ、哀れさを感じないわけには行きません。

私は只今まで三十六年半をこの世に生きて過しました。私は、私のこの哀れさを、私の死する日までに何れ程位の立派さに築き上げることが出來るかと、あわたゞしい心が迫ります。併し、いささか思ひ返したことには、私は仕事の上の若さを充分持つてゐると自信があることです。それは、私は先づ健康な體で居ります。而して心はいつも生き〳〵して努力に生きて行かれます。私は五十才、六十才まではキツト進歩して行かねば止まぬ決心を堅くもつてをります。私のこれから進み行く道は、私の頭にハツキリ鏡の様に映つてをります。私はすこしでも早く望みの進歩を得たいとは思ひ乍ら、一方には、丁度、眼前に美しい山を眺めながら、その山麓に到る道を行くやうな工合で、いさゝかじれつたい中にも今に得たい〳〵と思ふ、その道程を樂しみ安んずることが出來るのです。

私は私の哀れさを感じながらも、其處には何の疑問もなく、不安もありません。私は愉快な氣持で、おぼつかない足どりでその道程を歩いて行きます。

私は健康のつゞく限り、一生懸命ピアノをひいて死にたいと思ひます。健康とピアノ――これは實に私にとつて無上の賜なのです。

在二作人着力之處一」

眞清水藏六

名人入神？　それは「無二應答之道一却而是在二作人着力之處一」と。

却々難しい問題である。何とか之を說明する言葉もあらうが、五十餘年を泥の中に生きて來た無學な私は、新しい學問上の言葉を知らぬ。

深夜に至つて新しい工夫が浮ぶ、新に手に入れた陶土の事や窯の火が眼に浮ぶ、すると床を蹴つて轆轤に對ふ、提灯を携げて裏山の陶窯に登る、其麼時には工作物と自分との限界が判らなくなる、過去も未來も何にもない。況や作つた品物が賣れやうが賣れまいが勿論念頭にある筈はない。

私は二十歳を幾年か過ぎた頃、突然製作品が動き出したり、窯の中に物の聲が聞へたりした、然し間もなく其麼怪奇な現象はなくなつた、其れは幻想で有た迷信で有た、多分佛教の信仰から生れた自己催眠で有た。其後は何麼に一心不亂になつても、所謂理知の働きを失つた事はない。

人里離れた山科の山奥に青葉に包まれた私の隱家へも日本全國の名人達が訪ねて來て仕事自慢をして歸る、其麼時に私は考へる、名人なんて云ふものは陶窯に入れて灰滓も殘さず燒き捨てなければなるまい、名人なんとか云ふ考へをすつぱりぼんと打ち消す事だ、名譽欲や自慢欲が有ては製作品と製作者が一個に融合することはあるまい、と。

私が製作欲の極點に達した時、製作品と私とが融合した時、造物主だつて其處に針一本も容れる間隙はない筈だ、だが出來上つて見ると、却々自慢どころか、更に自分の無力を思ひ新しい研究欲が湧いて來るものだ。

明の時代に龍缸と云ふ難しい銘の壺が有た。之れは何でも神童性が窯の火中に投じて燒死し殘つた屍骸が龍缸の壺になつたと云ふ事である。尾張の瀨戶は加藤四郎左衞門が宋國から歸て窯を開いたのである。四郎左衞門が赤津に於て陶を造つて居ると、或夜、瀨戶の土が老婆に化けて彼に土の所在を傳授したと云ふ說を今でも信じて居る製陶家がある、斯様に怪奇な傳說に富んだ製陶界の事であるから、隨分不思議な入神譚も存在はして居るが私は前にも云つたやうに之を信じない。

眼には見へぬ空氣でも化學の力で分析する事が出來るが、入神の所感だけは具體的に說明は出來難い。唯「技ニ至ル」のが一番近道だ、精神一到、脇眼も觸れず、仕事一貫に沒頭して無我の境を經驗した人には、管々しく話なさくても了解は出來る。「工作中潜力之所於感神時無名人」である。

機略、神術の潜む處

將棋名人　關根金次郎

私が棋道に就いて少したりとも自得の域に達してゐるとして、その感想——それを形に現すことは到底不可能なことだが——を或る程度までゝも、とのことである。

名人の城と云つても誰れも自分で名人とは思ふまいが、兎に角一盤に秀でゝ名を爲すものは何人も或る共通の悟得の境地を味ふことであらう。それは力であり神である。からと云つて一朝一夕に、力を得、神に通ずるものでない。先づ私は若い時鄕國を出てから各所に放浪し、生活の爲にも、藝道の爲にも他人の見られない苦勞もして見た。現今將棋道は各階級を通じて盛を來し、都下各新聞にも信用の出來る評や勝敗の經過が出て極めて修業にも便利であるが棋道の當時は、實に暗黑たる世界で僅に强者を自から訪ね索めて試鍊したもので、その氣持ちに於いては昔日の武者修業と何等の相違がなからう。

今日の自分になつたことは至つて自然な道行きで、先輩は段々失はれ、一勝負を重ねる毎に自信と力を得て來、その中に自分では弟

子だと云ふ嘸惚れも無いが新聞や雜誌も弟子を公認して呉れ世間の人々も認めて呉れて弟子と云ふのも澤山出來たし、彼等もそれ〲發達して將棋道としても普及して行くと云ふ有樣である。

何事も左樣であらうが、如何に見せびらかさうとしても出來るものではなく、他人も認めるものでもない、初の間は他人の中で試合を見らるゝのさえ、顏に火が出るやうで、浪花節語りが湯屋の浴槽の中では巧妙に唄へても、舞臺に上ると全身が震へて夢を見てゐるやうにしどろもどろになるのと同じことである。如何に練習を無茶に遣つたからと云つて上達するものではない。將棋に定石があるやうに將棋道にも一定の順序があつて弱者が上氣せて一生懸命になればなる程無茶になり行くものである。小學校の兒童でも順を追ふた教育に依らねば大學に進まれない。此の一歩々々を登り一角の人物になるのは藝術の世界では絶えず統一した頭腦に依つて一階段を登ることを忘却されるので、此の點の統一を確固と攫んで努めることが名人になる要素ではあるまいか。

庭球家、ピアニスト、相撲、將棋でもさうだらうと思ふが、今や自分が、自分の藝の前に面接した、否面接する數分前からは自分であり乍ら、何んと云つてよいやら、今迄と全く異つた或る別なものになつて了ふのである。初歩の人は試合所には飯も食ひ得ない。又澤山食つても駄目だ。惡い頭を無茶にして了ふ丈である。そして眞箇に飯が食へねばならぬ。上氣て喉に噎つたり、血が湧いて腹が充滿したりしない、眞箇の食事をとる。もう食事のことから試合で、或る統一の中に悠々と腹が決定つてゐるのである。

自得による『自信』『斷定』『統一』は泰然として時と實さの差なく立派に透徹して我が胸中總ての機略が濁らず澄んでゐねばならぬ、がそこに如何しても解釋の出來ぬ『授かり』とでも云はうか、實に不可思議の現象が得られるのである。さう言へば可笑しいが兎に角其處には自分丈に教へられる神の扉に接するやうなものである。それは後になつて考へても、その最中も自分では解釋の出來ぬ奇蹟である。宇宙の神秘が紐解かれる加護を得る境地、それが名人たるの以所の生る所でなからうか。

飛、角は軍艦大砲にたとへ、包藏すれば力となり、金、銀は元より軍資に等し、桂馬は飛行機、香車は騎馬水雷の如く、歩は固より歩兵なり、王は國家、之れ現在の戰爭に異らない。軍の配置、用兵の法、戰期攻防の機略、神術を通つて現れる鬪ひは少さき頭の中にのみ不可解に潜んでゐて身は常に靈境を維持するのである。

眞劍卽舞臺精神

新派俳優　井上正夫

眞劍――ほんとうに全生命を傾倒した血の滲み出る樣な眞劍――只だそれ一つで、私は舞臺に生きて居る。大力士が四つに組んでネジ倒さうとするあの間髪をいれない緊張しきつた氣持ちで。尙私は告白するが無學といつていいほど、組織だつた教育を受けていない、そして私の性格は極めて不器用だ、であるから私には小手先で器用にやつてのける智慧を有たない、けれども私は、自分の體內から滲み出る眞劍一つで總ての缺陷を補つて居る、「眞劍によつて藝を生かす」これが私の一貫した舞臺精神である。

舞臺に出ることは、私に取つては決して容易なことではない、否、或る意味では戰慄するほどの恐怖であり、苦痛である。舞臺に出る每に、私は自分の血と肉の剝がれて行くのを判然と感ずる。一興行にキット七八百匁目

の體臺を滅ずるやうな狀態だ、一句のセリフだつて、手一つあげる身振りだつて私の血肉から滲み出る生命の結晶でないものはない。

現在の俳優で私ほど舞臺に出る數の少ないものはないのだが私は「どんなものでもやつてのける」と云ふ輕い氣持ちに、どうしてもなれないのだ、理論に立脚した說明は出來ないにしても、私は自分の仕事が非常に責任あるものと意識される。その脚本撰擇にだつて云ふに云はれぬ苦慮があり、そしてそれが自分の性格、氣質、感情とピッタリ合致融合する脚本でなければ、どんな有利な條件があつたにせよ、私は絕體に實演を避ける。嘗つて或る大劇場で或る脚本の實演を拒絕した時、其處の支配人が、「繪書や彫刻と違つて、別にあとに殘るものでもないのだから我儘をいはないで、何とかして吳れ」と云はれたが私にとつては、あとに殘るとか、殘らないとかいふことは問題ではない。少なくも私が舞臺に立つことは、眞劍な繪畫師や彫刻師が、その全生命を傾倒して自己の藝術を後代に殘さうとする厳肅な、緊張しきつた氣持と全く同じだ。

眞劍な俳優には、脚本全體の氣持ちは勿論その中の一句のセリフだつて、決して弛がせに出來るものではない、私は芝居のセリフを憶えないことで有名だが、之れは勿論私の不器用な性格に起因するとだらう。けれども私の藝に對する良心は、脚本の一句一句の内容をはつきり了解することなしに、唯だ言葉だけをスラ〳〵憶えていくことを許さない。役を振り當てられる毎に、私は幾夜も幾夜も徹夜する、そして深更脚本に對つて正座し、脚本中の人物と自己とを間隙なく合致せしむる爲めに、瞑想し、懊惱し、苦心するのだ。その人物の云ふ言葉の一句一句に就いて考察をすすめる、例へばセリフの中に「サウダ」といふ一句があるとして、此の「サウダ」の一句を活かす爲めに二時間三時間或は終夜苦しむ樣なことは決して珍らしいことではない。そして其一句のセリフだつてその中に汲み盡すことの出來ない或る生命の充滿して居ることが考えさせられる。セリフに就いての苦心はこの言葉の生命を如何に表現するかといふことにある。

舞臺に出ると私は此頃よく自己催眠にかかる、私自身がすつかり劇中の人物になり濟して劇の人物と自身との境が全然意識されなくなる。だから舞臺で泣く場合、笑ふ場合、怒る場合、私はほんとうに泣いて居り笑つて居り怒つて居るのです。劇中の人物と自己との間に明瞭な意識のある間は、劇の妙味「眞に迫る」境地は絕對に演出されるものではない。當時（そのとき）の私の氣持ちが眞に迫るのではない、眞そのものなのである。

尙ほ最後に繰返すが、私の舞臺に轉がる生命は只だ眞劍一つです、四つに組んでネジ倒す努一杯の氣持ちだけです。無學で不器用の私は觀客に私の眞劍さをかつて貰ふより他に何もないことを諒察していただきたい。

名人と天分と

柳家小さん

小三治と名乘て、はじめて高座に上りましてから六十六歲の今日まで丁度四十三年間、皆樣の御贔負を蒙ひて居ります。

名人となるには勿論天分がなければ出來ないことですが、その天分を活かす爲めに名人の苦しみ惱んだ努力は並大抵のことではありません。

私が名人だなんて……全く面はゆいことですが、御尋ねに對して私の苦心談を一、二御紹介申上げて責めをふさぎたいと存じます。

明治六年十六歲の時に、常盤津の師匠談洲

燕枝の弟子となり燕花といふ藝名で、斯道を勵んで見ましたもの丶、とても見込がないとフッツリ思ひきつて、二十二歳の時に落語家に商賣がえを致しました。此處で私は私の天分をはつきり自覺したのです、藝術慾とでもいふので御座いませうが、此の頃の私の藝道に對する熱心さは、實際正氣の沙汰ではありませんでした。

未だピーピーの藝人で、四人か五人しか集らないガランとした寄席で最前座をつとめて居る頃のことですから、私等の貧乏さ加減たら話になりませんや。此の頃私は醉ばらいの研究に夢中になつて居りました——一時落語家には醉ばらいの眞似はつきもので御座いまして、これが神に入らなければ一人前の藝人じやないのです——。道で醉ばらひに遭ふとすぐあとからつけて行く、ナケナシの金で一杯屋にはいり込んで、チット醉ばらい連中の樣子を見つめて居る、いろいろ研究して見ますもの丶、どうもシックリ私の心に來ないのです。あ丶金があつたら、乙な座敷で酒好の友達に振まつて、上品な醉つぱらい振りをミッシリ研究しやうものを……」と思ふと私の研究慾はもう矢も楯もたまらないのです、私は高座に上る時是非なくてはならぬ只一枚の羽織を質に置いて、酒好の友達を誘つて靜かな座敷で、上品な醉ばらい振りを心ゆくまで研究したことがありました。此んなこともありますもう四十年も前のことですが、その頃は本所の寄席に出て居りましたので、席がハネてから椎木町大川端に沿ふてお厩橋を渡つて本郷の通りに出て、九段坂上の家まで歸るのでした。それは鏡のやうに澄みきつた好い月夜でした。私は例の通りいろいろ醉に對する工夫をこらしながら松平邸(今の安田氏)の側の大川端の處を歩ひて居りますと、すぐ前を大工の棟梁みたいな奴がグデングデンに醉ばらつて、今にも河におつこちさうなのです。私はその醉ばらい振りにゾッコン惚込んでしまひました。私はうれしくてたまりませんでした。

「オット、大將あぶねえじやありませんか、あるいて丶さえそんじや川におつこつたら死んでしまいますぜ……」私は聲をかけてしまつたのです。

「どうです大將、わつちや大將の醉ばらい振りにすつかり惚れ込んだんでげすが、一杯つきあつて貰えませんか」と誘つて見ますと

「えらい、若僧、お前さんなかなか話せるぜー」

と云ふ譯でスッカリ思ふ壺にはまつたのでした。

そこで私は、その夜の給金をスッカリなげ出して、向島の掛茶屋に案内して夜の二時頃まで、思ふ存分大工の棟梁の醉ひ振りを研究したのでした。棟梁の家が向島の奥の有馬溫泉の處だと申しますので、其處まで送つてあげますと、棟梁のお神さんが大層悦んで、「今夜は是非宅に泊つて下さい」といつてす丶めてくれましたが、私はとてもおちつとして居れぬほどうれしい氣持になつて居りますので「ナーニわつち等は夜歩くのが商賣で御座いまして……といつて泥棒ぢやねえんですが……夜道は平氣で御座います……」此んな戲談をいつて別れたのですが、途中をスッカリ醉ばらいの棟梁になり濟まして、大醉でぐでりながら、どこをどう歩いたのか只だもう夢中で本郷の通りに來た時には、已に夜が明けて居たのを憶えて居ります。

次ぎにはじめたのはどもりの稽古です。どもりにもツキどもとかヒキどもとかいつていろいろ種類が御座いますし、眞似するとなりますと、口のき丶方、舌の廻し方、氣質の飲み込み、呼吸の吹き方、ひき方等なかなかむづかしいもので御座います、私は毎日小石川の大六天のどもり矯正院樂石社に通ひまし

て、一通り研究しましたものゝ未だシックリ心に入りませんので、寄席がハネると家に歸る途中他人様をとつかまへて、どもりでブツ〳〵カツテ見るのです。處が何しろ京橋の寄席がハネてから九段の家まで歩いて歸るのですから、お堀端に通る頃には人の子一人通りやしません。でも私の藝術慾はとてもヂツトして居られませんので、交番の巡査を相手にどもつて見るのです、今でもありますがあの内務省の裏手の交番では、羽織の包みを肩に背つて變な恰好した私が寒さに震え乍らひどくどもつて毎夜の樣に九段の家を聞くものですからスツカリ睨まれてあとをつけられたことも御座いました。ところがしまいには眞似からほんとのどもりになつてしまつて、それを矯正するに可成苦しんだもので御座ます。

右の樣なことは數多い經驗の一、二に過ぎませんけど、とにかく眞劍に苦しんだことが私の今日此樣から御贔負にして戴ける最大の原因で御座います。七十に近い老人になりまして、呼吸がもれる樣になりましても、今は晝夜私の藝道に對する眞劍な氣持ちと工夫とをおこたりません。

分つて分らない

名人 本因坊秀哉

今日は五回々を合せて五回勝つたから、一日は上つたらうと思つても、翌日は合す丈け負け通して了ふ。何月何日に一目上つた、何時の何日一段上つたと云ふことは全く分らないことである、自分が強くなつたことはその時々毎には分るもんでない。

上手になると云ふことには勿論苦心だとか努力だとか奮鬪だとか云ふことはあらう。

世人は或は云ふであらう「棋は是れ娛樂の一技に過ぎぬと」。それは異論のないことである。然しながら之は、棋の技の輕きを知つて未だ棋の眞隨の重きを解せない者の妄言である。棋の技の心髓とは何であらうか。『娛樂の裡に法を悟る』之れである、法を悟るとは宇宙萬象自然に交道する意味で眞にそれを翫味せば趣味愈々深く、身心淸淨殺儀自ら正しく、無我仙境に入るのである。人が他に入る時が眞に人倫の道を悟了するのである。

棋技の人心に裨益する妙なるは喋稱に値ひするのである。古來偉人傑士でも日蓮、信長秀吉、家康の如き大將も又た前田利家、伊達正宗等もさうである。之等の武将が殺伐の氣を押へ挿肉の嘆を慰して自他を制したのは斯棋の心髓を餘蘊なく發揮したものと云つてもよいのである。

之ち棋の德の存する所である。

國棋道は一千數百年の古き歷史を以つて上下に渡りて國民性に浸潤して來たのである。德川時代には棋所さへ設けて幕府保護の下に奬勵したし、現今は各新聞雜誌は勿論陬邊寒村にも到らざるなく國技とされてゐるのも一つに國の生命力を窺ふに足りるのである。

その起源は遠くて稽ふことは出來ないけれども東亞最古の文化が齎らしたる精神的藝技なることは疑ひないのである。

我朝に斯の技、渡來したのは與籍百濟の移入と共に韓土より來たとも云ひ或は推古朝隋唐交通以後ともなすものもあるが吉備眞備に附會してあるなどは俗說である。大寶令(文武天皇)に泥僧の博戲を禁じ琴棋與らずと云つてあるなどは既に一般に流行してゐたことが想はれるのである。

抑も棋道は唐土傳來の技藝であるとに疑ひを要れない所であるが遊興の具であるとは言ふものゝ先きにも言つた通り萬般の理に則ひ、聖人も此の理に照して政事を導いて來た

のである。唐土の圍碁は互先でも相互に置合四隅を定めて打ち始るを例として來たが、それでは手段の地盤が狹小で趣味も薄いので吾が祖本因坊算砂（名人）が此の置合ふことを廢して互先の碁を圍むを以つて我が國の碁としたのである。それで家康はそのことを賞稱して圍碁所を設置して算砂に管理せしめて碁道研究の道を開いたのである。

斯樣な次第で碁道には深い哲理と不可解の世界がある。兎に角黑の中は打ちよいのでその間は安心であるが黑の一子を受ける白は幾つかの定まつた一つを定めねばならぬ。黑の勝利は必定の事實である――弱いものはさうでもない――がその一定の位置の中の一つを定めるのは實に言語の外にある直觀獨斷ともつかない或る行動を選ばねばならない。白は成るべく複雜で難かしくして法則に叛せないやうにして行かねばならない。

總ての碁面を一糸亂さず腹中に藏めて置くのは何にもことわけて言はないでもよい。

圍碁に向へば自然に精神は集中してしまつて、世の中の雜事は何にも忘れる。即ち昔の武士の言つた三忘の歌の氣持ちで親妻子自分を忘れてしまうのである。

敵の氣合を見拔く、と云ふことは最も重要なことで先方もさるもので千變萬化生きたものである。棋面は餘りに廣過ぎる實に宇宙大であつてそこには底の知れね嶮さと迷ひがある。「分つて分らない」それが私の精神が集中して廣い棋面の神祕に迷ふ心持ちである。

例へば上に登り下に降り右、左と同じ五分〳〵の利を知りつゝも五分〳〵の損を知りつゝもそこに斷定の下されない所がある。

運命を持つと云へば運命だ。それが照明の下にあるやうに一つ宛、片付け得るものは神であつて人でない。我が祖以來二十一代名人は五指を屈するに足らない。昔からこの方、棋局は展開して進み來つても更に混迷の底がある。その暗い迷いをさぐり行く心持ちは只だ宇宙のこと愈〻深奥であると云ひ度いのである。

茶道と文化生活

官休庵　千宗守

茶道も其一面に於ては藝術の一創作を作すものと異ならない、然らば或時には會心の創作を終つて異常な歡喜を得る事がなければなるまい、がしかし茶の方は普通に言ふ處の繪畫によつて又は音樂によつて或は作工によつて作さるゝ處のものとは元より違つた道筋を行くものだけに其表現の上に於ても元より異なつたものである事は言ふ迄もない、從つて之によつて得らるゝ會心の微笑は禪家に言ふ處の因地一下の喜悅と云ふものになつて來る譯であろう、元來茶道の關係する範圍は隨分廣き各種の事柄に涉つてゐて、書畫骨董を鑑賞したり、一定の儀き式法に從つて茶を點てたり又煩瑣な手續で漸く一服の茶を飲むだりする丈けのものではなく、一般には日常生活の向上洗練即ち日本的文化生活を營む爲に必要な諸種の衣食住に關する訓練、座臥行住一片の塵埃を交へざる自己の境涯を設立して文化生活其れ自身を作さしめんとする事に他ならない、かくする爲に茶道は形式の確然たる道を取つて進んで來た即ち形體の形式動作の形式の定められたるものを學ぶ事によつて漸次自由の道を採る事にした――恰も劍道には一定の型を知つて後自由にその堂奧に進む如くに――やがてそれが精神生活にも漸次多大の變化影響を與へて行くのである、そして其起源及び發達が純日本的慣習の形式によつて來たものである丈け今日未だ過渡期にある總ての事はそれが純日本化せらるゝにつれてやがて此道にも當然取り入れらるゝ事となる筈

であつて移りゆく社會の變遷に從つて其形式は元より移さるべきものである、かくて茶道に親しむものは大なり小なりその個々の境遇に適したる文化生活を行ふものであつて日々の生活は藝術化せられ純化せらるゝに從つて彼茶の享樂は益深遠なる喜悦を生の内に見出す事となる、而して之れを一種の形に纏め知己朋友に此の生の歡喜を表現するものは即ち一會の茶事と云ふのであつて、自己の全人格を表現して生の喜びを彼等に訴へるものである、併ながら之れは繪畫の如く固定的なものでなく又音樂の如く刻々に過ぎゆくものでなく凡そ定められたる時間内に美はしき場所に於て經過的に或は器物により或は應對により或は特定の技術により或は料理によるなど人の五感に訴へて連續綜合して表現さるゝ自己の藝術である、始めにも言つた樣に範圍の廣いだけその何を表象するかを捕捉する事の困難な場合も甚だ少くない單に一幅の掛物を見たのみでは理解に苦しむ樣な事がある事もあらうが又それのみによつて已に其人の表象せんとする事丈は確然明かに知らるゝ場合もあらうがしかし矢張り結末に到つて總て綜合的に感受する事に於て全きを得る、整然淨寂たる庭園や室内と相合して茶道的なる文字繪畫又は數個の器物、飲食茶、動作技巧等によつて次ぎ次ぎ表はされて行く妙なる經過は丁度綜合藝術によつて陶醉さるゝ時と言へよう、從つて茶會を催す茶人にとつては自己が何かの衝動によつて起されたる感情を具體化し之れを表象して行く間には此處に會心の製作にも出會ふと云ふものである、最もかゝる方法であるからには入神の器物が作り上げられて滿足の微笑をもらすと云ふ樣な譯合のものではない、勿論茶事を行ひつゝある間に歡喜に滿ちて悦然たる時が屢あつても其多くは矢張一會の終局に於て得らる、滿足と言ふべきであろうそれ丈け時間に於ては空間的なるものではない、かの音樂を奏するものが演奏それ自身に於て非常な歡喜を享受しつゝある樣に自己の動作する度に歡喜を催す事はそれは動作によつて引起さるゝよりも寧ろ初めより歡喜の方が滿ち溢れてゐる爲である、しかし青疊の上に靜かに座して釜に對し一碗の茶を點ずる時は自然に妄想は霧散し盡して更に餘念なく沸々たる松聲よりは淸風自ら腋下に生じ來つて微笑禁じ難し之れをや因地一下の喜びと傳ふべくんば自家の船に人を乗せて淸涼の水邊に誘ひ共に折からの暑熱を避け得ると云ふものである。

精神統一

熊谷一彌

世間に名人と呼ばれる人々も數あるが名人と凡人との差異を判然と區別する境界とては何もない、强いて定義すれば或る一の事柄に就て普通の人の企て及ばざる技能を有する人に冠する言葉也とでも云つて置くとして私共庭球に志す者の全般を見渡せば殆ど其全部が名人と呼ばれる迄に達して居ない、世界の中に於ける一流の選手の技術を批評するに當つてもそれは單に他の人と比較して旨いとか上手だとかは云へるけれども眞實に所謂技神に入るてふ名人とては是迄目擊した事はないのである、之は庭球其物が職業化せず職務の餘暇に行ふに過ぎない運動である爲めに自然にゲームに關する研究が遅れ從つて未だ驚嘆す可き程の名人も出現しないのであると思ふ、世界屈指のプレヤーにして且つ然り、況や私の樣な未熟な者が假りにしても名人の仲間に加へられるのは恐縮の至りである。

然し私は素より名人ではないが今迄の淺薄ながらの經驗に徴して名人に達するには如何に修業す可きかを想像する事は出來る、即

ち入神の技を現し得るに至るには單に技術を習得するのみならず其上に普通人の閑却せる一事を會得しなければならない、一事とは何ぞや、乃ち精神の統一である、庭球技を修得して名人の域に達するには技術の練磨に始まつて精神統一は終りであると確信する。

庭球に於ける精神の統一とはゲームに臨んで精神をゲーム其物に集中し他の在らゆる雜念を除去する意味に外ならない、庭球技は極めてデリケートなゲームで且つ寸秒を爭ふ瞬間的のものである。總ての場合に敵の打球竝びに動作に依つて突嗟の間に考慮を決定し以て應戰するの必要があるから其間雜念を混へて居ては頭腦の動作に敏活を缺き到底滿足な結果は得難い。されば平常より此の一事を留意しゲームに臨んでは邪念を去りて緩急に應じなければならない、然し是が千乃至數萬の大觀衆のドヨミの裡に二時間以上に亙る劇勢の間、終始一貫して單にゲームのみに熱中し一專意心之に從ふが如きは云ふに易くして行ふに難きものである、私の過去に於ける經驗に徴しても明かに之を證して居る、私は不敏にして今日迄以上述べた通りの精神統一を完全に行つたゲームをやつた事は未だ曾つて一度も無いけれども戰蹟を靜に追想して見ると此の精神統一がより能く整つた折には必ず成蹟が良好であり不良の場合には吃度ゲーム中の何處か重大なる場所で此の缺陷を露して居た事を知つた、されば此一事が私に早くより理解されて居たならば如何にもして精神の修養に力を盡して今日迄により多くの榮ある事蹟を殘したものをと遺憾に堪へない次第である。

實にゲーム中白兵戰となつて双方共秘術を一球に注いで力戰する場合には其處に腕力の便る可きものなく視力の信頼す可きものもなく唯刹那々々に命ずる本能の儘に働くに過ぎない、斯る場合に處しては精神の集中の程度が極めて重大な影響を來す事は申す迄もない、俗にゲームに氣が乘らないで負けたとかゲームをする氣がしなくて不成績に終つたと云ふ實例は取りもなほさず此の精神統一の點に不充分であつた爲め自己の全技倆を發揮するに至らずして敗れた事で技術上に缺點ないとしても精神上に修養の十分積まない人は眞の名人には成れない、精神の統一さへ完全して居たなら假令周圍の事情か如何にあるとも差し支へはない譯である。

故に庭球に於て名人として入神の技を現はし且つ完備するには技術の點は勿論として精神の統一を修養し兩者相俟つて初めて名人たるの資格を得るのである事を確く信ずる次第である。

競技即氣合

撞球選手　山田　浩二

一言申上げて置きたいのは此の球突は要するに道樂者のする遊びに過ぎずとは從來社會の人々から屢々聞く處で練習には努力も要するが、やらふと思へば誰でもやれると大概の人は考へて居ります。處が事實其の道に深く入り込んで所謂切磋琢磨の功を積むとなれば無論其處には並以上の苦勞も心配もあり特に進んで一ツ並以上の者となつて見様となると異常の努力に又天分の力も借らねばならぬと云ふ次第單に球と言ても動きの一ツ一ツが悉く科學的に働くものですから昔ならば免許皆傳即ち其の奧義を見破と隨分不思議な常人からは一寸信用の出來ない事にぶつかるものです。天候の變化を知るも不思議な現象に就ても種々あります。一例を擧げれば即ち球で天候を豫知する塲當があります。私がキューを握つて三ツの球を斯う睨む時ハヽア風が吹いて來たなとか又は雨が降るなてな事を大抵判るんです。普通の人から見れば切支丹バテレ

ソの奇蹟にも近い術ですが其の種を割て見ると何に何んでもない事即ちビリヤードの球を造る材料は皆象牙なんですから私の様に年が年中球と睨め競べをして居る人間には此の象牙の球の色艶や或は膨れ具合で天候の變化が判ると言ふ丈象牙は不思議に氣候と頗る密接の關係を有つて居るもので少しも空氣のしめりをもつて來ると必ず色が平常よりも變つて來るんです只球臺に敷いてある青い羅紗もさうですがね空氣のしめりが來ると球の動きが何時ものカラフとした天氣の時程滑らかに行きません、モー一ツそれから風ですがね奇妙なもので一寸した風でも吹き込むと球の動きに非常な影響を與へるので此處を此位の力で突けば此の白い球が何とラインを通てクッションの何處に突當り何う言ふ風に方向を變へて何の邊を打ち其の餘力が何處で止まつて球がテーブルの何處の場所で靜止するかと言ふ事は球にキューを入れない前から判つて居るんですが一寸した空氣の動き即ち附圍に立て居る人が急に場所を轉じたとかドアーを開閉したとか言ふ事が球の動きに就き非常な影響を與へるので其の爲め最初の豫算がガラリと相違して來る事が度々あります。

Billiard is mind game ですから球を突く時の精心は全身心をキューの突きより離す事なく然も最も冷靜沈着と確固たる信念を以て競技をしなければなりません。競技の場合は丁度昔の劍士が氣合に依て飛ぶ鳥を落すとか言ふ様に赤球にも一種の氣合氣分を以て球に何處で止れと命令をするのです。

　以上の様な心持で努力をし何事も苦勞をしなければ上手とか名人とかにはなれません。私も常に其の心懸けで練習をして居ります。

法悅瞬間の延長

大日本劍道範士
大日本居合術範士　中山博道

世の中でよく「泥棒が來て繩を綯ふ」といふことがあるが、實際左う云ふ風で劍道を學んだのでは駄目だ。平常に於て備へて置かなければいざと云ふ場合に間に合はない。所謂「治に居て亂を忘れざる」の鍛練をして置かなければならない。

　日清戰爭の時でも、日露戰爭の時でも、やれ武術が必要だといつては俄に劍道をやり出し、戰爭がすんだといへば直ぐ止める。そんなことでは緊急の要事に間に合はない。劍道はそんなものではない。平常の人間の精神と肉體とを鍛へるものだ。

　劍道をやるのは爭ひをする心算ではない。所謂膽力を練るのである。武術の道は戈を止むるの道である。激した場合の、窮迫の場合の、耐忍の力を造るものだ。あらゆる紛事を超越して、從容の陣を張るにあるのだ。

　一人と一人と相對する、何ちらも眞劍に正々堂々と向はなければならない。卑怯な手に出、卑怯な形に出るものは到底駄目である。惡辣な手段で一時は勝を得た如く見えても、相手にそれを見すかされ、實質の弱いものは當然、眞實の力のあるものには負かされる。何處までも正々堂々、天に恥ぢず、己に恥ぢず、人に恥ぢざる態度を踏んで行くのが武道の精神である。「天網恢々疎にして洩らさず」といふことがあるが、劍道に於ける此の精神は世間の人事にも徹して居る。

　武道は決して勝負を事としない。落ちついた、膽力の法悅を望むものである。劍術をやつてゐる時の厳粛な瞬間、尊き瞬間、これを人間生活の道程に延長する。これが武道のモツトーだ。

　文武の兩道は其の一を消し去つて現代ではこの武の方は一般に世間から疎んじられてゐはしないか。よき文の道は矢張り根本は健全なる精神に基する。文の道を成長さすと共に武の念、即ち健全なる精神を忘れてはならぬ

舞臺に於ける眞實味

守田勘彌

○上手な役者や達者な役者はあるが、眞に名人の域に達した役者は古往今來果して何人ありませうか、私をして忌憚なく云はせれば、名人は出鱈目に出るものではありません、恰度慧星の如く現はれるものではありますまいか

○云ふまでもなく私達の尤も理想として居るのは此の名人の域に達したいと云ふ事であります、上手な役者は只巧いものだなアー、といふ輕い賞讃の言葉でつきて了ふかもしれませんが、徹底的にうま味のある役者は、心の底から人を動かすものではないでせうか。

○それはツケた味でなくモッタ味であるからです、どんなにものがおいしく喰べられてもタカヂヤスターゼの入らない役者になりたいと同時に、味の素などのおたすけが入らない役者になりたいと思ひます。

○と云ふ事を委しく申上げれば、天然自然の生地のまゝで厭に巧んだ技巧（あまりいゝ意味でない）で感心させたくない役者になりたいと希望して居ます。何故であるかと申せば眞にうま味のある役者の舞臺には邪氣がありませんが、場あたりの技巧のみの藝にはエテ邪氣臭氣があるものだと思ひます。

○私は下手な役者でも眞實の事をする役者はいゝ役者だと思ひます、言葉を換へて申せば必ずいゝ役者になれる素質があると思ひます眞實の事を云ふのは私などが殊更らしく申上げるまでもなく人生をさながらに表現すると云ふ事、もつと砕けて申せば人情に適るといふ事でも足りませうか、これは場當り技巧が巧いとは餘程違ひます。

○私は思ひます、いくら人氣湧くが如き舞臺を勤めても、場當りのみうまい役者では心細い、これはよく考へると本統の人氣ではなく單なる景氣かと思ひます、眞面目な演劇に、ツケ景氣はいらないと思ひます、否、これあるが故に役者は知らず／＼場當り技巧に誘致される事があるものです。

○或る私の信ずる人に、私は或る時こんな問ひを發しました、それは私達が新らしい仕事に門出する時でした「どうしたら舞臺で自分の藝を眞に現はす事が出來ませうか、」まことに愚問ですが、これは私が半自覺で煩悶して居た時の告白です。

○するとその人は言下に「役者が舞臺で自分の藝を眞に現はそうとしたら、役者自身が先づ眞實に生きよ、さすれば其舞臺も自然と其眞實味を表はさん」と、此の時から私はその扮する人間以上の舞臺は、單なる技巧や誤魔化しのツケ味では出來るものではないと覺醒しました。

○上手にやるといふ事よりは、眞實にやると云ふ事が役者の生命でありませうか、これは疑ふべき餘地のない眞理であると思ひます。

○ですから眞の新らし味と云ふ事は、新しい眞實味と云ふ事ではありますまいか、新時代の思潮におくれない眞實味をもつた役者が、一番新しい意味の役者でありませう。

○自分の小技巧よりも己れを空しくして自然に對する時、ほんとうの舞臺の眞實味があらはれてまいるのではないかと思ひます、時々子供がうま味のある藝を現はすのは、子供には邪氣がないからだと思ひます、子供の生活は其意味に於てよく藝術家の心持をあらはしてゐるのだと思ひます。

○アテ氣が出た時に眞の藝は滅亡だと存じます、ですから昔から眞の藝術家と云はれる程の人は、皆な無邪氣に生きるといふ事につとめたやうです、昔からの芝居道の言葉に「役者に子供」といふ言葉がありますが、眞の役者らしい舞臺をもつ役者は半面子供のやうでなければならぬ事を云つたものでありませう以上取り止めなく感ずるまゝを。

時評

ロシヤの饑饉

武者小路實篤

ロシヤの饑饉は隨分ひどいものらしい。一體ロシヤのことは正確にはわからないことは多いが、饑饉のひどいことだけは事實らしい。そして餓えてゐる人は非常に多數であつて、ロシヤだけではどうすることも出來ず、世界各國の人がその爲に働いてゐることは事實である。日本はその爲に働く人が今迄出なかつたことは、不名譽なことであるが、その人が出て來て熱心に働いてくれるのは喜びである。自分達はその仕事のよくゆくことを望み、そして餓えてゐる人を幾分かでも助けることが出來れば嬉しく思ふ。だが日本では多くの金が集るかどうか、恐らくどの國よりも僅の金切り集らなくはないかと思ふ。インドの饑饉の時には日本はもう少し熱心だつたらうと思ふ。もしロシヤの帝政時代に今度の樣な饑饉があつたらどうだらう。恐らく今奔走してゐる人は傍觀し、今傍觀してゐる人は奔走するだらう。しかしこの前トルストイなぞが骨折つた時も、日本では寄附しなかつたかも知れない。當時は日本とロシヤの間が面白くなかつた時かも知れないが。饑饉と云ふ大悲慘事に就いても政治的關係が影響して、助けるべき人を助けずにすませると云ふことは恐ろしいことである。謙信が信玄に鹽を送つたとは日本の美談になつてゐるが、反感を持つ政府の下にゐる人民の苦みに對して無頓着だといふとはよくない人情である。

ロシヤの今度の饑饉は天災のせいが、七八分はあつたであらが、二三分は無知な末者の革命家のあやまつた手段に災ひされ

たことは否定出來ないと思ふ。自分はロシヤに就ての多くの人の書くものを讀んだが、外面切りものを見ることの出來ない人のものが多かつた。それ等をよんでだまされるには自分達は人間を知りすぎてゐる。今のロシヤを理想化して見たがる人々は何と云はうとも、農民政策をやり損なつたことは否定出來ないと思ふ。その結果の幾分が今度の饑饉の元因をしてゐることは否定出來ない。

クロポトキンは「ボルシエキキは革命はどんな風にやつてはいけないかを世界に示した」と云つたさうだが、今度のロシアの革命の功罪を本當によく見ることの出來る人は殆んどゐない。自分は今、世界で本當のことを見ることの出來る人は殆んど居ないと思ふ。そして本當のことを見やうとする人さへごく少ないと思ふ。殊にロシアの眞相を見、又わかる人は少いと思ふ。レニンは幾分かそれを知つて之では駄目だと氣がついた少數の一人と思ふが、極度の神經衰弱に落ち入つてしまつた。

あとボルシエキキで信用の出來る人を自分は知らない。人命を重じることを本當に知らないものゝ革命は恐ろしい。人情も無視して恐怖と暴力で一時に自分の思ふ通りのことが出來ると思ふものは恐ろしい。このことは恐らくクロポトキンとゴルキーが知つてゐると思ふ。しかし勢ひだから仕方がない。誰れが惡いと云ふのではない。勢ひだから仕方がない。トルストイやドストエフスキーゝ恐れた勢が恐れた通りに汎濫したのだ。誰もそれはとめることは出來ない。レニンだつてたゞ千里の堤に蟻の穴をあけることに成功したにすぎない。革命のトロイカーに一つの鞭をあてることが出來たにすぎない。後は自分がふり落されない用意と、車が谷底におちない用心だけだ、ひき倒すものを恐れてはゐられない。とまる處まで走らせるより仕方がない。

車にのつてゐるものは樂天家ですましてゐられるかも知れない、御者は頭をこわしてしまつた。人をひきたをすことに痛快を感じ得るものは幸だ。しかし人情をもつものは不安を感じないわけにはゆかない。

四輪馬車のよく走るのをよろこんで見てゐるものよ。お前も仕合せだ。又四輪馬車が時々倒れさうになるものをよろこんで見てゐるものも仕合せだ。

だが餓えてゐるものは仕合せとはゆかない。車にひかれたものについては何にも云ふことはない、もう平和を得てゐるであらう。だが餓えてゐる人は仕合せとはゆかない。それは天災であらうと、人災であらうと。

たゞこゝに一つ金をあつめることに不都合な噂がある。

「それは勞農政府が饑饉を誇張して各國から金を集めて、それ

で極度の財政難を切りぬけようとしてゐる」と云ふ。

そして恐らく日本の金持達はこの無道な噂を信じてゐるにちがいない。

此噂を事實で消滅さすことが必要である。もし彼等に金を出させて一人でも多くの餓えたものを助けることを欲するなら。

つまりロシヤの饑饉ゝ救濟の方法その他についてロシヤからのたしかな報告を得て、かくの如く金が集まれば、かくの如く助かる人があると云ふことを知ることである。元より日本から送り得るものは燒石に水ともゆくまい。しかし米國からゆく多くの水の內の一部となつて役に立つことが出來れば喜びである。

自分はロシヤの饑饉がどの位いひどいか、それをこゝにかくことは出來ない。それには他に適當な人があるだらう。自分は饑饉と云ふ大きな出來事にたいしても、或は主義 政治的な厚意と反感が強くあらはれることを今更に強く感じるものだ。

ロシヤでは寺院の寶物を奪つて全部餓えてゐる人を救ふためにつかつてゐるらしい。(まさか政府の財政難の切りぬけに寺院の寶物を利用はしてゐまい。)その他あらゆる手段をつくしてゐるらしい。日本であつまる金が餓えてゐる人に役に立つ時がくれば、自分達、この仕事をしてくれた「前衛」及びその他の人に感謝するものである。

自分はロシヤの眞相を知りたい。饑饉の眞相も知りたい。每月々々どう云ふ風に進んでゐるか、段々助かる人が多いのか、どうかそれを知りたい。

自分は今のロシヤではクロポトキンとゴリキーを一番信用してゐるが、二人の饑饉についてどう云ふ考をもつてゐるか知りたく思ふ。ゴリキーがベルリンに來てゐると聞いてゐる。ゴリキーの談話でも誰か聞いて報告してくれるとうれしい。

自分は眞實が知りたい。

旅行中であはたゞしい時にかいた。自分 饑饉の眞相を知りたい。ロシヤの眞相が知りたい。そして人間が土地を生かすはどう云ふ方法をとつたら一番いゝか、それを知りたい。饑饉にあつては他にかく人があり、既にかいた人もあり、主意書もあるのだから、それに自分はそれ等以外のことはかけさうもないから。たゞすべての人間が人間らしく地上に生れるやうになるにはどうしたらいゝかを今更に考へると共に、餓えた人があつた時、全世界の人がその人にすなほにパンを與へることが出來る時代がくることを今更にのぞむのである。「今ロシヤに餓えてゐる人があるのですが」「それはお氣の毒ですね。私の處にかう云ふ不用なものがあるのですから、よかつたら上げて下さい」「ありがたう」

かう云ふことは簡單に出來ていゝはづと思ふ。不信が冷淡と不精が一番いけないのだ。

（一一、七、四）

武力干渉から利權の割込へ

山川均

ロ

政府は六月二十四日を以て、とう〳〵シベリヤ撤兵を聲明した。五億の金と一千人の生命を費やした四年間のシベリヤ占領の大芝居が、有耶無耶のうちに閉幕しようとする。然し誰れ一人、異議を唱へた者のないところを以て見ると、シベリヤ占領がよく〳〵無意義であつたことが知れる。

然しながらシベリヤ占領は、果してそれほど無意義であつたらうか。シベリヤ占領の爲に不幸にして尼港事件が起り、尼港事件の結果は不幸にして——特に日本の帝國主義に取つては迷惑千萬にも——サガレン島と黑龍江口の占領を餘儀なくされたのではなかつたか。若し尼港事件の代價として、露領サガレンの『讓渡』乃至は『租借』實質上同じことをも一つ云ひ換へれば『既得權の承認』といふことになれば、日本の資本主義的帝國主義に取つては迷惑千萬なことであるかも知れぬが、シベリヤ占領も滿更この無意義、滿更この元手の入れ損であつたとは云はれない。バイカル以東をせしめようなど〻いふ、柄にない大芝居を脚色してゐた人が何處かにあつたなら、其人々はシベリヤ占領が無意義に終つたことを慷慨して居るかも知れぬ。然し考へて見れば僅か五億の人の金を使ひ、千人ばかりの他人の子の命を棄て〻サガレン島が半分貰へれば、餘り惡るい商賣とは云はれまい。若し露西亞が火事場狀態でなかつたら、斯んな旨い拾ひ物は出來なかつたらう。

して見ればシベリヤ占領は、少くとも日本の資本的帝國主義に取つては、滿更この無意義であつたとは云はれない。日本の資本的帝國主義は無意味にシベリヤに出兵し、今ま又た空手で無意味に引揚げようとして居るものとすれば、其害毒は比較的輕少である。四年間のシベリヤ占領が、露國の經濟的建設の事業を××××××、昨年來の飢饉の慘害を一×××××××、シベリヤの住民の上にどれだけの×××××××かは別問題として、少くとも今後に害毒を殘さぬからである。けれど

も之に反して、若し日本の資本的帝國主義は、シベリヤ占領から相當の收穫を得て引揚げるものとしたならば、國民は政府と軍閥との行動に對して、決して警戒を怠ることは出來ぬ。シベリヤ占領は日本の民衆に取つてこそ全くの無意味であり、シベリヤの曠野で死んだ一千人の兵士と其の親や兄弟に取つてこそ全くの無意味であつたらう。けれども日本の資本的帝國主義に取つては、決して無意味でない。資本的帝國主義の傀儡たる政治家と軍人とが、シベリヤ占領の無意味を高調することによつて、民衆は彼等が、空手でシベリヤから引揚げようとしてゐるものでゞもあるかの如く欺かれて居る。大正九年に政府と軍閥とがサガレン島の占領を決行した時には、一方には盛んにバイカル地方からの撤兵を吹聽した。彼等はバイカル撤兵の袖でサガレン占領のお腹を匿そうとした。彼等が二年前に對外的に用ひて成功した戰法は、今日は偶々對内的にも効果を奏して居る

□

日本が四年の間シベリヤを占領した理由は、チエクスロヴアクの救援であつた。そのチエクスロヴアクは一體何者だらう。露國に於けるチエク軍が聯合國——殊に英佛——によつて操つられた傀儡だつたことは、今では隱れのない事實である。チエクの政治家等は英佛との或種の默契の下に、チエク軍に反亂を起させた。彼等はカザンにあつた露國の正金準備の大半を掠奪した上で、西に向つて進軍した。之は表面は獨逸の國境に進む爲だつたが、聯合國の本能寺は莫斯科にあつた。

大正七年八月、日本が米國の勸誘に應じてシベリヤに出兵したのは、このチエクの『西進』を援ける爲であつた。

ところが此の計畫は見事に失敗した。そこでチエクはシベリヤを横斷し、浦鹽から海路本國へ歸還することになつた。そこで今度はチエク軍の『東進』を助ける爲に、日本もシベリヤを占領してゐなければならぬと云ふことになつた。

然し大正九年の一月になると、英佛の頼みの綱のコルチヤク軍は、赤軍から最後の打撃を受け、チエク軍も戰爭を肯んじなくなつた。英國と佛國とが、露西亞の民衆の爲めに、結構な帝制を復興して下さらうといふ折角の企ても水の泡となつたので目先きの早い英、佛、伊の三國は、早々に見切りをつけて露國の國境から軍隊を引揚げ、米國も續いて撤兵した。

それでも日本の軍國主義のおぢさんだけは、可愛いチエクの身の上に若しもの事があつてはと云ふので、飽くまでシベリヤに頑張つてゐた。然るに有らうことか有るまいことか、本人のチエクは、シベリヤでは勞農官憲と慣れ合つて、勞農官憲の保護の下に、どし／＼浦鹽に進んで來た。此頃から日本の大義名分も少々輕々しくなつて來た。愈々このお客に、浦鹽から左樣なことを極められては、シベリヤ占領の大義名分が消滅するこ

とは云ふまでもない。日本は何時でも大義名分の國である。

そこで此時分から、日本はセミヨノフを使つて故らに東清鐵道の沿線に事端を釀し、チエクの撤退を妨げてゐると云ふ、飛んでもない非難が聞へて來た。然しチエクは愈々浦鹽から旅立つた。日本の出兵は危うく無意義に終らうとした。丁度此時！シベリヤの『政情』がまだ安定せぬことが知れた。恰かも大正十一年六月二十四日にシベリヤの政情が安定したやうに！

大正九年四月になると極東共和國が成立して、莫斯科政府はこの獨立を承認した。日本の大義名分が又た怪くなつて來た。

バイカルの撤兵――サガレン及び沿海州の占領――

この間に世界の形勢は一變した。勞農政府顚覆の最後の希望が消へた時、露西亞の協力――露西亞を經濟的に搾取すること――なしには、歐羅巴の經濟的復興の不可能なことが分つて來た。利權獲得の競爭が始まつた。

困つたのは日本の政府である。大義名分が儼として存してゐる以上は、固より撤兵する譯にはゆかぬ。シベリアを占領して居る以上は、御馳走の仲間入りをする譯にはゆかぬ。然し幸にして六月二十四日を以てシベリヤの政情が安定し、露國との間に修好關係が出來た。そこで愈々十月末日までに、沿海州全部から撤兵することゝなつた。

□

然しながら日本の政府と軍閥とは、何故に全ての露領から撤兵しないのか。撤兵が領土的野心の無いことを立證するものだとすれば、特に露領の一部分から撤兵せぬことは、やがて其の部分に對する領土的野心を立證するものではあるまいか。日本の資本的帝國主義が沿海州の撤兵と同時に、露領サガレン島の撤兵を實行せぬ以上は、尼港事件はサガレン占領の口實の爲めに、特に日本の軍閥の手によつて仕組まれたといふ非難は、永久に裏書きされるかも知れぬ。

シベリヤ撤兵に對して殆ど一人の異論もないことは、露國に對する武力干渉が如何に國民の意志に反して居り、シベリヤ占領が、如何に民衆に取つて無意義であつたかを證して居る。政府の撤兵聲明を見て、或人は輿論の勝利と云ふ。けれどもこれほど一般國民の意志に反し、之ほど民衆に取つて無意義なシベリヤ占領が、尙ほ且つ四年の間繼續せられた事は、日本に輿論の力がなく、有力な民衆の聲のないことを立證するものに外ならぬ。旣に政府と軍閥とが『自主的』に沿海州から撤兵せざることを得ぬような形勢の中にありながら、一歩を進めてサガレン撤兵を斷行せしめることが出來ないなら之は明に日本の民衆の無力を證明するものである。

日本の資本的帝國主義の政治家と軍閥とが、若し民衆の意志の利益に反して露國の民衆からサガレン島を奪はうとするならば、日本の民衆は、之を資本家的政治家と軍閥との手から奪つて、露西亞の同胞に還附しなければならぬ。日本の國民は何等の抗議をもしないで彼等に此の罪惡を犯さしめるであらうか。

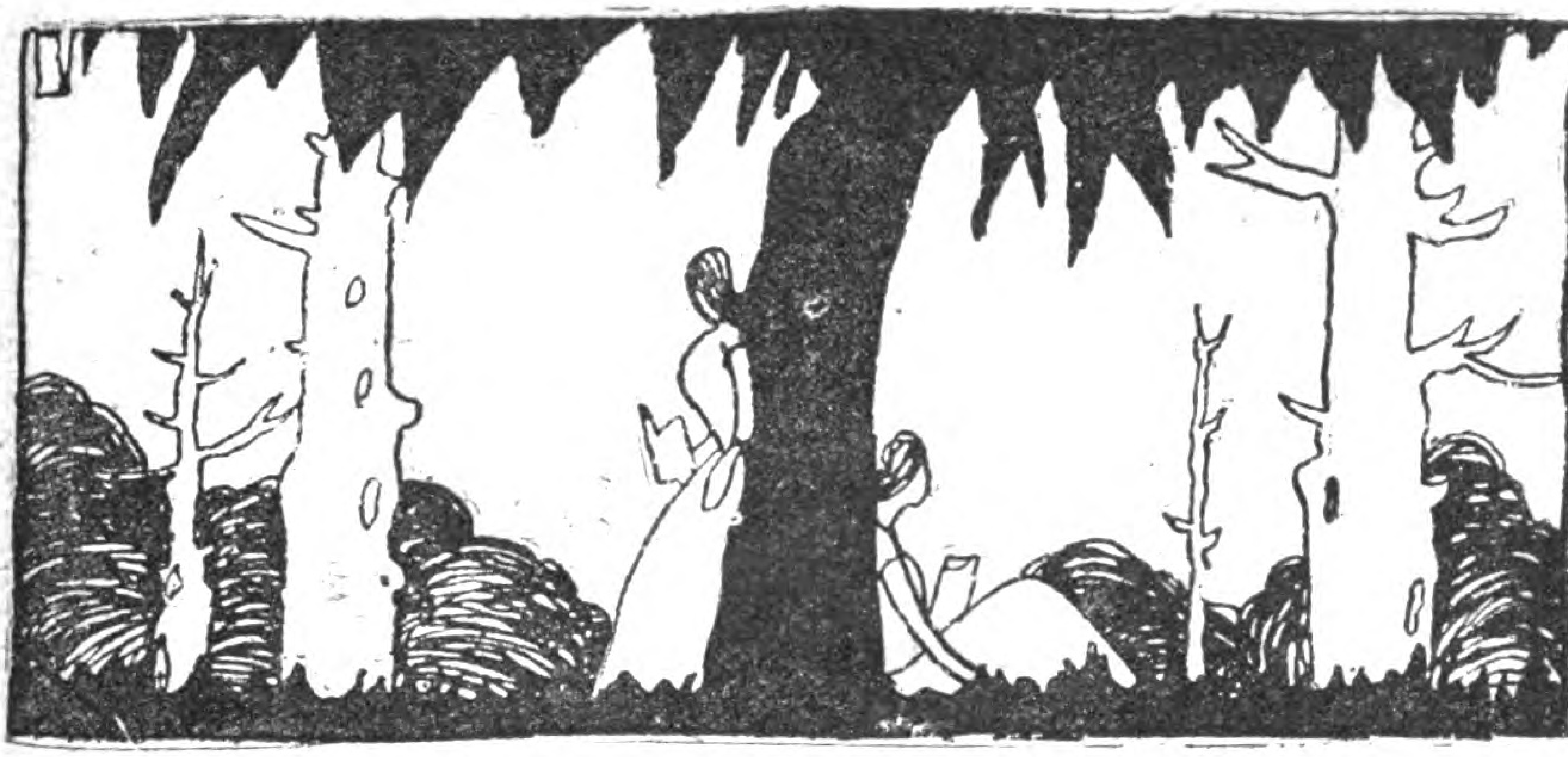
（七月十一日）

八月號創作

續不良兒　葛西善藏

暗夜行路　志賀直哉

截紙刀　里見弴



續不良兒

葛西善藏

時計屋の方も、やはり失敗だつたのだ。十一時頃床屋のお内儀さんに行つて貰つた、その二時間程前に、Fは時計屋を出てゐた。逗子の藥屋の場合と、同じやり口であつた。昨晩八時頃やはり小僧に置いて呉れと云つて突然訪ねたのを、餅など燒いて食はせたりして、時計屋では泊めて呉れた。東京の弟のところに居るのだと云つて、牛込の弟の住所は明瞭に云つてあつた。私も東京に居ることにしてあつたが、住所はいゝ加減な出鱈目を云つてあつた。Fは東京から小僧の口を搜しに來たやうに云つた。時計屋では何か家庭の事情でもあつて家出したものだらうとは思つたが、Fが、自分は機械などいじくるのが好きだから時計屋になりたいなぞと云つたりして、云ふことに筋道も立つてゐたので、主人の弟で海軍省とかの技手を勤めてゐる人に、今日役所の歸りに私の弟を訪ねさせて、話をきめる筈にしてゐた。Fは朝飯前に店先きを掃いたり、時計屋の子といつしよに近所の花屋に花を買ひに行つたり――その時に床屋のお内儀さんが見かけた譯だつた。それから間もなく、Fは一度東京に歸つて叔父さんとよく相談して出直して來ると云つて、主人の弟の人の東京から歸るまで待てと云つて引止めたのを振切つて、そこ〳〵に出かけたのだ

つた。外から歸つて來た主人は、その時はまだFが時計を持出したのに氣がつかなかつたが、後から自轉車で追かけて行つて極樂寺前で追ついて、Fが極樂寺坂の方へ行かうとするので、東京へ歸るのなら引返して汽車で歸つた方がいゝだらうと云ふと、電車の回數券一枚出して見せて、これがあるから江の島を見て行くのだと云つて、長谷から電車に乘つたと云ふのであつた。……床屋のお内儀さんが時計屋から聽いて來て與れた話は、大體斯うであつた。

私たちはまた床屋まで引返して來て、おせいもゐて、お内儀さんからその話を聽き直したのだが、いよ〳〵見當がつかなくなつた。

『やつぱし相手の奴が引張り出しに來たのだらうか。何か持出しやしなかつたかな?……時計屋で別にそんな話はしてゐませんでしたか?』

『え、別にそんなことは云つてゐませんでしたよ……』と、お内儀さんは曇りのない調子で云つた。

『兎に角警察へ頼むほか仕方がないね。どうも仕様がない奴だなあ……』

私たちはすつかり途方に暮れて、がつかりして、床屋を出ようとしてゐるところへ、やはりS屋の、おせいの嫂さんが、息を切らして、駈け込むやうに這入つて來た。

『まあ丁度いゝところでした。今ね、山の内の駐在所から建長寺の方へ電話がかゝりましてね、Fさんが腰越で時計屋に時計を賣つてるところとかを巡査に摑つて、駐在所に留めてあるから引取りに來いと云つて來たんださうですが、あなた方がお留守なので私が代つて出ましたのですが、山の内の巡査のおつしやるには、本署の方へ寄つてそれからすぐ腰越へ行くようにと云ふことでしたよ。……まあこゝに皆さんがゐて丁度よかつた。町の方だと云ふからこちらへでも寄つて聞いたら樣子がわかるかも知れないと思ひましてね、ほんとに駈けて來ましたのよ……』と、嫂さんは斯う云つて、ホツとした。

『さうでしたか。どうも有難うござんした……』と、私もホツとして云つたが、一昨晩以來S屋一家の人たちにかけた心配だけでも、たいへんなものだと思つた。

私たちはそゝくさと外へ出て、警察署へと半町程も歩るいた時分、またおせいが私たちを呼びかけて追かけて來た。

『……Kさん、あなた時計をお持ちですか？』と、彼女は急き込んだ調子で訊いた。

『時計？……持つてるよ……持つてるだらう……どうして？』と、私は突嗟の問ひに面喰つて、それともどうかして忘れて來たかな？と云つた氣もして、あわてた手つきで帶の間から時計を出して見せた。

『さうですか。それだとなんですけど、……Fちやんがまたお父さんの時計だとか云つて賣つてたんださうですから……』おせいは私の顏に注意深い視線を投げたが、斯う云つて口籠つた。

『……あゝさうか』と、私もやう〳〵そこに氣がついたが、『しかし時計屋では盗まれてゐないと云ふんだらう。それだけに怕いけないや。どんな奴の時計だかわかつたもんぢやない。まあ兎に角警察へ行つて來る……』私たちは斯う云つて彼女と別れた。

後になつて考へて見ると、その時のおせいの注意で、兎に角一應時計屋へ引返して調べなかつたと云ふことが、私たちの大きな手ぬかりだつた。私たちが床屋を出たあと、お内儀さんや嫂さんやおせいたちの間に話が出て、何しろゆうべはFが時計屋に泊つたのだから……さうに違ひないだらうとは誰にも考へられることで、それでおせいに追かけさして注意して呉れたのだが、その時の時分の神經は不良少年と云ふ見えない影に脅かされて錯亂してゐたし、時計屋では盗難の話は出なかつたと云ふことだし、兎に角當人さへ抑へてしまへばさうしたことの處分は後でどうにもつくと云ふ考へだつた。その時引返してゐ、Fが時計屋から持出したことが分つてゐたら、Fを腰越の駐在所で白狀さすことが出來て、Fに不良少年などの虚構の餘地を與へずに濟んで、あゝまでは事件を大袈裟にせずに片附けられたのかも知れないと思ふ。ところがその時のふとした手ぬかりから――當人が攫つたと云ふので氣がポーツとなつてもゐた――訪ねなかつたのが、たうとう最後まで機會を失つて、私が訪ねた時は、最早私たちは取返しのつかない慘めな立場に投り込まれてゐたのだつた。

時計屋では、現品を刑事が持つて調べに來られるまで持出されたことに氣がつかなかつたのだといふ――私は時計屋

の主人の言葉を信じたい。Ｆが朝店さきを掃いたりしてゐた時はまだ表の戸がしまつてゐて、店の中が薄暗かつた。その時Ｆが店のガラス箱の上に二三十置いてあつた機械の動かない傷み物の中から、小型のキツケル臺に金メツキの片側と、ニツケルの腕時計との二つを盗んだのだつた。後でそこの職人の話では、二つで拾圓位の價額のものらしかつた。が兎に角Ｆは金時計と思つて撰び取つた譯であるから、ある新聞に――小説家の倅金時計を盗む――と云ふ見出しで書いてゐたが、心理的に云つても正しい書方である。ところがまた、Ｆが極樂寺坂の方へ歩るいて行く途中、長谷の時計屋に寄つて、二つで五拾錢で買つて呉れと云つて斷はられてゐた。それから極樂寺前の飴屋にも賣りに這入つたらしい――そこから出て來たＦを自轉車で追かけて行つた主人が見つけて、そしてＦが長谷から電車に乘るのを見送つたのだと云ふことである。自分は親としての愚痴であるが、それまでの途中に、Ｆが持出したことを主人に發見されなかつたと云ふことは、私は自分の子の罪を庇ひたい卑しい心からではないが、Ｆのためにはたいへん不幸なことだつた。……

……

警察では、がつしりした體格の、赭ら顔の老練さうな巡査が、腰越の駐在所へ、さつきの小供の親がこれから引取りに行くところだからと、電話をかけた。私は一昨晩以來のことを話した。

『ゆうべはそこの八幡前の時計屋にやはり小僧に置いて呉れと云つて泊つたのださうですが、今も訊いて貰つたのですが時計屋では時計を盗まれてゐないやうな樣子で、さうして見るとその時計がどこから出たのか、腰越の方でも充分調べていたゞくつもりですが、都合でこちらへも彼奴を引張つて來ますから、よく取調べて說諭をしていたゞきたいと思ひますが……』腰越は藤澤署の管轄内だらうと思つてゐたので、腰越で放免されることになつても、さうした不良少年などの場合は、やはり鎌倉署に賴むほかないと思つて、私はさう云つた。

『は、それはその時のご都合で。……それでは兎に角あちらで濟みましたら、歸りに一寸寄つていたゞきますかな』

『は、承知しました。實はさつき山の内の駐在所の方からこちらへ寄つて行くようにと云ふことでしたので……』

私は物慣れた巡査の態度にいゝ感じを受けて、入口の外のベンチに腰かけてゐた弟を促して、すぐ近くの停留場か

ら、もうすつかり遊覽季節の客で混み合つてる藤澤行きの電車に乘つた。つい五日前にFが老父を送つてこの電車に乘つたのだが、三時間前にはどんな氣持で乘つてゐたらうか、そのFを今度はまた自分等兄弟が引取りに乘つた譯であるが、七里ケ濱の眺めどころではなく、お互ひに默り込んでゐた。

『山の中ででも見つかつて呉れた方が、まだよかつたがなあ。……その時計を賣らして、それからどうするつもりだつたらう。旅費を呉れてお前のところへでも放してやるつもりだつたか、それともその金のあるうちこの邊を浮浪し廻るつもりだつたらうか』

『さうですねえ、やつぱしそんなものがついてるんだと、幾らかでも金のあるうちは歩るき廻つてることでせうよ。それにしても、そんな時計なんかFちやんに賣らせたりしてるやうな不良少年だと、大したもんぢやないと思ひますがなあ……』

『何しろ今度は僕も少し油斷し過ぎたものな。留守が少し長過ぎた……』

『しかしまあ、死骸であがつたとか、なんとか云ふんぢやないから、まあ諦めるほかないでせうねえ……』と、弟は慰めるやうに云つた。

龍口寺前で下りると、駐在所はすぐだつた。往來を見下ろすやうに、右側の小高い場所の、小さつぱりした建物だつた。私たちが來意を告げると、若い細君が出て、『只今宮様のお詣りがございまして、それで出て居りますですが、ぢき歸つて參りますから、どうぞ……』と、愛相よく迎へて呉れた。丸いテーブルと三四脚の粗末な椅子の置かれた狹い應接室だつた。Fは隣りの同じやうな部屋の、ガラス窓の下のベンチに、學校鞄をさげマントを着たまゝで腰かけてゐた。Fは私たちを見て泣き出しやしないかと思つたが、そんな風もなく、逆上せたやうな赤い、硬張つた顏してゐて、脅えてる風も見せなかつた。

『時計屋へは、東京へ行くのだがおあしを落したから、お父さんの時計だが買つて呉れと云つて行つたのださうですが、何しろまだ子供さんのことですから、それで時計屋では下の交番まで知らして來たんださうでして、……』と、細

君は云つた。

『どうもとんだご厄介をかけました。でもお蔭様で摑まりましたから、充分こちらで取調べていたゞきませう。これまでのところでは盜癖はないやうなんですが、嘘は云ふやうですから、――その時計にしても、私のものではありませんから、鎌倉の時計屋で盜んだのでないとすると、どこか他で盜んだか誰かに貰つたか――貰つたと云ふのも變なことで、何か悪い者でもついてるのかも知れないと思ひますが、兎に角嘘では通らないものだと云ふことをよく敎へて置きたいと思ひますから……』

『いえもうほんの子供さんの出來心で……』と、細君は如才のない應對ぶりだつた。

『その時計を出して見せろ』とFに云ふと、マントのポケットから金メッキの一つを出した。

『この時計どこから出した？』

『貰つた……』

『貰つた……？……誰に？』

『秋山と云ふ子に……』

『秋山と云ふ子か？　どこの子だそれは？　なんだつて吳れたの？』

『貰つて來いつて……』

『貰つて來いつて、それではその子も腰越までいつしよに來たのか？』

『ウム……』

『その子はどうした？』

『知らない……』

『知らないつて、一體どこの子だ、家は知つてるだらう？』

『八幡前の裏の方から出て來るが、家は知らない』

『その子一人きりか？』
『もう一人慶ちやんと云ふ子と……』
『それはどこの子だ？』
『妙本寺の方から出て來る子だが、家は知らない』
『二人とも何んだ、學生か？』
『逗子の中學へ行つてる子だ……』
『何んと云つてこの時計を賣つて來いつて云つた？』
『唯この時計を賣つて來いつて。……云ふこと聽かなけあ、ひつぱたくぞと云つた』
『誰が？』
『秋山と云ふ子が……』
『秋山と云ふ子の時計なのか？』
『ウム……』
『逗子の藥屋へつれて行つたのもその二人なのか？』
『ウム……』
『なんだつてつれて行つた？』
『貴樣小僧になれつて……云ふことを聽かないとひつぱたくぞつて……』
『八幡前の時計屋へもか？』
『ウム……』
『そして今朝又呼び出しに來たのか？』
『ウム……』

『一體その二人といつから知つたんだ？』

『お祖父さんを送つて行つた歸りに……』

『どこで？』

『八幡樣の裏のところで……』

『そしてどうした？』

『貴樣俺の乾分になれつて。……云ふことを聽かないとひつぱたくぞつて』

『お前はどう云つた？　そして一つもひつぱたかれたのか？』

『その時はひつぱたかれなかつた。僕は默つて歩るいて來た……』

『一昨日の歸らなかつた晩は、ひつぱたかれたのか？　あの晩は蕎麥屋へでもつれ込まれて、蕎麥でも喰はされたのか？　お前はおせいちやんにその晩は物置きに寢たとか云つたさうだが、それでは嘘なんだね？』

『物置きに寢たと云ふのは嘘ぢやない。蕎麥屋なんかへも行きやしない』

『それではあの日學校の歸りに、友達と喧嘩して顏に傷したから、僕に叱られるから歸らなかつたとかおせいちやんに云つたさうだが、それでは嘘で、その秋山とか云ふ奴等にひつぱたかれたんだね？』

『…………』

『物置きへはお前一人で寢たのか……』

『僕一人で寢た……』

『巡査が歸つて來るまでの間に、私とドとはかうした問答を重ねたが、それがどこまでが本當なのか嘘なのか要領を得ない氣がされたが、兎に角彼一人のしたことでないと云ふことは、確められた氣がした。かうして生命に別狀なく、大して窶れてもゐないやうな當人を掴まへた以上、他の大抵のことはどうでもいゝとして、唯暴行を加へられてゐるかゐないか――そのことを考へると、私の氣持は隨分慘めなものだつた。そのことだけはどこまでもはつきりさせて、相手

の奴等に尤分制裁を加へてやりたいと思つた。それにしてもいつのまにこゝまで落ち込んでゐたかと思ふと、斯うした場所のベンチに曝されてゐる片意地さうな萎けた眼付してゐる彼の姿が、淺ましく醜くゝ、何かしら野生的な小動物めいた感じさへされて、私は自分自身の呪はれた存在を思はない譯に行かなかつた。

『兎に角今に巡査さんが歸つて來たら、何もかもはつきり正直に云ふんだな。嘘を云つたつて、駄目さ。僕なんかの前とは違ふからね、こゝでは嘘では通らない。だから何もかも正直に白狀すると、僕等からなんとでもお願ひして堪忍して貰つてやるが、さうでないと幾日だつてこゝに留めて置いて貰はにゃならん。その時計の出さきがはつきりしない以上、どうにも仕方がないんだからね。だからね、今に巡査さんが來たら、どんな云ひにくいやうなことでも、みんな正直に云つちまうんだよ。それでないと、取返しのつかないことになつちまうよ。どうしたつて、嘘では通らなんだからね。解つた？……』私と弟とは代る〳〵斯う云ひ置いて、應接室の椅子に歸つて、煙草を吸つてゐた。

間もなく巡査が歸つて來て、私たちと三人でＦの學校鞄や辨當の中なども檢べたが、別に不審なやうなものも出て來なかつた。一昨日の朝持つて出たきりの辨當の中にはこち〳〵になつた飯粒が喰付いてゐた。

『では一二時間も私たちは外へ出て參りますから。なか〳〵剛情な奴で、嘘も云ふやうですから、幾ら毆つて下さつてもよろしいですから、どうか本當のことを白狀さしていたゞきたいと思ひます。容易なことでは本當のことを云はないかも知れませんから……』

巡査が調べるのを應接室で私たちは聽いてゐたが、『オイ小僧！　貴樣この時計をどこで盜んで來た？』などゝ語調をかへて訊いてゐたが、Ｆはやはり私たちに云つたと同じことを繰返してゐて、埒が明きさうにないので、私たちは巡査に斷はつて、丁度前から強く降り出した雨の中を、下の通りへ出て、近くの蕎麥屋へはいつた。風も出て吹き込むので暖簾をはづして表の戸をメめた薄暗い部屋の茶湯臺に向ひ合つて、晝飯を食つてゐない私たちは蕎麥と酒を賴んだ。

『酒臭い息なんかして行つてわるかないかな？　巡査なんて氣の小さなもんだらうからな』

『そんなこともないだらう。ちつと位ゐいゝでせうよ』

『その一緒について來たと云ふ奴はどうしたらう。Fが引張られたのを見て逃げちまつたか、それとも今にFが免されて出て來るかと思つて、時計が惜しくてまだこの邊にうろ〳〵してるもんだらうか』

『いや無論そんな奴等のこつたから、この邊になんか愚圖々々してるもんぢやないでせう』

『兎に角鎌倉の奴等には違ひないんだな。僕の名前位ゐは知つてる奴等かも知れないな』と、十七八の不良中學生の姿が、いろ〳〵と私には想像された。斯うした三月下旬の春氣分に浮かされて、學校を怠けて漫然とこの邊を浮浪し歩るいてゐるような、深い企らみなんかない奴等の仕業のやうにも考へられた。

『それにしても小僧に押込うと云ふのはどう云ふ譯だつたらう？』

『さあそれは、Fちやんが歸りにくゝなつたんで自分からさう云つたんぢやないでせうか』

『さうか知ら？……』

日が暮れかけて、私たちは駐在所に歸つて行つたが、應接室にはさつきの巡査と部長の二人がゐて、椅子に腰かけて煙草を吸つてゐた。Fは隣りの部屋のベンチにさつきのように座つてゐた。

『どうもご厄介さまでした。如何でしたらう、白狀しましたでせうか？』と私は訊いたが、相手の二人とも疑はしげな冷笑したやうな眼付を見せたが、不得要領な挨拶ぶりだつた。

『いやどうもね、いろ〳〵訊いて見たのですがなか〳〵剛情のやうでしてな……』と、さつきの巡査が云つた。

『ではさつきの時計は、あれはどうしたのでせう？』

『さあそれも、どうもはつきりしたことがわからないんですがねえ……』

『さうでせうか。それではもしなんでしたら、それがわかるまで幾日でもこちらの方へ留めて置いていたゞきたいのですが、どうも私たちにもさつぱり要領得ないものですから……』私はこの邊は藤澤署の管轄だらうと思つてゐたので、藤澤へ廻つてもいゝと思つて斯う云つたのだつたが、やはり鎌倉部内だつたのだ。

『いやもうこゝでは留めて置く場所もありませんし、兎に角本署の方へ、本署でもいづれ調べることでせうから、本署

へ行つて……』こちではもう關係がないんだから早く引取れと云つた、態度だつた。

『何しろ困りましたなあ。どうも仕樣がない奴です。私と二人きりで暮してゐるので、つひ注意が行屆かなかつたのでしたが、やつぱし低能なんですな。ずつと早婚の子なもんですから、やつぱし腦味噌が足りないんだと見えて、こんなことになつちまひまして……』と、相手の二人の取付端のない態度に失望と泣笑ひを感じて、私は云つた。

『いやどうして〳〵、低能どころぢやない、しつかりしたもので……なか〳〵どうも、出來たお子さんです……云ふことだつてどうして十四としてはしつかりしたものだ……』

巡査は斯う如何にも感心したと云つた調子で云つて部長と顏を見合せたが、同時にひどく擽つたいやうな笑ひを浮べて、二人は私の顏に視入つた。――何と云ふ親馬鹿……それが、斯う云ふことを意味してゐたのだとは、その時の自分には察しられなかつた。

私たちが外へ出てゐた間にか、或はもつと前、Fが捕まると同時に、本署から電話でFのしたことがすべて明瞭になつてゐたのに違ひないのだ。Fがその時に素直に白狀するとよかつたのだ。どこまでも欺き了せるものと思ひ込んだ、ひねくれた剛情な、子供らしい淺はかさがいけなかつた。警察と云ふ特殊な手にかゝつてゐるのだと云ふことが、都會で育つて中學の試驗でも受けようといふ年ならば多少は理解がある筈なんだが、野生的に大部分田舍で育つて來た彼には、そんなことに理解が出來てゐなかつた。警察と親との相違なんか、それほど大したものとは、彼には考へられなかつたかも知れない。尤も、彼としては、必死の場合であつたらうが、自分等でさへ、彼の剛情――傲慢にさへ思はれた彼の態度には、結局同情を持つことが出來なかつたが、何と云ふ親馬鹿！……その時もそこまではFを疑へなかつた。警官の要領を得させない態度が氣にはなつたが、やはり半信半疑のまゝで、Fを引張つてすつかり暗くなつた外へ出た。どうせ最早嚢の中の鼠だ、Fの云ふなりになつて、根氣で彼の底を突き止めてやれ――斯うした腹もあつて、兎に角無事で捕まつてよかつたと、警官たちへお禮を云つて、駐在所を出たのだつた。

電車が來ないので、村を出て海岸の上の停留場まで三人は歩るいた。雨はやんでゐたが、空は暗く、波の音は高く聞

えてゐた。Fとは一昨日の朝から會はないのだが、斯うして並んで歩るいてゐると、ひどく久しぶりのやうな氣もされるが、また、平生のFではない――まだ何者かの支配につながれてゐる他所々々しい子で、完全な自分のFではないやうな氣もされて、口を利くのも臆劫な氣がされた。

『巡査が何と云つた？』

『小僧、貴樣この時計をどこから盜んで來たつて……』

『お前は何て云つた？』

『秋山と云ふ子に貰つて來いつて……』

『それだけのことか。ほかにも何か訊かれなかつた？』

『何も訊かれなかつた……』

『毆られたか？』

『ウム』

『幾つ？』

『一つ……』

『その秋山とか云ふ子が腰越の時計屋までついて來たとか云つたが、さうか？』

『さうぢやない、七里ケ濱まで一緒に來て、その子はそこで待つてるからつて……』

『その慶ちやんとか云ふ子もそれでは一緒だつたのか？』

『さうぢやない、その子は長谷の停留場の近くで待つてるつて……』

嘘ぢやないのか？　斯うなつてから嘘をついたつて仕樣がないよ。男らしく正直に云つちまふんだな。嘘ぢやないか？』

『嘘ぢやない……』

私と弟とが代る〴〵訊ねたが、Fはどこまでも斯んな風に云ひ張つた。

『ではその秋山と云ふ子も七里ケ濱から長谷へ引返したのか？』

『ウム……』

『どう云つて？』

『貴樣時計を質つたら長谷へ歸つて來いつて。歸つて來なかつたらひどい目に會はすつて……』

追求すればするほど、私たちは混亂ともどかしさを感じた。兎に角Fの云ふなりになつて、長谷の停留場に着くと、私たちは電車の下り口をFとは別に下りて、Fとは離れて、改札口の外へ出ると、Fとは十間程も後に離れて、Fをその邊をぶら〳〵歩るかせた。Fは海岸通りの暗い方へ往つたり、引返して線路を越えて大佛の方へ往つたり、雨あがりの路を日和下駄でチョコ〳〵と歩るいた。袴を穿いて、短いマントの帽子をかぶつて、猫脊の格好して、チョコ〳〵と私たちのさきになつて歩るいた。路次めいたところへ這入つて行つたり、明るいところへ出て來たり、さうして三十分餘りもそちこち歩るいてゐたが、私の氣のせゐか、Fの步調がだん〳〵速度が加はつて行くやうに思はれた。――、後で考へると、その時Fの脚がだん〳〵震へて來て、自然にさうした步調になつたのだらう――がその時にはさうとは氣へつかなかつたので、自業自得とは云ひながら、八幡前の時計屋で朝飯を喰べたきりで空腹でもあらうし、また相手の奴等にはすつかり脅迫され切つてゐるので、其奴等が摑まつた際の後難を怖れて、氣が氣でないのではないかと思ふと不憫でもあつたが、またさうして私たちのさきになつてマントの帽子を深くかぶつてチョコ〳〵と默つて行つたり來たりしてゐる姿を見ると、何かしたら凶兆の小黑い鳥めいたものゝ子――さう云つたものに魅られた不吉な子であるやうな感じがされた。私たちは歩るくのに疲れた。それらしい影にも見當らなかつた。

『この邊で鳥打帽をかぶつて飛白の着物を着た十八九位ゐの學生風の男が二人、ぶら〳〵やつてゐたのに氣がつきませんでしたでせうか？』と、私は停留場のそばの踏切番だか轉轍手だかの小屋の前に立つて、二三人ゐた若い男の人たちに訊いた。

『さあ……氣がつかなかつたが、それは何時頃のことですか？』

『何時頃つてはつきりしたことはわからないんだが、この邊で待つてることになつてゐたんで……』
『どうも氣がつきませんでしたね……』さつきから幾度もその邊をぶら〳〵やつてゐたので、礙式な鳥打帽をかぶつた私を刑事とでも思つたかのやうな顏して、彼等の一人は云つた。

私たち三人はそこからまた電車に乘り、驛前で下りて、警察署のすぐ前の蕎麥屋にはいつて、私と弟とはビールを飲み、Fには天丼をあてがひながら、また同じことを繰返してFに訊いた。がどこまで押して見ても、Fの答へは同じだつた。

『ほんとに嘘ぢやないのか。警察へ行つてからでは、どうにもならなくなるんだよ。お前がいくら剛情を張つたつて、刑事も居るし、お前の嘘なんか通りつこないんだからね。それがはつきりしないうちは幾日だつて留められるよ。今のうちお前がはつきり云ふと、僕等がどんなにも謝つて許して貰つてやることも出來るけれど、警察へ出てまで嘘をついたとなると、ほんとにたゞごとでは濟まないことになる、お父さんだつて隨分迷惑をせにやならんことになるんだから、今のうちにほんとのことを云つて吳れ……』と、私たちは氣が氣でなく、賴むやうにしつこく云ふたが、
『嘘ぢやない……』と、Fは云ひ張つた。
『どうもそれでは仕方がないなあ』と、私たちは諦らめるほかなかつた。單に時計だけのことだとまた考へやうもあるとしても、不良少年との關係は、私たちには手に負へないことだつた。

帳場に座つてゐた主人に、『この近所に秋山とか慶ちやんとか云ふ名の中學生がゐないでせうか？』と訊いて見たりしたが、知らないと云つた。私たちは蕎麥屋を出て、往來を突切つてすぐ向ふの警察署のドアを開けてはいつて、三人は警部補の前に立つた。書間の巡査のほかに六七人の巡査がテーブルに向つてゐた。私はそこでもFの一切のこと――今度の經過について警部補に詳しく話さねばならなかつた。警部補はまだ若い、鬚の黑い豐頰の、警官らしく冷靜な態度の人だつた。
『……そんな譯でして、この時計はどこまでも其奴等に貰つて來いつて云はれたんだと云ひますし、ゆうべ泊つた時計屋

では盜まれてゐないと云ふことですし、どうも此奴の云ふことが私たちには譯がわからないんで、何しろ今度は私が長く留守にして、その間學校を休んでゐたさうで、その間にさう云ふ奴等に捲き込まれたのか、此奴の云ふのではほんの此頃だと云ふんですが、何しろさつぱり要領を得ないんで、どうかこちらのなんで調べていたゞきたいと思ひまして、』

『時計屋へ泊つた……それはどこの？』

『すぐ八幡前のSと云ふ時計屋ださうで』

『S……それは怪しからんね、勝手に子供を泊めたりなんかして、……誰か時計屋の近所の旅館へでも電話をかけて、Sにすぐ來るやうに……』と警部補は云ふと、一人の巡査が電話より私が行つて來ませうと云つて出て行つたが、ぢき歸つて來て、

『Sは逗子へ行つて留守ださうで、歸り次第すぐよこすやうに云つて來ました』

『さうか……』と、警部補はうなづいた。

その金メッキの時計は、私たちが來ると同時に警部補のテーブルの上に出されてあつた。『さう云ふと、いかにも不良少年でも持つてゐさうな時計のやうな氣もしますが』と、私は云つたりしたのだ。ところが、後になつて時計屋の主人の話では、その時計はその晩時計屋へ使ひに行つた巡査が時計屋へ賣つたものださうで、その巡査がテーブルの上の時計を何氣なく手に取つて見て自分の賣つたものだと氣がつき、それで電話でなしに自身時計屋へ行つたものらしい。して見ると、その時まで時計屋からは何の屆けも出てゐなかつたとしても、その時にはもう警察ではFの盜んだことが明瞭になつてゐた譯である。それで、警察では特に、それから二時間ほどの時間の餘裕を與へて、今に時計屋の主人が出て來ると何もかもわかるんだぞ、だから今のうちに素直に白狀しろ——斯う云ふつもりだつたかも知れない。がそれを、Fはしなかつた。Fとしては、いよ〳〵主人が出て來ても、まだ不良少年を擔ぎ通すつもりだつたらうが、それがたいへんいけなかつた。そしてまたそこまで行つてまだそこに氣のつかなかつた私の親馬鹿——不良少年と云ふFの暗

示にかゝつてすつかり眼が眩んでゐた譯だつた。それにその時になつて、もう一つの時計さへFは出してゐなかつた。それも恐らく腰越で檢べられた時に——それはマントの裾の片隅を破つたか自然に破れたのか、そこに隱してあつたが——それも發見されてゐたのに違ひない。警察では何もかも明瞭になつてゐたのだ。唯不良少年と云ふことに多少の根據でもあらうかと、職掌上ちよつとは疑ひを持つたかも知れないが、當人を引張り出して來て見ると、所謂警察眼で、一目で全然幼稚な虛構であることがわかつたのだ。時計屋からだつてそのことは無論聽き出してあつた譯だ。要するにFの所謂惡化程度、境遇、家庭の事情——それを取調べるだけの必要だつたのだ。そしてそれからが悉く、警官の同情を買ふべく、餘りに點が少なかつたと云ふ譯であらう。

『逗子の開成？……さうぢやないだらう、……すると鎌倉中學の方ぢやないかな……鎌倉中學の方にも不良少年は居ると云ふことだが……』と警部補は冷笑を浮べてFの顏を見ながら、氣をひいて見るやうに、云つて見たりした。

『ふだん金なぞ持たして置くんですか？』

『別に持たして置くと云ふこともないですが……』

一人の巡査が、Fの體格を見たり、下眼瞼を開けて見たり、袴に二ケ所鉤裂きの出來てるのを檢べたりしたが、

『これはどうしたの？』

『物置きで寢た時竹で破ぶいた……』

『その時はお前さんほんとに一人だつたんだね？』

『ほんとに一人だつた』

そしてその巡査は、

『いくら不良少年だつて、金を取るとか、……何かするとか、目的なしにどうもするもんぢやありませんよ』と、どちらともつかないやうな調子で笑ひながら云つて、自分の席にかへつた。

『それにしても一昨日の晩物置きに寢て、晩飯も朝飯も食はずに學校へ行つたんださうですね。よく何も食はずに居れ

たもんだな……』と、警部補と席を並べてゐる今朝の巡査が云ふた。

『それはほんとのやうです。どうかしてわるくすねると、一日位ゐは食はなくても平氣で居るやうな質ですから……』

『ホウ、それぢやあ……？』と、巡査は首を傾げて意味ありげな視線を私に向けたが、それきり口を噤んだ。

『ふだんあまりやかましくしても駄目ですよ。子供はほんとに今が大事な時ですからな。毎日日が暮れてあそこまで一人で歸るなんて、それからして第一不注意ですよ』と、警部補は私に說諭的な口調で云つた。

『いや別にそんなにやかましくしてゐる譯ではないんですが、何しろ餘り出來ない方なもんですから、それで豫習を少し厳しくやらしてゐたんでしたが、それを今度は私の留守中學校を休んでゐたと云ふので、それで叱つたんでしたが、ふだんはそんなにもやかましくしてゐる譯でもないんです』と、私は辯解的に云つた。

『しかしいくら出來ないからと云つて、……中學へはいれるとかはいれないとか、そんな問題ぢやないですか。兎に角餘り刺激するやうなことはよかないですよ……』と、たしなめる調子で、一重瞼の射すやうな眼光を向けて云つた。

十時もだいぶ過ぎたが、時計屋の姿は見えなかつた。混亂と昂奮から、私は喘息の發作でも來さうな氣がした。Fはその間警部補のテーブルの前に立詰めだつたが、最早問答も途絕して、Fは片意地さうに顏を仰向けてゐた。

『それではひとつ、小父さんが訊いて見てやるかな、……ちよつとこつちへ來い』

警部補は斯う云つて、何とも得體の知れないやうな微笑を口尻に浮べて起ちあがつて、Fを奧の方へつれて行つた。

それではやつぱし不良少年と云ふのは事實なのだらうかと、三十分程の間だつたが、私には長い慘忍な沈默の時間だつた。席にかへつて來た警部補の顏は、すつかり無表情に引緊つてゐた。

『それではやつぱしその、不良少年といふのは事實なんでせうか？』

私が斯う訊いたが、警部補はやはり無表情な一瞥を與へたきりで答へなかつた。そしてちよつとの間額に掌をあて、考へ込む樣子をしてゐたが、心を決つしたと云つた風で、そばのガラスのペンを執り、紙の上へ持つて行つた。もう私

たちの方は振向うともしない態度だつた。

『それではその秋山と云ふ子は、いつもどんな着物を着てゐるかね？』

『飛白の着物……』

『飛白は木綿かね、絹かね？』

『木綿……』

『模樣はどんな模樣かね？　十の字のやうになつてるのか、それともお前さんの着てるやうな模樣かね、どつちだ？』

『僕の着てるやうなのゝもつと小さいの……』

『もつと小さいつてどれ位ゐかね？……こんなもんかね？』

『ウム……』

『羽織の紐はどんな色だつた？』

『茶見たいな……』

『太さはどうだ？』

『餘り太い方ではない……』

『帶は？……木綿か絹か？　どんな色をしてゐた？』

『…………』

『木綿か絹か？……お父さん見たいな帶か、それともメリンスか？』と、私は口を出したが、警部補は餘計な――と云つた眼付を見せた。

『メリンス……』

『色は？』

『…………』

『あんなやうなのか？』と、警部補は壁の方を指した。

『あんなやうなのゝもつと黑つぽいの……』

『フーム……そして下駄はどんなのを履いてる？』

『朴齒の日和……』

『緒は何だ、革かね布地かね？』

『布地見たいな……』

『どんな色？』

『黑い……』

『確かに黑い色かね？』

『ウム……』

『しつかり云はなくちやいけないよ。間違へちやいけないよ……』と、私は應援的にＦに注意した。

『確かに黑い色の布地の緒だね？』

『ビロード見たいな……』

『フーム……ビロード見たいな』警部補は時々符號めいた線を紙の片隅につけながら、訊問をすゝめた。

『それでは帽子はどんな帽子？』

『鳥打帽……』

『いつも鳥打帽かね？』

『ウム……』

『どんな色の？』

『鼠色見たいな……』

『鼠色見たいで、それで格子かなんかあるかね？』
『ある……』
『ある、……それへ徽章をつけてゐるのかね？』
『ウム……』
『どんな徽章？』
『ペンを交へたやうな……』
『ペンを交へたやうな、……足袋はどうだ、いつも穿いてるか穿いてないか……？』
『穿いてない……』
『いつも穿いてないか？』
『いつも穿いてない……』
『髪はどうだ、長くして分けてるか、それとも短く刈り込んでるか？』
『少し長くしてるが、分けてはゐない……』
斯んな風にして顔の雑作の一つ〳〵、皮膚の色、骨格、身長など明細に調べて行つた。もう一人の慶ちやんと云ふ方も服装などは大體似寄つたものだつたが、體格容貌は異つてゐた。
『それではその秋山と云ふ方は痩せて、長い黒い顔なんだね？　そしてその慶ちやんと云ふ方が肥えて丸い顔してるんだね、そしてその方が色が白いんだね？　さうだつたかね？』
『ウム……』
『年は二人とも十八位で、それで背丈はどんな方だ、二人とも？』
『背丈は普通だ……』
『普通つて……？』

『……四尺九寸位ね』と、Fは思ひ切つたやうに顔を眞赤にして云つた。
『四尺九寸位なんて、お前そんなはつきりしたことが云へるのかへ?』と、私はついまた口を出さずに居られなかつた。そして又傍の巡査を顧みて、
『十八位でそれだけの背丈があるもんでせうか?』と、たまらなくなつて話しかけたが、
『まあそんなものでせうな』と、巡査は無關心に云つた。
『金歯でも入れてなかつたか?』と、警部補は續けた。
『なかつた……』とFは答へたが、また思ひ出したと云つた風で、
『前にはないが、奥の方にあつた』と云ひ直した。
『それはどつちの方だ、秋山と云ふ方か、慶ちやんと云ふ方か?』
『秋山と云ふ方……』

こゝまで來て、私は思はず嘆息するやうに云つた。
『それほどまでにはつきり云へる人間が、どうしてまた不良少年なんと云ふ奴等に威嚇された位で、そんな馬鹿なことをしたのかなあ……』私は斯う獨り言のやうに云つたが、涙がにじんで來るのを覺えて、警官たちの顔を見廻したが、警官たちの目にもやはり一瞬間意味不明の異様な閃めきが傳はつたやうに感じられた。親としての感情には警官とても變りのない譯である。

Fの訊問は、大體斯んなことで濟んだ。奥へつれ込まれた時どんなことを白狀したのかわからないが、訊問中のFの態度は、かなりわるい感じだつた。警部補に問詰められてウム／＼と返事する――それがひどく傲慢からでもあるやうにも聞えるし、また極度の苦痛から歯を食いしばるため自然に發しられる言葉のやうにも思はれた。顔を眞赤にし、醜く脣を歪め、時々私の顔に横目を向け、總身を震はしながら、そのウム／＼を繰返した。私は寧ろ、私自身彼の立場に置かれなかつたことを、呪ひたい氣持だつた。

『やつぱしそれでは、さうした不良少年見たいなものがついてゐたんでせうか？』

『まあ、よく調べて見んと……』

『やはりその何か暴行でも加へられた形跡でも？……』

『兎に角よく調べてから……』と、警部補はどこまでも不得要領な態度で、うるさげな顔して云つた。

『實は入學試驗の都合で、こつちの學校の免狀式が二三日で濟み次第すぐ東京へやるつもりでゐるのですが、大抵幾日位ゐでそれが分るでせうか。免狀式が濟み次第東京へやつて差支えございませんでせうか。こちらのご都合でいつでもまた東京から呼び寄せますから……』

『さあ……』と警部補は一寸考へ込んだ風だつたが、『それでは一週間だけこつちに置いて貰ひませう。そのうちには何とか調べがつくでせうから』

『實はこの二十五日から入學試驗が始まるので、その方へも願書を出してあるものですから……』一週間と聞いて、私は當惑して嘆願するやうに云つた。

『さうですか。……それではと、明日は祭日だと、明後日――それではあと二日』と、警部補は考へ〳〵だつたが、きつぱりと確信の籠つた調子で云つた。

『さうですか。どうも有難うございます。それでは私たちの方でも、明日から此奴を引張り歩いて、其奴等を掴まへることにしますから。其奴等の掴まるまではそれでは此奴をこつちに置くことにしますから……』

『ではさうしてご覽なさい』

『この時計は其奴等を掴まへるまでこちらへお預けして置きますから』と云ふたが、私には明日にも其奴等を掴まへて見せると云ふ自信があつた。斯う明瞭になつた以上は、警察の力ばかり賴りにはしてゐられないと云ふ腹だつた。

『こつちで預かると云ふ譯にも、……まだそれだけの手續きがついてないことだからな』

『でもさうした不良少年の品物を私たちが家に持つて歸ると云ふのもなんですから、どうか時計はこちらで……』

『では、こつちで預つても仕方がないんだが、まあ……』と、警部補は苦笑しながら時計を片寄せた。

『それではその相手の奴等を引張つて來て、此奴の云つたことに間違ひないやうでしたら、何とか此奴の處分だけは許していたゞけませうか。何しろ免狀式前でもあり、入學にも差支えるやうなことになるんで、何とか處分だけは許していたゞきたいと思ふんですが』と、警部補の顔に覗入りながら哀願の調子で云つたが、

『それはいづれ明日署長と相談の上で、すべて署長の意見にあることですから……』と、彼はやはり冷淡な調子で云つた。

外に出て、私たちはすつかり疲れ切つて驛前から自動車で寺に歸つたが、井出君も東京から來てゐた。

『警察で云つたことは嘘ぢやないんだらう？嘘だつたらたいへんだぞ。もう本式になつちまつたんだからね。でもまだ今のうちなら、嘘なら嘘だつたと云ふと、これからでも行つて謝まつて來てやるが……』と、やつぱし私には腑に落ちないところがあるので訊いたが、

『嘘ぢやない』と、Fは云つた。

『奥で警部さんにどんなことを訊かれた？』

『お母さんがあるのかないのかとか、どうしていつしよにゐないんだとか……』

『そんなことだけか？』

『さうだ』

『それにしても、警部さんの前であれだけの答辯の出來る人間が、不良少年見たいな奴等に威嚇かされた位ゐで、どうしてこんな馬鹿なことをしたのかなあ。氣をつけろ！』と私は叱つたが、それにしてもF一人の悪智慧でなかつたと云ふことが、自分としてはせめてもの慰めであつた。

『そんなものが居るんですかねえ、おつかねえや〳〵』と、お寺の婆さんやおせいたちも舌を卷いた。

翌日は春季皇靈祭で、晴れたいゝ天氣であつた。境内の櫻もぽつ〳〵咲きかけてゐた。私たち三人して、Fを胐にし

て、不良少年を狩り出さうと云ふ譯である。多少興味のあることでもあつた。『逆緣ながらそれではひとつ、敵討に出かけてやるかな』と、私は笑つて云つたりした。『僕が餘り創作が出來ないので、Fの奴とんだ創作をやつた』と、云つたりした。Fには昨日の通りの服裝をさせた。『鞄は置いて行つてもいゝだらう、マントを着てるからわからないから』と云つたが、鍵裂きのまゝの袴に日和を履かした。私たちは各自にステッキや、井出君は太い竹の棒を持つた。『不良少年なんて生意氣だ！　摑まへたら毆りつけてやらうか！』と、井出君は逞ましい腕に力をこめて云つた。『しかしそんな奴等だから、刄物位ゐは持つてるだらうから油斷しちやいけませんよ』と、私は注意した。警察の手に摑まる前に自分等の方で摑まへ、誠意を以て彼等の改悛を求め、場合に依つては自分等もいつしよになつて警察へ謝まつてやつてもいゝと思つた。

『それでは出かけて來るからね、晩にはどつさり御馳走をこしらへて置いて呉れ、凱旋祝ひをせにやならんから……』とおせいに云ひつけて、私たち四人は九時過ぎに寺を出た。

弟を先頭に、それから二十間ほど離れてF、それからまた二十間程後になつて私と井出君とは並んで、ゆつくりした步調で建長寺前の通りを町の方へ繰出して行つた。うらゝかな春の日の光りとは、そぐはないやうな自分等の氣持だつた。八幡樣の裏の石段を登り、神前に好首尾を祈り、表の高い石段を降り、境内の舞樂殿の附近や石の鳥居前のあたりなどでは、特に目につき易いやうにFをぶら／＼させて、私たちは離れて油斷なく看視した。それから八幡前の通りを兩側の綻びかけた櫻の間を步いて停車場に行き、私たちは外のベンチに腰かけて、驛前の廣場をFにそちこちと步かせた。Fは俯向ひたなりで、機械的に、私たちの方も周圍の雜沓も目に入らぬかの樣子で、小刻みに往つたり來たりした。

『どうした氣持で步るいてるもんかなあ？』

と、私は前の晩の長谷での印象を思ひ浮べながら、云つた。

『どんな氣持つて、そりやいろ／＼心配してるもんでせう。相手の奴が怖くもあるだらうし、いよ／＼摑まつて對決となつたら、また自分の方にもボロが出るやうなことがあるのかも知れませんからね』と、弟は云つた。

『何しろ祭日なんで都合がわるかつたな。それでないと往きか歸りかをこゝで張り込んでゐると屹度捌まるんだがなあ』

『さうでしたね。それで警察でも、大體當りがついてるんだが、今日は祭日だからもう一日と延ばして云つたのかも知れませんね』

『さうなんだらうな……』

斯う話してる時、私はふと、外からやつて來た、帽子はかぶつてないが大島か何かの揃ひの着物にセルの袴をつけた、反りかへるやうに腕組みをした立派な體格の男に目がとまつて、オヤ？ と思つたが、それが昨日の受附の巡査だつたことに、すぐ氣がついた。顏なぞも剃つて見違ひるやうに立派になつてゐた。

『あれがゆうべのあの巡査だよ。堂々たるもんぢやないか。あゝしてゐると一寸巡査とは思はれないね。今日は非番なんだらうが、それではやつぱし僕等のことでゝも歩いてるのかな』と、待合室にはいる後姿を見送つて、私は弟にさゝやいた。

巡査がちきに出て行つて、私はお辭儀をしぞこなつたが、私たちも斯うして歩るいてゐると云ふことが、屹度巡査に好い印象を與へたに違ひないと思はれた。警察の誠意が有難く思はれた。

鎌倉不案內の弟に代つて、今度は私が先頭に立つて、一時間もして停車場を出たが、秋山と云ふのはいつも妙本寺の方から來ると云ふのでその邊の店屋で秋山と云ふ姓を訊ねたり、妙本寺の境內にはいつたり、そこで遊んでゐた十七位ゐの逗子の中學の帽子をかぶつた學生に訊いて見たりしたが、さつぱり手がゝりがなかつた。『鳥打帽へ徽章を附けたりすることは、絕對に學校では許しませんから』と、その學生は云つた。それから大町の通りをFの學校の方に出て——どうかすると共奴等は日曜などにボールを投げに見えることもあると云ふFの話なので、その邊で。しばらく網を張つたが、それらしい形も見えなかつた。でその近くの停留場からFひとり長谷まで電車に乘せ、私たちは一臺遲れて乘ることにした。ところが後の電車がどうかしたかなか〳〵やつて來ないので、Fをさらはれやしないかと、私たちは氣を揉んだ。』

『そんな奴等のことだから、隨分敏感なもんだらうからな、當分影を潜めて出て來ないかも知れないな』
『さうかも知れませんね。ちやんとした巣窟でも構へてゐるやうな、案外専門的な奴等かも知れませんからね。逗子横須賀の方まで繩張りにして始終そんな様なことをしてゐるやうな奴等だと、ちよつと難かしいですね』と、弟も云つた。
『何しろ敵討なんてたいへんなものなんだね。昔の人が何年もかゝつて捜し歩るいたんだらうが、兎に角敵討なんてたいへんなものなんだね』と、私は弟と顏を見合せて苦笑したが、二人ともゝうだいぶ倦怠が感じられて來た。そして私自身の暗い記憶が、またしても頭に浮んで來た。

それは少年時代から、長い月日の間何かに觸れては責められて來た最初の汚點の一つなんだが、昨日の腰越以來また新らしく喚びさまされて、絶えず頭の底で苦しくうごめいてゐた。私が八つの年、沒落した一家が母の村に引越して、一冬母の實家に同居した。尋常二年生だつた私は村の學校に入つて間もなくだつたが、ある日草紙か何か忘れて來て一旦家に歸つて來て、またそれを取りに學校へ行つたのだが、上級生たちの授業中で、そこらに誰も見えなかつたので、出る時そこの下駄箱に澤山載つてゐたスケート――と云つても木の臺に簡單な滑り金を打つけたもの――の中から、一等粗末に見えた藁緒の一足を、ついふら〱と掻ぱらふ氣になり、羽織の下に忍ばして持ちかへり、裏の土藏の臺石にスケートの臺を打つけて金だけ放し、臺は屋敷のわきの小川へ一つ宛投り込んだ。投り込んでしまつてから、ひどくわるい、取返しのつかないことをしたと空怖ろしくなり、子供ながらひどく昏迷を感じたが、放した二本の金は二三日椽の下へ隱して置いた。母に云つたらば買つて呉れないこともなかつたのだらうが、何しろ私はまだ八つで、金のついたスケートは履ける年齢ではなかつたし、村の子供たちのやうに練習もなかつたので、父は練習用に竹をつけたのをこしらへて呉れたが、子供心に耻かしく思ひ、往來へは出ずに裏の空地の雪を踏みかためて練習してゐたのだつたが、もう一つの不平は、私たちが村に來る前、私が從兄の中學生に一足分貰つたのを、引越の時紛失したか、母が村に來て誰かに呉れたかして無くなつてゐたので、私には隨分不平だつたものらしい。母は金が折れたから棄てた――そんな風に云つてゐたやうだが、兎に角私には不平だつた。そんなことも手傳つたものかも知れない。兎に角さうして二三日椽の下に隱

して置いたが、そのまゝ自分の臺に打つけて出歩るく大膽さもなかつたか、子供ながらに用心したものか、近所の年上の子供と從兄に貰つたのだと云つてその子供の金と交換して履いて一日もしたかで、偶然に私の盜んだのもつひ近所の子供のもので、交換した相手の方からそれが曝露して來た。金の裏に所有主の名が刻まれてあつたので、云ひ遁れよう餘地もなかつた。私は母に學校を休まされて嚴しい糺問を受けたが、私はどこまでも從兄に貰つたのだと云ひ張つた。夜に入つて母は神棚に燈明をあげ、茶碗に水を盛り、それに護摩木と云ふものを浮べて呑ませると云つた。『嘘でないと何ともないが、嘘だつたら、これを呑むと咽喉から血を吐いてすぐ死ぬ。それでもいゝか。さあ呑みなさい……』と、茶碗をつきつけられて、私はすつかり恐ろしくなり、聲をあげて泣いて、許しを乞ふた。私はその時ですつかり懲りてしまつた。がその時から三十年近く經つて、因果がFに報いて來た。自分は二度と泥棒だけは企てなかつたが、さうした血がやはりFに傳はつたものだらうかと、昨日腰越の駐在所でFを見出し、時計を出された時には、空恐ろしい氣がされた。

やがて三人は電車に乘つたが、私にはそんなことなど思ひ出されてだん〱憂欝になり、今朝出て來た時の勇んだ氣持が失はれて行つた。警察でも取あげたことであり、Fもあれまでにははつきり云つたのだからよもや嘘ではあるまいと思はれたが、やはりどこやら曖昧な、不透明な惱ましい感じを拂ひ退けることが出來なかつた。

『今あそこの路次で、不良少年らしい奴等が五六人寄つて立話をしてゐたが、彼奴等ぢやないかな?』と、井出君が電車が海岸の別莊町を通り過ぎた時に云つたが、長谷から引返すのも臆劫な氣がして、兎に角大佛の境內へと、はいつて行つた。

そちこちに置かれた、大佛のわきの石の腰かけに、私たち三人は一人づゝ離れて腰かけて、やはりFをぶら〱させてゐたが、大佛の前に立つて水兵たちが寫眞をとつたり四五人づれの大學生がやつて來たり、入り替り立替りやつて來る遊覽客のほかには、それらしい影も見られなかつた。境內の奧の櫻もまだ綻びかけたばかしだつたが、その下で大勢の醉拂が唄つたり踊つたりしてゐた。私たちは口をきゝ合ふのも退儀になつて來て、一時間もしてそこを出て來たが、

今度は長谷の通りを埃りを浴びながら私がやはり先頭でやつて來たが、私は身體も氣分も疲れ切つてゐた。停車場の裏手の空地では、女相撲の興行が初つてゐて、假小屋の高い櫓の上では朝からポン／＼太鼓の音が聞えてゐた。小屋の前には挑發的な女相撲の繪看板が何枚か飾られて、しきりに客を呼びこんでゐたが、不良少年などには誂へ向きの興行物だと云ふ氣がされて、しばらくその前に佇んでゐたが、さすがに這入つて見る勇氣が出なかつた。或は十八日Ｆが歸らなかつた晩、學校の歸りこの太鼓の音に誘惑され、いくらも廻り道にはならないので、小屋の前を通りかゝつてつひ這入る氣になつて時間を遲らしたのではないのだらうか――その方が活動へ這入つたと云ふよりも根據がありさうな氣がされたが、そんなことを今Ｆに訊ねたところで、無益だと云ふ氣がされて、訊いて見る氣にもなれなかつた。それから停車場前に出て、逗子の中學の帽子をかぶつて往來で遊んでゐた四五人の學生にも訊いて見たりしたが、更に手がゝりは得られなかつた。

もう三時だつた。私たちは其近所で遲い晝飯をたべながら、私と弟とはビールを飲んで、

『やつぱしそりや、學生なんてもんぢやありませんね。職工かなんかですね』と、弟は云つた。

『どうもさうらしいな。第一そんな鳥打に飛白の着流しで通ふ中學生なんて、今時ある譯がないね。ズックの鞄をさげてると云ふが、辨當箱入れだらう。向うへ行くと青服か何かに着替へるんで、逗子へ通ふと云ふのも嘘で、田浦か横須賀の職工に違ひないね。そんな奴等に掴まつて、面白半分から貴樣小僧になれとか何とか威嚇かされたんだらうが、Ｆも隨分つまらない奴等に掴つたもんだねえ！そうだらう？ 中學生なんて云ふのは嘘だらう？』と、私はＦの氣をひいて見るつもりから、斯う侮蔑した口調で云つたが、

『いやさうぢやないよ、職工なんかぢやなかつたよ』と、Ｆは打消したが、ポツと顔を赤らめた。それが、相手が職工と圖星をさゝれて、羞ぢたのだと、私には判斷された。職工なんかだと、暴行は免かれてゐるかも知れない――さうも思はれたが、しかしそれも確かめられたことではなかつた。

『そんならその鞄にどんなやうな本がはいつてゐた？』

『どんな本て……』と、Fはちよつと口籠つたが『やつぱしお父さんなんか讀むやうな……』と、曖昧に云ひ紛らした。

『僕なんか讀むやうな、……噓さ、大方講談本かなんだらう、職工だつて講談本位ゐは讀むさ』と、私は白々しい氣がして、Fの顏を視て云つた。Fも默つた。

夕方近くなつてそこを出て、弟とFとはすぐ停車場へ、私と井出君とは八幡前をもう一度一廻りしてついでに時計屋へ寄つて樣子を聽いて見るつもりで、S時計店のガラス戶を開けてはいつたが、店には私には顏見知りの主人が一人で、懷中時計の修繕をやつてゐた。

『私はゆうべの子供のおやぢですが、實はもつと早くに挨拶にあがる筈でしたが、すつかり調べがついた上でゆつくりお詫びにあがるつもりで、つひ失禮してゐましたが……』と、私はFの家出の事情から、朝から斯うして相手の不良少年の狩り出しに步るいてゐることを話した。

『ハ、ア左樣で……』と、主人はニヤ〳〵薄笑ひを浮べて狐疑的な眼して私の顏に視入つてゐたが、

『……そんな譯でして、私も家の者どもゝすつかり信用しちまつたので、云ふことがちやんと出來てるもんですからな、これは何か家庭の事情でもあつて、お母さんが違ふとか何とかそんなことで、それで東京から小僧の口を搜しに來た——當人がさう云ふもんですからな、それで實は今日弟を役所の歸りに牛込の叔父さんとこに寄さして話をきめよう——と——當人も叔父さんとこへ行つて吳れと云ふものですからな……何しろすつかり信じちまつたものですからな』と、いくらか辯解めいた調子も見えて、ゆうべからのことを詳しく話した。

『それで私のことはどんな風に？』

『いやあなたのことも、斯う云ふご商賣をしてゐると云ふことも云つてましたが、當人は萬事叔父さんの方へ相談して吳れと云ふので、それで……』

『私の住所はどんなことに云つてましたか』

『やはり東京のどことか云つてましたが、お父さんには相談しても駄目だから、叔父さんの方へ行つて呉れと云ふものですから……』

『さうでしたか……』と云つたが、私にはふと、こゝでも逗子の藥屋の場合と同じやうに、私のことも本當を打明けて云つたのではないかと、云ふ氣がされた。Fは、こちらは時計店では鎌倉でも繁昌の方だから――などゝ云ひもしたと、主人も云つたが、東京から突然やつて來た子供にそんなことが一寸云へさうにも思はれないことだし、何しろFの學校の徽章のついた帽子、學校の名入りの名刺をはさんだ鞄、また兎に角一年半の間毎日その邊を往來もしてゐたことだし、私の使ひにも幾度かやらされてゐることでもあり、鎌倉の生徒だ位ゐの判斷は、どこからだつて附きさうなものである。それだけの判斷が附かずに、全然風來のものと思つて、泊めたと云ふことは信じられないことだ。Fは私に虐待されてゐるとか、逗子の藥屋で云つたやうに私が病氣で貧乏だから小僧になるのだ――半ば私への申譯または反抗心から、本當にさう思ひ込んで賴んだのだが、それには私へ直接に交渉したのでは駄目だから、東京の叔父に相談して呉れ――さう云つたやうに賴んだものかも知れない。時計屋ではそれを信じて、それで私の方を後廻しにして、一應東京の弟の方へ當つて見、その上で私の方へ交渉してFを窮境……から救ひ出してやる――そんな風に考へたものかも知れないが、ところがFは主人の弟の人の東京から歸らない前に逃げ出した――歸つて來られて一切が曝露された場合のことが、Fにも考へられたらう――その時掻拂つて出た二つの時計が長谷の時計屋で五十錢に賣れたらば、多分それを汽車賃にして、東京の私の弟のところへ逃げ込んだものだらう。それともその金のあるうち浮浪を續けて、もつと深入りすることになつたか、それはわからない。後から主人が自轉車で追かけて、Fが二度目に賣りに行つた錺屋から出て來た時に、主人とFとの間にどんな會話が交はされたことか私には推測出來ないが、或は、

『時計を持つてるだらう？　それは置いて行け！』斯う主人に云はれたが、

『いやこれは、一つは僕のお父さんのだし、一つは僕のだ、盗んだのではない……』Fは斯う白を切つたのかも知れない。

何しろ往來ではあり、相手は子供だし、殊に私の住所を明かしてあつたのだとすれば、また明かさずに東京から奉公口を捜しに來たものと思つたとしても、私や警察へ無斷で子供を泊めたと云ふことは、何としても落度には違ひない。それやこれやを考へて、主人はその時はFが長谷の停留場から電車に乘るのを見屆け、强硬な態度に出ずに放してやつて、すぐ警察へ屆けて、警察の手で腰越で抑えるやうな手段に出たのかも知れない。それが後の煩ひを避ける一番賢い手段に違ひなかつた。

『何しろ時間も八時を過ぎてしまつたしね、まだ晩飯も食つてないと云ふことで、それから東京へ歸らすのも可哀相だと思つたものですから、奥で餅など燒いて食はせたりしましてな……』主人はやはり狐疑的な眼して云つたが、いつまでしても時計のことは云ひ出さなかつた。

昨日東京の弟の家を訪ねた、主人の弟だと思はれる若い洋服の男が外からはいつて來て、店の賣臺の上へドカリと腰かけて、土間の丸い腰かけに座つて主人と話してゐる私の横顏を見下ろすやうにして默つて聽いてゐたが、私はその方へは顏は向けなかつたが、冷めたい侮蔑的な彼の表情が、絕えず刺すやうに意識された。

『それではやつぱし、その時計はこちら樣のものではないんですね？　その時計では實は非常に困つて居るんですが……』主人も無論今までには警察へ呼出されて、その時計を見せられたことゝ思つたので、不安心な氣持で、訊いた。『いやそれが、やつぱし手前とこの物でござんしてな……』と、主人はやはりピカ〳〵と金齒を見せた薄笑ひを浮べて云つた。

『やつぱし彼奴一人で、盜んだもんでせうか？』

『まあさうでせうな。……實は今朝刑事がやつて來ましてな、この時計に見憶えがあるかと云ふから、あると云ふとねもう少しで胡麻化されるところだつたよ、それでは一つこれへ判を押して呉れと云つて、盜難屆に判を押さして持つて行きましたがね、今日は祭日だからこれで休みだとか云つて出て行きましたがな……』

『さうでしたか……』と云つたが、私には今朝停車場で見うけた和服姿の巡査のことが浮んだ。私たちの爲めに不良少

年を殺してゐたのではなく、盜難屆の用事を濟まして、それからぶらりと停車場に姿を現はした——それだつたのかなあ？……と、私は情けなくなつた。頭がカツト燃えあがつた後の、深い絕望的な溜息で、私はふら〳〵と昏倒を感じた

『彼奴が出かける時、誰かほかに呼び出しにでも來たやうな風がありませんでしたらうか？』

『別段そんな風は見えませんでしたよ』

『この八幡前の裏の方から出て來ると云ふんですが、十七八の中學生だか職工だか、なんでも慶ちやんとか云ふんださうですが、そんな名の子供を知りませんでせうか？』

『知りませんな……』

『その銹屋から出て來た時も、電車に乘る時も、彼奴一人でしたらうか？』

『さうでした』

『その銹屋と云ふのはどの邊でせうか？』

『極樂寺前のKと云ふ活動寫眞のすぐ近所ですがね、實は私もその時にはまだ時計のことには氣がつかなかつたのでしたが、職人の者を追かけさせたのでしたが、どうも何だか要領得ないやうなことを云つて歸つて來たもんですからな、それで私も丁度あの邊へ用事もあつたもんだから、自轉車を飛ばしたやうな譯でしてね……』主人はこれ以上のはつきりしたことは云はなかつた。

外は薄暗くなつてゐた。

『やつぱし彼奴が盜んだのだつた。不良少年なんてみんな嘘だ。……何と云ふひどい奴かなあ！』と、外へ出て待つてゐた井出君に云つたが、深い溜息と共に眼頭の熱くなるのを感じた。ドシンと、底知れない闇の底へ蹴落された氣持だこれと云ふも自分の不注意から起つた、偶然のFの失策として、その責任は自分の擔ふべきものだと考へられるとしても、この最後まで嘘でもつて自分等を引ずり廻してゐたFの性根は、憎むべく、わが子ながら輕蔑を感じた。さうした感情がまた、私自身にかへつて、私の胸を慘酷に噛み破ぶるものであらねばならない。

『どうしてFさんもそんなことしてましたかねえ！　どこにそんなことする必要がありますかねえ！』と云つた井出君の厚い近眼鏡の蔭に、チラと涙の光るのが見えた。私は心のうちで彼に感謝した。

八幡前の裏通りを停車場へと、井出君と並んで、私は足も地に着かないやうな氣持で歩るいて行つたが、ふと薄闇の向うから、建長寺の老師が健かな歩調でやつて來るのに會つた。私は立停つて足を揃へて、いつにも衰えを見せない深い閃めきを湛えたやうな老師の眼に視入りながら、お辭儀をした。

『どうもご無沙汰して居りまして……』と、私は毎度ながら獨參を怠けてゐるお詫びを云つた。

『どちらかへお出かけかな？　どちらかへお出かけかな？』と、老師は二三歩あるき出しながら言葉をかけた。

『どうもまずいことがありまして、まずいことばかしありまして……』と、私はいろ〳〵な意味で恐縮を感じながら答へた。

『その銹屋へもちよつと行つて來ませう。そこだつてどんなことになつてるかわからないから。何しろ一筋繩ではいかん奴ですからね、調べるだけ調べてかゝらないと』私は斯う云つて、二人で電車に乘るため警察前の方へ出て來たが、事件以來のことが一時に胸を衝いて來て、

『何と云ふひどい奴かねえ！……井出君にもわかりますか？……親の頸へ繩をつけて引廻してゐたやうなものぢやないですか……何と云ふ馬鹿な奴かなあ！』私は斯う叫ぶやうに云つて、人通りの途絶えた松の木の下の往來を力任せに打つたが、黑檀まがいの厳丈なステツキが中ほどからぽつきと折れた。私はその折れたまゝのステツキを持つて電車に乘り、長谷で下りてその銹屋を訪ねたが、出て來た主人らしい若い人が胡亂さうな眼付して、そんな子供は見えなかつたと云つて、相手にならなかつた。今度はFに感付かれてまた逃げ出されては大變だと思つて、私一人長谷の通りから俥で馳けつけたが、Fはやはり元氣はないが格別變つた樣子も見せず、待合室の入口で囮の役を勤めてゐた。入口に近い中のベンチに、弟は臍ぎ込んだ暗い顏して腰かけてゐた。

『やつぱし駄目。不良少年も何もかもみんな噓さ。彼奴一人の仕業だつた。警察ではもう朝のうちに、時計屋から盜難

屆まで出さしてある……』弟のそばに腰かけて、私は低い聲で云つた。
『やつぱしそんなことだつたかなあ……』と、弟も唇をゆがめて、苦痛の表情を見せた。
『Fちよつと來い』と呼んで私たちの間に腰かけさせたが、最早怒る元氣もなく、
『お前みんな嘘だつたんだね。警察では最初からみんなわかつてゐたんだよ。それを昨晩あんな嘘を警部さんの前で云つたのが、あれが一等いけなかつたな。……お前長谷の活動寫眞のそばの銃屋へも賣りに寄つたさうだな？』――Fは默つてうなづいた。

それから井出君の來るのを待つて、私とFと弟との三人は警察へ行つて、私たちの係りの警官ではなかつたが、部長の前に深く陳謝し、係りの警官への傳言を頼んで外へ出たが、寺への歸りの途中も口を利き合ふ元氣もなかつた。今日一日の喜劇にもならない愚かしい行動が、慘めに顧みられた。

その晩二時過ぎまで、Fは更に私から嚴しい叱責を受けた。警察での陳述が全然虛構だつたとしては、少しうますぎる、その裏にまだ多少の事實が潜んでゐやしないかと云ふ疑念もあつたが、また彼自身の自發的な告白からではなかつたとしても、これ以外には何の疚しいことも殘つてゐないのだとすると、子供として半ば以上許されたと云ふ安心と明るい氣分が様子に見えなければならないのだ。さう云ふ様子が見られない。弟にせがまれて頭をさげても、不自然な感じだつた。私は涙が出て仕方がないのだが、ふだんは泣き蟲の彼が、泣きもしなかつた。警部補の前で調べられた時と同じやうに、幾らか片ちんばの眼が血走つてぎら／＼と光り、下唇を醜く突ん出して、身體をぶる／＼震はしてゐたそれとも、それが私に對しての強い反逆――それが根本の動機であつて、こゝに到つて倘斯うした傲岸な態度を私に見せようと云ふつもりか、私には迷はない譯には行かなかつた。

『このほかには、ほんとにわるいことが何も殘つてないか？あつたら今のうちに云つちまへ。明日警察へ行けば何もかもわかるのだから、あつたら今のうちに云つた方がいゝ。ほんとに何もないのか？』
『何もない……』

『何もないつて、それが嘘ぢやないのか？斯うなつたら、何もかも男らしく綺麗に云ふものだよ。どんな人間だつて間違ひと云ふことはあるのだから、一旦斯うなつた以上は卑怯な態度を執るものぢやない。そんな卑怯な人間だつたら、惡黨になつたつて碌な惡黨になれやしないよ。だから何かあつたら、今のうちに男らしく云へ！』

『何もない……』

『ほんとに嘘ぢやないのか？』

『嘘ぢやないつて！』と彼は激しく總身を震はし、歯を喰ひしばるやうにして云つた。

警察での訊問には時間のことはほとんど簡略――その必要は彼等には最初からなかつたのだ――されてゐた。それで、今度は自分も警部補の眞似をして、一々書き取りながら、十六日老父を送つて行つて來た晩の時間から段々と問詰めて行つたが、はつきりしてゐるやうでどこにか引かゝりが出來て來る。小僧にならうとした動機を追窮されて、苦し紛れから、小僧になれと威嚇かしたのは中學生でも職工でもなく、扇ケ谷の方の酒屋の小僧だつたなどゝ出鱈目を云ひ出してまたも迷路へと絲を曳きかけたりしたが、一喝されて、それは素直に默つた。おせいの際をうかゞつて逃げ出した時、扇ケ谷の方へ出て、それから再び學校へと引返したのだがさすがにはいれずに學校附近の往來でぶら／＼してゐた時、横須賀歸りの箱車に會つて、ふと小僧にでもなるほか仕方がないと思ひ詰めて、その箱車の後について逗子へ行つたのだつた。そんな譯で扇ケ谷の酒屋の小僧など持出した譯であるが、兎に角すべてを告白してしまつたと云ふ素直さが、いつしよに暮してゐて朝晩に細かい表情にまで注意を拂つてゐる自分には、それが感じられない。まだ何か潜んでゐる！と云ふ直覺を、自分は酒を飲みながら詰問してゐるのだが、鈍らすことが出來なかつた。嫌疑者を幾晩も睡むらさずに訊問を續けて無意識狀態に陥らせて告白させる――さう云つた方法も行はれてゐると云ふことも聞いたことあるが、自分もしまひにはさう云つた慘忍な氣持すら湧いて來て、自分も同じことを繰返し／＼順序を替へたりして根堀り葉堀り追窮しては彼の疲勞につけ入らうと企てたりしが、彼は極度の緊張に堪え兼ねたかのやうに突然立ちあがつて、

『そんなにどこまでも嘘だ／＼と云ふんなら、僕これから一人で警察へ行つて謝つて來る！』斯う突かゝるやうに叫ん

で袴を穿きさうにした。

『馬鹿野郎が！　今何時だと思つてゐるんだ。貴樣一人で行つて謝つて、それで濟むくらゐのことなら、斯うしてみんなして騷いでゐやしない。叔父さんにしても井出君にしても、忙がしい身體なんだぜ。俺の病氣のことだつて知つてるだらう。誰の爲めにみんなが斯うした馬鹿な目に會つて、警察へまで引出されて耻を搔いてゐるのか、ちつたあ考へても見ろ、この罰當り奴が！　そんな人の人情のわからないやうな奴は、碌な人間ぢやないぞ。……この馬鹿者が！』私も斯う怒鳴つたが、私はがつかりしてしまつた。空恐ろしい氣さへされて、Fを床に就かした。

『あんな奴のことだからね、どんなこともし兼ねない奴だからね、今夜はお前も氣をつけて呉れ』と、私は弟に注意した。逃げ出しもし兼ねないし、自殺もし兼ねない──さう思ふと、私は怖くなつた。

　翌朝十時頃疲れた睡りからさめたが、弟とFの姿が見えないので、來てゐたおせいに『Fたちはどうした？』と訊いたが、おせいの話で、私は思はず『しまつた！』と云つて、蒲團を飛び出した。弟はおせいの爺さんと相談して、二人でFをつれて警察へ出かけたと云ふのである。

『もうよつぽど經つの？』

『まだ三十分位ゐのものでせう、出かけたのはほんのさつきでしたから。叔父さんの方ではまた、叔父さんはゆうべは一寸も睡むらなかつたさうで、今朝私が來ると、何しろ兒もひどく疲れてゐるやうで氣の毒だから、自分ひとりで行つて來ようかしら、警察へはなるべく早く行つた方がいゝだらうからと、さうおつしやるもんですから、それではうちのお父さんと二人で行つたらどうでせう、役には立ちますまいけど年寄りだから、さう云つて私はうちへ行つてお父さんを呼んで來たんでしたが、それはどうもわるうござんしたねえ……』

『そりや困つたことをして呉れたなあ。今になつて、僕が行かないなんて、警察へ對してだつてわるいし、そんな卑怯なことは出來ない譯なんだからな。どんな病氣だからつて、自分の子のしたことぢやないか、僕が出て行かないと云ふ法がないよ。それに僕が行つてよく賴まないとわからないこともあるし、弟の奴も案外しつかりしてゐるやうで斯うし

た肝腎の場合に姑息なことをするなんて、やつぱし學問をしてゐないせゐだな。兎に角みんなが警察に居るうちに行かないと、一旦引取つてしまつた以上それきりなんだから、學校や新聞のことなんかもあるんだし、兎に角大急ぎで自働車を呼んで吳れ。何しろ困つたことをして吳れた……』

建長寺の電話を借りて停車場前の自働車屋にかけさせ、井出君も起して私たちは顏を洗つて自働車の來るのを待つたが、なかなか來ないので、往來まで出て待つことにして二人で出かけたが、往來の門のところで若い巡査が一人立ち番してゐた。何かあるのか知ら？と思つたが、一昨晚警察で顏を見知つた巡査なので挨拶して、『何しろ不良少年には弱らされましたよ。これからまた警察へ行くところです』などゝ笑ひながら話してゐると、空の自働車が一臺反對の方からやつて來たが、多分少し下の方で引返して來たものと思ひ、手をあげて停めて、『警察前まで』と云つて乘つたが少し駈つてから立派な膝かけのあるのに氣がついて、

『君は停車場前の自動車ですか？』

『いやさうぢやありません』

『さうですか。實は停車場前へ電話をかけて、もう來る時分だと待つてゐたところだつたので、多分さうだらうと思つて停めたのですが……』

『さうですか。私の方ではまたあそこで巡査と話してゐたから、多分警察の人だらうと思つて停めたのでしたが、なあによござんす、どうせあちらへ歸るんだから』斯う云つて警察前まで乘せて吳れた。

途中では彼等に會はなかつたので、若しやと望みをかけて警察のドアを開けてはいつて行つたが、例の警部補と昨日の和服姿の巡査との二人が事務を執つてゐるきりで、室内は出拂つて、夜分とは違つた靜かな空氣が漂つてゐた。私は警部補の前でいろいろと陳謝したが、

『もう濟んでしまつたことですから』と、うるさげに、冷淡に云つたきりで、相手にならなかつた。

『それではどうか學校の方へだけでも內聞に、……あと二三日で免狀式といふところなもんですから』と、私は最後に

まさか露骨に新聞へだけは書かさないやうにして呉れとも云ひ兼ね、また賴んだところで今更仕様があるまいと思つたが、相手の心持を推量したくも思ひ、未練らしく斯うも最後に賴んで見たが、何の感じも動かない冷淡な一瞥を報いられたばかしだつた。

外に出て、停車場前から馬車に乘り、がつかりした、何もかもおしまひだと云つた淋しい氣持で、春の日を浴びながら歸つて來たが、小袋坂を登りきつてふと四五間前を見ると、狹い往來の左側を二三人の婦人と四五人の子供づれの一行の後から、見覺えのある署長が劍柄を握りながらついて行くので、門のところに立つてゐた巡査と思ひ合はされ、さては高貴のお方の半僧坊へのお詣りの護衛だなと氣がついたが、署長の方でも馬車の音にふり返つて、ヂロリと鋭い凝視を私たちに向けたが、突嗟のことで下車するだけの心構への出來ないうちに、自分の不良兒のことなども思ひ浮んだりして混亂した氣持のうちに乘り越してしまつたが、建長寺の門はそこから幾間とも離れてゐなかつたので、私たちが降りるとすぐ後から御一行もお着きになつたので、門の巡査はすつかり敬禮の姿勢を取つてゐた。私はひどく恐怖を感じながらも、心の中で『それではこの署長さんの意見ですべてが決定した譯だな……』さう思ふと、脊に浴びせられてゐる署長の鋭い眼光が意識されて、私は何とも云へないムヅ〳〵した感觸が脊筋を傳はつた。警察官と云ふ職務に對して、自分は初めて稍はつきりした感じを抱かされた氣がされた。

『どうだつた？』と、私は歸つてゐた弟に訊いた。

『いや大して難かしいことも云はなかつた。簡單な注意だけで濟んだ』

『Ｆの方は？』

『奥につれて行かれて、刑事見たいな人に、書いたものを讀んで聽かされて、これに間違ひないかと云ふからないと云ふと、そんならそれに名前を書いて指で判を押せつて……』

『それだけか？』

『お前は中學へはいるんださうだが、中學どころか、二度とこんなことをすると、すぐ監獄へぶちこまれるんだぞつ

て……』

『さうか』と云つたが、最早何を云ふ張合ひもなかつた。

どうせ日が暮れて立たせる譯だが、Fの行李や夜具の始末にかゝらせようとしてゐるところへ、S時計店の名刺を持つて、そこの職人だと云ふ若い男が訪ねて來た。私と火鉢に向き合つて座つたが、ほとんど三十分餘りも要領を得ないことを冗々と並べて、低能なんぢやないかしら、何を云ひ出すつもりなんだらうといゝ加減私たちをいら〳〵させたところで、結局、もう一つ時計を持つてる筈だから出してほしいと云ふのだつた。

『實は手前どもでも氣がつきませんでしたので、ゆうべ消防の寄合ひがあつて、長谷の時計屋も同じ消防だものですから、そんな話が出て、その子供なら二つ持つて來た、二つで五十錢でいゝからと云つて來たんだが、それに違ひない、さう云はれて手前どもでも初めて氣がついたやうな譯でして……』と、どうして低能どころではないなか〳〵用心深い調子だつた。

『F、持つてゐるだらう？……出せ』と、傍で聞いてゐたFに云つたが、マントの裾からすぐ出した。古いニツケルの腕時計で、やはり動かないものだつた。

『もうほかに何かないの？　あつたらみんな云つちまひなさい。みんな云つちまふと、氣が輕くなるから……』と弟も云つた。

『蓄音機の針……』

『一箱か？』

『半分ばかしはいつてゐたの』

『ほかに何かないか？』

『ほかには何もない』

『馬鹿な奴だなあ。だからゆうべあんなにまで訊いたんぢやないか。どうも何か殘つてる氣がしたんで、あんなに訊い

たのに、云はないもんだから、結局こんなことになるさ』と、つひ口に出て、

『それで、やつぱし警察へは屆けてあるんですね？』

『いや、それは、手前どもの方でも決してわるくはお取計ひいたしませんから、一應手前どもへお寄り下さるやうにといふ主人の話でございますが……』とやはり不得要領な用心深い調子だつた。

『それではすぐあとから弟をやりますから。何しろ斯う云ふことになつて居るので、警察へ屆けてあるんだと一應警察の手を經ないといけないかも知れませんから……』斯う云つて時計は渡さずに歸したが、屆けてあるともないとも云はずに、職人は歸つて來て、

『やつぱし屆けたんだけど、警察ではもう事件は濟んだんだから直接にかけあへ、一體お前のところでも無斷で子供を泊めたりするから斯んなことが起るんだ、とか何とか叱られたんでせう、それでもしこつちで時計を出さないやうだと困るとでも思つて、あゝ用心深く出て來たんですね』と云つた。

『どうだ、F、氣をつけろよ。世間といふものはみんなそんなもんだよ。向うではお前をどこまでも泥棒するためにはいり込んだ位ゐに思つてもゐるだらうし、泥棒の子の親だから、あんな時計でも隱しやしないかと、思はれるやうなもんだからね、隨分と耻晒らしな話さ。あんな時計をまた、東京へ持つて行つて、お祖父さんや叔父さん叔母さんに嘘をついて、誰かに貰つたのだとか云つて、腕にかけて歩るくつもりだつたのかい？　情けない奴だなあ。お前が中學へはいれたらニツケルの腕時計を買つてやると云つてゐたんぢやないか。そんなにほしければ、僕の時計だつてやりもするし、いくらだつて買つてもやるぢやないか。僕も實に懲りたから、これから生涯時計といふものは持たないつもりだから、お前も二度とは斯う云ふことをして呉れるな。どんな人間だつて間違ひといふものはあるんだから、今度のことは許すから、氣をつけて、人の爲めになるやうなえらい人間にならなければいけない。僕は貧乏だけど、一生貧乏で暮すだらうが、お前の學資は、お祖父さんがちやんと用意して呉れてる。ケチな根性を起して呉れるな。……どうだ、今度はちつたあ氣持も直つたらう、そんなら叔父さんへもお辭儀をしろ』と、Fに云つた。Fの表情もやうやく和らげられ

てゐた。

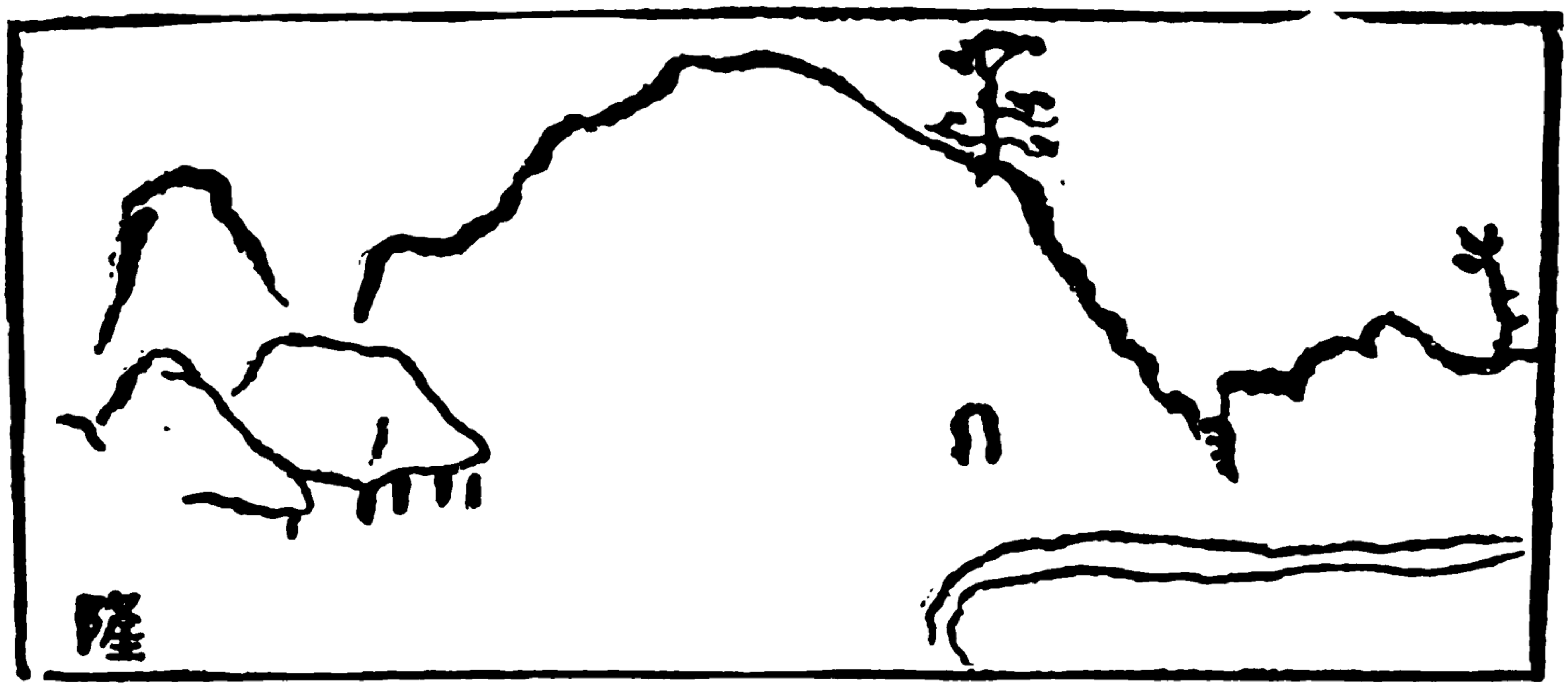
『その蓄音機の針はどうしたの？』

『七里ケ濱で鳥居なぞこさへて遊んだ』

おせいのうちから古いのを貰つて來ては、木片へ刺して鳥居とかいろ〳〵な細工をして遊んでゐることは、自分も知つてゐた。それにしても、あの波の高い七里ケ濱邊で、春の日を浴び、空腹を抱えて、途方に暮れて何時間かさうしたことをして一人で遊んでゐたのだらうが、よくふら〳〵と波に捲き込まれて行かなかつたことだと、自分等の運命に感謝した。

別れの晩飯をたべ、行李と夜具を俥屋に運ばせ、三人は八時過ぎに出て行つた。せめて二三日も井出君に殘つて貰はうかとも思つたが、やはり全然一人になる方がいゝと思つて、明日から長い間續くであらう幽閉の日々を、このがらんとした十疊八疊打通しの暗い室で、謹愼して送らねばならないと、覺悟を極めた。

——十年七月——



暗夜行路

志賀直哉

十二

舞臺では「紙屋治兵衛」河庄うちの場を演じて居た。謙作は何度も此狂言を見てゐたし、それに此役者の演じ方が毎時も餘りに豫定の如く只上手に演じる事が、うまいと思ひながらも面白くなかつた。そして彼は何んとなく中途半端な心持で、少しも現在の自身——許婚の娘とかうしてゐる、樂しかるべき自身を樂しむ事が出來なかつた。彼は寧ろ現在眼の前にゐる直子を見、二タ月前の彼女を憶ひ、それが同一人である事が不思議にさえ思はれた。

直子は淋しい如何にも元氣のない顔つきをしながら、舞臺に惹き込まれてゐる。其ぼんやりした樣子が謙作にはいぢらしかつた。が、同時に彼自身、どうにも統御出來ない自身の惨めな氣分を持て餘まして居た。

彼は努めて何氣なくしてゐた。然し段々に今は一秒でもいゝ、一秒でも早く此場を逃れ出たいと云ふ氣分に被はれて來た。かう云ふ事は彼に珍らしい事ではなかつたが、場合が場合だけに彼は一層苦しい一人角力を取つてゐた。お榮との結婚の豫想が彼を一時的に放蕩者にしたやうに、此度も亦、多少病的に左うなつた事が、彼を疲らし、彼の神經を弱らし切つて居たのだ。

芝居のはねたのはもう晩かつた。戸外には滿月に近い月が高くかゝつてゐた。彼は直ぐ皆と別かれ、繩を出た小鳥のやうな白川さで一人祇園社の横から智恩院の方へ歩いて行つた。兎も角一人になればいゝのであつた。智恩院の大きな山門は近よるに從つて、その後ろに月が隱れ、大きな山門は眞黑に一層大きく眺められた。

結婚の第一歩がこんなにして始まつた事は幸先き悪い事のやうな氣がした。然し何よりも悪いのは矢張り自分だと彼は思つた。自制出來ない悪い習慣──左ういつて自身責任を逃がれる氣はないが、若しかしたら祖父からの醜い遺傳から自分は毎時、裏切られるのだ。そんな氣も彼はするのであつた。何しろ愼まう。今日の事は今日の事だ。これから本統に愼み深かい生活に入らなければ結局自分は自分の生涯をその爲め破滅に導くやうな事を仕かねない。そして結婚後は殊に此事は愼まねばならぬ。左う考へた。彼は此何度でも繰返えす、そしていつも破れて了ふ決心を此時も亦繰返えした。

彼が直子と結婚したのはそれから一週間程してからであつたが、その前一度、直子等親子三人が彼の寓居を訪ねて來た事がある。曇つた寒い日の午後だつた。仙が臺所で何か用事をしてゐる時で、彼は石本と信行に出す端書を出しに二丁程ある、ポストまで出かけて行くと、彼方から歩いて來る親子三人を遠くから見た。母だけ一足後れた、直子は先に立つた兄にその大きな身體に寄添ふやうにして何か快活に喋つてゐる所だつた。見違える程に美しく、そして生々して見えた。謙作は心の踊るのを覺えながら立止まつて待つた。

謙作も至極氣持が自由だつたし、萬事氣持よく行き、皆、愉快さうにしてゐた。仙も此新しい女主人の爲めに出來るだけの好意を見せたがり、その爲め、焦つてゐた。謙作は久しく出した事のない手文庫の寫眞──亡き母、同胞、母の兩親、お榮、その他學校友達などの──を出して見せたりした。

銀閣寺へ行く事にして歩いて出る。安樂寺。それから法然院を見、そこの阿育王塔の由來を話す時直子は丁度女學生が崇拜する先生の話でも聴くやうな樣子で謹み深く熱心に耳を傾けてゐた。謙作はその爲め却つて話すのに氣がさした位であつた。

銀閣寺へ入らうとすると、不意に「少し氣分が惡いから先に歸る」と兄が云ひ出した。青い顔をして、額に油汗をかいてゐる。皆一寸心配したが、謙作が自身の寒がり辭から、無暗と部屋に炭火をおこした、それに當つたらしい。一人でもいゝと云ふのを丁度俥があつて、母と二人、直子だけを殘して先に歸る事になつた。

二人は瓦かけを縦てに埋づめた坂から、默つて門を入つて行つた。「徳」と一字の衝立てがあつて、其側で案内者を待つ間も話が途斷れて居つたが、間もなく短かい袴を穿いた案内の子供が出て來て、「照月臺に銀砂壇」「左右の唐紙は大雅堂の筆」こんな風に一人大きな聲をしてゐて呉れるので具合惡さは何時か失れた。

「歸り、若し直ぐ俥で歸るやうなら、置いて來た日傘や信玄袋は宿の方へ、晩にでも屆けて上げますが、どうしますか」と謙作は訊いた。直子は默つて一寸怒つたやうな眼付きで、彼の方を見てゐた。「それとも寄つて行きますか？」かういふと、當り前だといふやうに「えゝ」と不愛想に答へた。

二人は南禪寺の裏から疏水を導き、又それを黒谷に近く田圃を流し返してある人工の流れについて歸つて行つた。竝べる所は二人は竝んで歩いた。竝べない所は謙作が先に立つて行つたが、その先に立つてゐる時でも、彼は後からついて來る直子の、身體の割りにしなつた小さい足が、きちんとした眞白な足袋で、褄をけりながら、すつ／＼と賢こ氣に踏み出されるのを眼に見るやうに感じ、それが如何にも美しく思はれた。さういふ人が――左ういふ足が、直ぐ背後からついて來る事が、彼には何か不思議な幸福に感じられた。

小砂利を敷いた流れの底を流れに逆つて一疋の鮒の子が一生懸命に遡つてゐた。如何にも目的あり氣に首を延ばして遡つてゐる樣子が可笑しく二人は暫く立つて眺めてゐた。

「私、文學の事は何んにも存じませんのよ」直子は其時、とつけもなく、そんな事を云ひ出した。謙作は蹲んで泥の固鞠を拾ひ、鮒の行く手に見がけて投げた。鮒は一寸首を縮めたが、解けた泥水が失ると、甲羅に薄く泥を着けたまゝ又歩き出した。

「知らない方がいゝんです」謙作は蹲んだまゝ答へた。

「ちよつとも、いゝ事ありませんわ」

「その方が僕には却つていゝんです」

「何故？」

から云はれると謙作も判然した事は云ひにくかつた。昔はそうでなかつたが、今の彼は細君が自分の仕事に特別な理解があるとか、ないとか、そういふ事は何方でもよかつたのである。お榮と結婚したいと考へた時に既に不知その問題は通り過ぎてゐた。そして「寧ろ文學が大好きです」と云はれる方が、堪らなかつた。

直子の方は此事を早く斷わつて置かぬと氣になるらしかつた。それともう一つ、直子の伯母で、出戻りで、直子の生れる前から自家にゐる人がある。此人が、自身に子のない所から直子を甚く可愛がつてゐた。今はもう六十餘りで直子と別れる事を淋しがつてゐる。此伯母はこれからも時々京都へ出て來て御厄介になる事があるかも知れない。その事をどうか許して頂きたい。から云つた。

「伯母からも呉れぐもお願して置いて呉れと申されましたの」と云つた。

寓居へ歸つて二人は暫く休んだ。直子は次の間の本棚を漁りながら、「どういふ御本を讀んだら、よろしいの？」とまだこんな事を云つて居つた。

二人は一緒に出て、謙作は宿まで直子を送つて行つた。兄はもう起きてゐた。歸つて暫く眠つたら直つたといふ事だつた。

十三

二人の結婚はそれから五日程して、圓山の「左阿彌」と云ふ家で、簡單にその式が擧げられた。謙作の側からは信行、石本夫婦、それから京都好きの宮本、奈良に歸つてゐる高井、そんな人々だつた。直子の側はN老人夫婦、その他三四人の親類知己で、その他仲人のS氏夫婦、山崎醫學士、東三本木の宿の女主人等で、簡單と云つても謙作が兼ねて自

身の結婚式として考へてゐたそれに較べれば賑やかで、寧ろ自分にはそぐはない氣さへした。そして此日も上出來にも彼は自由な氣分でゐる事が出來た、種々な事が、何となく愉快に眺められ、人々もそういふ感じを與へ得る事を心で喜んでゐた。

舞子、藝子等の慣れた上手な著つけの中に直子の不慣な振袖姿が目に立つた。その上高嶋田の少しも顔になまかぬ所なども、變に田舍染みた感じで、多少可哀想でもあつたが、現在心の樂んでゐる謙作には左ういふ事まで一種ユーモラスな感じで惡くは思へなかつた。

十一時頃に總てが濟んだ。歸り際に信行は、

「俺は石本の宿へ行くよ。それからお榮さんには明日は早く俺から電報を打つて置かう。精しい事は少し落着いた所でお前から手紙を出すといゝね」とこんな事を云つた。信行は此日可成り甚く醉ひ、一人でよく騷いでゐた。然しその騷ぎ方が何となく厭味がなく、少しも皆に不快な感じは與へなかつたが、それでも初めて信行のこんな樣子を見る謙作はそれが物珍らしくもあり、同時に多少心配でもあつた。今はいゝが、もう少し醉つたら脱線しはしまいかといふ氣がしてゐた。が、今、信行から、思ひの外の正氣さで、そんな事をいはれると、彼は流石信行だといふやうな心持で、心から肉身らしい親しさを感じないではゐられなかつた。

歸ると仙が、昔風な小紋の紋附きを著て玄關に出迎えた。

翌日早く二人は先づS氏の家へ禮に行つた。出勤の時間になつてゐたが、S氏は待つてゐて吳れた。それから石本夫婦の宿へ行き、其所から信行も一緒になつて東三棲の實家の連中のゐる所へ行つた。

二三日は何の彼の、歸る人の見送りやら、奈良行きのつき合ひやら、そんな事で忙しく日を過ごした。

謙作の寓居は八帖に次の間が北向きの長四帖、それに玄關、女中部屋といふ小さな家だつた。北向きの四帖が使へない部屋なので二人になると、どうしても又引越さねばならなかつた。

謙作は直ぐ仕事をする必要もなかつたのであるが、結婚後暫くは何も出來なくなつたと云ふ風になりたくない氣持か

ら、殊更何時でも仕事の出來る狀態を作つて置きたかつた。或日二人は前に一度見た事のある高臺寺の中の貸家を見に行つた。前に見た家は既にふさがつて居たが、同じ並びに新築された二軒棟割りの二階家があつて、其東側のが氣に入つて大概それと決めた。

「此所が一寸具合惡さうだな」二階の南向きの窓から首を出して謙作は云つた。「隣りから首を出すと、直ぐ向かひ合ひになる」

「本統に」と直子も云つた。鍵を持つて案内に來た大家の若い息子が、

「其所でしたら、其便所の屋根に小さい塀を立てゝもよろしいです。西日除けにもなりますよつて……」と心持よく云つた。

「左う。左うして貰らへば上等です。それから、此電氣の紐を部屋の隅に置く机の上まで引張れないと困るのですが、若し何んだつたら私の方で直してもいゝけど……」

「へえ、それ位、私方でさせませう」

此邊まではよかつた。が、それから又階下に下り、茶の間になる部屋の電燈が矢張り天井から二尺程しか下がつて居ないのを見ると、謙作は

「これも少し困るな」と云つた。「これぢやあ針仕事に暗らいだらう」

「延びるんぢやないこと」と直子が一寸脊延びをしてそれを下げようとした。

「延びまへん」大家の息子は氣觸を害したやうな調子で云つた。そして少し離れた所に立つて默つてそれを見てゐた。

謙作は自分達が餘りに蟲がいゝのを怒つてゐるな、と思つた。蟲がいゝには違ひないが、又どう云ふわけでこんな事まで吝くするのだらうと思つた。大家の方は延ばさうとは云はない、延ばして貰ひたいと云つてゐる事が分かつてゐて、知らん顔をしてゐる事が謙作には彼の我儘な本性から一寸癪に觸つた。

「これは私の方で入つてから延ばしてかまひませんね」と彼は云つた。

「困り、ますーそれは」不愛想に若い大家はそれをはねつけた。
「どうしてかしら」
「京都の者にはそれで事が足りとるさかいな」
「…………」謙作は腹を立てた。
「それに左う紐を長うしたら見ようなうなる」
「返へす時元通りにして返へしたら、いゝだらう。それでも駄目か？」
「駄目どす。」若い大家は顔色まで變へてゐる。
「そんな馬鹿な奴があるもんか。そんなら借りるのはやめだ。歸らう」謙作の方も短氣にこんな事を云ひ、挨拶もせずにさつさと出て來た。直子一人閉口してゐた。それでも直子が何か云つてお辭儀をすると、若者も「いや」と云つて、叮嚀に頭を下げた。
「まあ、兩方お短氣さんなのねえ」と日傘を開きながら小走りに追つて來た直子が笑つた。
「然し彼奴、割りに氣持のいゝ奴だ」謙作は苦笑しながら云つた。若者の怒るのも無理ない氣もしたし、自分が一緒にむか腹を立つた事も少し氣まりが悪かつた。
「喧嘩してほめてちやあ仕方がないわ。あんないゝ家、惜しいわ」
「幾ら惜しくても、もう追ひつかない」
「今度はね。默つてゝ、入つてから勝手に直すのよ。そんな、初めつから色々註文をするから怒つて了ひますわ」
其日はもう貸家探しをやめ、二人は祝物の返えしの品を買ひに行く事にした。五條坂の有名な陶工の家を一軒々々寄つて見た。六兵衞、清風、宗六、——宗六の家の多分宗六と云ふ人だらうと思ふ、至極質素な身なりをした未だ割りに若い人が親切に參考品といふ先々代宗六の赤玉の香合などを見せて呉れた。初代宗六は龜山から出た人で謙作の母方の叔母が片附いた先が此陶工の近い親類である所から、その叔母は京都では何時も此家に宿るといふやうな話を前に聞い

てゐた。彼は左う云ふ心持からも此人に或る親みを感じないではゐられなかつた。然し何故か彼は自分が其叔母の甥である事を云ふ氣はしなかつた。

宗六の家が陰氣にじめ〳〵してゐるのに反し、宗六から出て新しく一家をなした木仙の家に行くと總てが變に生き〳〵してゐる事が感じられた。彼は好意のある宗六の家で買ふ物がなく、矢張り木仙へ來て返えしの品々を揃える事が出來た。店一杯に品物を置いた中に座つて、一人で茶をつぎ客の應對をしてゐる二代木仙は如何にも覇氣のある人物らしかつた。

彼は赤繪の振出しを幾つか買ふ事にした。其箱だけは今病床にゐると云ふ初代が書いた。

二人が其家を出た時には既に日暮れ近かく、寒い風が道に吹いてゐた。謙作には其寒さが堪えた。

「早く何所かで飯を食はないと風邪をひきさうだ」彼にこんな事を云つて二重まわしの襟を立てた。

「屹度仙が支度をして待つてますわ」

「どうだか？」

「左う？　そんなに平時(いつ)そとであがつてゐらしたの？」

「左うでもないが、出掛けた時間がおそかつたから、そとで食つて來ると思つてるだらうよ」

なだらかな五條坂を二人はこんな事を云ひながら下りて行つた。五條の橋はかけ更えで細い假橋が竝べてかけてある。二人はそれを渡つて行つた。

「これが五條の橋なの？」

「うむ」

「伯父(N老人)さんがSさんのお世話で、五條の橋杭の舊い臺石を頂く事になつたとか、大變喜んで居らしたわ」

「何にするんだらう？」

「お茶室の踏石にするとか、何んだかそんな事を云つてらしたやうよ」

「伯父さんは中々お茶人なんだね」
「えゝ。自家のお母さんとは大分異ふ方なのよ」
「左うかね。初めて東三樓に出た時、古い羅紗の袋で中々いゝのを見せて頂いたが。左う云ふ物も凝られる方かね」
「あれは古い袋ですわ。私が子供の頃からよく腰に下げて居らしたのを覺えてますわ。あんなのがいゝの？」
「中々いゝぢやないか」
「貴方も中々お茶人なのね。今日のお買物を見てもさうらしいと思つたわ」こんな事を云つて直子は笑つた。
「兄さんはどうなの？」
「兄さんも私もお母さんの子ですもの、左う云ふ方は一向いけない方よ」
「その方がいゝ。若い人のお茶人はあまりいゝものぢやないよ」
「貴方のは何んでも解らない方がいゝのね。文學も解らない方がいゝし、風流も解らない方がいゝし」
「本統だよ」と謙作は云つた。「文學が解つたり、風流が解つたりすると云ふ事は一種の悪趣味だ」
「妙なお説ね。私、それも解らないわ」と直子は大きな聲をして笑ひ出した。謙作も笑つた。直子はそれを覗き込むやうにして、「矢張りそれも解らない方がいゝの？」と云つて自分でも堪らなさゝうに笑ひこけた。
「馬鹿」そして謙作も思はず、こんな言葉を口に出した。
二人は橋を渡ると、其所から四條まで電車で行き、菊水橋といふ狭い橋の袂から蠣船に行つた。謙作には尾の道以來の蠣船である。で、彼にはあの頃の苦しい記憶が一寸氣分を掠めて通つたが、然しそれから被はれるにしては今の彼は余りに幸福だつた。一つは居る場所の雰圍氣が全で變つてゐた。あの薄暗い倉庫町の蠣船とは此所は余りに變つて居る。前に祇園の茶屋々々の燈りがある。四條のけばけばしい橋、その向ふに南座、それらの燈りがまばゆいばかりにきらきらと川水に照反へして居る。
一時間程して二人は其所を出た。二人は輕い氣持を味ひながら、美しい着物を着た舞子や髮を引つつめて結つた小さ

いおちよぼ等の行き交ふ祇園の茶屋町を抜けて、東山側の電車通りに出た。その出た所に、前にも一度書いた場末の寄席のやうな小さい芝居小屋がある。其所で謙作が甞つて蝮のお政と云ふ女を見た、其小屋である。
「あなたは蝮のお政と云ふ女を知つてるかしら？」彼は其時を憶ひ出して云つた。
「何れだか、講談で讀んだ事があるやうよ」
「此所でその女を見た事がある」
「まあ。未だ生きてる人なの？」
「自分の一代記を芝居にして歩いてる」
謙作は其時のあの頭を丸めた男のやうな大きな女の話をした。「決して心の樂しむ事のない絶望的な憂欝―そんな印象を受けた事などを話した。そして彼はそれと一緒に其春何度も書いて遂に書き上げられなかつた榮花と云ふ女の事も話した。
「懺悔と云ふ事も結局一遍こつきりものだからね」彼はこんな事を云つた。「二度目からはもう最初の感激はないんだから、懺悔の意味はなさないと思ふよ。それを芝居で興行して歩くと云ふのだから無理ない話だ。無論懺悔の意味は少しもないね」
彼はそれよりも、現在、罪を犯しながら、その苛惜の爲め常に一種張りのある氣持を續けてゐる榮花の方が、既に懺悔し、人からも許されたつもりでゐて、其實、心の少しも樂しむ事のないお政の張りのない氣持よりは、心の狀態として遙かにいゝものだと思ふと云ふやうな事を云つた。
「左うでせうか？　私、悪い事をしても、云はない間は、それは苦しいの。だけど、それを云つて了ふと本統にせいせいしますわ」
「あなたの悪い事と、お政や榮花の悪い事とは一緒にならないよ」
「異うの？」かう云つた直子の言葉の調子が謙作には如何にも無邪氣に響いた。

「そりやあ、異うよ。あなたのは云ひさえすれば誰れでも許せる程度のものだし、お政や榮花のは左う簡單には行かないだらう。あなたのは云つて直ぐあなたがそれを忘れた所で誰れも何んとも思はないが、悪い事によつては懺悔したら共儘その氣持を持ち續けてゐて呉れなければ困るといふやうなのがあるだらう。直ぐせい〳〵されたらいゝ氣がしないよ」

「誰れがいゝ氣がしないの？」

「誰れがつて……悪い事をされた人が……」

「執念深いのね」

「懺悔もいつそ懺悔しなければ悔悟の氣持も續くかも知れないが、仕てしまうたら却つて駄目だね」

「そんなら、どうすればいゝの？」

「……」謙作は不意に云ひ詰まつた。彼には不圖亡き母の事が想ひ浮んだ。彼は陷穴に落ちたやうな氣がした。そして、口を噤んで了つた。二人は暫く默つて歩いた。五六歩行つた時に、

「もうそんな話、やめませう。ね？、」と直子も何か不安な氣持に襲はれたかのやうに云つた。直子は謙作の母の事は聞いてゐた。が、それが其時、想ひ浮んだのではないらしかつた。只何んとなく氣配が彼女を不安にしたらしかつた。

そして、

「何か、もつと氣持のいゝお話ないの？　氣持のいゝお話をして頂戴。ねえ。……私、そんなお話よく解からないのよう」殊更甘えるやうな調子に云つて、その丸味のある柔かい肩で押して來た。

「何んでも解からないね」謙作は笑つた。「解からないと云へば讃められるかと思って……」

「左うよ。私、何んにも解からないから、わからず屋よ。いゝこと。貴方もその方がいゝんでしよ」

間もなく二人は輕い氣持になつて北の坊の寓居へ歸つて來た。

十四

十日程して二人は衣笠村にいゝ新建ちの二階家を見つけ、其所へ引移つた。一月の、それは京都でも珍らしい寒い日だつた。建つて漸く壁の乾いた所で、未だ一度も火の氣の入らぬ空家では、寒むさは一層身に堪えた。

S氏の會社の年寄つた小使が手傳ひに來た。その小使が、

「此所は女御はんだけでは御留守が淋しいですな。別に物騷なちう事もありますまいが、犬を飼はれたら、よろしな」

と云つた。それで謙作はその人に犬の世話を頼んだ。

その晩は、あるだけの火鉢に火を一杯におこして部屋を溫めてから寢た。

彼は二階に書齋をきめた。机を据えた北窓から眺められる景色が彼を喜ばした。正面に丸く松の茂つた衣笠山がある。その前に金閣寺の森、奥には鷹ケ峰の一部が見えた。それから左に高い愛宕山、そして右に、一寸首を出せば漸く雪を頂く叡山が眺められるのである。彼はよく机に向つたまゝ、何も書かずに左う云ふ景色を眺めて居た。

二人はよく出歩いた。花園の妙心寺、太秦の廣隆寺、秦の河勝を祭つた蠶の宮、御室の仁和寺、鷹ケ峯の光悦寺、それから紫野の大德寺など、この邊をよく散歩した。そして夜は夜で、電車に乘つて新京極の賑やかな場所へもよく出掛けた。近くでは千本通りの左う云ふ場所へ行つた。

其頃丁度中學では謙作より二つ程下だつたが、家の近かい所からよく遊んで居た末松が、岡崎の或る下宿に來た。四五年前に此所の大學に入つたのだが病氣の爲めに二年程休んで、未だに年の半分位づつ東京から出て來ては殘つた試驗を受けてゐる。此末松が或晩、謙作の書いた物をよく見てゐると云ふ青年を連れて訪ねて來た。

「水谷君は君の書くものと坂口君の物とが一番好きなんださうだ」から末松が云つた。謙作は返事に困つた。坂口と一緒に好かれてる事も困つたが、面と向かつて自分の作物をかう云はれると彼は毎時返事に當惑する方だつた。

「水谷君も文科で、今年大學へ來るんだ。僕にはよく分からないが詩でも歌でも何んでもやるよ」

「其内何か出來たら、お暇の時に見て頂きます」水谷は割りにハキ〳〵した調子で云つた。
「坂口には會つた事あるんですか？」
「いえ、未だ一度もお眼にかゝりません」
直子が茶や菓子を持つて入つて來た。謙作は末松に紹介した。それから水谷にも。
直子は何時の間にか著物をかへ、髪も奇麗になでつけて、如何にも新妻らしい、しとやかさで、客の前に茶や菓子を進めた。
「君は奥さんのお從兄を知つてるんだね」末松は水谷を顧みて云つた。
「えゝ。要さんとはずつと中學が一緒でムいました。それから、久世君も左うです」
直子は故もなく赤い顔をした。要と云ふのはN老人の息子で今東京の高等工業に入つてゐる。謙作は會つた事はないが、名だけはよく知つてゐる人だ。そして彼は、
「久世君といふのはどう云ふ方？」と直子の方を向いて訊いた。
「要さんの御親友で、同志社の大學にゐらつしやる――そら！　貴方のもの讃めてゐらつしやる方よ」直子は謙作にだけは如何にも自由な調子で後を早口に云つた。結婚の話の時作家としての謙作の評判を訊いたと云ふ其人の事である。
「さうか」
「久世君も是非お伺ひしたいと云つて居りますがお差支えムいませんか？」
「えゝ。何時でも」
直子は殆ど寄添ふやうに近く謙作の側に坐つて居た。謙作は何か、客の手前、具合悪い感じをしながら、故意、直子に無關心でゐようと努めたが、それが又、故とらしくなりさうで困つた。彼は何氣なく居ずまひを直す時になるべく直子から身を離した。
「要さんからは時々お便りがムいますか？」水谷は年に似合はず、こんな風に直接直子に話しかけたりした。

「いゝえ、ちよつとも」から云ひながら直子は謙作の方を向いて、「ひどいわ。此方へあがつてから一度も便りを吳れないのよ」と云つた。謙作は默つてゐた。

「此春休みには敦賀の行きか歸りに京都へも寄るやうな事を久世君の所へ云つて來たさうですよ。此方の新御家庭を拜見しがてらに……」水谷は左う云つて一人笑つた。

「いやな人！」と直子は腹立たしさうに云ひ、一寸赤い顏をした。

末松が謙作とは親しい間柄でゐながら側に馴染の薄い直子が居ると、平時の半分も喋れずにゐるのに、初めて水谷が年に似ず何の拘泥りもなくそんな串戯をよく喋れる事が謙作にはいゝ感じがしなかつた。水谷は色の白い小作りの、笑ふと直ぐ頰に大きく縱に笑窪の入る。そして何んとなく眼に濁りのある青年だつた。紺絣の著物にセルの袴を穿いて、袴の紐を駒結びに結び切つて、其先を長く前へ二本垂らしてゐた。末松とは同じ下宿で今度初めての知り合ひで、將棋、花合はせ、玉突、左う云ふ遊び事がうまく、二人はその方での友達であつた。

「奥さん」仙が唐紙の向ふで呼んだ。「奥さん、一寸、來ておくれやすな」

直子は急いで立つて行つた。その姿が隱れると、今までそれを待つて居たかのやうに、末松は花を打ちつける手眞似をしながら、

「やるかい？」と云つて笑つた。

「いや」と謙作も微笑し、首を振つた。二人が未だ中學生だつた頃お榮と三人でよくそれをした事があつた。

「道具はあるの？」

「何所かにあるわけだよ。例の古い奴が……」

「やりたいなあ」末松は如何にも其遊びをしたいらしく、子供らしい調子で云つた。

「何んだい、そんなに熱なのか？」

「末松さんの熱は下宿でも一番高いんです」

「奥さんはどうだい？」と末松が云つた。
「どうかな」
直子が仙に襖を開けさせ、林檎の切つたのを山に盛つた大きい切硝子の鉢を両手に持つて入つて來た。
「花を知つてるかい？」謙作は未だ立つてゐる直子を見上げて訊いた。
「花つて…？」直子は立つた儘首を傾けた。
「こんだ」謙作もその手附をして見せた。
「あゝそのお花？」直子は坐り、鉢をいゝ位置に置きながら「知つてゝよ」と云つた。
「うまいな！」水谷が浮かれ調子に左う云つて如何にも乘氣な風をした。
「道具のあるとこ分かるかしら？」
「お引越しの時一寸見たんですけど、赤い更紗の風呂敷に包んであるのが左うでせうか」
「それだ」
「持つて來るの？」と、よくする癖で直子は又首を傾けて訊いた。
「うむ」
少時して四人は電燈の下の白い布れに被はれた一つの座蒲團を圍んだ。
「總て四倍勘定なんだ。その他は別に變りはないけど」左う石を分けながら末松が云つた。
「私の知つてると異つてさうだわ」
「あなたのはどう云んだ。矢張り役なんかあるんだらう？」
「そりやあ、ありますわ。月見、花見、とか、猪鹿蝶とか、そんなのがあるのよ」
「それぢやあ、異うな」と謙作が云つた。
「左う？ そんなら私、初め見てませう。その方がいゝわ」

「奥さん、かまひませんよ」と器用な手附きで札を切りながら、水谷が云つた。「直ぐ覺えられますよ。それに四人なら誰れか餘ますから、餘た人が後見をすればいゝんですもの」

「入るといゝ。直ぐ覺えられるよ。役を書いてやるから、紙と硯を持つて來ないか」

直子は立つて、それを取りに行つた。

水谷が黒の札を四つに分け、それを開けると謙作の所に親の鶴があつた。

謙作は赤い札を取り、それを播いた。

「私が書きませう」水谷は入つて來た直子の手から紙と硯を取り、手役から一つ〳〵說明をしながら書いた。

謙作は一寸自分の手を見てから、それを伏せ、手持ち不沙汰に卷煙草に火をつけた。

「龍岡君は今何所だい？矢張り巴里かい？」末松が云つた。

「左うだ。中々勉强してるらしいよ」

「飛行機の發動機では龍岡君が日本では一番いゝんださうだね」

「左うかね。既に一番いゝとなつてるのかね」謙作は心から嬉しく思つた。そして「それは嬉しいな」と云つた。

「左う云ふ噂だよ。――君の所へは始終便りがあるかい？」

「時々ある」

水谷は一ト通り手役の說明してから、

「光一が一名ガチヤ。丹一が丹兵衛……」こんな事を云ひながら、「光一」の下に「ガチヤとも云ふ」などゝ書いた。

「おい、いゝ加減にやらうよ」待遠しがつて末松が云つた。

「待ち玉へ、手役が濟んで、これからが出來役の部だ」そして水谷はその方の說明を始めた。

「お榮さんは？」と末松が訊いた。

「天津に居る」

「天津に」末松は驚いたやうに云つた「又、どうしてそんな所へ……」
「向ふに從妹がゐるんだ。それが去年の秋に出て來て、それと一緒に行つたよ」謙作はお榮の商賣を訊かれたくなかつた。隱す必要もなかつたが、初めての水谷の前ではそれが云ひたくなかつた。然し末松は矢張りそれを訊いた。
「何か商賣でもしてられるのかい？」
「何か一寸した事をしてるんだらう。その從妹と共同でやつてるんだ」
末松はそれ以上追求して訊かなかつた。その時丁度、
「さあ、それぢやあ、始めませう」と水谷が云つた。謙作は直ぐ自分の手をその儘めくり札に重ねて、
「何貫」と云つた。
「二貫です」
謙作はそれだけを場へ投出すと直子の方へいざり寄り、
「どうだい分かつた？」と其手を覗き込んだ。
「どうなの？」直子は札を兩手に持つたまゝ謙作の顏の前へ出した。
「出て御覽」
「これ、役なの？」直子は左ういつて自分の札と水谷の書いて與れた紙と見較らべた。皆は笑つた。
こんな風に初めてなのであるが誰れか一人づゝ寢た者が後見についてゐると、何時か直子が一番の石高となつてゐた。そしてその後に水谷の後見で五光を作ると、これで大概銀見は決つて了つた。
直子の大きな銀見で、一年濟んだ所で、
「今度は一人でやつて御覽。大概解かつたらう？」と謙作がいつた。
「えゝいゝわ。今度は一人でやるわ」
然し一人になると、直子は矢張りよく負けた。結局又誰れか後見をする事になつたが一ト勝負濟んで數勘定の時など、直

子はよく、

「私に何か手役なかつたこと?」からいつて考へる事があつた。「あつたわ。たて三でしよ」

「何いつてんだ。そりやあ、前の勝負だ。慾が深いな」謙作は串戯らしく左う云ひながら、直子には女らしい小心で、實際慾の深い所があるやうだと云ふやうな事を思つた。

水谷の親で、親が出ると云つた。次も出ると云つた。その次が謙作で、謙作には二タ役がついて居たので、出ると云ひ、最後の直子が追込まれる事になつた。

「買つてやらう。何かあるかい」左う云つて謙作は直子を顧みた。

直子は扇形に開いた七枚の札を彼に見せて、

「丹兵衛さんよ」と云つた。

「よし。櫻の丹だ」から皆にいつて、何氣なくもう一度見た時にかすの菊が一寸彼の注意をひいた。彼は手を出し其所だけ扇をもつと開いて見た。それは盃のある菊で、それがあつてはその手は役にならなかつた。謙作は其盃だけが上の札で完全に隱されてある所から、これは直子がづるをしようとしたのだと思つた。

「ちよつとも氣がつきませんでしたわ」直子も一寸いやな顏をして云つた。

「よろしい。それぢやあ、櫻の丹があるが、罰として只だ」彼は何氣なくその札を受取り、めぐり札に切り込んで、直ぐ勝負にかゝつたが、「猾い奴だな」と直ぐ一と口に串戯の云へなかつた處に何んとなく、それが實際直子の猾るだつたやうな氣がした。勝負をしながら、彼は其事を考へた。彼は氣を沈ませた。そして、思ひなしか、皆も妙に默つて了つたやうな氣がした。

十一時頃、歸るといふ二人を送つて、彼は直子も連れ、自家を出た。

「その内。下宿へやりに來ないか」と末松が云つた。

「行つてもいゝが……」謙作は曖昧に答へ、然し水谷のやうな連中と一緒にやるのは氣が進まなかつた。

「どうか是非お出で下さい」と水谷も云ふ。「大概毎日、何所かの部屋でやつてます」
「花は餘り得意でもないから‥‥」
「そんな事はありませんよ。時任さんの花は理詰めで大變面白いと思ひますよ。末松君のは思念術流と云ふんですが、時々定跡にない事をやるんでね」こんな事を云つて水谷は末松の方を向いて大きな聲をして笑つた。
「思念術とはどういふんだ」謙作は末松に云つた。
「えゝ、思念術か？」と末松は只笑つてゐた。
「つまり思念術で何んでもおこしで打ち當てようといふのですよ」
椿寺、それから小さい橋を渡つて一條通りの町になる。が、晩いので何所ももう店を閉め、ひつそりして居た。直子は毛の襟卷（謙作の）に深く頬を埋め默り勝ちに謙作の後からついて來た。
「どうだい。もう歸らないか」と末松が云つた。
「あなたはどうだい？」謙作はいたはるやうに云ひ直子を振り返つた。
「私、いゝのよ」
「そんなら大將軍の前あたりまで行かう」
寒い晩で、皆が默ると、凍つた路に下駄の歯音が高く響いた。
「もう少し溫かくなつたら、一緒に何所かへ行つて見ようかね」十年程前の春の末松と富士の八湖を廻はつた事がある、それを憶ひ出し、謙作は云つた。
「それは賛成だね。僕は此春、月ケ瀬へ行つて見ようと思つてるよ。君が未だなら、月ケ瀬でもいゝね。笠置の方から越して行くんだ」
「月ケ瀬はいゝでせうね。僕も未だ行かないが」と直ぐ水谷も云つた。が、二人はそれには答へず、八湖廻りをした時の話などを始めた。

そして間もなく大將軍といふ町中にある丹塗の小さい社の前まで來て、其所で謙作達は二人に別かれて引返えして來た。直子は何となく元氣がなかつた。矢張り先刻の事が直子の心を傷けて居るのだと謙作は思つた。謙作は若しそれが云へる事なら何んとか云つて慰めてやりたかつた。そして彼にも亦それが自身の事柄のやうに心を傷けて居るのであつた。

「疲れたかい？」

「いゝえ」

カタリコトリ冴えた音をさせながら、野菜を積んだ牛車がすれ違つて行つた。牛は垂れた首を大きく左右に振りながら鼻から出る太い氣霜を道へ撒き〳〵通り過ぎた。

「猾るは惡い」謙作は思つた。「惡い事は大概不快な感じで、これまで自分に來た。が、今、自分は毛程の不快も惡意も感じて居ない。これは不思議な事だ」と思つた。彼には堪らなく直子がいぢらしかつた。彼はその事があつて、反つて嘗つて感じなかつた程に深い愛情を感じて居た。

彼は默つて直子の手を握り、それを自分の內懷に入れてやつた。直子は媚びるやうな細い眼つきをして、その頰を肩へつけ、一緒に歩いた。謙作は何かしら甚く感傷的な氣持になつた。そして痛切今は直子が自分の一部である事を感じた。

（つゞく）



截紙刀

里見弴

ほんのつまらない截紙刀である。柄は、別に手工も加へてない仔山羊の角で、普通の女の中指ほどの太さと、すんなりと延びたJ字形に、天然物だけがもつてゐる生々しい魅力が、――それもまあ、そんな風に感じられる人々には、あらうかと云ふほどのものだ。根本のコクンと太くなつたところに、茶褐色をした、生のまゝの剛い毛が、つや〳〵と毛並を揃へて殘してあるなどは、どうしたつて歐羅巴人の好みで、われ〳〵大和民族には、不潔な氣がして、あまり有難くもない氣取かただ。身は、多分水牛だらう、水飴のトロリとした感じの黑さで、テーブル・ナイフのやうに先を丸めずに、ツンととんがらせてある。そのとんがり具合は、ひと握りを一寸とあまさない柄の、小指から藥指のなかほどまでかけて、彎曲してゐる角の先と、相呼應してちよつと面白い。長さは全體で一尺がちよつとつまるくらゐだらう。――要するに、これと同じ出來のものを得やうとしたら、東京、横濱、神戸あたりのあらゆる文房具屋と云はず、そんなものゝありさうな店を片ぱしから尋ねても、恐らくは徒勞に歸するだらうが、さうだからと云つて、しみ〴〵それを手にとつて、いかにひねくり廻してみても、決して貴重な、と云ふ感じは起つて來ない代物だ。――少くも、月何艘かはいる歐米各航路の客船から、何百人づつか吐き出される「洋

行歸り」が、親戚知己の笑顔を見ようとして、トランクの底に、多少とも土産ものを用意して來る今日では……。

そのうへ、これは、もう大分に古び、一二箇所刄もこぼれてゐる。

「どうしたのよ、顯理、急に默つちやつたりして……」

それきり松子は、惡戯じみた微笑を湛えて、ぢツと相手の、伏目になつた眉間のあたりを見詰めたまゝに默つてゐた。

「ねえ、顯理！」などゝもう一度答を促したりしないのは、この娘、たしかに「沈默の言葉」をよく知つてゐる。油ツ氣なしの、然しつやゝかな黒く細い髮を、無雜作に、——でなければ、ちよつとさう見えるやうに、グル〳〵と束ねたのが、爭はれないもので、どことなく本場の味になつてゐたが、その額ぎはから髮のなかへ、中の三本の指を突ツ込み、小指は折り曲げ、親指は頬に支つて、顎を載せんばかりに深く凭れかゝつた書物机に、左で肘杖をつきながら、右の指さきには、その、問題の裁紙刀を弄んでゐたのだ。

「……だつて、……だつてね……」

二十三歳の青年、宮崎顯理は、英吉利人を父にもつた混血兒で、片眼鏡のチェンバレンが若い時分にはこんなだつたらう、と思はせる、大體、マッチ箱を藥のひいてある狹い面から見たやうな、——云ひ換えれば兩の頬を板で挾まれて育つたやうな細面の、日本人の血がはいつてゐる髮は暗い方ながら、でも白晳だけに、可なりに目立つ雀斑だつた。とは云へ、チェンバレンに似てゐるくらゐだから、目鼻だちは、決して醜いわけではない。鼠霜降の間着は、着くづれたなりに、ちやんと身についてゐるし、カラやシャツやタイにも、おろそかならぬ注意のほどが現はれ、總じて女子學習院、女學館あたりの生徒でも、振り返つて行くだらうと思はれる風俗だつた。

「だつて、——なによ。

明かに、顯理は、さう云ふ娘の言葉を待つてゐた。然し、まだ、意地の惡い沈默が續いた。深い金屬製の傘をかぶつ

た卓上電燈の周りには、もうそろ〳〵小さな羽蟲どもが舞つて來る時節で、丁度、英語や羅馬綴りや幾何學的な線を矢鱈に書き重ねてゐる書簡帳(ライティングパッド)の上へ、米粒ほどの、あざやかな綠色をしたやつが、ピチ〳〵とはねて來たが、それを顯理は、ペンのさきで輕く抑えた。鼻のなかほどから下を光のなかに、さうして傘の陰になつた薄暗がりからは、娘の大きな眼が、ぢツとさう云ふ仕草を見詰めてゐることを意識しながら……。

「こん畜生……」

もがくのを、少し力を入れて抑えつけると、柔いペンさきが割れて、その隙間(すきま)に小蟲の體が狹まれて了つた。

「いやよ」

截紙刀は左に握つたまゝで、娘は邪慳に萬年筆をひつたくると、すきまなくいたづら書がしてある上へ、二三本太い線をギユウ〳〵と引いてから、鞘をはめたが、どこかへしまふでもなく、目の前にぽんと擲りだした。先刻から伏せてゐる眼は決してあげることをしずに、そして無言で、けれども動作はてきぱきと敏捷(すばや)く、靑年はすぐそれをとりあげて兩の指先に、鞘と身との捩込(ねぢこみ)をもどしたりはめたり、こも〳〵逆に廻しながら、机の下では、綯り合せたやうに、踝(くるぶし)のところで重ねたすらりと長い足を、ピンと延したり、力をゆるめて、リノリユウムの床の上に、スリツパアの踵(かかと)をトンと落したり、これもこも〳〵に、一定の間(ま)をきざんでゐた。

ものは粗末だけれど、亞米利加好みに、氣の利いた裁(た)ちの部屋着で、松子の、脂肪よりは筋肉の發達で可なりに太く、そして白い腕は、肘の五分ほど上から露(あらは)だつたが、その左の掌(たなごころ)を、右に持つた截紙刀の身で、平打に、ピタリと打つと同時に、ちよいと握つて、すぐまた放すと、はねあげて置いて打つ、さう云ふ動作が、印度靑(インヂイアンブルー)の紗で張つた机の上に、明るい灯(ひ)を浴びて繰り返へされてゐた。――芝白銀の高臺に庭を廣くとつた邸うちで、初夏の宵の口ながら、あたりは至つて靜で、却つて遠の空に、カアブを行く電車の軋りが響いたりした。

「Patented in eighteen, eighty four ......May, twenty ,third, eighteen ninety nine,...... Waterman's ideal fountain-pen......」

撰ることをよすと、だしぬけに顯理はその軸に刻んである文字を、流暢に、正しい發音で讀み下したが、「なんだつけ、N. Y.つてのは。New York かね」
「知らないわ」
「知らないか……」
ぽいと萬年筆を投げだすと、兩肘を張つて、ギシ〱籐を軋み鳴せながら、椅子ごとうしろに反り返つて、「あツあ、あアあアあア、だ」
「どうも、御退屈さま」
「フン」
と、鼻のさきで笑つたが、今度は目をあげて、薄暗がりで、白い部分がいやに白く見える娘の目を、ちつともたぢろがずに見返しながら、「わしアまた、快活なる靑年になるんだ。Good jolly chap にね……」
「いゝでせう。……つまり前々どほりの不良少年でゐようつてことなんでせうから、その方が正直でいゝわ」
「さうかね、わしアさうは思はないがねえ。わしには、不良つてとこはないよ。たゞ、ちつと冗談が多すぎるだけだ。……なアんて云つてるのも、冗談かな」
「そいでね、顯理、快活にならうとさへ思へば、いつからでもすぐになれる?」
「なれるとも。今、わしはもう快活だよ。さうぢやないか」
「うはべだけでせう。……さつき、急に默つて了つた時は?」
「あれはね……」
と、机に兩手を突つ張つて、椅子を、うしろの足だけで立たせて、陰に置いてゐた顏を、急にトンと前にかゝると同時に、近々と娘のそばへよせたが、その時には、また以前の伏目になつてだ、「からさ、あの時に、快活なる靑年にならう、と思つてゐたのさ」

松子は默つてゐた。仔山羊の角の曲つたところを、人さし指にひツかけて、小指のさきで、それに指鐶の動きを與へながら、これも目を落して、キラリ〳〵と揺れ動く水牛の刄を見詰めてゐた。

「……快活なる青年か……」

呟きながら、悠々と、娘から截紙刀を奪つて、同じく人さし指のさきにかけ、飛行機のプロペラアのやうにキリ〳〵と廻しだした。

「ね、落ちない」

「當り前ぢやないの」

「保さん、今ごろはもう、船ンなかだね。きつと嬉しくつて〳〵よく眠られないくらゐだぜ」

松子はニヤリとしながら、

「どうして？」

「どうして……、どうしてはないだらう。松ツちやんも、これで、どうしてなか〳〵圖々しくなつたもんだな」

「歸つてから、顯理みたいな不良少年とつきあふやうになつたもんだからだわ」

「倫敦にゐた時分にア、頭の毛を編んでさげたりして、膝ツ小僧を出して歩いてゐたんだがねえ」

「顯理だつて、可愛いゝ坊ツちやんだつたわ」

「ウフツ、生意氣いつてらア。僕ら、あの時分もう煙草もすつてたし……」

「さうよ、十五六でもうさうだつたんだから……」

「十五六？　冗談いつちアいけないぜ。そんなになるもんか」

「さうオ、ぢア……」

「もうかれこれ十年になるぜ、十三四だ」

「さうかしら。……あゝ、さうね、あなたが日本へ歸つた翌々年にあたしたちが亞米利加へ行つて、……それがあたし

十三の年だから。……ちよいと、さうすると、あなた、昔から隨分ふけてたわね」
「ふけてた？」
「あら、ふけてたぢア可笑しいのね。あゝ、ませてたか。……さうよ、もう隨分大人ぢみてたわ」
「そんな氣がするんだよ」
と、急にぽッと赤くなつて、「さうするとなんだね、君は十ぐらゐか。ぢアおさげにもしてゐないくらゐかな。おかツぱさんだつたのかな。考へると滑稽だなア」
「あたしが亞米利加へ行つてからは、ちつとも手紙をくれなくなつたわね」
「亞米利加、大嫌ひだ」
「解つてゝよ。だから、N. Y.がどこだかも知らないんでせう、——知つてゝも知らないふりなんかするんでせう」
顯理は、急にほかのことでも考へだしたやうに、むづかしい顔つきをして、なんとも答へなかつた。——机に近い、あけ放した窓のそとは、雨もよひの暗い空だつた。高い二階ながら、習との風もはいらない。
「保さんはいくつになるんだつけ」
「日本流に云へば二十九」
「二十八かい。さうかなア、わしより五つも上だつたかなア。……歸るとすぐ結婚するのかね」
「どうだか知らない」
「でも、赤くなるね」
「いやな顯理！」
と、靨（えくぼ）をいれてキュウッと口を結び、顎を引き加減にちよつと睨むと、すぐまたけろりとして、「でもね、マヽは、序だから學校をすまして了つたら、つて云つてるの」
「なんだい、君どつか學校へあがつたのかい」

「いゝえ、保よ、保のことよ」
「やすウ？　いやなの、もうすつかり夫婦きどりなんだね」
「さうぢやないけど。……保つて呼んぢア可笑しい？　だつてあつちにゐた時分だつて、始終さう云つてたのよ」
「それア然し fiancé になつてからだらう？　まさか、たゞのお友達の間から、保、なんて呼んでたわけぢアあるまい？」
「そんなこと訊くもんぢアないの。……だからね、ほんの夏休を歸つて來るくらゐのつもりで、荷物なんぞも、すつかりは持つて來ないんだから、今度はどうなるか解らないわ」
「こつちで結婚して、honey-moon がてら、一緒にむかふへ歸つて行つたらいゝぢアないか」
「だつて、學校へ行つてる間はね……」
「Heavens!」
云ふなり、何やら行進曲（マーチ）のやうな急調子のものを、上手に口笛で吹き鳴しながら、ドシン〳〵床を踏んだ。
「よして頂戴、マヽが吃驚して上つて來るわ」
「小母さん歸つて來たかい」
と、すぐよして、ちよつと首を縮めた。
「どうだか。まだ……かも知れない」
「出鱈目いつてらア。こんな早くすむ芝居があつてたまるもんか。……さア、それぢアちつと快活なる青年を發揮して、ひと騒ぎしてやるかな」
さう云つても、顯理は、椅子から立ちあがらうとするでもなく、ぢつと娘の目を見入りながら、裁紙刀の刄の方を堅く掌（てのひら）に握り、發條（ばね）でもかけるやうに、柄の彎曲したところをつまんで、ギユウ〳〵ッと廻してゐた。
松子の眉が、薄く刷（は）いたほどに雲ると、急に目を落し、机の羅紗の上を掌（てのひら）で熨すやうな、それまでに似げなくしほらしい仕草をした。さうして、大きく溜息をついた。それと見ると、顯理の目のなかゞ光つて來た。

「……ねえ」

靜に、沈んだ聲で、「こんなにして君と話をするのも、今夜ツきりだね」

右の手で額を支え、顔をそむけるやうにして、娘は默つてゐた。身ぢろぎもしなかつた。顯理からは、耳と、頰の下の方の僅な部分と、露な頸筋としか見えなかつた。それも、すぐ、涙のために、はつきりとは見えなくなつて行つた……。

「でもね」

やゝ暫してから、松子が、矢ツ張り窓の方を向いたまゝで、しんみりと、「でも、いつまでもつきあつてね。あたし、結婚したつて、おんなじことよ。あなたを好きなことは、ちつとも變りやしないわ」

「有難う、有難う。僕は……、僕は……、僕だつて一生變りやアしない……」

おろ〳〵聲でさう云ふと、截紙刀を投げだして、顯理は、机の上にうつぶしに、兩腕の間に顏を覆ふて了つた。それからまた暫して向き直つた松子が、もう大分頽りかけた青年の肩の搖れを見おろしてゐた眼差には、噓もなかつたが、然し涙の跟も殘つてはゐなかつた。落つき拂つたものだつた。さうして、一分すぎ、二分すぎするうちに、たうとう退屈の色さへ浮んできた。彼の女は、そつと截紙刀を拾ひあげて、今度はそれに見入つた。その氣勢で、顯理が顏をあげた。赤い目をしてゐた。突嗟に、娘の目からも退屈の色は消えて、美しい細い眉の間に、微な縱皺がよつた。

「ねえ、顯理」

と、やさしい、情の罩つた聲で呼びかけると、突然截紙刀を、自分の手と一緒に、青年の手のうちに握らせた。これ、あたし、大切にしてゐたんだけれど、今夜の記念に、あなたにあげよう。あたし、山羊がすき、それから、この眞ツ黑な身の色も大すき。或人が大事にしてゐたのを、……それをね、無理にねだつて貰つちやつたの。一目見て、どうしてもさうしないではゐられなかつたほど、氣に入つちやつた品だから、私のものになつてからも、それア大切にしてゐたのよ。だから、顯理、そのつもりで貰つて頂戴ね。だアれにも見せるのいやよ。それから、あたしから貰つたなんてこと、なほさら秘密にしてね？　いゝこと？　あなたも、いつまでも大事にもつてゝくれるわね？」

ナイフを中心に、いつか四つの手が、男のと女のと、一枚おきに重り合つて、グウンと底力のこもつた一塊りになつてゐた。顯理は、その上へ顔を突き出し、けはしく相手の目を見据えて、
「ぢア、これは亞米利加製だね」
「さうぢアないわ。さうぢアないけれど、若しさうだつたら、あなた貰ふのいやだと云ふの」
「いや、それは我慢する。だけど、その或る人と云ふのは、保さんぢアあるまいね」
「プッフ」
グラリと頭をふつて噴き出すと同時に、敏捷く手を引いて、豐な兩の頬を抑えた。「いやだ〱。どうしてさう顯理は、ものごとをへんな風にばかり釋るんだらう。疑ぐり深いつちアありやアしない」
「よし！」
と、吊り込まれた笑顔ながらも、聲の調子は、冗談とも眞劍ともつかず、「きつとだね。きつとそれに間違ひないね！」
「いやよ、そんな……」
「よし〱。その代り、もし萬一にもそれが嘘だつたら……」
右に堅く握つた裁紙刀に氣がつくと、ニヤリとして、「かうだよ」
と、松子の心臓の上へ、その鋩を突きつけた。
「フン、紙ぢアあるまいし……」
「よし、決して、卑怯にほかの刄物は使はない。必ずこれで殺してみせる。あゝ、殺すとも……」
「いやだ！顯理と來たらそれア不良なんだからね、うつかり冗談も云へやアしない」
「不良つてとこはないよ。たゞ、ちつとばかり冗談が多すぎるばかりだよ」
「だからうつかり冗談が云へないのさ。冗談家に冗談、――氣違ひに刄物つて云ふやうな勘定ぢアないか」
「まアなんでもいゝや。そいぢアこの刄物は、有難く貰つとくよ」

「ほんとに、大事にしまつとかなくつちアいやよ……」

「大丈夫だよ」

と、上着の内衣嚢(うちかくし)にしまひながら、「寝る間も肌身をはなしやアしないよ」

前原保武は、弘道館二段の免許とりで、七寸ゆたかの大兵肥滿だつたから、麻布市兵衛町の暗い通りを、外國風に腕をかけさせた松子が、――日本人の女としては目につく大柄なのに、まるで吊るさげられて行くやうに見えた。梅雨あけの、道はまだ乾き切つてゐなかつたが、ある限りの星を頂いたやうな、晴れ亘つた空を見あげて、保武は、

「いゝな、日本の夜はやつぱりいゝな」

と、存外子供々々した聲なり、調子なりで、「それから、こんな眞ツ暗な通りがあるのもいゝな」

自分も娘も、帽子なしなのを幸に、こゝみかゝるやうにして、ちよつと額に脣を觸れた。松子は、すがつてゐる手にギユウツと力を入れて、すぐそれに答へながら、

「歸りたては、ほんとに東京は暗い、と思ふわね。でも、ぢき馴ちまふわ。今でも、あなたにさう云はれるまで氣がつかずにゐたんですもの」

大きな男ほどよく似合ふ絹紬(けんちう)の、一足ごとにタプリ〳〵と脛(はぎ)をうつヅボンの重みを樂みながら、暫く默つて歩いてゐたが、

「さうだ。人間つてものは、なんにでもすぐ馴ちまふ。……君も早く、うちの家風に馴てくれよ。洋服の膝をそろへて、疊の上にかしまつて、なんかムヅ〳〵云つてる君を見てゐると、可哀さうになつちまふが、すぐ馴るよ、馴らアね?!」

「えゝ……。でもあたし、どうしても、保のマヽだけは可怖いわ。それアあたしが、なんにも日本のお行儀を知らないと云ふ心配、――不安心からでもあるんだけれど、一々することをぢつと見られてるやうな氣がして……」

またね、君ンとこと、うちとぢア、ちつと違ひすぎるほど違つてるからね。一人々々前にお膳を控えて飯を食ふなんざア、なんぼなんでもあんまり時世に遅れすぎてるから、どうにかしなさいつて云つてるんだけどもねえ……」

「あゝ、あたし、あれほんとにかなはないわ。食べた氣がしやアしない」

「また松が、すつかり堅くなつちまふんだもの。こぼしたらこぼしたで、ちつとも構やアしないんだよ」

「あら、さうはいかないことよ」

「なにいくんだよ」

ペツトリなすりつけたやうな青髯にさへ目をつぶれば、十嚢とも見えないことはない丸々とした童顔に、にこやかな微笑を浮べて、「一體、松があんまり堅くなるから、うちの阿母さんが堅くなる。うちの阿母さんが堅くなつて、切口上で出ると、松がますます恐縮する、つて云ふやうな關係だよ。だから、構はず飯を食ひこぼしたり、たまにはお汁のお椀でもひつくり返したりして見せる方がいゝんだよ。そんな風にしてお互にもつと笑ふ機會を多くする方がいゝんだよ。これで、阿父さんが生きてる時分だと、大分うちも陽氣だつたんだがね。それに、第一もうちつとはハイカラだつたよ」

「保のパヽは……」

「さアそれももういゝ加減馴れたらいゝぜ。阿父さんてお云ひよ」

「あゝごめん。阿父さん、永い間巴里に行つてらしつたつてのに、なぜあんな家をお建てになつたんでせうね」

「巴里に行つてらしやつたのは若い時分、僕なんぞがまだ生れてゐない時分だし、あの家が出來たのは、ずつともう晩年のことだもの。その間には、すつかりまた日本人に戻つちやつたんだよ。それでも、勿論、阿母さんほど舊弊ぢやアなかつたがね」

「いゝえ、阿母さんだつて別に……、あれが普通なのよ。うちの方が特別なんだわ。……でも、日本つて、隨分不思議な國ね。どこへ行つたつて、こんなとこないでせう」

「どうしてさ」

「だつて、こんなに、いろんな風がゴチャ〳〵なとこつて、ほかにないわ。支那だつてこんなぢアないわ」
「さうかね、僕は支那へは行つたことないが、……さうかな、さう云やア不思議に違ひないな……」
「えゝ、不思議だわ、不思議ですとも……」
「あゝちよつと……」
と、急に立ちどまつて、相手の言葉を抑えるやうな手つきをして、それからまた改めて歩き出しながら、「不思議で思ひ出したんだが、……不思議なことがあるんだよ」
「なアに」
「どうもね、それが、ほんとに不思議なんだよ」
首をかしげて、考へ〳〵、靜に話しださうとした時に、飯倉の電車通に出て了つたので、「どうする？もうちつと散步してもいゝんだらう？あんまり君がもぢ〳〵してゐて氣の毒だつたから、飯がすむとすぐ、送つてつてやらうなんて、出て來ちやつたんだから、……まだ時間は早い筈だよ」
と、街燈の方に身を振り向けて時計を見て、「まだ九時前だ。どうだい、これからずツと芝公園の方へ出てみようか、あの紅葉館の前から彼方のとこ、ちよつといゝところだつたが、今でも變つちアゐまい」
「えゝさうしませう。さうして、あたしどつかで、ちよつとなんか食べたいわ」
「なんだ、晩飯の食ひ直しか」
「だつて……」
「いゝよ〳〵。歩いてくうちに、なんか食ひ物屋があるだらう」
「えゝ、そいで、今の不思議な話は？」
「あゝ、それアね、昨日ね、五番町まで用があつて出かけたもんだからね、そこからぢき近くだから、ちよつと宮崎のうちへよつてみたんだよ」

「えゝ」
「さうするとね、通された書齋の机の上に、不思議なものが載つてるんだ」
「なんだつたの」
「一目見てね、……まだ顯理が出て來ないうちだつたけれど、思はず手にとりあげちやつて、……見れば見るほど不思議なんだ」
「…………」
「松も憶えてるだらう？ほら、十八町目の君ンちのアパアトメントに、僕が居候してえた時ね……？」
「えゝ」
「あの時分さ、僕の截紙刀がなくなつたつて云つて、ちよつと騷いだことがあるだらう？」
「あゝさう〳〵、そんなことがあつたわね」
「あれなんだ」
「なにが？」
「あの、山羊の角を柄にしたやつが、ちやアんと宮崎の机の上に置いてあるんだ」
「…………」
「あれアね、……あん時には、あんまり騷ぎたてゝも、君ンちの方に惡いと思つて、なアによござんす、なんて云つてたけれどね、あれア實は、阿父さんの形見なんだからね」
「まア、さうオ！」
「あゝ、君にも云はなかつたかな。……さうなんだよ。それも、巴里時代からずツと阿父さんが使つてゐらしつたものなんだつて云ふんだから、……なに、品ものは、別に金めなもんでもなんでもありやアしないけれど、そんなわけで、僕にとつちアゝちよつと錢金に代へがたい大切な記念だつたんだがね……」

「さうオ！そんなら、あん時さうおつしやればいゝのに……」

「そんな……」

と、輕く笑つて、「云つたつて、云はなくつたつて、なくなつたものが、それで出て來る筈もなし、まア、そんなこと云へば、餘計なほ心配をかけるわけだと思つて、默つてゐたのさ。……さうだつたかな、君にだけは話したやうな氣もしてゐたんだがな……」

「いゝえ、あたしはじめてよ」

「さうだつたかね。……なにしても、不思議ぢアないか、それが、……………それがとは云へないかも知れないが、少くとも、それと寸分違はない出來のものが、宮崎の机の上にあつたんだから……」

「あれは。あたしも憶えてるけれど、實際どうみたつて安ものだつたんだから、一本きり拵へる筈はないわね。いづれ數つくつて、賣つてたものでせうからね」

「うん、だがね、角の彫の、或る一箇所、鐵砲百合の形そのまゝのところがあつてね、僕はいまだにそれをはつきり憶えてるんだが、顯理のをよく〳〵見ると、ちやんとそれまで現れてるんだからね。同じものぢアなくつて、そのものだ、とつい初めは思ひ込んぢまつたんだが、……考へてみれアそんなことは、まア絶對にあり得ない、と云へることだからね。不思議だよ、どう考へても不思議だよ……」

「へんね」

「へんだよ。第一、あれがなくなつたのからしてへんだつたんだからね。僕のことだから、――わりにから見えて丹念な方だらう？だから、本の間にでも挾んだまゝ、本箱にしまひ込みやアしないかと思つて、一冊々々出して振つて見たり、君なんぞが寢ちまつてからだが、コソ〳〵コソ〳〵、それアいく晩かゝつて部屋ぢう探し廻つたか知れやアしないぜ。それでない。ぢアいよ〳〵盜られたものとするね。ところが、僕の机の上には、いつだつて財布でも、時計でも、――これだつて……」

と、胴着の衣囊を上からハタ〳〵とたゝいてみせて、「僕としちやア大枚の、二百弗近い金を出して買つたんだからね、――その時計でも、いつだつてほつたらかしにして置いたんだが、ついに一度間違ひなんぞあつたためしがないのに、截紙刀一本だけ盜つて行く盜賊なんて、考へられない話だからね。だから、なくなつたのからして、いまだに僕には不思議な氣がしてゐるくらゐなんだ。それが、それが、どうだい、いつの間にか日本まで飛んで來て、宮崎のうちにあるなんぞは、探偵小說以上だね。かうなれアもう怪談の部だよ」

「それで、あなた、……顚理に……」

「勿論きいたさ……」

「さうしたら？」

「あいつ、倫敦にゐた時分に買つたんだとさ。さうすれア十年も昔のことだらう？まだ阿父さんが使つてゝ、僕のものにやアなつてゐない時分の話だからね。世の中に、――幾何學で云ふ『等しい』の意味ぢアなくつて、「同じものが二つ存在してゐなくつちアならないわけになるんだ。實際、こんな不思議なことつてないよ。おかげで昨日から、なんだか、へんな、氣味の惡いやうな氣がしてならないんだ」

「さうオ。……でもやつぱり、おんなじ製造所で出來た、偶然によく似たのだつたんでせうね」

「まアね、さうよりほかに考へやうがないわけだねえ」

「さうねえ、でも、さうだとしても、不思議な氣がするくらゐだわ……」

「うん」

いつか彼等は、芝公園のなかを步いてゐた。老杉の下に、蒼々と瓦斯燈が灯つてゐるのが、知らぬまに、空がかき曇つて、暗い闇夜になつて了つたやうな感じをさせた。ちらりほらり、散步や逢引らしい人の影が見えるばかりで、薄ら冷い、さびれた氣持があたりに立ち罩めてゐた。

「あゝ、話に夢中になつてゝ、食ひ物屋に氣をつけて來るのを忘れちやつた。どうだね、腹がすいたらうね」

「いゝえ、そんなでもないわ」

それからちよつと間をおいて、「ねえ、保、いま類理の話が出たから云ふんだけれど、……聞いてくれる？　少し不愉快な話だけど……？」

「なんだい。不愉快な話なんぞがあるんなら、さつさと話して、さつさと片をつけちまはふぢアないか」

「えゝ。……類理ね、あの人、もう前のやうぢアなくつてよ」

「知つてるよ。不良だつて云ふんだらう？　僕があつちへ行く前から、——まだあいつが暁星に行つてた時分から、ちよく〳〵それは聞いてたよ。僕、その時分に一二度云つてやつたこともあるくらゐだ。……で、それがどうしたつてんだい」

「さうオ、知つてらつしやつたの？　そんならいゝけど……」

「なんだい、へんだね、不良だからどうかしろつてのかい？」

「えゝ、随分たちのよくないことをしてゐるらしいわ。だから、あんまりつきあはない方がいゝと思つて……」

「なアんだい。いくらあいつが不良だつて、あんな子供に、僕が感化されたり影響されたりしてたまるもんかね。あいつ早熟てるから、僕なんぞと同輩みたいな口の利きようをしてるけれど、なんでも、五つ六つは違ふんだぜ。こつちぢアてんで眼中に置いてやしないよ」

「ぢアいゝけど…………。ねえ、保、あなた怒つて、あの人になんかしちアいやよ。きつと、なんにもしなきア云ふことがあるんだけど………」

「なんだい、松！君、僕には何一つ隠しごとをしないつて約束ぢアないか。云へよ、なんだよ、………どんなことだよ」

「きつと怒らない？」

「それア、事によつちア怒るよ。だけど、怒つたつていゝぢアないか」

「怒つたつていゝけど、「あんな人を相手になんかすると、あとがうるさいから、いくら腹がたつても、呶鳴りつけたり

亂暴なこと書いた絕交狀を出したり、なほさら手出しなんぞは絕對にしないつてことを、ちやんと私に約束して頂戴。……………いゝえ、いや、その約束をなさらないうちは、あたし、死んだつて云やアしないから」

「なぜそんなに顚理を可怕がるんだらうね。あんなもの。お前……………」

「いゝえ、可怕かアないんだけど、あんなものにかゝり合つたらこつちが損よ。あなた今、眼中に置いてないつておつしやつたぢアないの。そんなら、――それがほんとなら、どんなことを聞いても平氣でゐられる筈だわ」

「なんだよ、一體、早く話せよ」

「話すわ。だから、きつと、怒つて亂暴なことしちアいやよ。たゞあなたの方から、それとなくつきあはないやうにして、自然と遠のくのを待つて、それで事實上絕交することだつて出來るんだから……………」

「だからいゝよ。お前がそんなに心配するんなら、お前の云ふ通り、いゝやうにしてゐてやるから、なんだか早く話せよ」

「あのね、――いゝえ、ちつとも大したことぢアないのよ。……あたしね、propose されたの」

「なアんだい。いゝぢアないか………」

「よかアないわ。あなたとのことを知らないんなら、それアいゝかも知れないけれど、ちやアんと知つてゝなんですもの」

「どうしてまたそんなことを知つたんだらう」

「きつとマヽでも喋つたんでせう」

「ふうん、知つてゝか。……ぢア、つい最近のことだね？」

「えゝ、丁度あなたが、むかふを船にお乘んなさる時分……」

「怪からん奴だな」

「まア、あの人にしてみれア、あなたより自分の方が先口だつて云ふやうな氣なんでせう。それアまたね、倫敦時分

のことを考へてみれア、可哀さうなところもあるのよ。うちのマヽがそれア可愛がつて、あたしと兄妹のやうにして育てたんですからね。よく、大きくなつたら御夫婦になるんだらうなんて他に揶揄はれたりしたものよ。だから、自分ぢアいまだにその氣でゐたんでせう」

「そんなら、もつと早く申込んどきアいゝんだ……」

「さうよ、あなたとのことを知つてから、それをまるで無視して申込むなんて、あなたに對しても、あたしに對しても、侮辱だわ。だからあたし、小ッぴどくはねつけはしたんですけれど……」

「ぢアもうそれでいゝんぢアないか」

「えゝいゝのよ。たゞね、あたしたちが結婚しちまつたからでも、前々どほりつきあつてゐなけれアならないんだとたまらないから、それで、それであなたにお話して……」

「いゝよ、もう解つたよ。絶交するよ……」

「だけど、それをね、あんまり……」

「解つたつてば、媚いね！　お前の云ふ通りおだやかにやるよ、大丈夫だよ」

「さう？　ほんとにさうしてくださる？　……うれしい！　あたしこれで、ほんとうに安心したわ！」

松子は、組み合せてゐる腕に、ギュウッと力をいれて、心からの、——或は肉體からの、感謝を傳へた。許婚の夫は、顏を綻ばして、

「なんだい、僕が喧嘩ッ早いと思つて、隨分先の先まで考へたもんだな。そんな餘計な心配をするもんぢアないよ。僕アあんな、ひと捻りでつぶれさうな男を相手どつて、喧嘩なんぞする氣にアなれないから」

さう云つてから、もう一度彼の女の額に接吻してやつた。

——で、紛失した截紙刀の秘密が、永遠にあらはれさうにはなく見えた……。

編輯を了へて

◇餓えたる露西亞を救へとの聲が高くなつた、志ある人々はいくらでも喜捨して貰ひたいものだ。まさか隣人の飢え死にするのを直前して默つて高座から見物してもいられまいから。

◇アインスタイン教授の來朝について、帝國學士院は院議を以つて歡迎するに決定した、蓋し學界破天荒の盛事として我々は幾多碩學連のこの擧措を喜ぶものである。

◇西伯利撤兵はそれは當然のことながら、この點は前內閣よりましだ。放漫政策の張本人高橋は政治に一定の見識なく、人格に何等の權威がない、それで政友會總裁とは大した儲けものだ。

◇始めて民衆の前で演說してそして鬼の首でも取つたかのやうな憲政會のおめでたさ、そのおめでたさがあればこそ內閣も、サーベルに取られてしまふのさ。精々多寡の知れたこうした政黨總裁を床の間に据えおいて友公も痩せ腕を振つて見るのサ。

◇本誌が時代の要求に應じて、エスペラント講座を新設したことにつき、芬蘭公使ラムステッド博士、小阪氏始め各大家の盡力を謝する、京都、大阪、名古屋の各協會支部の祝電、それから個人として澤山の人々の祝辭、祝電を謝する、そして其期待に背かぬやうに努力して、必ず豫期以上の成功を見せたいものだ。

◇ゴルギーはローラン、フランス、バルビユースに招かれて近々のうちに南方佛蘭西に赴く、そして暫く南歐の滴るやうな綠の天地に病を養ふこととなつている。

◇獨逸政界に大波紋を起させたラテノウ博士は兇變に斃れた、彼の哲學思索はレ二ンのそれと並び稱せられて前途に多大の期待をかけられたが惜しいことをした。

◇九月中に本社から婦人雜誌が出る、また、この夏は汗みどろにされることだらう、かくの如く我々にはいつまで待つた所で夏休みは來ない、しかし我々は我々の希望目がけて突貫する、本屋や、雜誌屋で儲けるなぞの月並みの希望は寸毫もない、三年たち、五年たてば我々の志業は始めて第一印象を地上に投ずる。

◇本社記者募集は哲學に於て廿三名科學に於て十三名の應募者があつた、しかし何れも思はしい成績を見ることが出來なかつた、それで科學部は石原純氏に哲學は矢崎美盛氏が面倒を見てくれられる。

改造定價

冊數	定價	郵税
壹冊	八十錢	貳錢
半ヶ年	五圓六拾錢	増大號共郵税不要
壹ヶ年	拾壹圓廿錢	増大號共郵税不要

注文の注意

本誌一頁廣告料 一等 百圓 二等 七拾圓

◎本社廣告取次所 博報堂 弘盛舍 日本電報通信社

◇増大號其他定價變更に依る前金拂込み不足は不足金の拂込みを待つて發送す

◇◇◇註文は凡て前金とす 前金切れの際は發送を停止す 外國發送の註文は壹部郵税貳拾四錢を申受く(但し支那を除く)

◇◇◇見本は發送せず 郵税切手代用は壹割増のこと 拂込みは振替によるが最も便利なり

大正拾壹年七月廿日印刷納本
大正拾壹年八月一日發行

八月號八拾錢

編輯發行兼印刷者 東京市芝區伊皿子町四十番地 平田貫一郎
印刷所 東京市京橋區西紺屋町廿七番地 秀英舍

發行所 東京芝區愛宕下町一ノ一 改造社
電話 芝(長)一六三八 芝二八五四 芝四三〇三
振替東京八四〇二

露西亞飢饉救濟捐金募集

露西亞の飢饉の慘狀は本誌本月號に山川均氏の說く所に依つても明かである、目下同業「前衞」社は其救濟の一策として左の通り義金募集をやつて居る、我々はそれが機宜を得たる措置として大方の人々の奮つて援助されんことを希望するものである、尚、「前衞」社の義金募集の細目は左の通りである、讀者にして本社に寄附を委託されし場合は本社は喜んで前衞社に取次ぐ、そしてその受領證の代りとして本誌に芳名を掲ぐることとする。

改造社

一、本社は左の方法により、露國飢饉救濟金を募集します。奮つて御援助を願ひます。

一、金額には制限はありませぬ。勿論多いに越したことはないが、十錢二十錢の少額でも構ひませぬ。

一、送金は成るべく振替（又は郵便爲替にて本社に御拂込みを願ひます。少額の場合は郵便切手（五厘切手に限る）でも差支へありませぬ。

一、御寄附に對しては、受領書を差出すか、又は誌上で報告をします。姓名の公表を憚られる場合は匿名、又は其由を御附記を願ひます。

一、寄附は個人でも團體としてゞも構ひませぬ。

一、集まつた金額は便宜の爲め、大規模に露國救濟資金や物資の募集をしてゐる外國の確實な機關（例へば米國の「勞農露西亞友人會」等の如き）に寄贈すること。

一、寄附金の清算と處分に就ては、追つて社外から、信用すべき數名の人を選んで監督を受けます。

東京大森新井宿

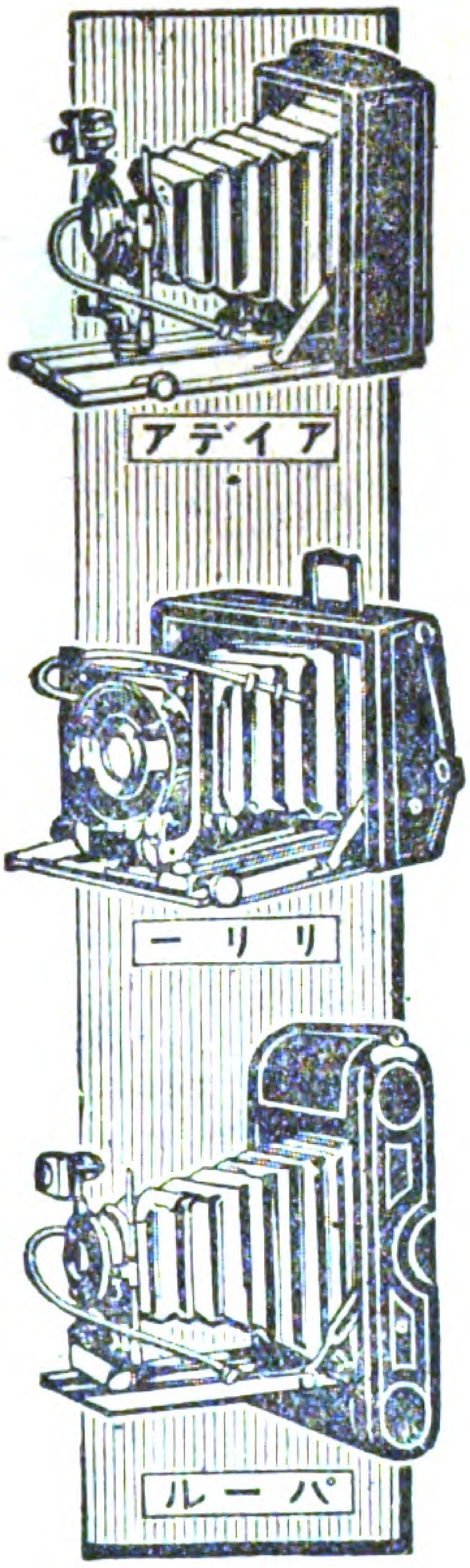
前衛社

振替東京五四七七

旅行氣分の高潮に達した頃日

海に山に唯一の好伴侶は

リリー。パール。アイデア。



名刺形　手札形　葉書形

型錄進呈

◎藝術味ある印畫……自信ある寫眞は、怎うしても完全に焦點を覗き得るカメラに限ります。

リリー、パール、アイデアの三大カメラは何れも斯界の覇者として、推奨せらるゝ理想的寫眞器にして乾板フヰルム兼用せられ焦點も覗かれます。

◉面白い懸賞——以上のカメラを御求めになれば一枚宛臺紙が添へてありますから、あなたの傑作を貼つて御送り下さい、入選畫は寫眞之趣味に掲載し賞品も贈ります。

東京本町二丁目　**小西六本店**　支店 大阪長堀橋

Balai ばら゜ーい　　Palaj ばーら゜イ

Studento ストうでーヌと　Pia ぴーあ

Sur すル　　Sen せヌ　　Ec えチ

Graso グら゜ーそ　　Glaso グら゜ーそ

Ŝero スフえーろ　　Sufero すフえーろ

Bela べーら゜　　Vera ヴえーら

Leciono II. 文法

§ 1. エスペラントの單語には次の二大別がある：

(1) 文の構成上の主役となる a 名詞、b 動詞、c 形容詞、d 動詞の四品詞で、次節に述べるが如く一定の語尾を以て文中の役割を明示せられてゐる。

(2) 文構成上の補助役たる助辭、即ち所謂 a 冠詞、b 代名詞、c 數詞、d 前置詞、e 接續詞、f 副詞的助辭、g 間投詞。此等の詞は少數有限であるから、別に語尾を以て一々區別する必要がなく語尾を有して居らぬ。

LECIONO I. 發音

Gesto げーすと	Ĝemis ぢューみス
Ĝoji ぢョーュい	Ĝusteco ぢュステーッお
Ĵuse じューせ	Justeco ゆステーッお
Japano やぱーの	Ĵaluza じャるーざ
Enĵeti えヌじェーテい	Majesta まイえーすた
Julio ゆりﾟーお	Pejzaĝo ペイざーぢョ
Honesta ほねーすた	Ĥoro ほーろ
Roso ろーそ	Rozo ろーぞ
Poŝo ぽーしョ	Sataj さーたイ
Ŝatas しャーたス	Ŝajni しャーイに
Stalo すたーろ	Ŝtalo シュたーろﾟ
Boato ぼあーと	Foiro フおいーろ
Kiu きーう	Biero びえーろ
Fr ŭlo フらーゥろﾟ	Balau ばらﾟーう
Pereu ぺれーう	Eŭropo えゥろーぽ
Lingvo りﾟーヌグゥお	Gusto ぐーすと
Gvardio グゥあルデいーお	Birdo びールど
Lipharo りﾟフはーろ	Ĉashundo ちャスふーヌど
Pachoro ぱッほーろ	Apud あーぶド

D どー、E えー、F ふおー、G ごー、Ĝ ぢょー、H ほー、Ĥ
ほー、I いー、J よー、Ĵ じょー、K こー、L ろ°ー、M もー、
N のー、O おー P ぽー、R ろー、S そー、Ŝ しょー、T とー、
U うー、Ŭ ゥおー、V ヴおー、Z ぞー。

發音練習

〔注意〕(1) 及び ŭ は子音である。常に正しい位置に揚音せよ。
(2) C は常にツの音でクの音になることはない。g は常にグの音 (ヂ は ĝ)。
h は決して默音となることはない。j は英語の y の音 (ĵ は ジ)。ĵ は決して舌が口蓋につかぬ様に。S は常に清音で、ズ となることはない。
r と l とをよく區別して。

(3) 次の練習には近似的に日本の假名を附けて置いた。f は フ で、l は ル° ĥ は ラ と云ふ記號を以て表はすことにする。揚音は一で示す。

Caro ツあーろ (ca はおとッつァんのつァの如く)

Cento ツえーヌと　　Scio スツいーお

Paco ぱーツお (co はごッつォーさまのつォの如く)

Ĉapelo ちゃぺーろ°　　Ĉesante ちェさーヌて

Ĉiam ちーあム　　Kaŭĉuko かウちューこ

Gardi がールドい　　Ĝardeno ぢャルでーの

s（清音）近似：ス ｝舌端を齒の根から少しはなして（摩擦音）
z（濁音）近似：ズ ｝

舌端を齒の根につければ c（ツ）音となる。

k（清音）近似：ク ｝舌の根元を喉奥につけて（破裂音）
g（濁音）近似：グ ｝

h 日本のハ行音。全く解放した無聲に近い音。

r 近似：ル 舌端を口蓋上に撥くか、又は舌端を震動させて（江戸ツ子の卷舌の如く響かせて）

l 舌端を口蓋に粘着させ舌の左右から呼氣を逃がして柔かく。

§ 5. エスペラントでは揚音 Akcento は常に各語の最後から二番目の綴（即ち最後から二番目の母音）にある。例へば

su'per すーぺル　ho-di'aŭ ほディーあウ

bo'naj ぼーなイ　ge-o-grafi'o げおグらっいーお

外國語學習上各語區々な揚音の所在を覺えると云ふことは大な苦痛であるのは何人も經驗した處であろう。就中英語などは揚音が一寸違つても相手に通じない。此點もエスペラントが非常に樂であり、且つ最後から二番目の綴に揚音があることは（伊太利語の多くの語、及びポーランド語もそうだが）語の發音を非常に明瞭ならしむる効果がある。

§ 6. 文字の名稱は母音は其儘、子音は -O（次課に述べる名詞の語尾）をつけて呼ぶ。A あー、B ぼー、C ツおー、Ĉ ちョー

ない。

(3) Ĥ はイングランド語にはないが、スコットランド語や、獨、露、其他歐洲大陸の諸國には極めてありふれた音である。H は喉を全く開放して發する、無聲に近い音、K は舌の根元を喉奥につけて出す破裂音であるが、Ĥ は H と K との中間音、即ち舌の根元を喉奥につけず、少しく隙間を作つて呼氣をかすれさして出すハ行音で、摩擦音である。

日本語の『母』は haha ではなく、二番目の ha はいくらかかすれて haĥa と發音されてゐる。又『本』は hon であるが、『御本』は普通日本人は goĥon と發音してゐる。Ĥ の音は此の如く我日本語にもあり日本人にもさまで困難な音でない。然しエスペラントでは此の Ĥ の文字を有する語は極めて僅少である。

(4) 老婆心から他の十五の子音の發音をも次に並べて置く。

p（淸音）近似：プ		上下の唇を合せて發する
b（濁音）近似：ブ		
m（鼻音）近似：ム		
f（淸音）近似：フ		上の齒で下唇を輕く押へて
v（濁音）近似：ヴ		
t（淸音）近似：ト		舌を口蓋につけて（破裂音）
d（濁音）近似：ド		
n（鼻音）近似：ヌ		

§ 4, 殘り二十三文字は皆子音であるが、其發音は次の八文字の外は普通のロオマ字と同じである。

C＝英語 cats の ts, 獨乙語 Zeit の Z と同じ、卽ち近似的に日本語の：ツ

Ĉ＝英語 church の ch, 獨語 Deutsch の tsch, 近似的に：チ

Ĝ＝Ĉ の濁音。英語 gem の g, 又は judge の j, 近似的に：ヂ

Ŝ＝英語 shin の sh, 獨語 schnee の sch, 佛語 cheval の ch, 近似的に：シ

Ĵ＝Ŝ の濁音。英語 pleasure の s, 佛語 jour の j, 近似的に：ジ

J＝英語 you の y, 獨語 jeder の j, 近似的に：イ

Ŭ＝英語 how の w, 獨乙 Haus の u, 近似的に：ウ

Ĥ＝獨乙語 Doch の ch.

〔注意〕(1) Ĝ は Ĉ の濁音であるから、Ĉ と同樣に舌を口蓋につけて、强く發する破裂音。Ĵ は Ŝ の濁音、卽ち S と同じ具合に、決して舌を口蓋につけず、舌と口蓋との間に僅か間隙を作つて、呼氣をかすれさして漏し乍ら發する摩擦音。

(2) J は日本のヤ行の子音、Ŭ はワ行の子音で、母音では

のであるから、發音する通りを其儘綴つて書いてゆけばよろしい。

英語はネルソン百科辭典に公言してある如く發音學上から見れば正に世界最惡の言語である。例へば A の發音の如きは cāme, cà', call, fäther, boat.........など一字多音で學者をして去就に迷はしめる。f と ph とは同音を表はし、X は一文字で ks, 又は gz と云ふ二音を表はしてゐる。又『しやー』と云ふ音を表すのに sha を用ひてゐるが、元來 s は「ス」、ha は「はー」と云ふ音で sha は當然「スはー」と云ふ發音でなければならぬ。之を全然別種な音『しやー』と讀ませるのは不合理の骨頂である。エスペラントでは此の如き不合理をせぬために ŝ と云ふ一文字を新に制定してゐる。即ち sha は『スはー』、ŝa は「しやー」。ĉ, ĝ などの新文字の採用は此の理由によるものである。

§ 3. エスペラントの母音は次の五つの基本母音のみで、其發音は全く日本語の母音と同じである。

A あー　E えー　I いー　O おー　U うー

外國語發音學習上の眞の困難は子音ではなくして、母音にある。先祖傳來母音は五つしかないものと心得てゐる日本人や、スラヴ人に『廣いO。狹いO』の音などと云つた處で、到底のみこめるものでない。基本母音の五のみを用ひてゐるエスペラントは日本人にとつて極めて便利である。

國際語

エスペラント講座

工學士 小坂狷二講

Leciono I. 發音

§ 1. エスペラントの字母 Alfabeto は次の二十八文字から成る:—

A B C Ĉ D E F G Ĝ H Ĥ I J Ĵ

K L M N O P R S Ŝ T U Ŭ V Z

§ 2. 發音は發音學上の理想法則である (a) 一字一音、(b) 一音一字 の法則に從ふ。

(a) 一字一音とは或る一文字の發音は一と通りしかない、即ち綴つてある通りを其儘發音すればよいと云ふことである。又逆に

(b) 一音一字、即ち或る一音を表はす文字は二タ通りはない

社會政策と階級鬪爭

福田德三著

◇書留送料十九錢◇
◇定價金貳圓八拾錢◇
◇四六版並製◇

内容目次＝

索引附訂正版
五百二十九頁

東京芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二番

THE KAIZO, (LA REKONST... REVIEW OF
POLITICS. LITERATURE, SOCIAL FAI...
PRICE: EIGHTY SEN A COPY. TWELVE ...
OFFICE: KAIZOSHA, 1 ATAGOSHITA... SHIBA, TOKIO

大正八年三月廿一日第三種郵便物認可
大正拾壹年八月壹日發行(每月一回一日)
大正拾壹年七月廿日印刷納本
第四卷第八號
八月號
定價金八拾錢